

徳王子大崎遺跡

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅴ
(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ)



2013.3

高 知 県 教 育 委 員 会
(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

徳王子大崎遺跡

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅴ
(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ)

2013.3

高 知 県 教 育 委 員 会
(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

徳王子大崎遺跡が所在する香南市香我美町は、香宗川左岸に位置しています。香南市香我美町は南北に長い地域であり、太平洋に面した沿岸部から平野部、山間部まで各時代の遺跡が数多く存在しています。また、香南市香我美町山北に所在する恵日寺では国の重要文化財に指定されている木造十一面観音像が本尊となっており、遺跡のみならず数多くの文化財も香我美町内には残されています。

本書は平成20・22年度に発掘調査を実施した高規格道路南国安芸道路に関連する徳王子大崎遺跡の発掘調査報告書です。南国安芸道路関連では東から口檜ヶ谷遺跡、坪井遺跡、徳王子前島遺跡、徳王子広本遺跡、花宴遺跡、東野土居遺跡と多くの発掘調査が平成16年度から実施されており、香南市の歴史が序々に明らかになっています。本遺跡からは弥生時代から近世までの遺構・遺物が確認されており、これらの調査成果は香南市の歴史を考えるうえで貴重なものであり、地域の歴史遺産として活用して頂きたいと考えております。

最後に本遺跡の調査にあたり多大なご理解とご協力を頂いた国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所、地元関係者の方々、発掘作業・整理作業に従事して頂いた作業員の皆様には心よりお礼申し上げます。

平成25年3月

公益財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 森田尚宏

例言

1. 本書は南国安芸道路の建設に伴い、平成20・22年度に実施した徳王子大崎遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局から受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター（現公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター）が発掘調査を実施した。
3. 徳王子大崎遺跡は高知県香南市香我美町に所在する弥生時代から近世にかけての複合遺跡で、弥生時代の集落跡などが確認されている。発掘調査は調査対象区域の買収状況に応じて平成20年度と平成22年度の2カ年にわたって実施し、平成20年度の調査面積は1,623㎡、平成22年度の調査面積は1,385㎡で、発掘調査延べ面積は3,008㎡であった。
4. 発掘調査・整理作業は次の体制で行った。

平成20年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 小笠原孝夫
総務：同次長 森田尚宏, 同総務課長 恒石雅彦, 同主任 谷真理子
調査総括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久
調査担当：同調査第四班長 出原恵三, 同専門調査員 井上昌紀, 同調査員 島内洋二, 測量補助員 都築愛, 秋山英洋
事務補助員：友永可奈

平成22年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 小笠原孝夫
総務：同次長 森田尚宏, 同総務課長 里見敦典, 同主任 弘末節子
調査総括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久
調査担当：同調査第四班長 出原恵三, 同専門調査員 安岡猛, 同主任調査員 下村裕, 測量補助員 秋山英洋
事務補助員：友永可奈

平成24年度

総括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 森田尚宏
総務：同次長 嶋崎るり子, 同総務課長 里見敦典, 同主任 黒岩千恵
調査総括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久
調査担当：同調査員 下村裕
事務補助員：友永可奈, 廣内美登利

5. 本書の執筆と編集は下村が行い、現場写真については平成20年度は井上・島内、平成22年度は安岡・下村が撮影し、遺物写真は下村が撮影した。また、遺物観察表については整理作業員の方に指定した設定で変換作成して頂いた。
6. 遺構についてはST（竪穴建物跡）、SB（掘立柱建物跡）、SK（土坑）、SD（溝跡）、SE（井戸跡）、P（柱穴）で表記した。掘立柱建物跡の一部については模式図(S=1/100)を掲載している。また、掲載している遺構平面図の縮尺はそれぞれに記しており、方位Nは世界測地系のGNである。
7. 遺物については原則として縮尺1/3で掲載し、一部の遺物については縮尺を変えているが、各挿

例言

図にはスケールを表記している。また、遺物番号は通し番号とし挿図と図版の遺物番号は一致している。

8. 現地調査及び報告書作成をするにあたっては、下記の方々のご指導及び貴重なご教示、ご助言を賜った。記して感謝の意を表したい。

公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸氏、パリノ・サーヴェイ株式会社

9. 調査にあたっては、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所のご協力を頂いた。また、地元住民の方々に遺跡に対するご理解とご協力を頂き、厚く感謝の意を表したい。

10. 発掘調査及び整理作業については、下記の方々のご協力を頂いた。

発掘調査

平成20年度

加治正一, 加治宣子, 加治正敏, 上屋福美, 小松清一, 小松悠悦, 竹村正紘, 竹中光恵, 田村明, 田村美賛子, 永野宏幸, 野本修身, 野本和子, 久竹孝, 宮崎林

平成22年度

植田秀夫, 上田豊, 加治正一, 加治宣子, 加治正敏, 川村正廣, 小松清一, 小松弼, 小松悠悦, 島村雄二, 田村明, 田村美賛子

上記の方々には酷暑・酷寒のなか、労を厭わず現場作業に従事して頂いた。記して感謝の意を表したい。

整理作業

中西純子, 内村富紀, 岩貞泰代, 横山めぐみ, 黒岩佳子, 川添明美, 澤田美弥, 西山麻美, 久家朋子, 若江紗映, 西内広美

上記の方々には整理作業を担当して頂いた。記して感謝の意を表したい。

11. 出土遺物は「08-9KO」, 「10-9KO」と注記し、高知県立埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章 序章	1
1. はじめに	1
2. 調査の契機と経過	1
(1) 契機と経過	1
(2) 試掘確認調査	2
(3) 調査の方法	3
3. 遺跡の地理的・歴史的環境	4
(1) 地理的環境	4
(2) 歴史的環境	5
第Ⅱ章 調査の概要	7
1. 調査の経過	7
(1) 調査の経過	7
(2) 調査日誌抄	7
2. 調査区の概要	9
(1) I区	9
(2) II区	12
(3) III区	14
(4) IV区	17
(5) V区	19
第Ⅲ章 遺構と遺物	21
1. I区	21
(1) 中世	21
(2) 近世	25
2. II区	26
(1) 弥生時代	26
(2) 中世	46
(3) 近代	54
3. III区	54
(1) 弥生時代	54
(2) 中世	59
4. IV区	64
(1) 近世	64
第Ⅳ章 自然科学分析	65
1. はじめに	65
2. 試料	65
3. 分析方法	65

本文目次

(1) 重鉍物・火山ガラス比分析及び屈折率測定	65
(2) 珪藻分析	66
(3) 花粉分析	66
(4) 植物珪酸体分析	67
(5) 種実遺体分析	67
(6) 炭化材同定	67
4. 結果	68
(1) 重鉍物・火山ガラス比分析及び屈折率測定	68
(2) 珪藻分析	69
(3) 花粉分析	69
(4) 植物珪酸体分析	72
(5) 種実遺体分析	73
(6) 炭化材同定	75
5. 考察	75
(1) 遺跡の立地環境	75
(2) 台地構成層について	75
(3) 谷部の堆積環境	77
(4) 谷部の水文環境	78
(5) 谷部の古植生	79
(6) ST-1の植物利用	81
第V章 考察	83
1. 弥生時代	83
2. 中世	83
3. まとめ	84

挿図目次

図1-1	徳王子大崎遺跡位置図	1
図1-2	試掘トレンチ配置図(S=1/2,000)	3
図1-3	調査区配置図(S=1/2,000)	4
図1-4	周辺の遺跡分布図(S=1/25,000)	5
図2-1	I区東壁セクション図	10
図2-2	I区堆積層出土遺物実測図	11
図2-3	II区東壁セクション図	12
図2-4	第I層出土遺物実測図	13
図2-5	第V層出土遺物実測図	13
図2-6	第VI層出土遺物実測図	14
図2-7	III区中央バンク東壁セクション図	14
図2-8	第I層出土遺物実測図	15
図2-9	第III層出土遺物実測図	16
図2-10	第IV層出土遺物実測図	17
図2-11	IV-W区北壁セクション図	18
図2-12	IV-E区北壁セクション図	19
図2-13	V区南壁セクション図	19
図3-1	I区遺構平面図(S=1/250)	21
図3-2	SD-1	22
図3-3	SD-1出土遺物実測図1	22
図3-4	SD-1出土遺物実測図2	23
図3-5	SD-1出土遺物実測図3	24
図3-6	SD-2	24
図3-7	SD-2出土遺物実測図1	25
図3-8	SD-2出土遺物実測図2	25
図3-9	P-1~3出土遺物実測図	26
図3-10	II区遺構平面図(S=1/250)	27
図3-11	ST-1	28
図3-12	ST-1出土遺物実測図	29
図3-13	ST-2	30
図3-14	ST-2出土遺物実測図1	31
図3-15	ST-2出土遺物実測図2	32
図3-16	ST-2出土遺物実測図3	32
図3-17	ST-2出土遺物実測図4	33
図3-18	ST-2出土遺物実測図5	34
図3-19	ST-2出土遺物実測図6	35

插图目次

图3-20	ST-2出土遺物実測図7.....	36
图3-21	ST-2出土遺物実測図8.....	37
图3-22	ST-2出土遺物実測図9.....	38
图3-23	ST-2出土遺物実測図10.....	38
图3-24	ST-2出土遺物実測図11.....	39
图3-25	ST-3.....	40
图3-26	ST-3出土遺物実測図.....	41
图3-27	ST-4出土遺物実測図.....	42
图3-28	ST-5出土遺物実測図1.....	42
图3-29	ST-5出土遺物実測図2.....	43
图3-30	SK-1.....	43
图3-31	SK-1出土遺物実測図1.....	43
图3-32	SK-1出土遺物実測図2.....	44
图3-33	SK-2.....	44
图3-34	SK-2出土遺物実測図.....	45
图3-35	P-1出土遺物実測図.....	46
图3-36	SK-3・4出土遺物実測図.....	46
图3-37	SK-5.....	47
图3-38	SK-5・8出土遺物実測図.....	47
图3-39	SD-1.....	48
图3-40	SD-1出土遺物実測図.....	48
图3-41	SD-2.....	48
图3-42	P-2~5出土遺物実測図.....	49
图3-43	P-6~10出土遺物実測図.....	51
图3-44	P-11~17出土遺物実測図.....	53
图3-45	T-1出土遺物実測図.....	54
图3-46	Ⅲ区遺構平面図(S=1/200).....	55
图3-47	ST-1.....	56
图3-48	ST-1出土遺物実測図1.....	56
图3-49	ST-1出土遺物実測図2.....	57
图3-50	ST-1出土遺物実測図3.....	57
图3-51	SK-2.....	58
图3-52	SK-2出土遺物実測図.....	58
图3-53	SK-3.....	58
图3-54	SB-1.....	59
图3-55	SB-1出土遺物実測図.....	60
图3-56	SK-4.....	60
图3-57	SK-6出土遺物実測図.....	61

図3-58	SD-1.....	61
図3-59	SD-1出土遺物実測図.....	62
図3-60	SE-1.....	62
図3-61	P-1出土遺物実測図.....	63
図3-62	P-2・3出土遺物実測図.....	63
図3-63	IV-W区遺構平面図(S=1/300).....	64
図3-64	SD-2.....	64
図4-1	分析試料採取地点の位置と層序.....	65
図4-2	重鉍物組成及び火山ガラス比.....	68
図4-3	屈折率測定結果.....	69
図4-4	主要珪藻化石群集.....	69
図4-5	花粉化石群集.....	72
図4-6	植物珪酸体含量.....	74
図4-7	遺跡の位置図.....	76
図4-8	遺跡周辺の地形.....	77
図4-9	遺跡周辺の地形分類図.....	78
図4-10	遺跡周辺の地形分類図・地形横断面図.....	79

表目次

表1-1 周辺の遺跡地名表.....	5
表4-1 重鉍物・火山ガラス比分析結果.....	68
表4-2 火山ガラスの屈折率.....	68
表4-3 主要珪藻分析結果.....	70
表4-4 花粉分析結果.....	71
表4-5 植物珪酸体含量.....	73
表4-6 種実遺体分析結果.....	74

遺物観察表目次

遺物観察表 1.....	87
遺物観察表 2.....	88
遺物観察表 3.....	89
遺物観察表 4.....	90
遺物観察表 5.....	91
遺物観察表 6.....	92
遺物観察表 7.....	93
遺物観察表 8.....	94
遺物観察表 9.....	95
遺物観察表 10.....	96
遺物観察表 11.....	97
遺物観察表 12.....	98

遺構計測表目次

遺構計測表1～3.....	101
遺構計測表4・5.....	102

写真目次

写真2-1 発掘調査風景.....	7
写真2-2 発掘調査風景.....	8
写真2-3 発掘調査風景.....	9

図版目次

- 図版 1 遺跡遠景(南より)
調査前全景(南より)
- 図版 2 東壁セクション(西より)
遺構検出状態(南より)
- 図版 3 遺構完掘状態(真上上空より)
遺構完掘状態(南より)
- 図版 4 SK-1セクション(南より), SD-1バンクセクション(南西より), SD-1瓦質土器(53)出土状態, SD-1備前焼(55)出土状態, SD-1石製品(56)出土状態, SD-2バンクセクション(東より), SD-3バンクセクション(南西より), SD-4バンクセクション(南より)
- 図版 5 調査前全景(西より)
東壁セクション(北西より)
- 図版 6 遺構検出状態(西より)
ST-2・3検出状態(西より)
- 図版 7 遺構完掘状態(真上上空より)
遺構完掘状態(西より)
- 図版 8 ST-1完掘状態(西より), ST-1弥生土器出土状態, ST-2完掘状態(南より), ST-2バンクセクション(西より), ST-2弥生土器出土状態, ST-3完掘状態(西より), ST-4完掘状態(西より), ST-5完掘状態(西より)
- 図版 9 SK-1完掘状態(西より), SK-1バンクセクション(西より), SK-1弥生土器(190)出土状態, SK-2完掘状態(西より), SK-2弥生土器出土状態, SK-2弥生土器(205)出土状態, SK-4バンクセクション(西より), SK-5完掘状態(南より)
- 図版 10 SK-8セクション(南より), SK-9セクション(南より), SD-1バンクセクション(南より), SD-2バンクセクション(南より), P-2土師質土器(223)出土状態, P-2土師質土器(224)出土状態, P-9土師質土器(235)出土状態, P-10青磁(242)出土状態
- 図版 11 調査前全景(西より)
遺構完掘状態(真上上空より)
- 図版 12 遺構検出状態(西より), 遺構完掘状態(西より), SB-1完掘状態(南東より), SK-1セクション(南より), SK-2セクション(東より), SK-4セクション(南より), SD-1バンクセクション(東より), SE-1セクション(東より)
- 図版 13 調査前全景(南東より)
IV-W区北壁セクション(南より)
- 図版 14 IV-W区遺構検出状態(南より)
IV-W区遺構完掘状態(南より)
- 図版 15 IV-W区SD-2完掘状態(北より)
IV-W区SD-2バンクセクション(南より)
- 図版 16 IV-E区北壁セクション(南より)
IV-E区完掘状態(南より)
- 図版 17 調査前全景(北西より)
南壁セクション(北西より)
- 図版 18 南壁セクション(北より)
完掘状態(西より)
- 図版 19 瓦質土器(鍋・播鉢)
土師質土器(鍋)
- 図版 20 弥生土器(壺・甕)
- 図版 21 弥生土器(壺・甕)
- 図版 22 弥生土器(甕)
- 図版 23 弥生土器(甕・鉢)
- 図版 24 弥生土器(高杯・甌・ミニチュア)
- 図版 25 弥生土器(甕・ミニチュア・支脚)
- 図版 26 弥生土器(壺・甕・鉢・支脚), 青磁(碗)
- 図版 27 弥生土器(壺・甕・ミニチュア), 土師質土器(鍋), 備前焼(播鉢)
- 図版 28 弥生土器(甕)
- 図版 29 弥生土器(鉢)

図版目次

- 図版 30 弥生土器(壺・甕・鉢・高杯・蓋)
- 図版 31 弥生土器(甕・高杯), 土師器(甕・羽釜),
緑釉陶器(椀), 土師質土器(鍋), 備前焼
(甕)
- 図版 32 弥生土器(鉢), 土師器(羽釜), 土師質土
器(鍋・羽釜), 瓦質土器(鍋), 備前焼(甕),
石製品(石鏃)
- 図版 33 弥生土器(壺・甕・鉢), 土師質土器(鍋・
羽釜), 石製品(石鍋)
- 図版 34 土師器(甕・羽釜), 瓦器(椀), 土師質土
器(杯・皿・小皿), 青磁(碗)
- 図版 35 重鉦物・軽鉦物
- 図版 36 珪藻化石
- 図版 37 花粉化石
- 図版 38 植物珪酸体
- 図版 39 種実遺体
- 図版 40 炭化材

第 I 章 序章

1. はじめに

本書は、高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局から業務委託を受け、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター（現公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター）が平成 17・18 年度に実施した高知南国道路外 1 件埋蔵文化財発掘調査のうち南国安芸道路埋蔵文化財試掘確認調査及び高知県教育委員会が平成 21 年度に行った試掘確認調査の結果を受け、平成 20・22 年度に実施した高知南国道路外 1 件埋蔵文化財発掘調査のうち徳王子大崎遺跡の発掘調査の成果をまとめたものである。

この調査は、国土交通省（四国地方整備局土佐国道事務所）が計画し、実施している一般国道南国安芸道路建設工事に伴い、工事によって影響を受ける遺跡（埋蔵文化財）について事前の発掘調査を行ったうえで出土遺物等の整理作業を行い、遺跡の記録保存を図ることを目的としている。

徳王子大崎遺跡は平成 17 年度に実施した事前の試掘確認調査によって新たに発見された遺跡で、本書で報告するのは平成 20・22 年度に行った徳王子大崎遺跡の発掘調査の報告である。

本遺跡は香宗川左岸に広がる低湿地に向けて北側から延びる丘陵上に立地する弥生時代から近世までの複合遺跡で、弥生時代や鎌倉・室町時代の集落跡などが確認されている。

2. 調査の契機と経過

(1) 契機と経過

南国安芸道路は、高知市と安芸市間 36 km を結ぶ一般国道 55 号の自動車専用道路である高知東部自動車道の一環として安芸地方生活圏と高知中央生活圏の連携強化を図るほか、四国横断自動車道と接続し広域交通ネットワークの形成を目的とする道路で、昭和 62 年には国の高規格幹線道路網計画に組み込まれている。高知東部自動車道は延長 36 km と長く、高知県内で最も周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が集中する高知平野を横断する路線であることから大規模で長期的な発掘調査が予想された。埋蔵文化財について具体的な調整を開始したのは平成 15 年度からであり、まず埋蔵文化財の取り扱いについて国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所と高知県教育委員会が調整を行った。その結果、当面の工事予定区域については周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）があるもののこれまで発掘調査が実施されておらず、遺構の遺存状態が全く不明であるため土地の買収が完了した箇所の試掘確認調査を平成 19 年

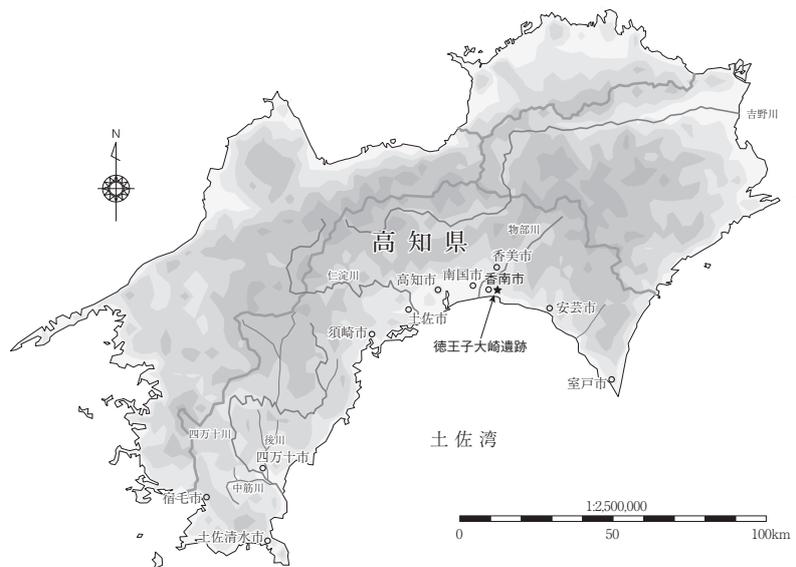


図1-1 徳王子大崎遺跡位置図

2. 調査の契機と経過 (2) 試掘確認調査

度までは財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター（現公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター）、平成20年度からは高知県教育委員会が順次実施した。

平成17年度の南国安芸道路関係では徳王子地区が対象となり試掘確認調査が実施された結果、調査対象地に設定したトレンチから遺構が検出され、当該箇所が本発掘調査の必要があると判断された。また、平成18年度にも試掘確認調査が実施され、調査対象地で1カ所のトレンチから遺構が検出された。本遺跡はこの試掘確認調査の結果初めて確認された遺跡であり、地名をとって「徳王子大崎遺跡」と命名された。この結果を受け、平成20年度に本発掘調査を実施することとなり、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター（現公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター）が国土交通省四国地方整備局と業務委託を締結した高知県教育委員会からの委託を受け本発掘調査を実施した。土地の買収が遅れた箇所については、平成21年度には高知県教育委員会が試掘確認調査を行い、調査対象地の西側で遺構を検出し、この結果を受けて平成20年度と同様、平成22年度に本発掘調査を実施した。

平成15年度以降に実施された試掘確認調査によって南国安芸道路の路線内で新たに確認された周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）は、本遺跡のほか口檜ヶ谷遺跡（南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅰ）や花宴遺跡（南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ）、徳王子前島遺跡（南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅲ）、坪井遺跡（南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅳ）、徳王子広本遺跡であり、順次本発掘調査が実施されている。

(2) 試掘確認調査

① 対象区域の状況

平成17年度の試掘確認調査は丘陵上に3箇所のトレンチ（5×5m）を任意に設定し、平成18年1月24日から2月23日の間に行った。また、平成18年度では2箇所のトレンチ（5×5m）を任意に設定し、平成18年10月19日に試掘確認調査が実施され、平成21年度では7箇所のトレンチ（3×3m）を任意に設定し、平成21年9月24日から9月25日まで行われた。掘削作業は機械力（ユンボ）と人力、遺構検出作業は人力で行った。なお、遺構については検出に留めた。

この試掘確認調査において計12箇所のトレンチのうち5箇所において遺物包含層を確認した。この遺物包含層からは弥生土器・土師質土器など弥生時代と中世の遺物が出土しており、当該期と考えられる遺構が検出されている。平成17年度の試掘確認調査により新たな遺跡として徳王子大崎遺跡が新設され、丘陵部を中心に弥生時代と中世の遺構が遺存していることが判明した。

② 遺跡の概要

徳王子大崎遺跡は平成17年度に実施された事前の試掘確認調査で新たに確認された遺跡で、弥生時代から近世にかけての遺構・遺物が確認される複合遺跡となり、大字から遺跡名が付けられた。

本遺跡は香宗川左岸の低湿地に向けて北側から派生した丘陵上に立地しており、周辺の丘陵部にも同様の遺構が残存する可能性が考えられる。弥生時代では調査対象区域南側において竪穴建物跡などが検出されている。この竪穴建物跡は計6軒検出されており、当該期の集落を構成するものと考えられる。なお、後世の地形改変により調査対象区域北側では当該期の遺構は削平されたとみられ、遺存状態は極めて悪かった。

中世では調査対象区域東側で掘立柱建物跡が1棟検出されており、当該期の集落が丘陵上を中心に展開していたものとみられる。また、調査対象区域西側では屋敷を区画していたと考えられる溝

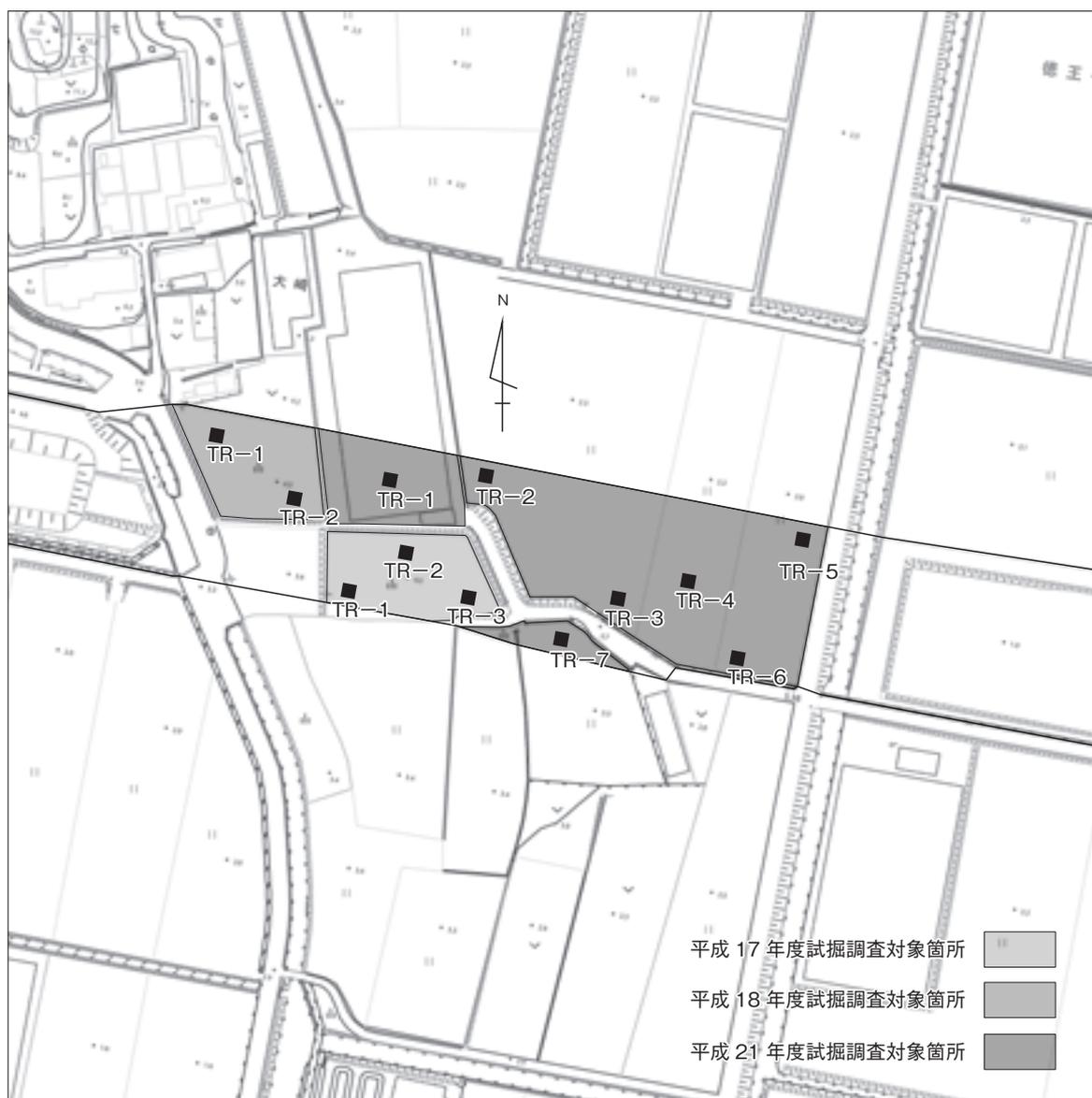


図1-2 試掘トレンチ配置図(S=1/2,000)

跡が確認されており、徳王子大崎遺跡の立地する丘陵上には当該期の集落が広がっていたとみられる。

(3) 調査の方法

試掘調査の結果を受けて、平成17・18年度に実施した花宴遺跡の発掘調査の際に設置された世界測地系の4級基準点及び4級水準点を基に任意の基準点を設定し、発掘調査に備えた。

測量は世界測地系第4座標系(IV系)の基準点を使用し、X=61,100m, Y=22,200m(北緯33° 33' 02" , 東経133° 44' 20" , 真北方向角-0° 07' 55")を原点とし、A～F(100mグリッド:大グリッド)を組み、調査対象区域内を西から順にアルファベットを配した。100mグリッドの中にはそれぞれのアルファベットを冠する20m(中グリッド:1～25)グリッドを設定し、調査で使用する4mグリッド(小グリッド:1～25)にはA1-1と枝番を付した。なお、遺構図にはグリッド名ではなく座標値を標記している。

調査は試掘確認調査の結果を受けて、平成20年度に調査区Ⅰ・Ⅱ区、平成22年度にⅢ～Ⅴ区を設

3. 遺跡の地理的・歴史的環境 (1) 地理的環境



図1-3 調査区配置図(S=1/2,000)

定し、平成20年度にはI区、平成22年度にはIII区から調査を開始した。

堆積層の掘削は原則として遺物包含層直上までは機械力を導入し、遺物包含層以下は人力掘削を実施した。なお、遺物包含層でも遺物量が少ない場合などは作業効率を考慮し、機械力で遺構検出を行った。また、遺跡の成り立ち等を明らかにするために地質学や土壌学等関連分野の協力を得て、古環境の復原にも重点を置いた。

3. 遺跡の地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

徳王子大崎遺跡の所在する高知県香南市は平成18年3月1日に、香南5町村(赤岡町、香我美町、野市町、夜須町、吉川村)が合併して誕生した新しい市で、東西約20km、南北約15km、面積126.49km²、人口34,490人(平成24年8月末現在)である。本市は東は安芸市・安芸郡芸西村、西は南国市、北は香美市に

接しており、高知県の中央部を南西方向に向けて流れて土佐湾に注ぐ全長約71km、総流域面積468km²の一級河川である物部川の左岸に位置している。本遺跡が所在する香南市香我美町を地形的にみると、北側には標高489.5mを測る秋葉山を主峰とする山系、東側には標高723mを測る長者ヶ森をはじめとした山系が存在し、これらの主要山系の延びる方向は基盤地質の構造方向と一致している。河川は香宗川と山北川が南西方向に向かって流れ、下流域の徳王子付近には氾濫原性低湿地が広がっている。

本地域の地形は山間部、丘陵部、平野部と大きく三つに分かれており、本遺跡は香宗川左岸に広がる氾濫原性低湿地に向けて北側から派生した丘陵上に立地しており、香我美町徳王子で確認されている遺跡の多くはこれら丘陵上に存在している。

(2) 歴史的環境

香南市香我美町内で確認されている遺跡は56箇所であるが、最も古い時期の遺物が出土している



図1-4 周辺の遺跡分布図(S=1/25,000)

表1-1 周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	徳王子大崎遺跡	弥生・中世	8	大東遺跡	古墳・古代	15	徳王子広本遺跡	弥生～中世
2	東野土居遺跡	弥生～近世	9	江見遺跡	古墳	16	徳王子前島遺跡	〃
3	香宗城跡	中世	10	刈谷城跡	中世	17	徳善城跡	中世
4	香宗遺跡	〃	11	花宴遺跡	弥生	18	クノ丸遺跡	古墳・中世
5	宝鏡寺跡	〃	12	徳善天皇古墳	古墳	19	姫倉城跡	中世
6	ハザマ遺跡	弥生～中世	13	螢野古墳	〃	20	西峯城跡	〃
7	御所の前遺跡	〃	14	徳善古窯跡群	古代	21	坪井遺跡	弥生～近世

3. 遺跡の地理的・歴史的環境 (2) 歴史的環境

遺跡は拝原遺跡である。この遺跡からは遺構は検出されていないが、縄文時代後期前半の宿毛式土器と松ノ木式土器、縄文時代後期中葉の片粕式土器が出土している。次の縄文時代晩期では十万遺跡から当該期の貯蔵穴が確認されており、刻目突帯の深鉢と鉢が出土している。その後、人間の営みが確認されるのは弥生時代前期末になってからであり、下分遠崎遺跡や拝原遺跡、十万遺跡で当該期の遺構・遺物が確認されている。また、弥生時代中期には的場遺跡や本村遺跡など丘陵部に遺跡が立地するようになり、弥生時代後期に至っては拝原遺跡や十万遺跡、裨地遺跡などで堅穴建物跡が検出されている。

古墳時代にはいると香我美町内にも古墳が築かれており、計7基が確認されている。そのうち徳善天皇古墳が5世紀代とされているが、確証はない。その他の古墳はいずれも古墳時代後期の築造とみられるが、多くの古墳は後世の地形改変により消滅している。また、拝原遺跡では古墳時代後期の堅穴建物跡が確認されており、当該期の須恵器窯跡も香我美町内に存在している。

古代においては、十万遺跡で8世紀後半とみられる隅丸方形の掘方を持つ掘立柱建物跡が13棟検出されている。承和年中(937)に編纂された「倭名類聚抄」によると香我美町の町域は大忍郷の大部分と曾我郷の一部を含むと考えられており、十万遺跡で検出された掘立柱建物跡群はこの大忍郷に関連する建物群の可能性が指摘される。

中世になると香我美町の大部分は鎌倉時代初期に成立したとみられる大忍庄に含まれており、鎌倉極楽寺領となっている。この大忍庄には東川末延名や西川行宗名といった多くの名が存在しており、名主の活発な活動が文献等で確認でき、これらの名から清遠名や末清名などの脇名が数多く派生していることが、現在当地域に残る字名などで推察される。本遺跡の東側に存在する徳王子広本遺跡で検出された当該期の掘立柱建物跡や溝跡は、当時大忍庄に存在していた名主の活動を裏付けるものと考えられる。その後、中世後期には前述した各名主は香宗川と山北川の流域に20箇所あまりの城をそれぞれ構え小地域を支配する土豪としての地位を確立していったが、序々に長宗我部氏の支配下に組み入れられたとみられる。

その後、近世を経て明治11年(1884)に町村制が施行され、岸本村・王子村・徳善村・山南村・山北村・西川村・東川村が誕生し、昭和17年(1942)には徳王子村・山南村・富家村・香宗村が合併して大忍村が誕生している。その後、大忍村は昭和22年(1949)に廃村となり旧村に復帰しているが、昭和30年(1955)に岸本町・徳王子村・山南村・山北村・東川村・西川村が合併し、香我美町が誕生している。また、平成18年(2006)に香南市となり現在に至っている。

参考文献

香我美町史編纂委員会 1985『香我美町史』上・下巻

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査の経過

(1) 調査の経過

徳王子大崎遺跡は平成17年度に実施された高知東部自動車道南国安芸道路建設工事に伴う事前の試掘確認調査によって新たに確認された遺跡である。平成17年度の試掘結果を受け、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所と高知県教育委員会の間で本発掘調査について協議を行い、平成20年度に本発掘調査を実施することとなった。調査は国土交通省四国地方整備局から高知県教育委員会が業務委託を受け、平成20年6月6日付けで高知県教育委員会と財団法人高知県文化財団(現公益財団法人高知県文化財団)との間で業務委託契約を締結したうえで、本発掘調査を実施した。また、平成20年度において未買収箇所については、平成21年度に高知県教育委員会が試掘確認調査を行い遺構が確認されたことから、平成20年度と同様国土交通省四国地方整備局から高知県教育委員会が業務委託を受け、平成22年4月1日付けで高知県教育委員会と財団法人高知県文化財団(現公益財団法人高知県文化財団)との間で業務委託契約を締結したうえで、本発掘調査を実施した。

(2) 調査日誌抄

平成20年度.....

- | | | | |
|------|------------------------------------|------|-----------------------|
| 7.16 | 調査区を設定し、I区で重機による表土掘削を開始する。 | 8.21 | I区の遺構調査を行う。 |
| 7.17 | I区で重機による表土掘削と並行して調査区の周囲にトレンチを掘削する。 | 8.22 | I区の遺構調査を行う。 |
| 7.18 | I区で重機による表土掘削と並行して調査区の周囲にトレンチを掘削する。 | 8.25 | I区の遺構調査を行う。 |
| 7.22 | I区で重機による表土掘削と並行して調査区の周囲にトレンチを掘削する。 | 8.26 | 第X層の土壌洗浄を行う。 |
| 7.23 | I区の遺構検出作業を行う。 | 8.27 | 調査区排水作業及び第X層の土壌洗浄を行う。 |
| 7.24 | I区の遺構検出作業を行う。 | 8.28 | 調査区排水作業及び第X層の土壌洗浄を行う。 |
| 7.25 | I区の遺構検出作業を行う。 | 8.29 | I区の遺構調査を行う。 |
| 7.28 | I区の遺構検出作業を行う。 | 9.1 | I区の遺構調査を行う。 |
| 7.29 | I区の遺構検出作業を行う。 | 9.2 | I区の遺構調査を行う。 |
| 7.30 | I区の遺構検出作業を行う。 | 9.3 | I区の遺構調査を行う。 |
| 7.31 | I区の遺構検出作業を行う。 | 9.4 | I区の遺構調査を行う。 |
| 8.1 | I区の遺構検出作業を行う。 | 9.5 | I区の遺構調査を行う。 |
| 8.4 | I区の遺構検出作業を行う。 | 9.8 | I区の遺構調査を行う。 |
| 8.5 | I区の遺構検出作業を行う。 | 9.9 | I区の遺構調査を行う。 |
| 8.6 | I区の遺構検出作業を行う。 | | |
| 8.7 | I区の遺構検出作業を行う。 | | |
| 8.8 | 雨天のため現場作業を中止する。 | | |
| 8.18 | I区の遺構検出作業を行う。 | | |
| 8.19 | I区の遺構検出写真撮影を行う。 | | |
| 8.20 | I区の遺構調査を行う。 | | |



写真2-1 発掘調査風景

1. 調査の経過 (2) 調査日誌抄

- 9.10 I 区の遺構調査を行う。
- 9.11 I 区の遺構調査を行う。
- 9.12 I 区の遺構平面図作成及びⅡ区で重機による表土掘削を行う。
- 9.16 雨天のため現場作業を中止する。
- 9.17 雨天のため現場作業を中止する。
- 9.18 雨天のため現場作業を中止する。
- 9.19 雨天のため現場作業を中止する。
- 9.22 航空写真撮影のため清掃作業を行う。
- 9.23 航空写真撮影のため清掃作業を行う。
- 9.24 航空写真撮影のため清掃作業を行う。
- 9.25 航空写真撮影を行う。
- 9.26 雨天のため現場作業を中止する。
- 9.27 I 区の下層確認作業及び埋め戻し作業を行う。
- 9.29 I 区の埋め戻し作業及びⅡ区で表土掘削を行う。
- 9.30 雨天のため現場作業を中止する。
- 10.1 雨天のため現場作業を中止する。
- 10.2 Ⅱ区で重機による表土掘削と並行して調査区の周囲にトレンチを掘削する。
- 10.3 Ⅱ区で重機による表土掘削と並行して調査区の周囲にトレンチを掘削する。
- 10.4 Ⅱ区で重機による表土掘削と並行して調査区の周囲にトレンチを掘削する。
- 10.6 Ⅱ区の遺構検出作業を行う。
- 10.7 Ⅱ区の遺構検出作業を行う。
- 10.8 Ⅱ区の遺構検出作業及び遺構検出写真の撮影を行う。
- 10.9 Ⅱ区の遺構検出写真撮影及び遺構調査を行う。
- 10.10 Ⅱ区の遺構調査を行う。
- 10.14 雨天のため現場作業を中止する。



写真2-2 発掘調査風景

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 10.15 Ⅱ区の遺構調査を行う。 10.16 Ⅱ区の遺構調査を行う。 10.17 Ⅱ区の遺構調査を行う。 10.18 Ⅱ区の遺構調査を行う。 10.20 Ⅱ区の遺構調査を行う。 10.21 Ⅱ区の遺構調査を行う。 10.22 Ⅱ区の遺構調査を行う。 10.23 排水作業を行う。 10.24 Ⅱ区の遺構調査を行う。 10.27 Ⅱ区の遺構調査を行う。 10.28 Ⅱ区の遺構調査を行う。 10.29 航空写真測量のため清掃作業を行う。 10.30 航空写真測量を行う。 10.31 下層確認作業を行う。 11.3 埋め戻し作業を行う。 11.4 埋め戻し作業を行う。 11.5 埋め戻し作業を行う。 | <ul style="list-style-type: none"> 11.10 Ⅲ区で遺物包含層の人力掘削を行う。 11.11 Ⅲ区の遺構検出作業及び遺構検出写真を撮影する。 11.12 Ⅲ区の遺構調査を行う。 11.15 Ⅲ区の遺構調査を行う。 11.16 Ⅲ区の遺構調査と並行してⅣ-W区で重機による表土掘削を行う。 11.17 Ⅳ-W区で重機による表土掘削及び遺構検出作業並びに遺構検出写真撮影を行う。 |
|--|---|

平成22年度.....

- 10.28 Ⅲ区で重機による表土掘削を行う。
- 10.29 Ⅲ区で重機による表土掘削を行う。
- 11.1 Ⅲ区で重機による表土掘削と並行して調査区の周囲にトレンチを掘削する。
- 11.2 Ⅲ区で遺物包含層の人力掘削を行う。
- 11.4 Ⅲ区で遺物包含層の人力掘削を行う。
- 11.5 Ⅲ区で遺物包含層の人力掘削を行う。
- 11.8 所内研修のため現場作業を中止する。
- 11.9 所内研修のため現場作業を中止する。

- | | | | |
|-------|--------------------------|---------------|----------------------------|
| 11.18 | Ⅲ区及びⅣ－Ⅴ区の遺構調査を行う。 | 自然科学分析の調査を行う。 | |
| 11.19 | Ⅲ区及びⅣ－Ⅴ区の遺構調査を行う。 | 12.18 | Ⅲ区で航空写真撮影及びⅣ－Ⅴ区の埋め戻し作業を行う。 |
| 11.22 | 雨天のため現場作業を中止する。 | 12.20 | Ⅳ区の安全柵撤去作業を行う。 |
| 11.24 | Ⅳ－Ⅴ区の清掃作業を行う。 | 12.21 | Ⅲ区の埋め戻し作業を行う。 |
| 11.25 | Ⅳ－Ⅴ区の遺構完掘写真撮影を行う。 | 12.23 | Ⅲ区の埋め戻し作業を行う。 |
| 11.26 | Ⅲ区の遺構調査を行う。 | 1.6 | Ⅴ区で重機による表土掘削を行う。 |
| 12.7 | Ⅲ区の遺構平面図等作成と並行して排水作業を行う。 | 1.7 | Ⅴ区の埋め戻し作業を行う。 |
| 12.8 | Ⅲ区の遺構平面図等作成と並行して排水作業を行う。 | | |
| 12.9 | Ⅳ－Ⅴ区の埋め戻し作業を行う。 | | |
| 12.10 | Ⅳ－Ⅴ区の埋め戻し作業を行う。 | | |
| 12.11 | Ⅳ－Ⅴ区で重機による表土掘削を行う。 | | |
| 12.13 | 雨天のため現場作業を中止する。 | | |
| 12.14 | Ⅳ－Ⅴ区で重機による表土掘削を行う。 | | |
| 12.15 | Ⅲ区で排水作業を行う。 | | |
| 12.16 | 雨天のため現場作業を中止する。 | | |
| 12.17 | Ⅲ区の清掃作業及び遺構完掘写真撮影並びに | | |



写真2-3 発掘調査風景

2. 調査区の概要

本遺跡は香宗川左岸の低湿地に向けて北側から派生した丘陵上に立地する遺跡で、確認された遺構は弥生時代、中世(鎌倉～室町時代)、近世(江戸時代)であり、遺構の分布状況が時期によって異なっている。

弥生時代の遺構はⅡ・Ⅲ区で確認されており、これらの調査区が立地する丘陵上では計6軒の竪穴建物跡が検出されており、当該期の集落が展開していたものと考えられる。丘陵上に立地する調査区はⅠ～Ⅲ区であるが、最も標高の高いⅠ区では当該期の遺構は確認されておらず、後世の地形改変により削平されたとみられる。

中世の遺構はⅠ～Ⅲ区において検出されている。Ⅲ区では掘立柱建物跡が1棟確認されており、当該期の屋敷が存在していたものと考えられる。また、Ⅰ区では屋敷を区画していたとみられる溝跡が検出されており、丘陵全体に当該期の屋敷群が広がっていたとみられる。

近世においては丘陵裾部に所在するⅣ区から溝跡が検出されているのみで、丘陵上には当該期の遺構は確認されていない。このことから、丘陵上に中世まで存在していた屋敷群は近世段階には消滅していることが窺われ、本遺跡は現在と同じく耕作地として利用されたと考えられる。

なお、下層確認調査も含めた調査総面積は3,008㎡であり、出土遺物の総点数は約9,130点を数える。

(1) Ⅰ区

調査対象区域の西端部に位置する東西約33m、南北29mの台形状を呈する調査区で面積は720㎡である。本調査区は全調査区において最も標高が高く、確認された遺構の時期は中世である。遺物包含層から弥生土器や土師器、須恵器が出土していることから、当該期の遺構が存在していたと考えられるが、後世の地形改変により削平されたとみられる。中世の遺構も総じて遺存状態が悪く、近世

2. 調査区の概要 (1) I 区

以降耕作地として利用されるにあたって、削平を受けたとみられる。

① 層序

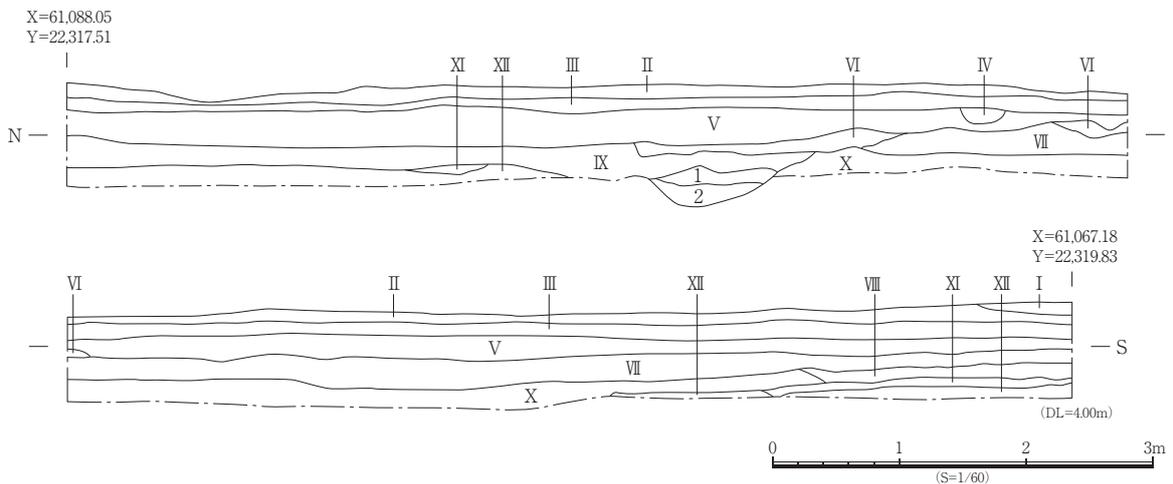
本調査区は丘陵上に立地していることもあり、風化礫層上に中世の遺構が確認されている。遺物包含層から弥生土器が出土していることから、当該期の遺構が存在していた可能性も考えられるが、後世の地形改変により削平されたとみられる。

調査区で認められた基本層序は以下のとおりである。

- 第I層 小～中礫混じりの暗褐色(10YR3/3)シルト層(盛土)
- 第II層 炭化物を含む小礫混じりの褐灰色(10YR4/1)シルト層
- 第III層 小～中礫が少し混じる褐灰色(7.5YR4/1)粗粒砂質シルト層
- 第IV層 黒褐色(10YR3/2)シルト層
- 第V層 中礫が少し混じる鉄分混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト層
- 第VI層 中礫が少し混じる暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト層
- 第VII層 小～中礫が少し混じる黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土層
- 第VIII層 中礫が少し混じる黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト層
- 第IX層 中礫が少し混じる灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト層
- 第X層 大礫が少し混じる褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト層
- 第XI層 鉄分と炭化物を含む黒褐色(2.5Y3/2)粘土質シルト層
- 第XII層 褐色(10YR4/4)シルト層

層位中、遺物包含層は第IX・X層(中世)であり、弥生時代の明確な遺物包含層は確認されなかった。遺構検出は第XII層上面で行っている。

第I・II層は現代の耕作土であり、厚さ4～16cmを測る。第III～VIII層は旧耕作土で、弥生時代～中



- | | |
|---|--|
| <p>層位</p> <p>第I層 小～中礫混じりの暗褐色(10YR3/3)シルト層(盛土)</p> <p>第II層 炭化物を含む小礫混じりの褐灰色(10YR4/1)シルト層</p> <p>第III層 小～中礫が少し混じる褐灰色(7.5YR4/1)粗粒砂質シルト層</p> <p>第IV層 黒褐色(10YR3/2)シルト層</p> <p>第V層 中礫が少し混じる鉄分混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト層</p> <p>第VI層 中礫が少し混じる暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト層</p> <p>第VII層 小～中礫が少し混じる黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土層</p> <p>第VIII層 中礫が少し混じる黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト層</p> <p>第IX層 中礫が少し混じる灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト層</p> | <p>第X層 大礫が少し混じる褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト層</p> <p>第XI層 鉄分と炭化物を含む黒褐色(2.5Y3/2)粘土質シルト層</p> <p>第XII層 褐色(10YR4/4)シルト層</p> <p>遺構埋土(SK-2)</p> <p>1. 小礫が少し混じるオリブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒砂</p> <p>2. 炭化物を含み小礫が少し混じる暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルト</p> |
|---|--|

図2-1 I区東壁セクション図

世の遺物を含む。厚さ8～32cmを測り、近世以降の耕作土と考えられる。

第IX・X層は中世の遺物包含層で厚さ11～28cmを測り、当該期の遺物が出土している。第XII層は風化礫で構成される自然堆積層で、上面で中世の遺物が検出されている。

② 堆積層出土遺物

第I層出土遺物

土師質土器(図2-2 1)

1は小皿の底部破片である。摩耗のため調整は不明で、胎土には粗粒砂を含む。

近世磁器(図2-2 2)

2は皿の口辺部破片である。器面には灰白色の釉を施し、胎土は精良である。

第IX層出土遺物

瓦質土器(図2-2 3・4)

3は鍋と考えられる胴上半部破片で、独立した鏝が一つ残り鏝上部には孔を穿つ。調整は摩耗が著しく不明で、胎土には中粒砂を含む。

4は播鉢の口辺部破片で、5・6条を単位とする条線を施す。調整は摩耗が著しく不明で、胎土には中粒砂を含む。

備前焼(図2-2 5)

5は播鉢と考えられる口辺部破片で、内外面とも回転ナデを施す。胎土には粗粒砂～小礫を多く含む。

石製品(図2-2 6・7)

6は叩石とみられ、側面部と両端部に敲打痕が認められる。石材は砂岩である。

7は石鏝で、完存する。石材はサヌカイトである。

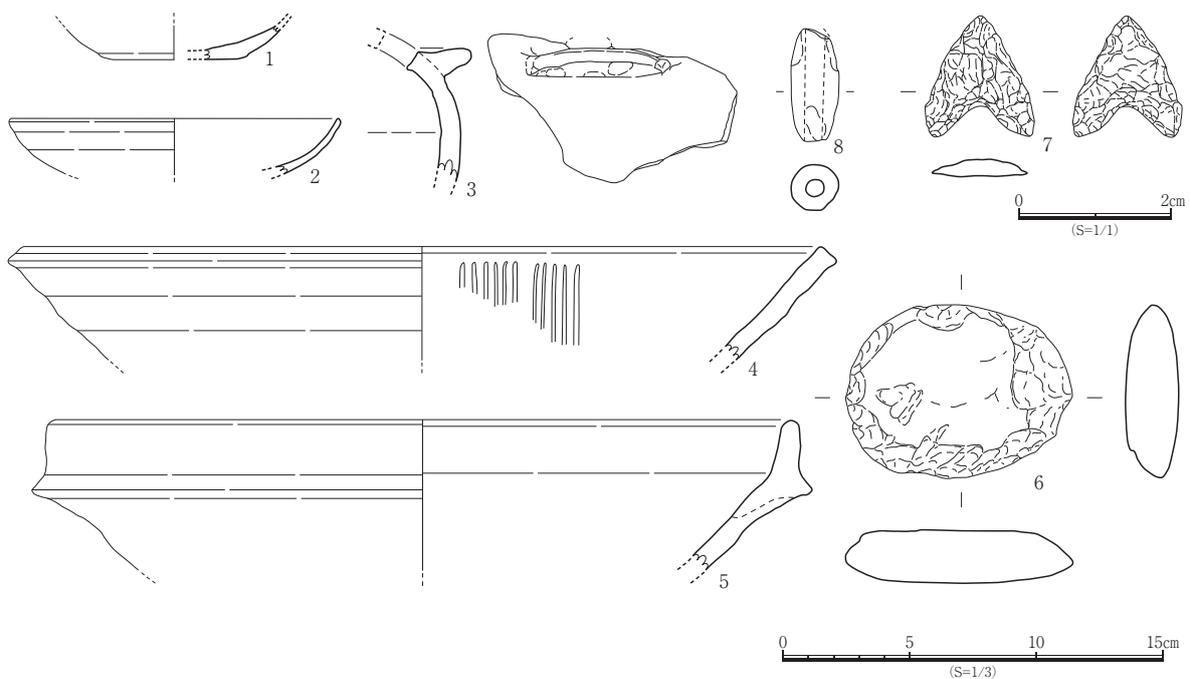


図2-2 I区堆積層出土遺物実測図

2. 調査区の概要 (2) II区

第X層出土遺物

土製品(図2-2 8)

8は土錘で、片側の端部を欠損する。摩耗のため調整は不明瞭で、胎土は精良である。

(2) II区

調査対象区域の南側に位置する東西約45m、南北約23mの台形状を呈する調査区で面積は903㎡で、本調査区で確認された遺構は弥生時代と中世、近代である。遺物包含層からは土師器や須恵器も出土しており、周辺には当該期の遺構が存在している可能性が考えられる。確認された弥生時代と中世の遺構は遺存状態が悪く、近世以降耕作地として利用されるにあたって削平を受けたとみられる。

① 層序

本調査区は丘陵上に立地していることもあり、風化礫層上で弥生時代と中世の遺構が確認されている。遺物包含層からは土師器や須恵器が出土していることから、本調査区周辺には当該期の遺構が存在している可能性も考えられる。

調査区で認められた基本層序は以下のとおりである。

- 第I層 極粗粒砂を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粘土層
- 第II層 褐色(10YR4/6)極粗粒砂質シルト層
- 第III層 にぶい黄褐色(10YR5/4)極細粒砂層
- 第IV層 褐灰色(10YR4/1)シルト質粘土層
- 第V層 暗褐色(10YR3/3)シルト層
- 第VI層 明黄褐色(10YR7/6)極粗粒砂を含む黄褐色(2.5Y5/4)シルト質極細粒砂層
- 第VII層 暗褐色(10YR3/3)中粒砂質シルト層
- 第VIII層 風化礫を多く含む明黄褐色(10YR6/8)シルト層

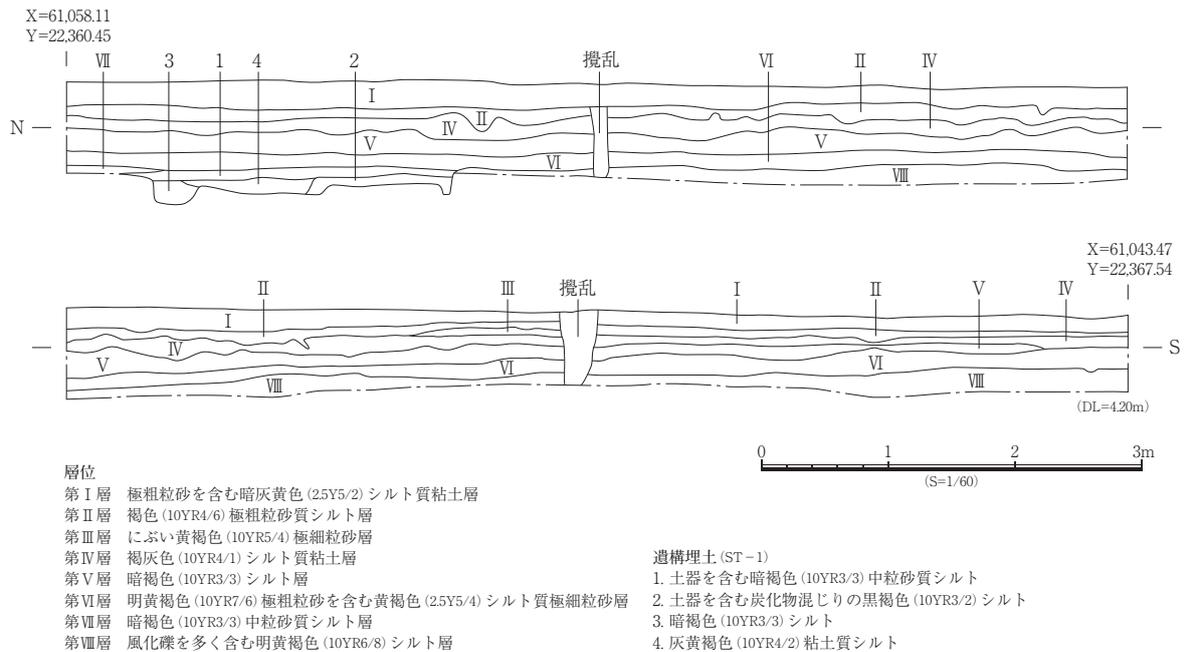


図2-3 II区東壁セクション図

層位中、遺物包含層は第Ⅵ層(中世)と第Ⅶ層(弥生時代)である。本調査区で確認された堆積層からは土師器や須恵器が出土しているが、当該期の明確な遺物包含層は確認されなかった。遺構検出は第Ⅷ層上面で行っている。

第Ⅰ層は現代の耕作土であり、厚さ7～24cmを測る。第Ⅱ～Ⅴ層は旧耕作土で、弥生時代～中世の遺物を含む。厚さ2～21cmを測り、近世以降の耕作土と考えられる。

第Ⅵ層は中世の遺物包含層で、厚さ9～21cmを測る。第Ⅶ層は弥生時代の遺物包含層で、厚さ2～6cmを測る。

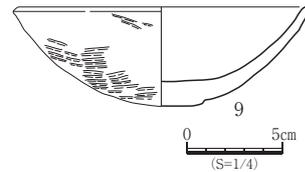
第Ⅷ層は風化礫を多く含む自然堆積層で、上面で弥生時代と中世の遺構が検出されている。

② 堆積層出土遺物

第Ⅰ層出土遺物

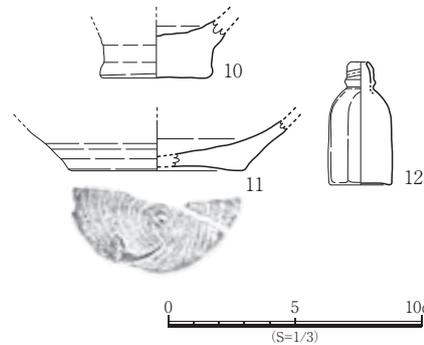
弥生土器(図2-4 9)

9は鉢で、全体の約3/4が残存する。摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面にはタタキ目が残る。胎土には中粒砂～小礫を少し含む。



土師質土器(図2-4 10・11)

10・11は杯である。10は柱状高台で、高台部のみ残存する。摩耗が著しく調整は不明瞭であるが、底部外面には回転糸切りの痕跡が残る。胎土は精良である。11は底部破片で、内面は摩耗のため調整は不明であるが、外面には回転ナデ調整が残る。底部切り離しは回転糸切りで、胎土は精良である。



ガラス製品(図2-4 12)

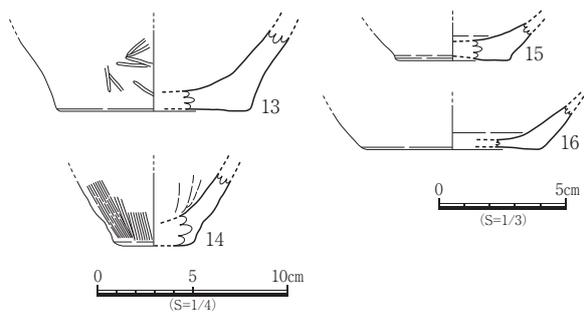
12は目薬瓶で、完存する。

図2-4 第Ⅰ層出土遺物実測図

第Ⅴ層出土遺物

弥生土器(図2-5 13・14)

13は壺と考えられる底部破片である。全体的に摩耗が著しいが、外面にはヘラミガキの痕跡が残る。胎土には中粒砂～小礫を含む。



14は甕と考えられる底部破片である。内面にはナデ、外面にはハケを施し、外面の一部に煤が付着する。胎土には中粒～極粗粒砂を含む。

図2-5 第Ⅴ層出土遺物実測図

土師質土器(図2-5 15・16)

15・16は杯の底部破片である。15は摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面には回転ナデ調整の痕跡が残る。胎土は精良である。16は摩耗が著しく調整は不明で、胎土には中粒砂を含む。

第Ⅵ層出土遺物

弥生土器(図2-6 17～20)

17・18は壺と考えられる底部破片である。17は内面にハケのちナデ、外面にタタキを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。18は摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面にハケ調整が残る。胎土には中粒砂～小礫を含む。

2. 調査区の概要 (3) III区

19・20は甕である。19は口辺部破片で、内面にはハケ調整、外面にはタタキのちナデ調整が認められる。口縁端部にはヨコナデを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。20は胴下半部から底部にかけての破片で、内面にはハケ及びナデ、外面にはタタキのちハケを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。

土師質土器(図2-6 21)

21は鍋の口辺部破片である。内面にはヨコナデ、外面にはタタキを施し、鏝の下部には煤が付着する。

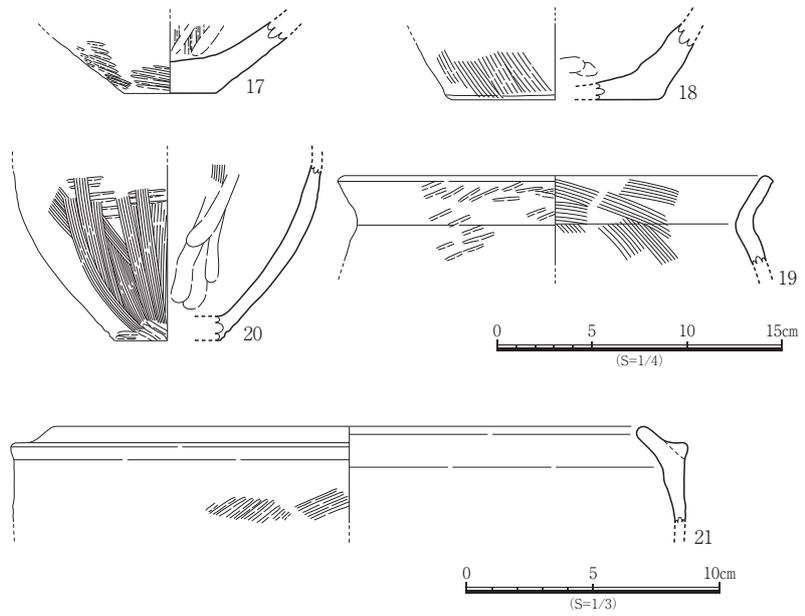


図2-6 第VI層出土遺物実測図

(3) III区

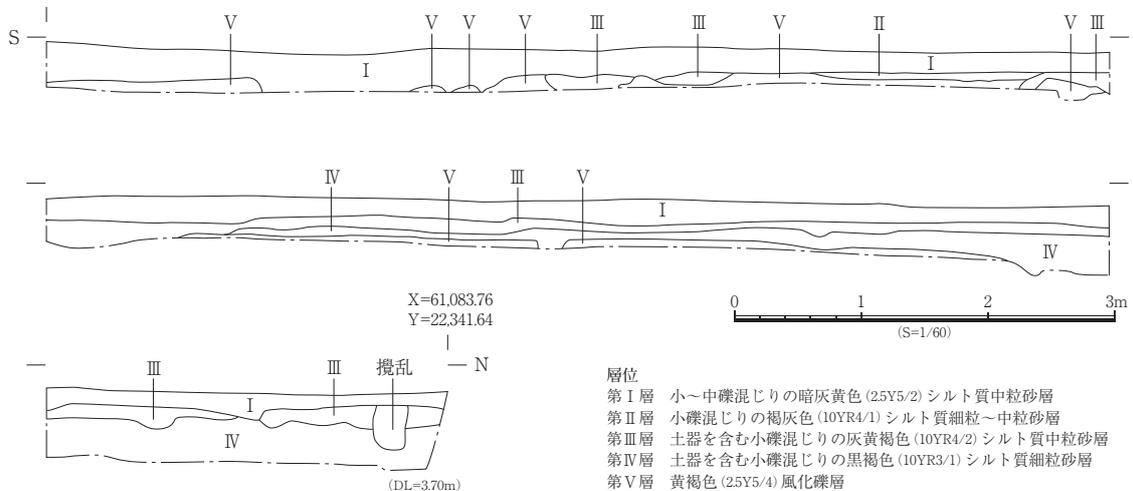
調査対象区域の北側に位置する東西約49m、南北約31mの台形状を呈する調査区で面積は603㎡で、本調査区で確認された遺構は弥生時代と中世である。遺物包含層からは土師器と須恵器が出土しており、I・II区同様周辺に当該期の遺構が存在している可能性が考えられる。検出された遺構は総じて遺存状態が悪く、他の調査区と同じく近世以降耕作地として利用されるにあたって削平を受けたとみられる。

① 層序

第I層 小～中礫混じりの暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質中粒砂層

第II層 小礫混じりの褐灰色(10YR4/1)シルト質細粒～中粒砂層

X=61.063.74
Y=22.342.63



- 層位
- 第I層 小～中礫混じりの暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質中粒砂層
 - 第II層 小礫混じりの褐灰色(10YR4/1)シルト質細粒～中粒砂層
 - 第III層 土器を含む小礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)シルト質中粒砂層
 - 第IV層 土器を含む小礫混じりの黒褐色(10YR3/1)シルト質細粒砂層
 - 第V層 黄褐色(2.5Y5/4)風化礫層

図2-7 III区中央バンク東壁セクション図

第Ⅲ層 土器を含む小礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)シルト質中粒砂層

第Ⅳ層 土器を含む小礫混じりの黒褐色(10YR3/1)シルト質細粒砂層

第Ⅴ層 黄褐色(2.5Y5/4)風化礫層

層位中, 遺物包含層は第Ⅲ層(中世)と第Ⅳ層(弥生時代)である。遺構検出は第Ⅴ層上面で行っている。

第Ⅰ層は現代の耕作土であり, 厚さ9~30cmを測る。第Ⅱ層は旧耕作土で厚さ2~5cmを測り, 近世以降の耕作土と考えられる。

第Ⅲ層は中世の遺物包含層で厚さ4~18cmを測り, 第Ⅳ層は弥生時代の遺物包含層で厚さ3~16cmを測る。調査区の地勢は南西から北東にむけて緩やかに傾斜しており, 標高の高い調査区南西側を中心に近世以降の地形改変により, 遺物包含層は削平されていた。

第Ⅴ層は風化礫で構成された自然堆積層で, 上面で弥生時代と中世の遺構が検出されている。

② 堆積層出土遺物

第Ⅰ層出土遺物

弥生土器(図2-8 22・23)

22は壺と考えられる底部破片で, 内面には指オサエとナデ, 外面にはタタキのちハケを施す。底部外面にはタタキ目が残し, 胎土には中粒砂~小礫を含む。23は支脚と考えられるもので, 脚部のみ残存する。全体的に摩耗と剥離が著しく, 胎土には中粒砂~小礫を含む。

土師器(図2-8 24)

24は羽釜の口辺部破片で, 器面には内外面ともヨコナデを施す。鏝下部には煤が付着し, 胎土には中粒~極粗粒砂を多く含む。

備前焼(図2-8 25)

25は播鉢の口辺部破片である。器面には回転ナデ調整が認められ, 内面には9~11条を単位とした条線を施す。胎土には中粒~極粗粒砂を含む。

第Ⅲ層出土遺物

土師器(図2-9 26)

26は甕の口辺部破片である。口縁部内外面と胴部内面にヨコナデ, 胴部外面にハケを施し, 胎土には粗粒砂~小礫を含む。

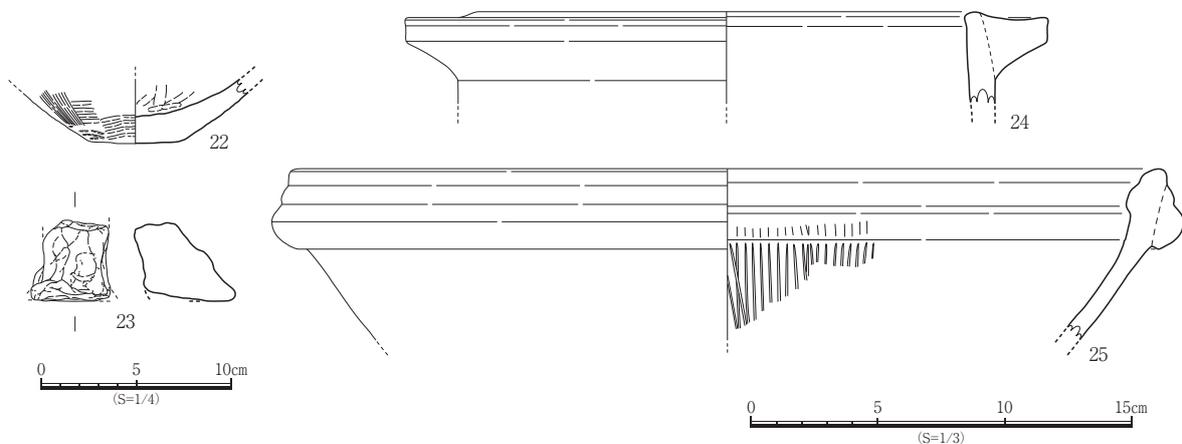


図2-8 第Ⅰ層出土遺物実測図

2. 調査区の概要 (3) Ⅲ区

須恵器(図2-9 27)

27は壺と考えられる口辺部破片である。器面には回転ナデを施し、胎土には中粒砂を含む。

土師質土器(図2-9 28・29)

28は椀の底部破片である。器面は摩耗が著しく調整は不明で、胎土には中粒～極粗粒砂を含む。

29は羽釜の口辺部破片で、器面には回転ナデを施す。胎土には中粒砂～小礫を含む。

土製品(図2-9 30)

30は土錘である。摩耗のため調整は不明であるが、表面には指頭圧痕が残る。胎土には粗粒砂～小礫を含む。

石製品(図2-9 31)

31は台石と考えられるもので、片側に使用痕が認められる。石材は砂岩である。

第Ⅳ層出土遺物

弥生土器(図2-10 32～43)

32は壺と考えられる底部破片である。内面には指ナデとヘラナデ、外面にはタタキのちナデを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。

33～41は甕で、33～37は口辺部から胴部破片である。33は頸部の屈曲が弱く、口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がるもので口辺部内面にハケ、胴部内面にナデを施す。外面にはタタキ目が認められ、胎土には粗粒砂～小礫を含む。34は頸部の屈曲が強く、口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がるもので、口辺部内面にヨコナデ、胴部内面にナデ、外面にタタキを施す。口辺部外面にはタタキのあとヨコナデ調整が認められる。胎土には粗粒砂～小礫を含む。35～37は頸部の屈曲が強く、口辺部が外反するものである。35は外面にタタキを施し、口辺部外面にはタタキのあとヨコナデ調整が認められる。内面は摩耗のため調整は不明で、胎土には中粒砂～小礫を含む。36は口辺部外面にヨコナデ、胴部外面にハケのちナデを施す。内面は摩耗のため調整は不明瞭であるが、胴部内面にナデ調整の痕跡が残る。胎土には中粒砂～小礫を含む。37は口辺部内面にハケ、胴部内面にナデを施す。外面にはタタキ目がみられ、口縁端部は強いヨコナデのため断面方形を呈する。胎土には中粒砂～小礫を含む。38～41は底部破片で、38・39は

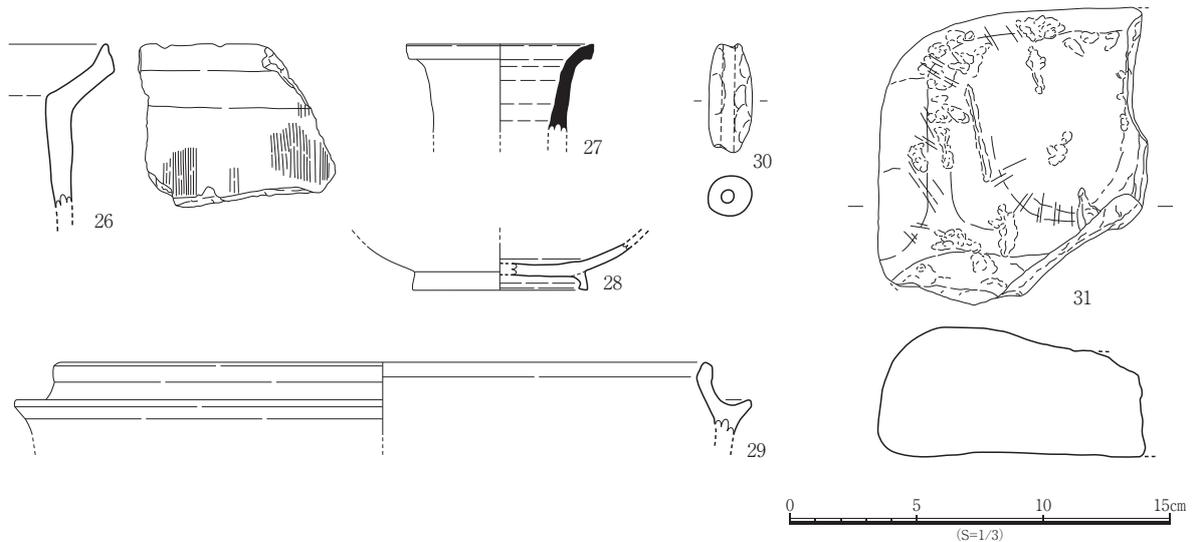


図2-9 第Ⅲ層出土遺物実測図

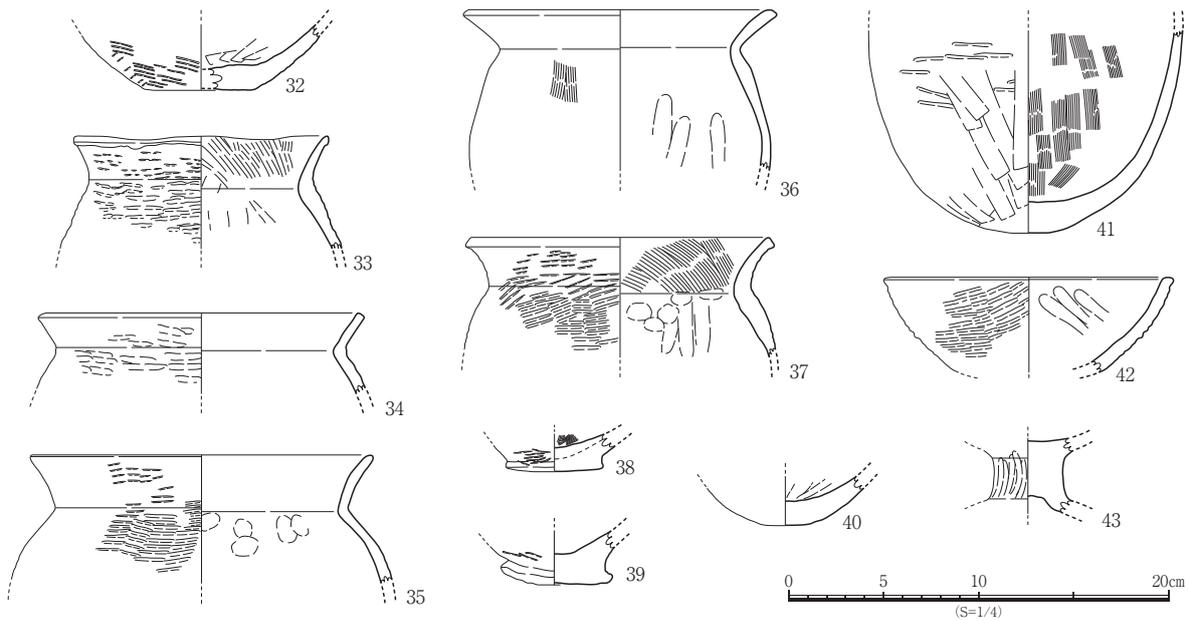


図2-10 第Ⅳ層出土遺物実測図

平底を呈するものである。38は内面にハケ，外面にタタキを施し，胎土には中粒砂～小礫を含む。39は内面にナデ，外面にタタキを施し，胎土には中粒砂～小礫を含む。40は若干平底を呈するもので，内面にナデを施す。外面は摩耗のため調整は不明で，胎土には中粒砂～小礫を含む。41はほぼ丸底を呈するもので，内面にハケ，胴部中央部外面にタタキのち指ナデ，胴下半部から底部外面にかけてヘラナデと指ナデを施す。底部内面にはお焦げが残り，胎土には中粒砂～小礫を含む。

42は鉢である。底部を欠損し，内面にナデ，外面にタタキを施す。口縁端部には強いヨコナデがみられ，胎土には粗粒砂～小礫を多く含む。

43は器台と考えられるもので，脚柱部のみ残存する。摩耗のため調整は不明瞭であるが，一部にナデ調整の痕跡が残る。胎土には中粒砂～小礫を含む。

(4) IV区

調査対象区域の北側に位置する東西約48m，南北約49mの台形状を呈する調査区で面積は747㎡である。本調査区は調査対象区域のなかで最も標高が低く，本調査区で確認された遺構は近世である。明確な遺物包含層は確認されず，遺構密度も極端に低いことから本調査区は居住域ではなく生産域として利用されていたとみられる。

① 層序

IV-W区

- 第Ⅰ層 小礫混じりの暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒～中粒砂質シルト層
- 第Ⅱ層 小～中礫が多く混じるにぶい黄褐色(10YR5/3)中粒～粗粒砂質シルト層
- 第Ⅲ層 小礫混じりの黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂質シルト層
- 第Ⅳ層 小礫混じりの灰色(5Y4/1)極細粒～細粒砂質シルト層
- 第Ⅴ層 小～中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)シルト層で細粒～粗粒砂を多く含む。
- 第Ⅵ層 小礫混じりのオリーブ黒色(5Y3/1)シルト層でオリーブ灰色(2.5GY5/1)風化礫を含む。

2. 調査区の概要 (4) IV区

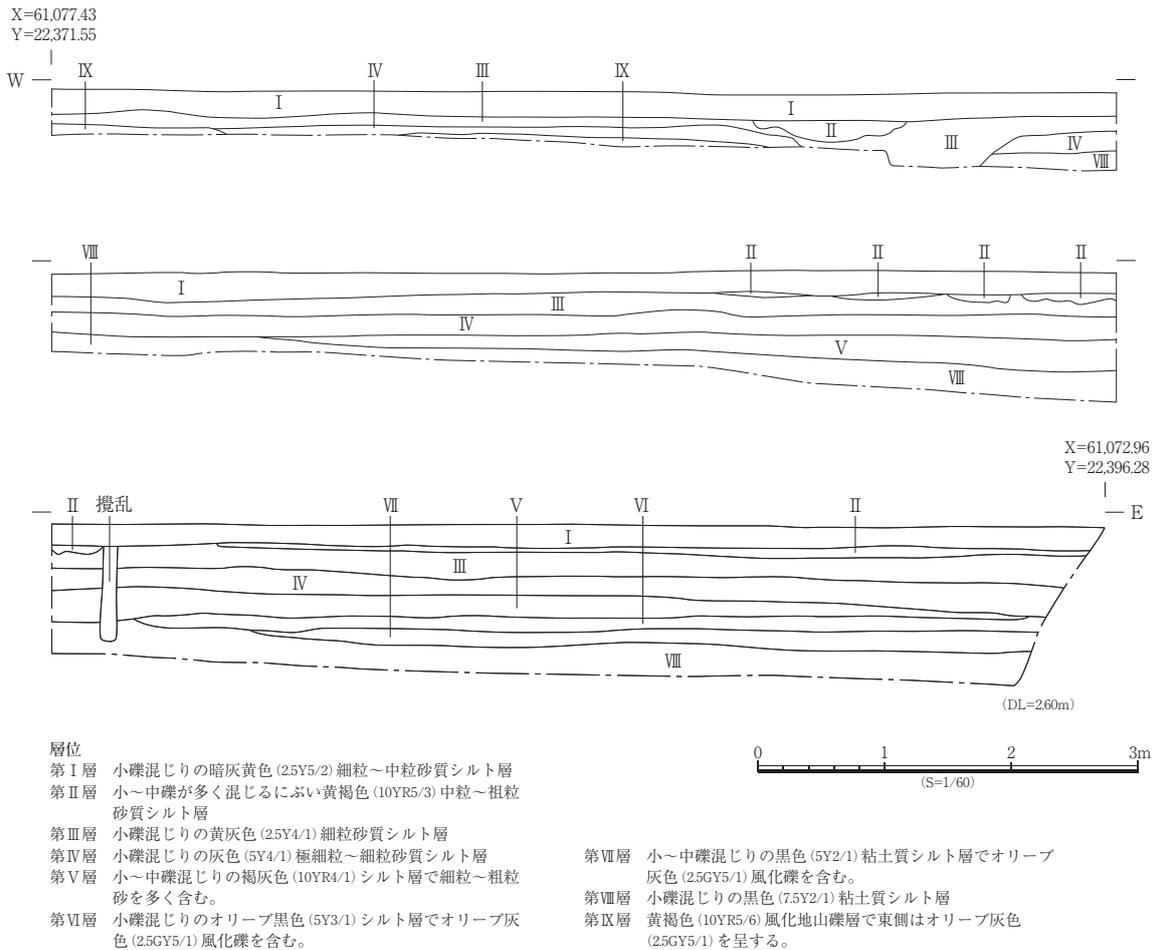


図2-11 IV-W区北壁セクション図

- 第VII層 小～中礫混じりの黒色(5Y2/1)粘土質シルト層でオリーブ灰色(2.5GY5/1)風化礫を含む。
第VIII層 小礫混じりの黒色(7.5Y2/1)粘土質シルト層
第IX層 黄褐色(10YR5/6)風化地山礫層で東側はオリーブ灰色(2.5GY5/1)を呈する。

IV-E区

- 第I層 灰黄褐色(10YR5/2)極細粒～細粒砂質シルト層(耕作土)
第II層 小～大地山礫を多く含む灰色(N5/)粘土質シルト層
第III層 中粒砂～小礫を含む灰色(10Y5/1)粘土質シルト層
第IV層 中粒砂～小礫を含み鉄分の沈着がみられる灰色(N5/)粘土質シルト層
第V層 細粒～粗粒砂を含み鉄分の沈着がみられる灰色(N6/)粘土質シルト層
第VI層 青灰色(5BG6/1)の地山礫を多く含む灰色(N4/)粘土質シルト層
第VII層 有機物を含む灰色(7.5Y5/1)粘土質シルト層
第VIII層 有機物を含む細粒～中粒砂混じりの灰色(7.5Y4/1)粘土質シルト層
第IX層 有機物を含む細粒～中粒砂混じりの灰色(10Y6/1)粘土質シルト層
第X層 中粒～極粗粒砂を含む灰色(5Y4/1)粘土質シルト層
第XI層 細粒砂～小礫を含む灰色(7.5Y5/1)粘土質シルト層

層位中、明確な遺物包含層は確認されなかったが、遺構検出は第Ⅸ層(Ⅳ-W区)上面で行っている。

第Ⅰ層は現代の耕作土で厚さ15~24cmを測る。第Ⅱ~Ⅷ層(Ⅳ-W区)と第Ⅸ~Ⅺ層は自然堆積層でシルト~粘土質シルトを呈しており、低湿地の状況であった。

第Ⅸ層(Ⅳ-W区)は風化礫で構成された自然堆積層で、上面で近世の遺構が検出されている。調査区の地勢は西から東に向けて緩やかに傾斜しており、標高の高い調査区西側を中心に後世の地形改変により、遺構は削平されたと思われる。

(5) V区

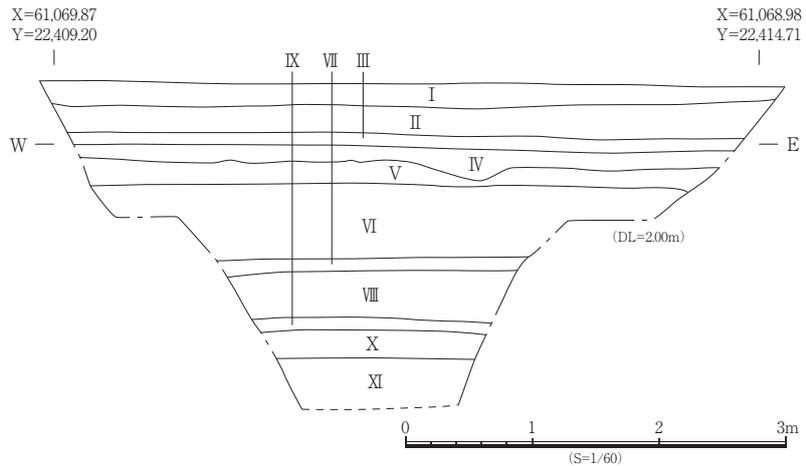
調査対象区域の南東側に位置する東西約17m、南北約2mの長方形を呈する調査区で面積は35㎡である。本調査区では明確な遺物包含層は確認されず、遺構は検出されなかった。

① 層序

- 第Ⅰ層 小礫混じりの灰黄褐色(10YR5/2)シルト質細粒~中粒砂層
- 第Ⅱ層 小~中礫混じりの褐灰色(10YR5/1)中粒砂質シルト層
- 第Ⅲ層 小~中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)細粒~中粒砂質シルト層
- 第Ⅳ層 小~中礫混じりの黒色(10YR2/1)細粒砂質シルト層

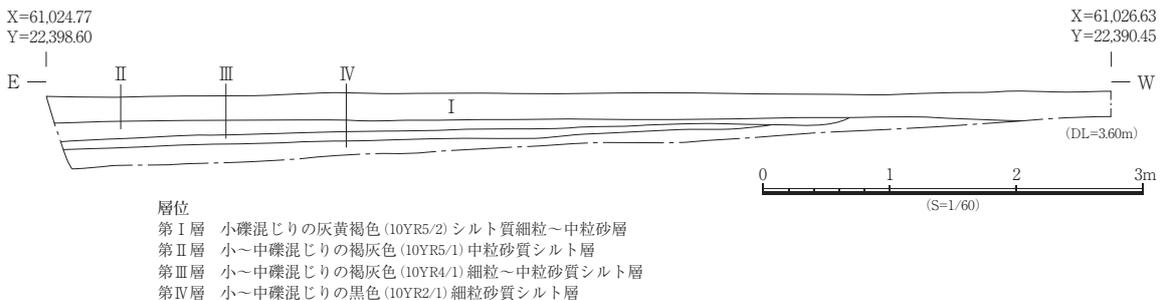
層位中、明確な遺物包含層は確認されず、遺構も検出されなかった。

第Ⅰ層は現代の耕作土で厚さ20~22cmを測る。第Ⅱ~Ⅳ層は自然堆積層で、西から東に向けて緩



- 層位
- 第Ⅰ層 灰黄褐色(10YR5/2)極細粒~細粒砂質シルト層(耕作土)
 - 第Ⅱ層 小~大地山礫を多く含む灰色(N5/)粘土質シルト層
 - 第Ⅲ層 中粒砂~小礫を含む灰色(10Y5/1)粘土質シルト層
 - 第Ⅳ層 中粒砂~小礫を含み鉄分の沈着がみられる灰色(N5/)粘土質シルト層
 - 第Ⅴ層 細粒~粗粒砂を含み鉄分の沈着がみられる灰色(N6/)粘土質シルト層
 - 第Ⅵ層 青灰色(5BG6/1)の地山礫を多く含む灰色(N4/)粘土質シルト層
 - 第Ⅶ層 有機物を含む灰色(7.5Y5/1)粘土質シルト層
 - 第Ⅷ層 有機物を含む細粒~中粒砂混じりの灰色(7.5Y4/1)粘土質シルト層
 - 第Ⅸ層 有機物を含む細粒~中粒砂混じりの灰色(10Y6/1)粘土質シルト層
 - 第Ⅹ層 中粒~極粗粒砂を含む灰色(5Y4/1)粘土質シルト層
 - 第Ⅺ層 細粒砂~小礫を含む灰色(7.5Y5/1)粘土質シルト層

図2-12 Ⅳ-E区北壁セクション図



- 層位
- 第Ⅰ層 小礫混じりの灰黄褐色(10YR5/2)シルト質細粒~中粒砂層
 - 第Ⅱ層 小~中礫混じりの褐灰色(10YR5/1)中粒砂質シルト層
 - 第Ⅲ層 小~中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)細粒~中粒砂質シルト層
 - 第Ⅳ層 小~中礫混じりの黒色(10YR2/1)細粒砂質シルト層

図2-13 V区南壁セクション図

2. 調査区の概要 (5) V区

やかに傾斜している。調査区西側では後世の削平を受けたとみられ、これらの堆積層は確認されなかった。

第三章 遺構と遺物

1. I区

確認された遺構の時期は中世・近世で、土坑・溝跡・柱穴が検出されている。平面がコの字状を呈する溝が確認されており屋敷を区画する溝跡と考えられるが、区画内では掘立柱建物跡は復元できず屋敷内の居住域は調査区北側に存在するものとみられる。

(1) 中世

土坑・溝跡・柱穴が検出されているが、総じて遺構密度は低い。

① 土坑

SK-1

調査区南西部で検出した隅丸方形とみられる土坑で、長辺2.18m、短辺1.72m、深さ48～78cmを測り、長軸方向はN-67°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は1層が黒褐色(10YR3/2)シルトのブロックを含む小礫混じりの褐色(7.5YR4/3)砂質シルト、2層が明黄褐色(10YR7/6)シルトのブロックを含む小～中礫混じりの褐色(10YR4/4)シルト質砂、3層が黄色(2.5Y7/8)粘土のブロックを含む中礫混じりの褐色(10YR4/4)砂質シルト、4層が灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで出土遺物は皆

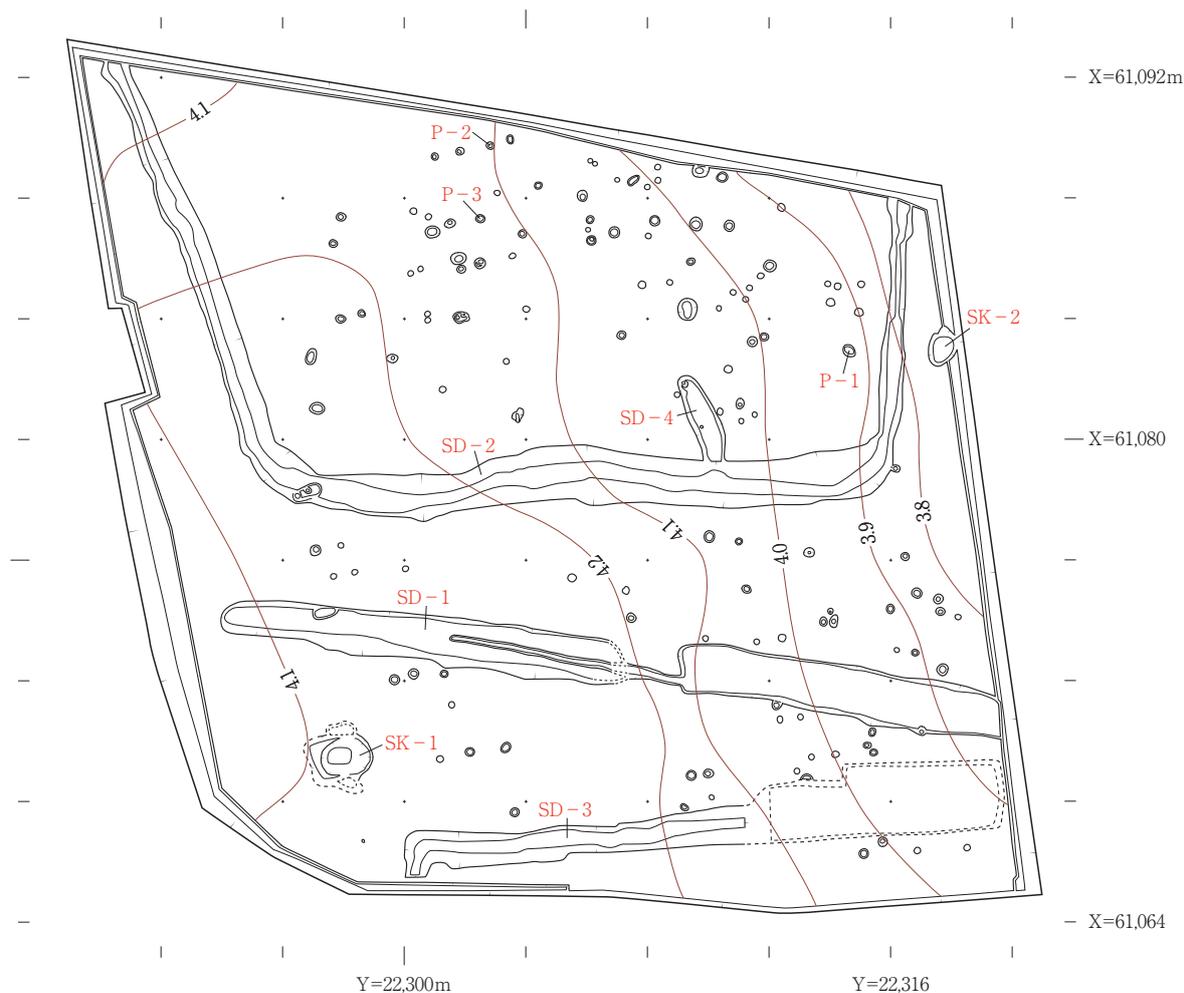


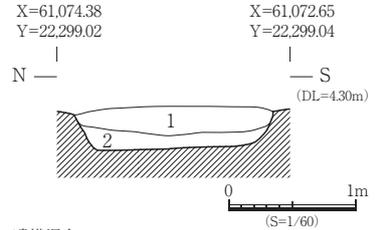
図3-1 I区遺構平面図(S=1/250)

1. I区 (1) 中世

無であった。

SK-2

調査区東部で検出した楕円形とみられる土坑で、東側は調査区外へ続く。確認長径1.32m、確認短径0.90m、深さ17~27cmを測り、長軸方向はN-21°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は褐色シルトのブロックを含む暗褐色(10YR3/3)シルト質粘土で出土遺物は皆無であった。



② 溝跡

SD-1 (図3-2)

調査区南部で検出した東西溝跡で、東側は調査区外へ続く。幅0.32~1.81m、深さ16~42cmを測り、基底面は西(3.849m)から東(3.669m)に傾斜し、26.80mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は1層が大礫混じりの暗褐色(7.5YR3/3)粘土質シルト、2層が中~大礫混じりの暗褐色(7.5YR3/3)粘土質シルト

遺構埋土
1. 大礫混じりの暗褐色(7.5YR3/3)粘土質シルト
2. 中~大礫混じりの暗褐色(7.5YR3/3)粘土質シルト

図3-2 SD-1

トであった。出土遺物には弥生土器49点、須恵器16点、土師質土器1,027点、瓦質土器36点、備前焼5点、白磁1点、石製品6点がみられ、土師質土器7点(44~50)、瓦質土器4点(51~54)、備前焼1点(55)、石製品6点(56~61)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-3 44~50)

全て鍋の口辺部破片で、44~49は口辺部外面に鏝を持ち、50が明瞭な鏝を持たないものである。44は内面と口辺部外面には回転ナデを施し、胴部外面にはタタキ目が認められる。鏝下部から胴部外面にかけて煤が付着し、胎土には粗粒砂~小礫を含む。45は摩耗のため調整は不明瞭であるが、胴部外面にはタタキ目が残る。鏝下部から胴部外面にかけて煤が付着し、胎土には粗粒砂~小礫を含む。46は内面と口辺部外面には回転ナデを施し、胴部外面にはタタキ目が認められる。鏝下部から胴部外面にかけて煤が付着し、胎土には中粒~極粗粒砂を含む。47は摩耗のため調整は不明瞭であるが、鏝下部にヨコナデ、胴部外面にはタタキ目が認められる。胴部外面には煤が付着し、胎土には中粒~粗粒砂を含む。

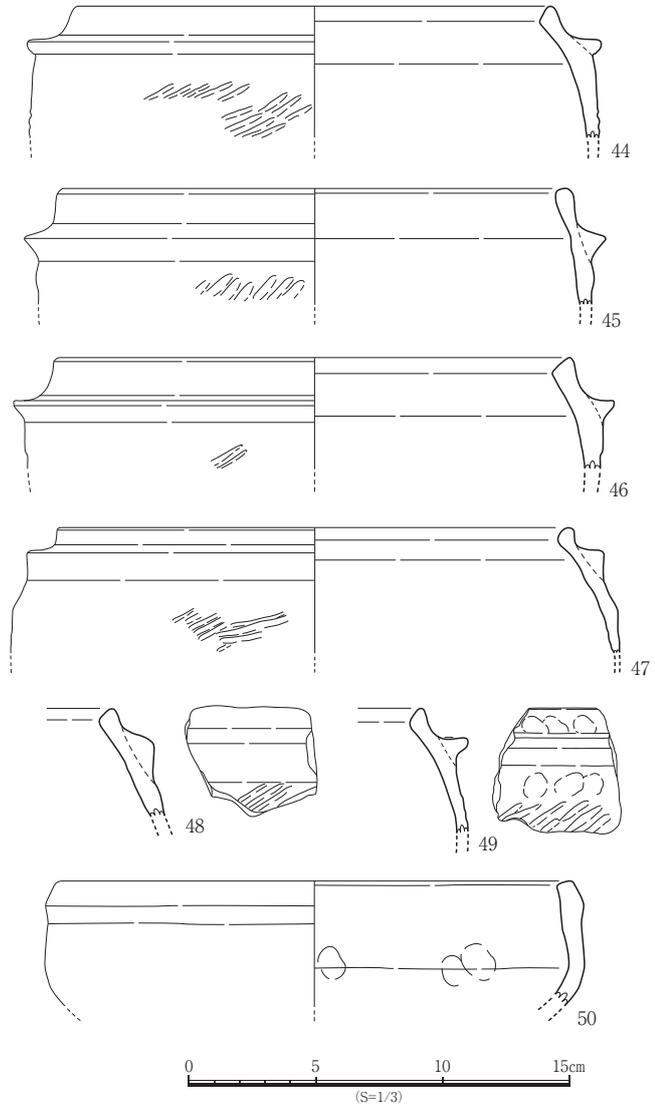


図3-3 SD-1出土遺物実測図1

48は摩耗のため調整は不明瞭であるが、胴部外面にタタキ目が残り、胎土には中粒砂～小礫を含む。49は摩耗のため調整は不明瞭であるが、胴部外面にはタタキ目が残る。鏝下部から胴部外面にかけて煤が付着し、胎土には中粒～粗粒砂を含む。50は摩耗のため内面の調整は不明であるが、口縁部外面にヨコナデ、口辺部から胴部の外面にはナデを施す。外面には煤が付着し、胎土には中粒～極粗粒砂を含む。

瓦質土器(図3-4 51～54)

全て鍋である。51は口辺部破片で摩耗のため内面の調整は不明であるが、口縁部外面にはヨコナデ、胴部には指オサエのちナデを施す。外面には煤が付着しており、胎土は精良である。52は全体の形状が復元できたもので、胴部から底部内面にヨコナデとナデ、底部外面には指オサエのあとナデを施す。底部外面には煤が付着し、胎土は精良である。53も全体の形状が復元できたもので、口縁部内外面にヨコナデ、胴部内外面に指オサエのちナデ、底部内外面にナデを施し、胎土は精良である。54は独立した鏝が二つ付くと考えられるものである。摩耗のため調整は不明で、胎土は精良である。

備前焼(図3-5 55)

55は甕の口辺部破片で、内外面とも回転ナデを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。

石製品(図3-5 56～61)

56は石鍋で、口縁部と底部の一部を欠損する。器面には加工痕が認められ、石材は滑石と考えられる。

57～59は叩石で石材は砂岩である。57は両端と片側側面に敲打痕が残る。58は完存し、側面全体に敲打痕が残る。59は側面全体と両面に敲打痕が残る。

60は砥石で、片側の平坦面と側面に使用痕が残る。石材は砂岩である。

61は石鏝で、完存する。石材はサヌカイトとみられる。

SD-2(図3-6)

調査区北部で検出した溝跡で、平面はコの字状を呈する。幅0.46～1.92m、深さ9～19cmを測り、基底面は西側(4.008m)から東側(3.626m)に傾斜し、43.50mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は

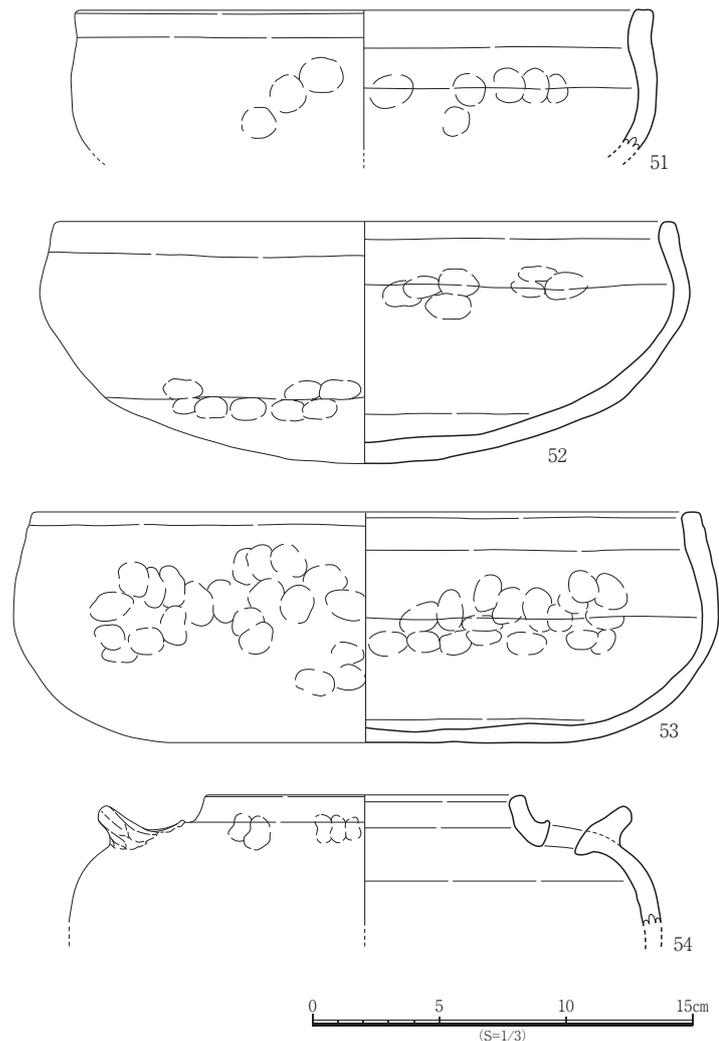


図3-4 SD-1出土遺物実測図2

1. I区 (1) 中世

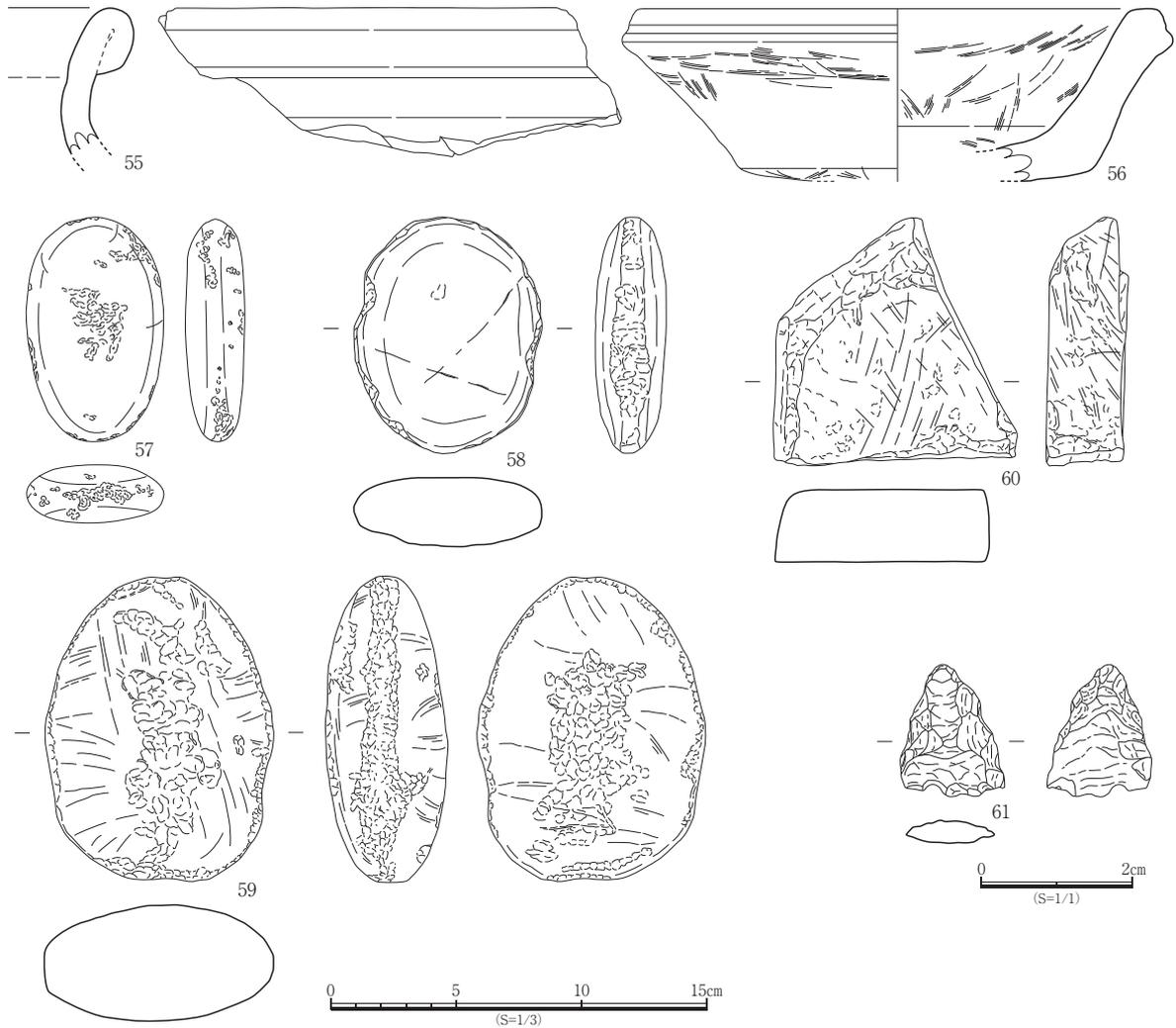


図3-5 SD-1出土遺物実測図3

中～大礫混じりの黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂質シルトであった。出土遺物には須恵器4点, 土師質土器206点, 瓦質土器11点, 備前焼1点, 白磁1点, 石製品2点がみられ, 土師質土器1点(62), 備前焼1点(63), 石製品2点(64・65)が図示できた。

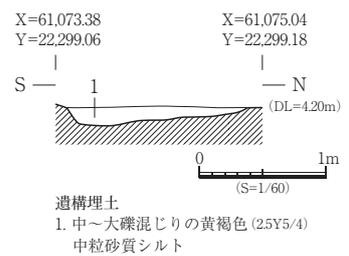


図3-6 SD-2

出土遺物

土師質土器(図3-7 62)

62は鏝を持つ鍋の口辺部破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが、鏝下部から胴部外面にかけて煤が付着する。胎土には中粒～極細粒砂を含む。

備前焼(図3-7 63)

63は播鉢の口辺部破片である。器面には回転ナデを施し、内面には9条の条痕が認められる。胎土には粗粒砂～小礫を多く含む。

石製品(図3-8 64・65)

64・65は叩石で、石材は砂岩である。64は側面全体に敲打痕が残る。65は約1/2を欠損し、片側の側面に敲打痕が認められる。

SD-3

調査区南部で検出した東西溝跡で、東側は攪乱に切られており、西側は直角に曲がり南へと続く。幅0.65～1.31m、深さ7～18cmを測り、基底面は西(4.036m)から東(3.961m)に傾斜し、11.80mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は明黄褐色(10YR7/6)シルトのブロックが混じるオリブ褐色(2.5Y4/6)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器3点、須恵器1点、土師質土器23点がみられたが、図示できるものはなかった。

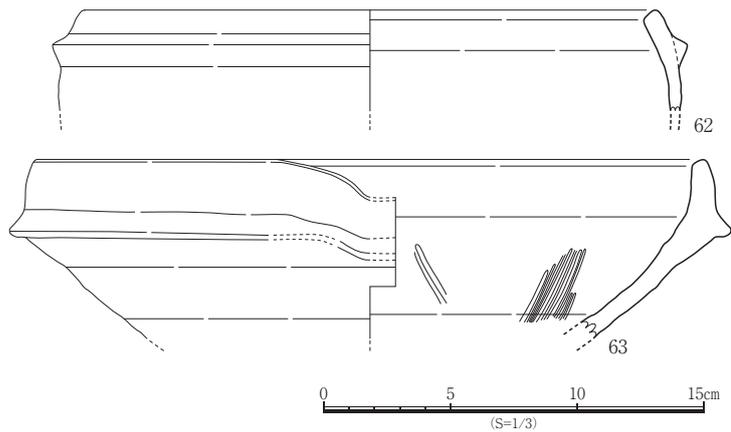


図3-7 SD-2出土遺物実測図1

SD-4

調査区北部で検出した南北溝跡で、南側はSD-2に切られている。幅0.68～0.94m、深さ4～9cmを測り、基底面は北(3.979m)から南(3.843m)に傾斜し、3.20mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は炭化物を含む中礫混じりののび黄褐色(10YR4/3)シルトであった。出土遺物は皆無であった。

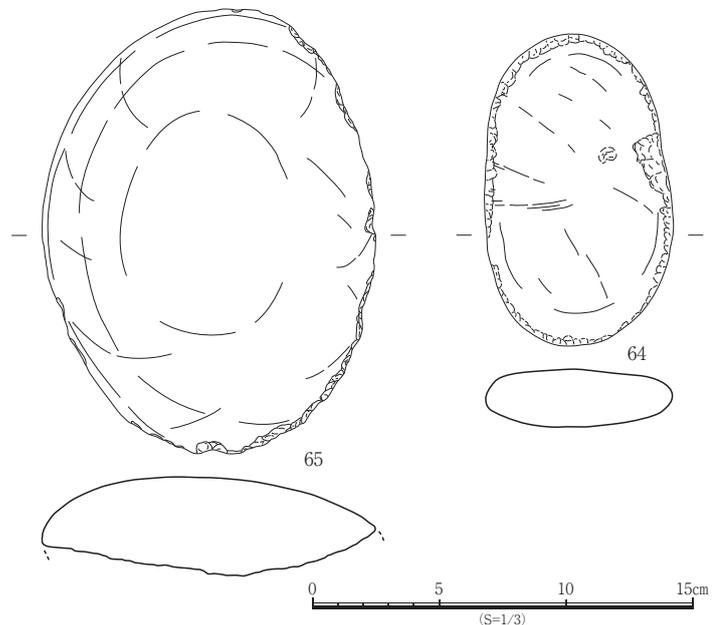


図3-8 SD-2出土遺物実測図2

③ 柱穴

P-1

調査区東側で検出された柱穴である。長径44cm、短径32cmの楕円形で、深さ19cmを測る。埋土は小礫混じりののび黄褐色(10YR5/3)砂質シルトで、出土遺物には土師質土器1点(66)がみられ、図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-9 66)

66は鍋の口辺部破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが、胴部外面にタタキ目が残る。鏝下部から胴部外面にかけて煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫を含む。

(2) 近世

柱穴が検出されているが、遺構密度は低い。

P-2

調査区北側で検出された柱穴である。長径28cm、短径21cmの楕円形で、深さ29cmを測る。埋土は土器と炭化物を含むオリブ褐色(2.5Y4/3)粘土質シルトで、出土遺物には近世磁器1点(67)がみられ、図示できた。

2. II区 (1) 弥生時代

出土遺物

近世磁器(図3-9 67)

67は皿である。器面には灰白色の釉を施し、見込みにはハマの痕跡が残る。高台畳付は4箇所波状に削り、胎土は精良である。

P-3

調査区北側で検出された柱穴である。長径30cm、短径25cmの楕円形で、深さ18cmを測る。埋土は土器と炭化物を含むオリブ褐色(2.5Y4/3)粘土質シルトで、出土遺物には弥生土器4点、土師質土器1点、近世陶器1点がみられ、土師質土器1点(68)が図示できた。

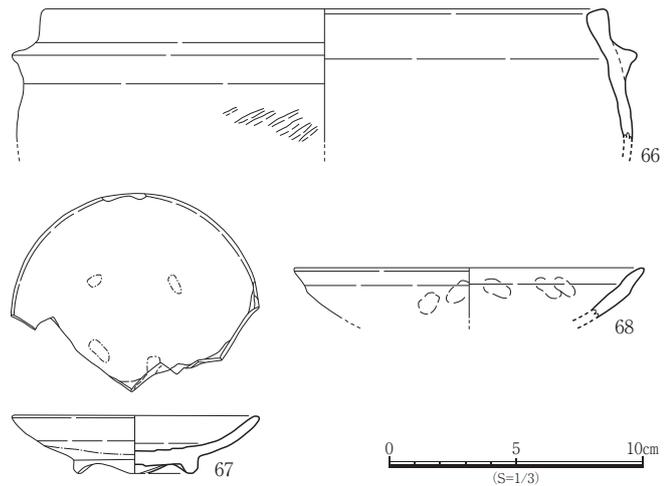


図3-9 P-1~3出土遺物実測図

出土遺物

土師質土器(図3-9 68)

68は皿の口辺部破片である。手づくね成形とみられ、器面には指頭圧痕が残る。胎土は精良である。

2. II区

確認された遺構の時期は弥生時代・中世・近代で、竪穴建物跡・土坑・溝跡・柱穴などが検出されている。弥生時代では弥生時代前期の土坑が検出されており、当該期の集落が本調査区周辺に存在している可能性が考えられる。また、弥生時代後期では竪穴建物跡などが5軒検出されており、当該期の集落が本調査区を中心に展開していたとみられる。中世では溝跡や多くの柱穴が検出されているが、掘立柱建物跡を復元することはできなかった。

(1) 弥生時代

竪穴建物跡・土坑などが検出されており、当該期の集落が確認された。

① 竪穴建物跡

ST-1(図3-11)

調査区東部で検出した方形を呈する竪穴建物跡で、東側は調査区外へ続く。一辺は3.18~3.29mを測り、主軸方向は不明である。遺存する壁高は3~23cmで、床面の標高は3.692~3.787mを測る。付属遺構として、中央ピット(P-1)と壁溝、4個の柱穴及びベッド状遺構を確認した。検出された柱穴はいずれも浅く、明確に主柱穴と断定できるものはなかった。中央ピット(P-1)は長径0.35m、短径0.34mの円形で、深さ13cmを測り、弥生土器が6点出土している。壁溝は三方の壁沿いで検出されており、幅3~18cm、深さ3~5cm、延長6.45mを測る。竪穴建物跡の南北側に地山削り出しとみられるベット状遺構が確認されており、比高差は3~5cmであった。埋土は1層が黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト、2層が明黄褐色(10YR6/6)粘土、3層が灰オリブ色(5Y5/2)粘土質シルト、4層が土器を含む暗褐色(10YR3/3)シルト、5層がにぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルトで、出土遺物には弥生土器267点、石製品2点がみられ、弥生土器12点(69~80)が図示できた。



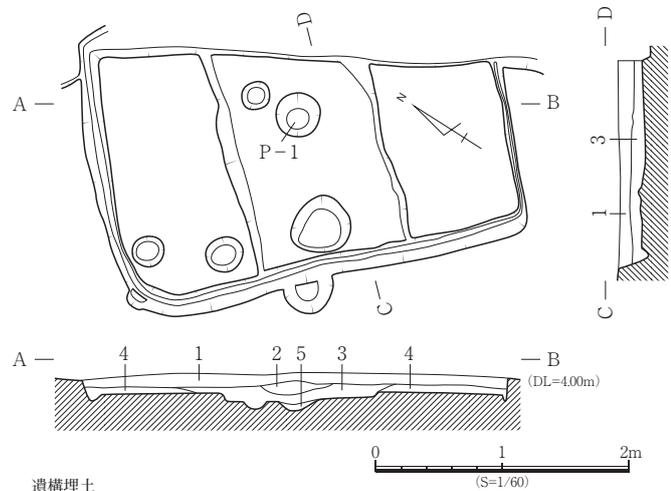
図3-10 II区遺構平面図(S=1/250)

2. II区 (1) 弥生時代

出土遺物

弥生土器(図3-12 69~79)

69~76は甕である。69・70は全体の形状が復元でき、口辺部が外反して立ち上がるものである。69は口辺部内面にハケ、胴部から底部内面にナデ、口縁端部にヨコナデを施し、胴部外面にはタタキ目が認められる。また、胴下半部から底部の外面にはタタキのあとハケを施す。胴下半部には破裂痕が残り、胎土には中粒砂~小礫を含む。70は内面にハケ調整とナデ調整、外面にタタキがみられ、胴中央部から底部の外面にはタタキのあとハケを施す。胎土には中粒砂~中礫を含む。71~74は口辺部から胴中央部にかけての破片で、71~73は口辺部が外反して立ち上がるものである。71は摩耗のため内面の調整は不明瞭であるが、外面にはタタキ目と指頭圧痕が認められる。胎土には中粒砂~小礫を多く含む。72は口縁部内外面にヨコナデ、胴上半部内面にハケ、胴上半部外面にタタキを施す。胎土には中粒砂~小礫を含む。73は摩耗のため内面の調整は不明瞭であるが、口縁端部にヨコナデ調整、口辺部外面にハケ調整、胴上半部にタタキ目が認められる。胎土には中粒砂~小礫を含む。74は口辺部が斜め上方に直線的に立ち上がるものである。全体的に摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面にはタタキ目が認められる。胎土には中粒砂~小礫を含む。75・76は底部破片で、平底を呈する。75は内面にナデ、外面にタタキを施し、胴下半部外面にはタタキのあとヘラナデ調整がみられる。胎土には中粒砂~中礫を含む。76はやや歪んでおり、内面にハケ、外面にはタタキを施し、胴中央部にはタタキのあとハケ調整、胴下半部にはタタキのあとヘラナデ調整がみられる。また、胴中央部には煤が付着しており、胎土には中粒砂~中礫を含む。



- 遺構埋土
- | | |
|--------------------------|----------------------------|
| 1. 黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト | 4. 土器を含む暗褐色 (10YR3/3) シルト |
| 2. 明黄褐色 (10YR6/6) 粘土 | 5. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト |
| 3. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粘土質シルト | |

図3-11 ST-1

77は鉢とみられる口辺部破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面にはナデの痕跡が認められる。胎土には中粒砂~小礫を含む。

78は器台とみられるもので、台部と脚裾部を欠損する。摩耗のため調整は不明で、胎土には中粒~極粗粒砂を含む。

79はミニチュア土器で鉢を模したと考えられるものである。内面にはナデ、外面にはタタキのあと丁寧なナデを施し、胎土には中粒砂~小礫を含む。

石製品(図3-12 80)

80は砥石とみられるもので、両面と側面に使用痕が認められる。石材は砂岩である。

ST-2(図3-13)

調査区北東部で検出した多角形を呈する竪穴建物跡で、北側は調査区外へ続く。一辺は4.32~4.76mを測り、主軸方向は不明である。遺存する壁高は3~29cmで、床面の標高は3.639~3.809mを測る。付属遺構として、中央ピット(P-1)と壁溝、14個の柱穴及びベッド状遺構を確認した。このう

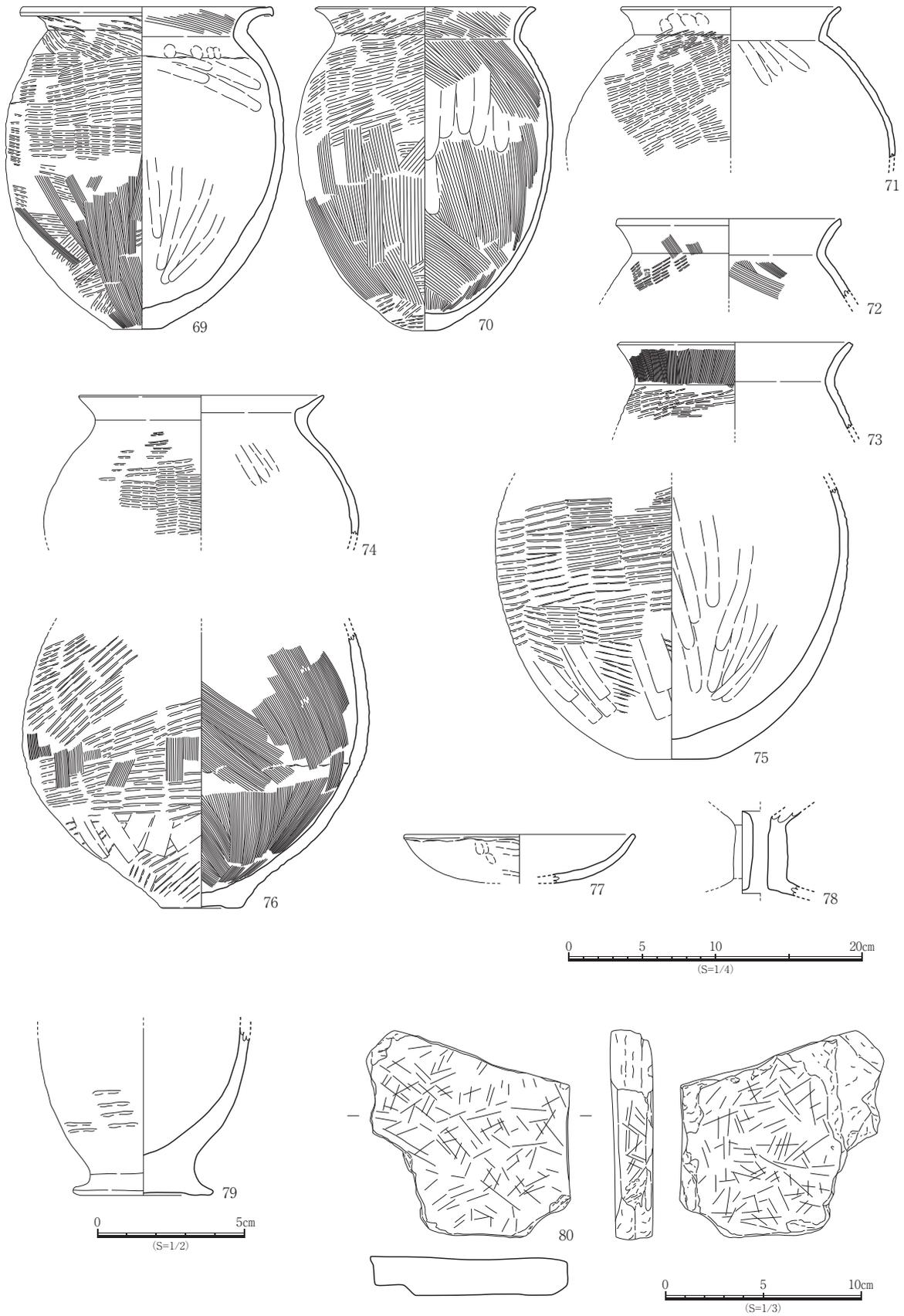


図3-12 ST-1出土遺物実測図

2. II区 (1) 弥生時代

ち、主柱穴と考えられる柱穴は位置関係から中央ピットを囲むP-2～8とみられるが、北側は不明である。P-2は径26cmの円形で、深さ31cm、P-3は径22cmの円形で、深さ21cm、P-4は径20cmの円形で、深さ26cm、P-5は径19cmの円形で、深さ27cm、P-6は径29cmの楕円形で、深さ23cm、P-7は径20cmの円形で、深さ7cm、P-8は径19cmの円形で、深さ27cmを測り、柱間寸法は0.66～1.39mとみられる。中央ピット(P-1)

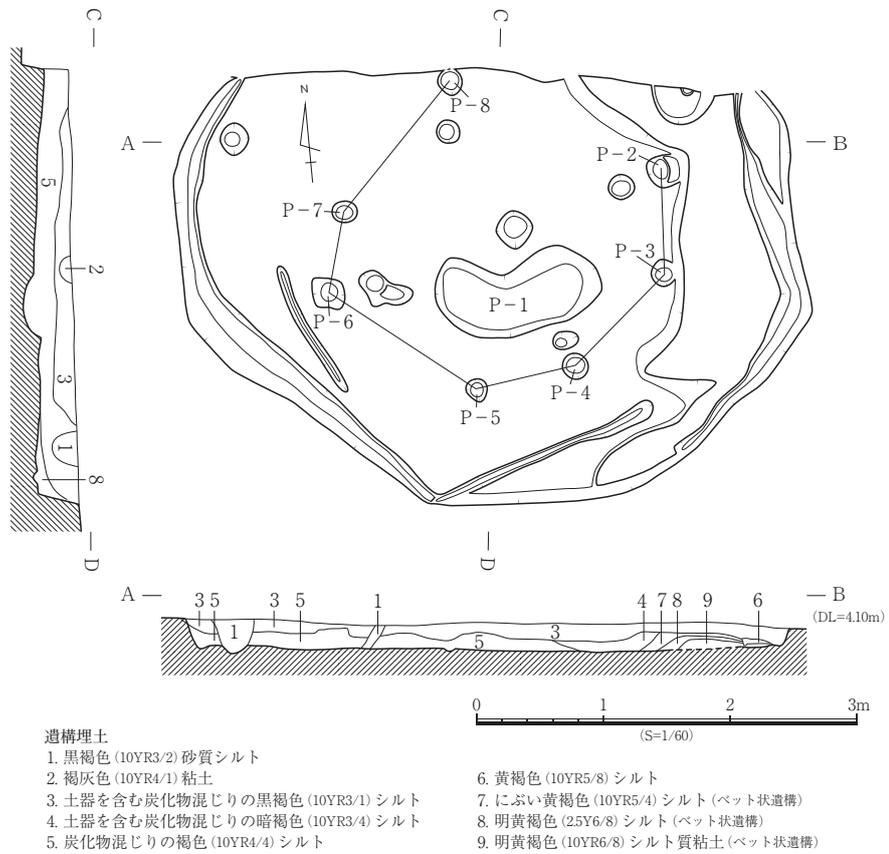


図3-13 ST-2

は長径1.32m、短径0.49mの不整楕円形で、深さ13cmを測り、弥生土器が1点出土している。壁溝は西壁と東壁沿いで検出されており、幅8～28cm、深さ2～8cm、延長7.26mを測る。壁穴建物跡の東側には版築されたと思われるベット状遺構が確認されており、比高差10～16cmであった。埋土は1層が黒褐色(10YR3/2)砂質シルト、2層が褐灰色(10YR4/1)粘土、3層が土器を含む炭化物混じりの黒褐色(10YR3/1)シルト、4層が土器を含む炭化物混じりの暗褐色(10YR3/4)シルト、5層が炭化物混じりの褐色(10YR4/4)シルト、6層が黄褐色(10YR5/8)シルト、7層がにぶい黄褐色(10YR5/4)シルト(ベット状遺構)、8層が明黄褐色(2.5Y6/8)シルト(ベット状遺構)、9層が明黄褐色(10YR6/8)シルト質粘土(ベット状遺構)で、出土遺物には弥生土器1,498点、石製品4点がみられ、弥生土器88点(81～168)、石製品2点(169・170)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-14～22 81～168)

81～94は壺である。81～83は口辺部が緩やかに外反するものである。81は全体の形状が復元できたもので、底部はほぼ丸底である。胴部内面にはナデ、口辺部内面にはヨコナデを施し、口辺部から胴上半部外面にはハケ調整、胴中央部から胴下半部の外面にはタタキ目とハケ調整が認められる。胴中央部には煤が部分的に付着し、胎土には中粒砂～小礫を含む。82は口辺部から胴上半部にかけての破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが、胴上半部内外面にヘラミガキ調整、口辺部外面にヨコナデ調整がみられ、胎土には粗粒砂～小礫を含む。83は口辺部破片で、内面にハケ、口縁部内外面にヨコナデ、口辺部外面にハケを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。84・85は口辺部が強く外

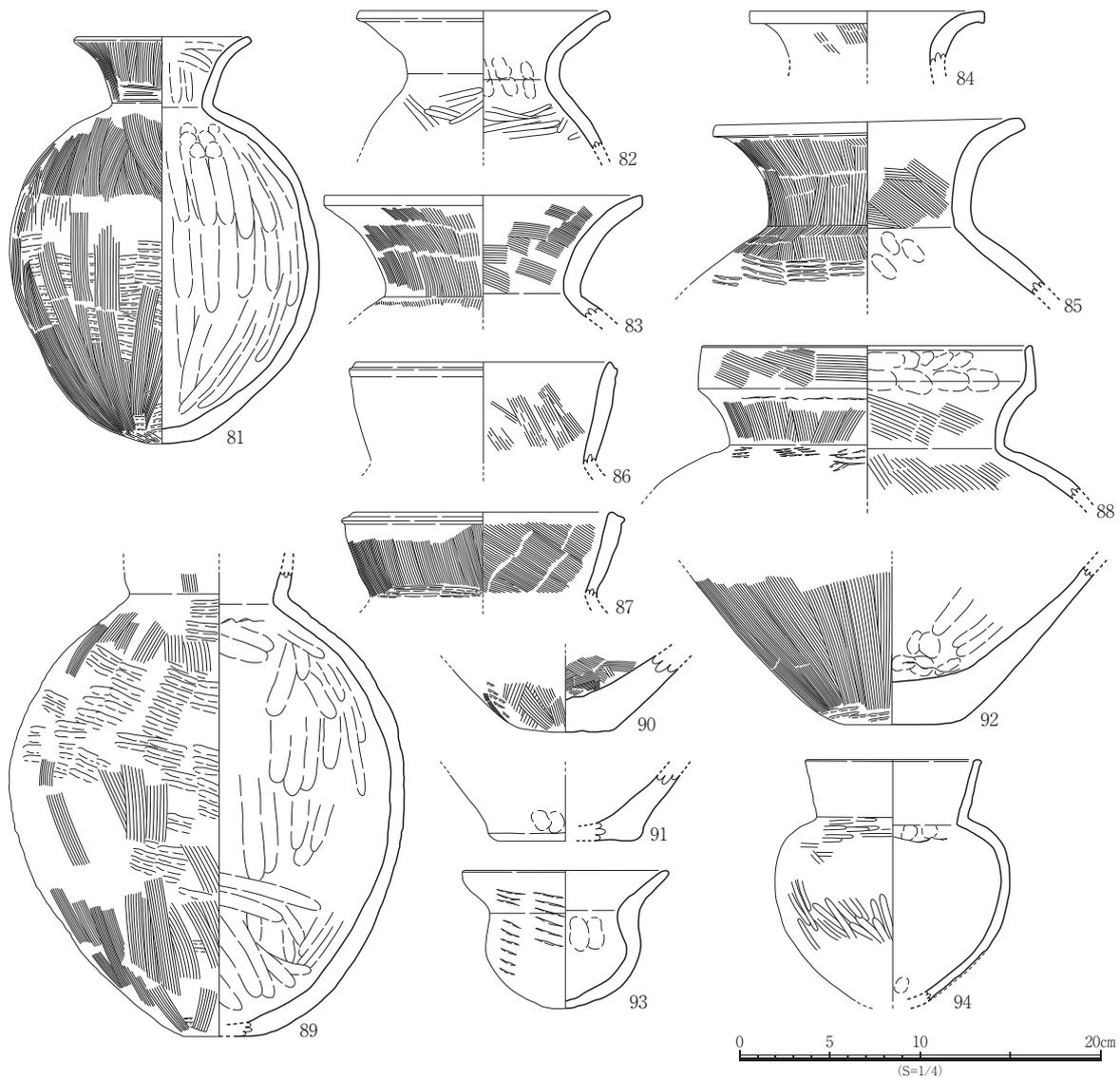


図3-14 ST-2出土遺物実測図1

反するものである。84は口辺部破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面にハケのあとヨコナデを施し、胎土には中粒～極粗粒砂を含む。85は口辺部から胴上半部にかけての破片である。口辺部内面にハケ、胴上半部内面にナデを施し、口縁部内外面にヨコナデ調整、口辺部外面にハケ調整、胴上半部外面にタタキ目が認められる。胎土には中粒砂～小礫を含む。86・87は口辺部が斜め上方に直線的に立ち上がるもので、口辺部破片である。86は摩耗のため調整は不明瞭であるが、口辺部内面にハケ調整、口縁部内外面にヨコナデ調整が認められる。胎土には中粒砂～小礫を多く含む。87は内外面ともハケを施し、口縁部内外面にはヨコナデ調整がみられる。胎土には粗粒砂～小礫を含む。88は二重口縁を呈するもので、口辺部から胴上半部にかけて残存する。摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面と口辺部外面にはハケ調整、胴上半部にはタタキ目がみられ、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。89は口辺部を欠損するもので、摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にはナデ調整、外面にはタタキ目とハケ調整が認められる。胎土には中粒砂～小礫を含む。90～92は底部破片である。90は内面にハケ、外面にタタキとハケを施し、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。91は摩耗のため

2. II区 (1) 弥生時代

調整は不明で、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。92は摩耗のため調整が不明瞭であるが、外面にはタタキ目とハケ調整が認められ、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。93・94は小型の壺である。93は丸底を呈し、摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面にはタタキ目が認められ、胎土には中粒砂～小礫を含む。94は底部を欠損する。口辺部内外面は摩耗のため調整は不明であるが、胴部内面にはナデ調整、胴部外面にはヘラミガキ調整が認められ、胎土には粗粒砂～小礫を多く含む。

95～140は甕である。95は全体の形状が復元できたもので、口辺部が斜め上方に直線的に立ち上がる。内面にはハケとナデ、外面にはタタキを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。96～98は底部を欠損するもので、96・97は口辺部が斜め上方に直線的に立ち上がる。96は内面にナデと指オサエ、外面にタタキを施し、口辺部外面にはタタキのあとの指オサエが認められる。胴下半部には炭化物、外面全体には煤が付着し、胎土には中粒砂～中礫を含む。97は胴部内面にナデ、口辺部内外面にハケ、胴部にタタキを施し、口縁部内面にはヨコナデ調整、胴下半部にはタタキのあとハケ調整が認められる。口辺部から胴上半部外面には煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫を含む。98は口辺部が外反し

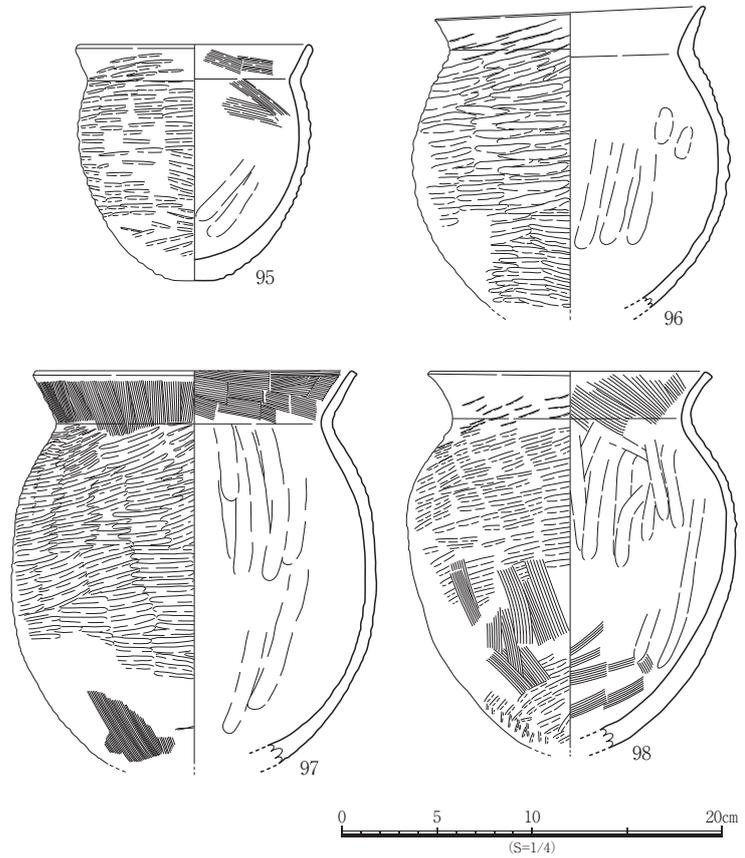


図3-15 ST-2出土遺物実測図2

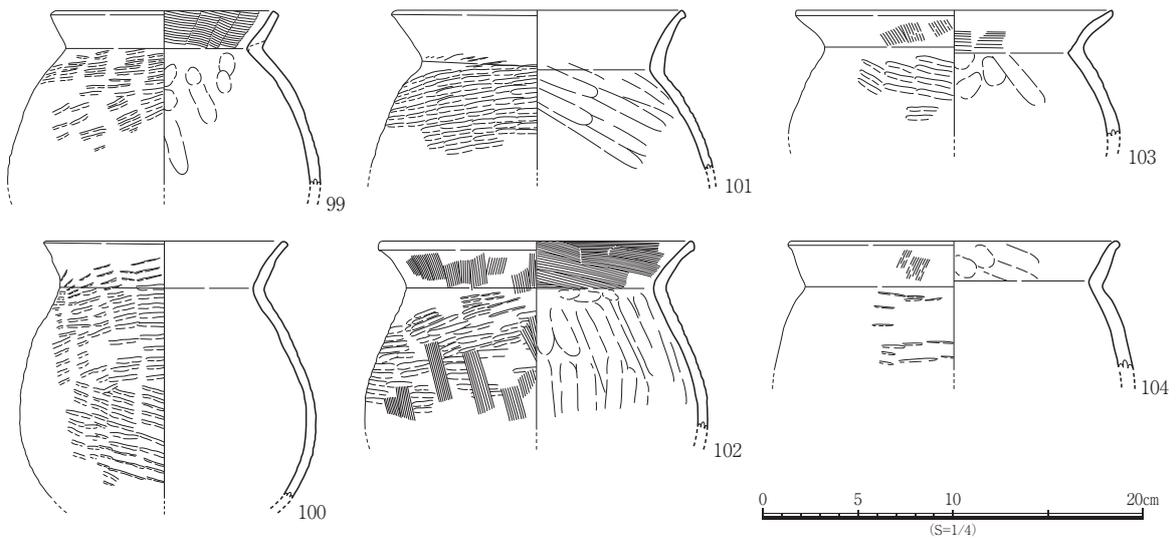


図3-16 ST-2出土遺物実測図3

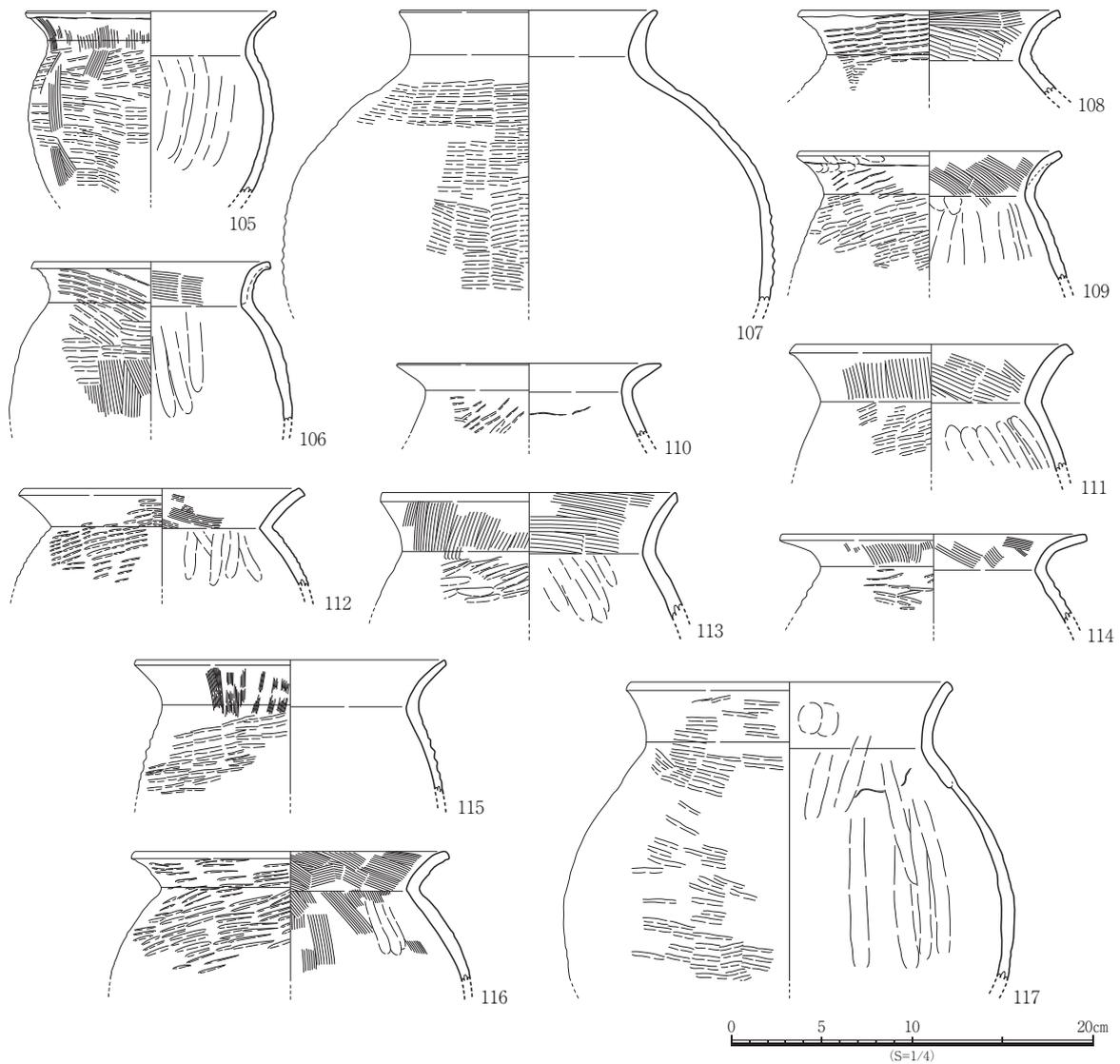


図3-17 ST-2出土遺物実測図4

て立ち上がるもので、口辺部内面と胴下半部にはハケ、胴上半部から中央部の内面にはナデを施し、外面にはタタキ目がみられる。口辺部外面には指オサエ、胴下半部にはハケをタタキのあとに施す。口辺部から胴上半部の外面には煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫を含む。99～104は口辺部が斜め上方に直線的に立ち上がるもので、口辺部から胴上半部にかけて残存する。99は口辺部内面にハケ、胴部内面にナデを施し、口辺部外面にはヨコナデ調整、外面にはタタキ目がみられる。胴部外面には煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。100は摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面にはタタキ目が残る。外面全体に煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫を含む。101は口辺部内外面にヨコナデ、胴部内面にナデを施し、胴部外面にはタタキ目がみられる。外面には部分的に煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫を含む。102は口辺部内外面にハケ、口縁端部にヨコナデ、胴部内面にナデを施し、胴部外面にはタタキとハケ調整がみられる。口辺部外面には煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫を含む。103は摩耗のため調整は不明瞭であるが、口辺部内外面にハケ調整、胴部内面にナデ調整、胴部外面にはタタキ目が認められる。口縁部内外面には指頭圧痕が残り、胎土には中粒砂～小礫を

2. II区 (1) 弥生時代

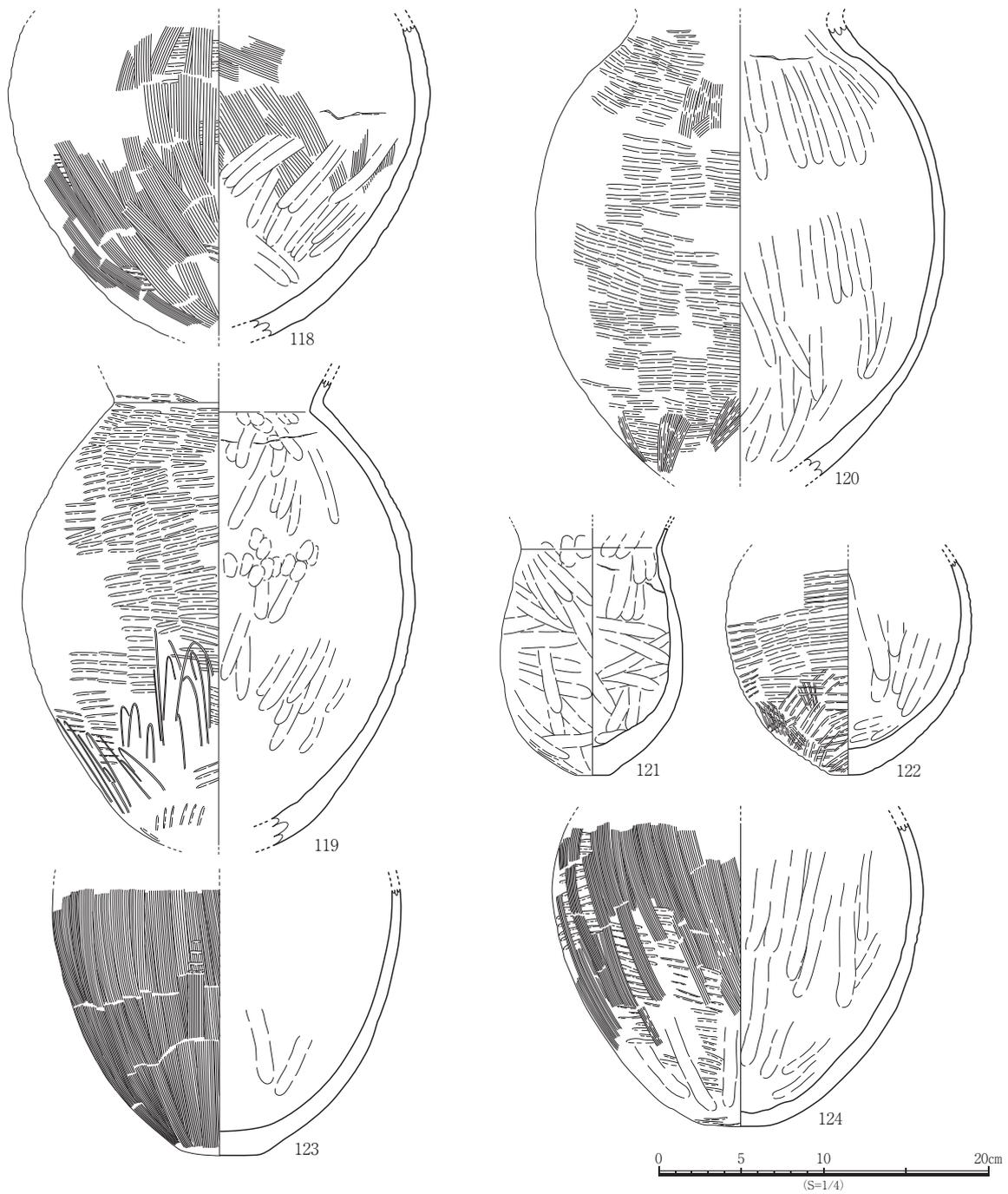


図3-18 ST-2出土遺物実測図5

含む。104は摩耗のため調整は不明瞭であるが、口辺部内外面にヨコナデ調整、胴部内面にナデ調整、胴部外面にタタキのあとのナデ調整が認められる。口縁端部内外面には指頭圧痕が残り、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。105～117は口辺部が斜め上方に外反して立ち上がるもので、口辺部から胴上半部にかけて残存する。105は摩耗のため調整は不明瞭であるが、胴部内面にナデ調整、口辺部外面にハケ調整、胴部外面にタタキとハケ調整が残る。胎土には中粒砂～小礫を含む。106は口縁端部内面にヨコナデ、口辺部内面にハケ、胴部内面にナデを施し、外面にはタタキ目がみられ、胴上半部にはタタキのあとのハケ調整が認められる。口辺部外面には煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫

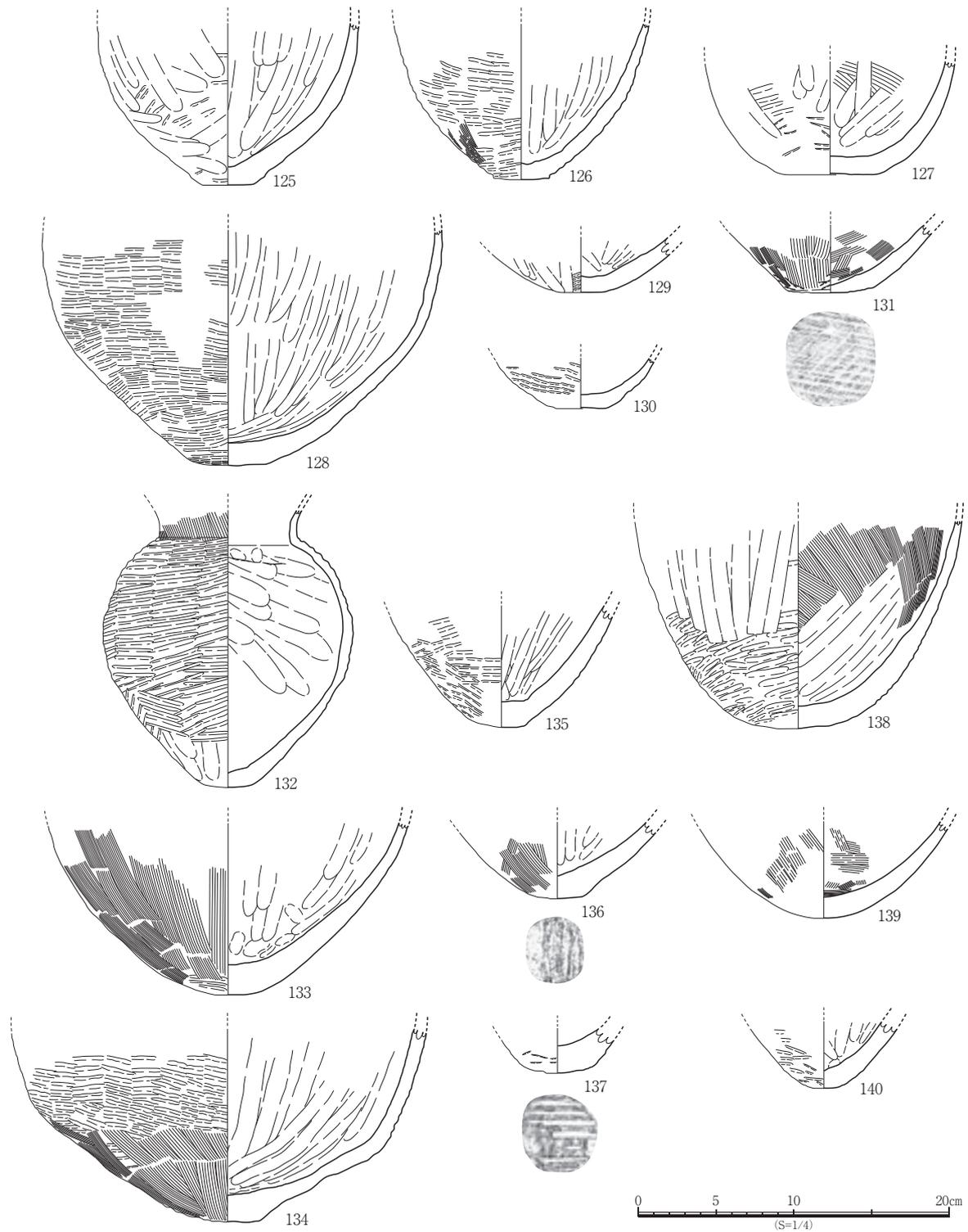


図3-19 ST-2出土遺物実測図6

を含む。107は器形が大きく歪んでおり、摩耗のため調整は不明瞭である。外面にはタタキ目が認められ、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。108は口辺部内面にハケ、口辺部外面にタタキを施し、口縁端部内外面にはヨコナデ調整が認められる。胎土には中粒砂～小礫を含む。109は口辺部内面にハケ、胴部内面にナデを施し、外面にはタタキ目がみられる。口縁端部内外面と口辺部外面には指頭圧

2. II区 (1) 弥生時代



図3-20 ST-2出土遺物実測図7

痕が残り、胎土には粗粒砂～小礫を含む。110は摩耗のため調整は不明瞭であるが、胴部外面にはタタキ目が残る。胎土には中粒砂～小礫を多く含む。111は摩耗のため調整は不明瞭であるが、口辺部内外面にハケ調整，胴部内面にナデ調整，胴部外面にタタキ目が認められる。口辺部外面には煤が付着し，胎土には中粒砂～小礫を含む。112は口辺部内面にハケ，胴部内面にナデ，外面にタタキを施す。口縁端部にはヨコナデ調整がみられ，胎土には中粒砂～小礫を含む。113は口辺部内外面にハケ，

胴部内面にナデ、胴部外面にタタキを施す。口縁端部にはヨコナデ調整がみられ、胎土には中粒砂～小礫を含む。114は摩耗のため調整は不明瞭であるが、口辺部内外面にハケ調整、胴部外面にタタキ目が認められる。口辺部外面には煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫を含む。115は口辺部外面にハケ、胴部外面にタタキを施すが、内面は摩耗のため調整は不明である。胎土には中粒砂～小礫を含む。116は口辺部内面にハケ、胴部内面にハケとナデを施し、外面にはタタキ目がみられる。口縁端部には指頭圧痕が残り、胎土には中粒砂～

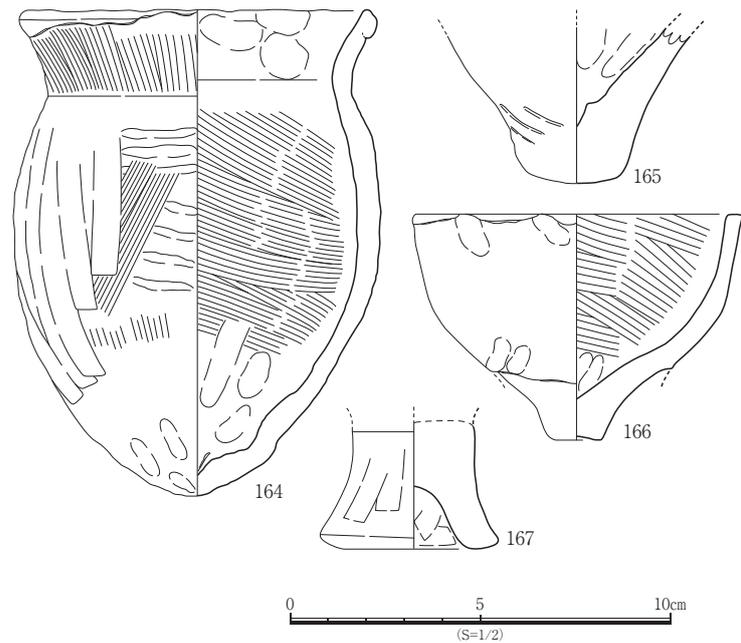


図3-21 ST-2出土遺物実測図8

小礫を含む。117は摩耗のため調整は不明瞭であるが、胴部内面にはナデ調整、外面にはタタキ目が認められる。胎土には中粒砂～小礫を含む。118～120は胴部のみ残存するものである。118は内面にハケを施し、下半部にはハケのあとのナデ調整が認められる。外面にはタタキのあとハケを施し、胎土には粗粒砂～中礫を含む。119は内面にナデ、外面にタタキを施し、外面下半部にはヘラ描き沈線がみられる。胎土には中粒砂～小礫を多く含む。120は内面にナデ、外面にタタキを施し、胴上半部外面にタタキのあとハケ調整とナデ調整、胴下半部外面にタタキのあとハケ調整がみられる。胎土には中粒砂～小礫を含む。121～131は底部が平底を呈するものである。121は口縁部を欠損するもので、内外面とも粗いナデを施す。胴中央部に破裂痕がみられ、胎土には中粒砂～中礫を含む。122～128は胴部から底部にかけて残存するものである。122は内面にナデ、外面にタタキを施す。胴中央部には煤が付着し、胎土には粗粒砂～小礫を多く含む。123は摩耗のため内面の調整は不明であるが、外面にはタタキのあとハケを施す。底部外面にもタタキ目がみられ、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。124は内面にナデ、外面にタタキを施す。外面にはタタキのあとハケ調整とナデ調整がみられ、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。125は内面に強いナデ、外面にタタキのあと粗いナデを施し、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。126は摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にナデ調整、外面にタタキ目とハケ調整が認められる。胎土には中粒砂～小礫を含む。127は胴部内面にハケのあとナデ、底部内面にナデを施し、外面にはタタキのあとナデ調整がみられる。胎土には中粒砂～小礫を含む。128は内面にナデ、外面にタタキを施し、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。129～131は底部のみ残存するものである。129は内面にナデ、外面にタタキのあとナデを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。130は摩耗のため内面の調整は不明であるが、外面にはタタキ目が認められる。胎土には中粒砂～小礫を多く含む。131は内面にハケ、外面にタタキのあとハケを施す。底部外面には斜行するヘラ描き沈線が認められ、胎土には中粒砂～小礫を含む。132～137は底部がやや平底を呈し、132～135は胴部から底部にかけて残存するものである。132は口縁部を欠損するもので、内面全体にナデ、

2. II区 (1) 弥生時代

口辺部外面にハケ、胴部外面にタタキとナデを施す。口辺部から胴上半部外面には煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫を含む。133は摩耗のため内面の調整は不明瞭であるが、ナデ調整が認められる。外面にはタタキのあとハケを施し、胎土には粗粒砂～小礫を多く含む。134は大きく歪んでおり、内面にはナデ、外面にはタタキを施す。胴下半部にはタタキのあとのハケ調整がみられ、胎土には粗粒砂～中礫を含む。135は内面に強いナデ、外面にタタキを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。136・137は底部のみ残存するものである。136は内面にナデ、外面にハケを施す。内面の一部に炭化物が付着し、胎土には中粒砂～小礫を含む。137は内面にナデ、外面にタタキのあとナデを施す。内面には炭化物が付着し、胎土には中粒砂～小礫を含む。138～140は底部が丸底に近い形状を呈するものである。138・139は胴部から底部にかけて残存するものである。138は内面にハケと強いナデ、外面にタタキとヘラナデを施し、胎土には粗粒砂～小礫を含む。139は摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にハケ調整、外面にハケ調整とナデ調整が認められる。胎土には中粒砂～小礫を含む。140は底部のみ残存するもので、内面にナデ、外面にタタキを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。

141～152は鉢で、141～146は平底を呈し、体部が内湾もしくは直線的に立ち上がるものである。141は摩耗のため調整は不明瞭であるが、底部内面にはナデ調整が認められる。胎土には粗粒砂～小礫を多く含む。142は手づくね成形とみられ、体部内外面にナデを施す。口縁部内外面と体部下端に指頭圧痕がみられ、胎土には粗粒砂～中礫を含む。143は摩耗のため調整は不明瞭であるが、器面にはタ

タタキ目と指頭圧痕がみられ、胎土には粗粒砂～中礫を含む。144は摩耗のため調整は不明瞭であるが、体部外面下端にタタキ目がみられ、胎土には粗粒砂～小礫を多く含む。145は摩耗のため調整は不明

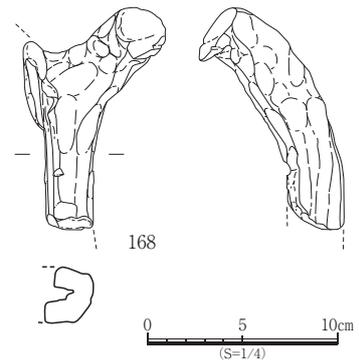


図3-22 ST-2出土遺物実測図9

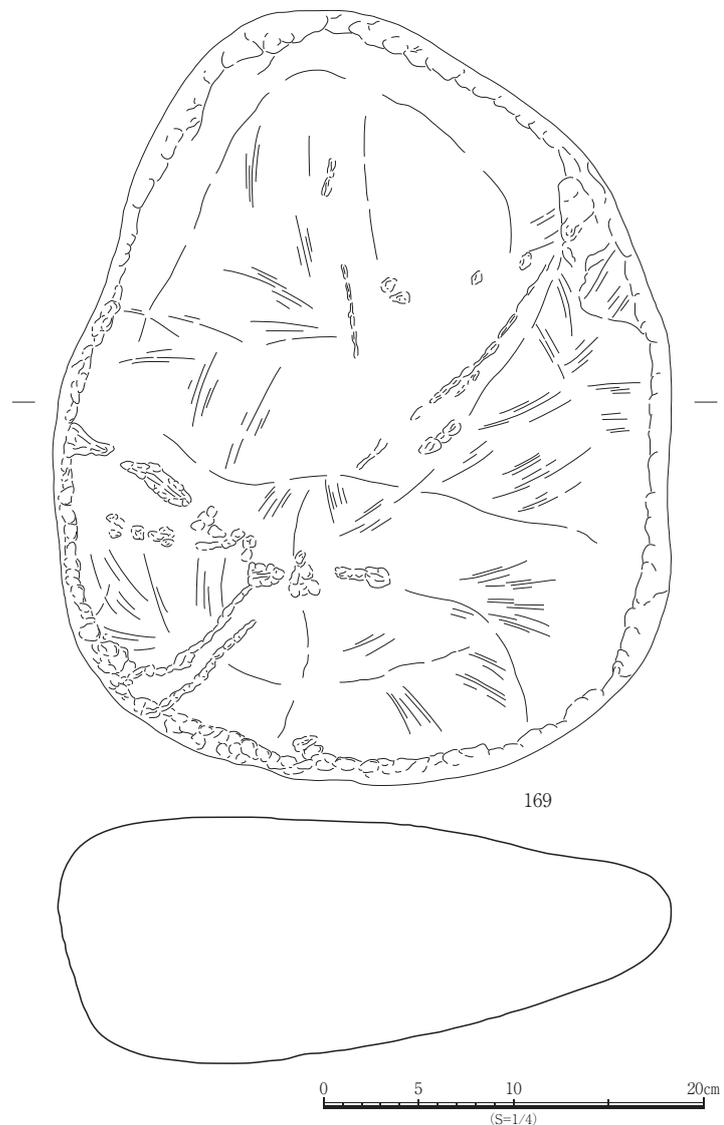


図3-23 ST-2出土遺物実測図10

瞭であるが、体部外面にタタキ目が認められる。口縁部は指オサエのため波状を呈し、胎土には中粒砂～中礫を含む。146は摩耗のため調整は不明瞭であるが、体部内面にハケ、体部外面にタタキを施す。口縁端部にヨコナデ調整、底部内外面に指オサエが認められ、胎土には中粒砂～中礫を含む。147～149は丸底を呈し、体部が内湾して立ち上がるものである。147は摩耗のため内面の調整は不明であるが、外面にはタタキを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。148は内外面ともハケを施し、外面には破裂痕がみられる。胎土には粗粒砂～中礫を含む。149は内面にナデ、外面にタタキを施し、口縁部内外面には指頭圧痕がみられる。口縁部は指オサエのため若干波状を呈し、胎土には中粒砂～小礫を含む。150は平底を呈し、口辺部が屈曲して立ち上がるものである。内面にハケ、外面にタタキを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。151・152は脚付鉢と考えられるものである。151は摩耗のため調整は不明瞭であるが、脚柱部外面にヨコナデ調整が認められ、胎土には粗粒砂～小礫を含む。152は脚部のみ残存し、脚柱部外面にナデ、脚裾部内外面にハケのあと指オサエを施す。胎土には中粒砂～小礫を含む。

153～160は高杯である。153は脚端部を欠損するもので、脚裾部には円孔を穿つ。杯体部内面にナデ調整、杯底部内面にヨコナデ調整とナデ調整が認められ、杯口縁端部にはヨコナデを施す。外面全体には丁寧なヘラミガキを施し、胎土には粗粒砂～小礫を多く含む。154・155は杯部のみ残存するものである。154は摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にハケ調整とナデ調整、外面にハケ調整が認められ、口縁端部外面にはヨコナデを施す。一部残る脚柱部外面にはナデ調整がみられ、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。155は摩耗のため内面の調整は不明であるが、口縁端部内外面にヨコナデ、外面にハケを施し、胎土には粗粒砂～小礫を含む。156～160は杯口辺部と脚端部を欠損するものである。156は内外面とも丁寧なヘラミガキを施し、胎土には粗粒砂～小礫を含む。157は脚柱部外面にナデ、脚裾部外面にハケを施し、他は摩耗のため調整は不明である。胎土には中粒砂～小礫を少し含む。158は摩耗のため調整は不明で、胎土には中粒砂～小礫を含む。159は脚柱部内外面にナデ、脚裾部外面にハケを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。160は摩耗のため調整は

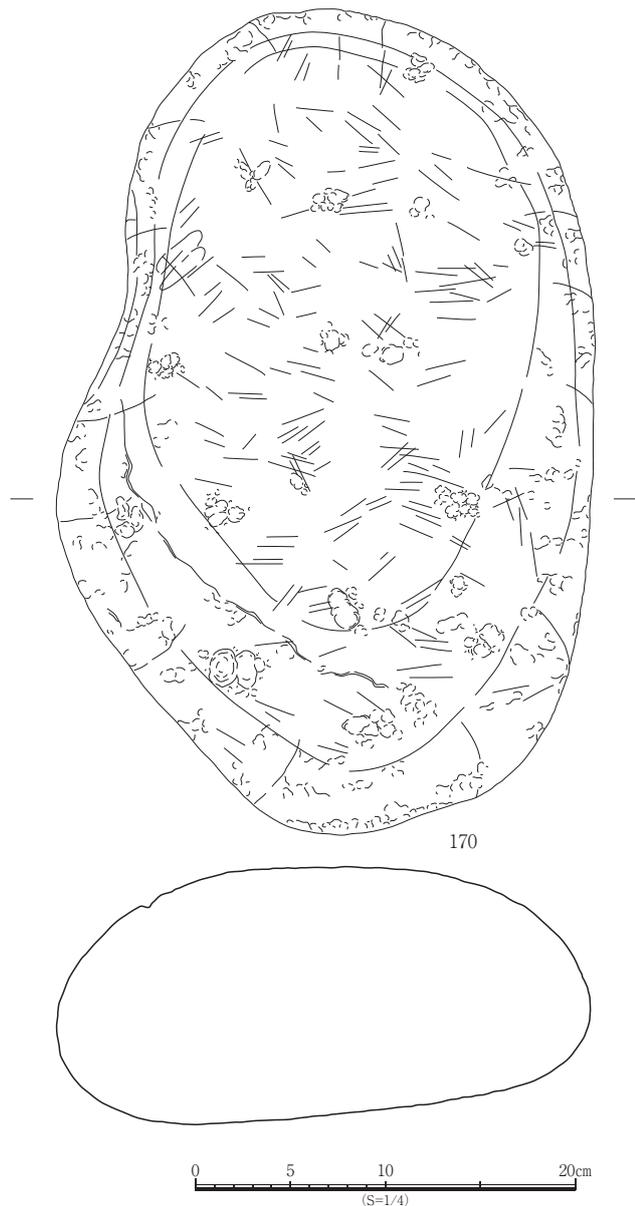


図3-24 ST-2出土遺物実測図11

2. II区 (1) 弥生時代

不明であるが、脚柱部内面にしぼり目がみられ、胎土には中粒～極粗粒砂を含む。

161・162は蓋で、つまみが輪状を呈し、裾部を欠損する。161は内外面ともナデとヘラミガキを施し、つまみには成型時の指頭圧痕がみられる。胎土には中粒砂～小礫を含む。162は摩耗のため内面の調整は不明であるが、外面にはハケ調整が認められる。つまみには成型時の指頭圧痕がみられ、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。

163は甑と考えられるもので、胴下半部から底部にかけて残存し、底部には円孔を一つ穿つ。摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にナデ調整、外面にタタキ目が認められ、胎土には中粒砂～中礫を含む。

164～167はミニチュア土器で、164・165は甕を模したと考えられるものである。164はほぼ完存し、口縁部内外面と口辺部内面に指オサエ、胴部内面にハケを施し、胴下半部から底部内面にかけてはナデ調整と指頭圧痕がみられる。胴部外面にはタタキのあとハケとヘラナデ、胴部外面下端には指オサエを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。165は胴下半部から底部のみ残存し、内面にナデ調整、外面にタタキのあとのナデ調整が認められる。胎土には中粒～極粗粒砂を含む。166・167は高杯を模したと考えられるものである。166は杯部のみ残存し、内面にハケ、口縁端部にヨコナデ、外面にナデと指オサエを施す。胎土には中粒砂～小礫を含む。167は脚部のみ残存し、内外面にヘラケズリを施す。胎土には中粒砂～小礫を含む。

168は支脚と考えられるもので、脚部を欠損する。中空で外面には指オサエとナデを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。

石製品(図3-23・24 169・170)

169・170は台石で、ともに片面のみ使用痕が認められ、石材は砂岩である。

ST-3(図3-25)

調査区北東部で検出した方形を呈する竪穴状遺構で、一辺は2.87～3.24mを測り、主軸方向はN-59°-Eである。遺存する壁高は6～15cmで、床面の標高は3.712～3.961mを測る。付属遺構として、壁溝と8個の柱穴、ベッド状遺構を確認した。検出された柱穴はいずれも浅く、明確に支柱穴と断定できるものはなかった。壁溝は北壁沿いで一部切れるが、全ての壁沿いで検出されており、幅8～16cm、深さ2～15cm、延長10.12mを測る。竪穴建物跡の北側と東側には地山削り出しとみられるベッド状遺構が確認されており、比高差5～7cmであった。埋土は1層が黒褐色(10YR3/2)シルト、2層が黄色(2.5Y7/8)シルトのブ

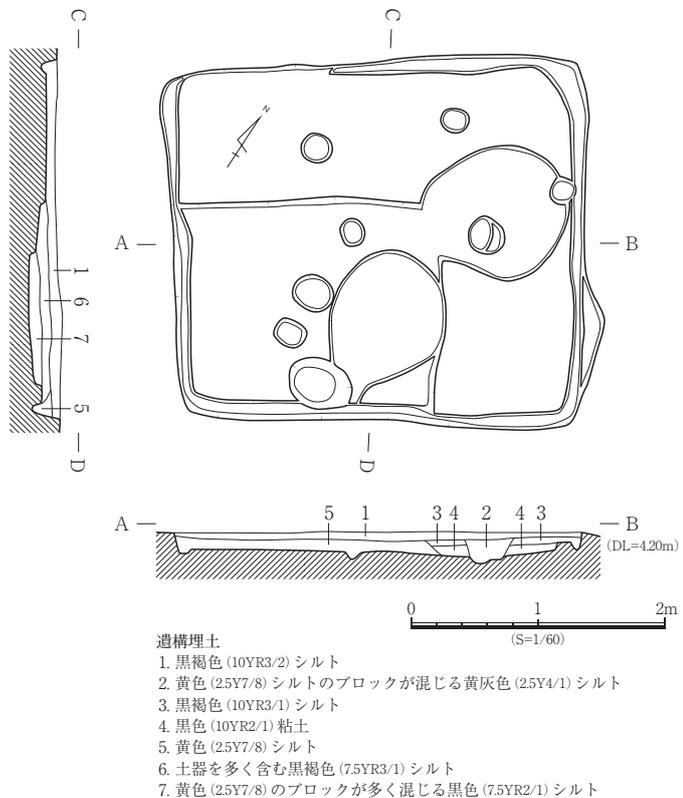


図3-25 ST-3

ロックが混じる黄灰色(2.5Y4/1)シルト, 3層が黒褐色(10YR3/1)シルト, 4層が黒色(10YR2/1)粘土, 5層が黄色(2.5Y7/8)シルト, 6層が土器を多く含む黒褐色(7.5YR3/1)シルト, 7層が黄色(2.5Y7/8)のブロックが多く混じる黒色(7.5YR2/1)シルトで, 出土遺物には弥生土器377点, 石製品4点がみられ, 弥生土器4点(171~174)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-26 171~174)

171~173は甕で, 171・172は口縁部から胴部にかけて残存する。171は摩耗のため調整は不明瞭であるが, 外面にタタキ目が認められる。胴上半部の一部に煤が付着し, 胎土には中粒砂~小礫を含む。172は口辺部内面にハケ, 胴部内面に強いナデを施し, 外面にはタタキ目がみられる。口縁端部にはヨコナデ調整が認められ,

胎土には中粒砂~小礫を含む。173は胴部破片で, 摩耗のため調整は不明瞭であるが, 外面にはハケ調整が認められる。胴中央部には煤が付着し, 胎土には細粒~中粒砂を含む。

174は鉢である。内外面ともナデを施し, 胎土には中粒砂~小礫を含む。

ST-4

調査区中央部で検出した方形を呈する竪穴状遺構で, SD-1に切られる。一辺は3.83~5.25mを測り, 主軸方向はN-62°-Wである。遺存する壁高は3~6cmで, 床面の標高は4.164~4.262mを測る。付属遺構として壁溝と11個の柱穴を確認したが, 明確に主柱穴と断定できるものはなかった。壁溝は一部切れるが, 東西と南で検出されており, 幅5~14cm, 深さ2~4cm, 延長5.17mを測る。埋土は1層が明黄褐色(10YR6/8)砂質シルトのブロックが多く混じる黒褐色(5YR3/1)砂質シルト, 2層が明黄褐色(10YR6/8)砂質シルトのブロックが多く混じるにぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルトで, 出土遺物には弥生土器136点がみられ, 弥生土器5点(175~179)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-27 175~179)

175・176は壺とみられるものである。175は胴下半部から底部にかけての破片で, 内面にハケのあとナデ, 外面にハケを施し, 胎土には中粒砂~小礫を含む。176は胴部破片で, 内面にハケ, 外面にハケのあとヘラミガキを施し, 胎土には中粒砂~小礫を含む。

177は甕の胴部から底部にかけての破片で, 内面にハケ, 胴中央部にタタキのあとハケ, 胴下半部

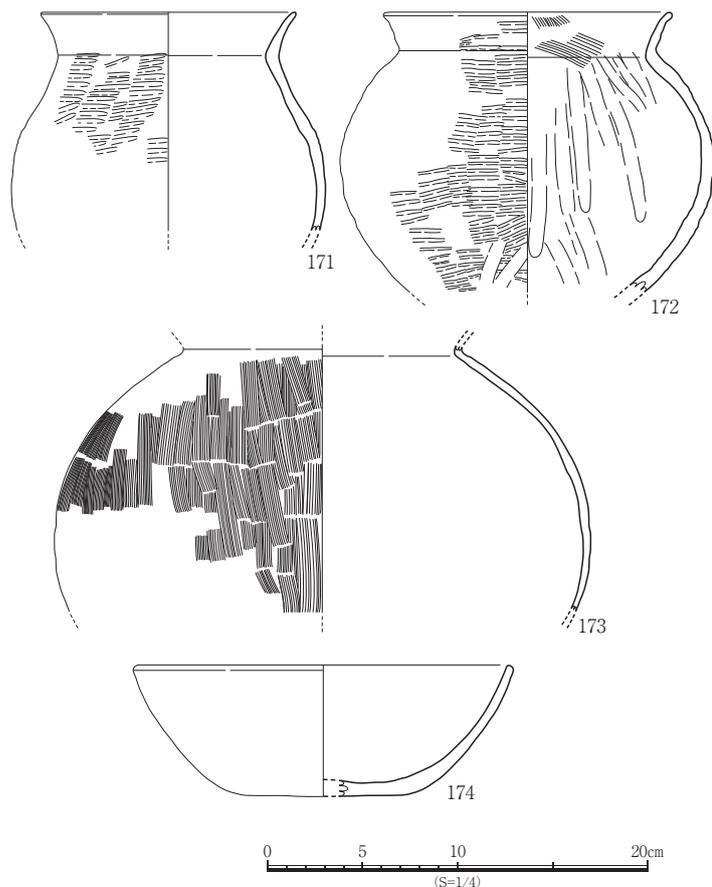


図3-26 ST-3出土遺物実測図

2. II区 (1) 弥生時代

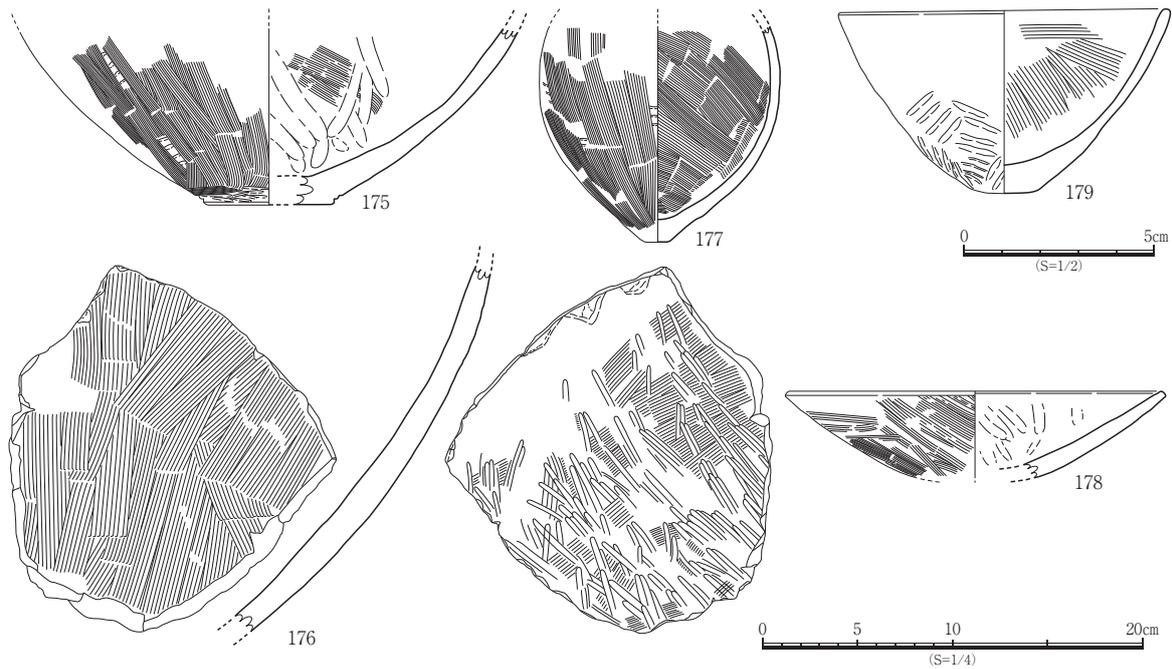


図3-27 ST-4出土遺物実測図

にハケを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。

178は鉢の口辺部破片で、内面にナデ、外面にハケを施す。口縁部内外面にヨコナデ調整がみられ、胎土には中粒砂～小礫を含む。

179はミニチュア土器で、鉢を模したものとみられる。内面にはハケ調整、外面にはタタキ目が認められ、胎土には中粒～極粗粒砂を含む。

ST-5

調査区北西部で検出した方形を呈するとみられる竪穴状遺構で、北側は調査区外へ続く。一辺と主軸方向は不明である。遺存する壁高は9～26cmで、床面の標高は3.866～3.967mを測る。付属遺構として3個の柱穴を確認したが、明確に支柱穴と断定できるものはなかった。埋土は1層が土器を含む黒褐色(10YR2/2)シルト、2層が明黄褐色(2.5Y7/6)風化礫が混じる黒褐色(10YR2/2)シルトで、出土遺物には弥生土器247点がみられ、弥生土器7点(180～186)、石製品1点(187)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-28 180～186)

180～183は壺とみられるものである。180は口辺部破片で、摩耗のため調整は不明であり、胎土には中粒砂～小礫を含

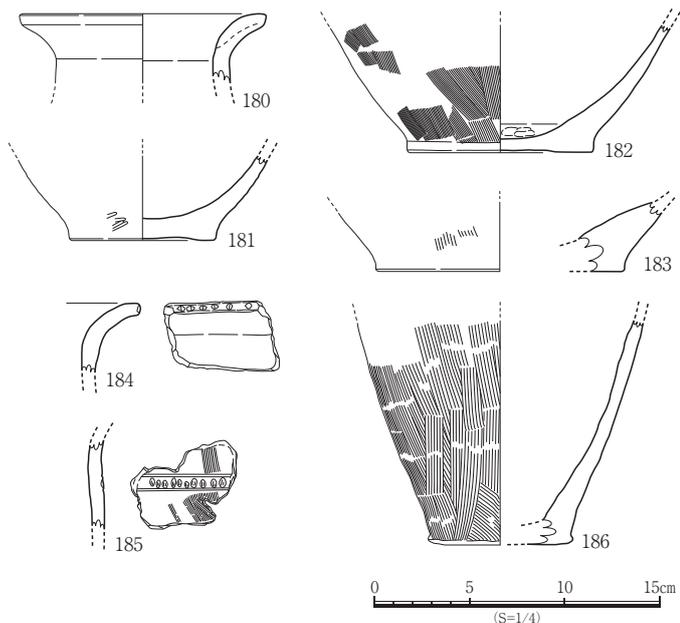


図3-28 ST-5出土遺物実測図1

む。181～183は底部破片である。181は摩耗のため調整は不明瞭であるが、胴下半部外面の下端にヘラミガキ調整が認められる。胎土には中粒砂～小礫を多く含む。182は摩耗のため内面の調整は不明であるが、外面にはハケを施し、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。183は摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面にはハケ調整がみられる。胎土には中粒砂～小礫を含む。

184～186は甕とみられるものである。184は口縁部破片で、端部には刻み目がみられる。摩耗のため調整は不明で、胎土には中粒砂～小礫を含む。185は胴上半部破片と考えられるもので、2条のヘラ描き沈線を施し、沈線間には刺突文がみられる。外面にはハケ調整が認められ、胎土には中粒砂～小礫を含む。186は胴下半部から底部にかけての破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面にはハケ調整がみられ、胎土には中粒砂～小礫を含む。

石製品(図3-29 187)

187は叩石である。両面と側面の一部に敲打痕が認められ、石材は砂岩である。

② 土坑

SK-1(図3-30)

調査区南西部で検出した長方形を呈する土坑で、長辺2.72m、短辺1.66m、深さ5～15cmを測り、長軸方向はN-15°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は中礫と黄褐色(10YR5/6)シルトのブロックが少し混じる黒色(7.5YR1.7/1)粘土質シルトで、出土遺物には弥生土器115点、石製品1点がみられ、弥生土器6点(188～193)、石製品1点(194)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-31 188～193)

188・189は壺とみられる胴部から底部にかけての破片である。188は内外面ともハケのあとヘラミガキを施し、胎土には中粒砂～中礫を含む。189は内面にナデ、外面にヘラミガキを施し、胎土には中粒砂～小礫を含む。

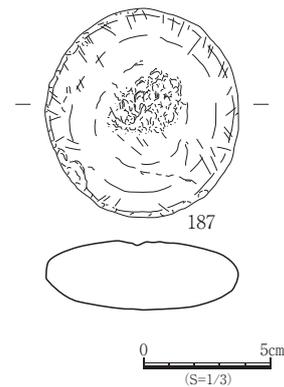
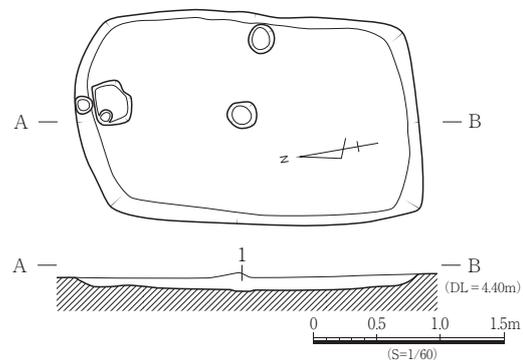


図3-29 ST-5出土遺物実測図2



遺構埋土
1. 中礫と黄褐色(10YR5/6)シルトのブロックが少し混じる黒色(7.5YR1.7/1)粘土質シルト

図3-30 SK-1

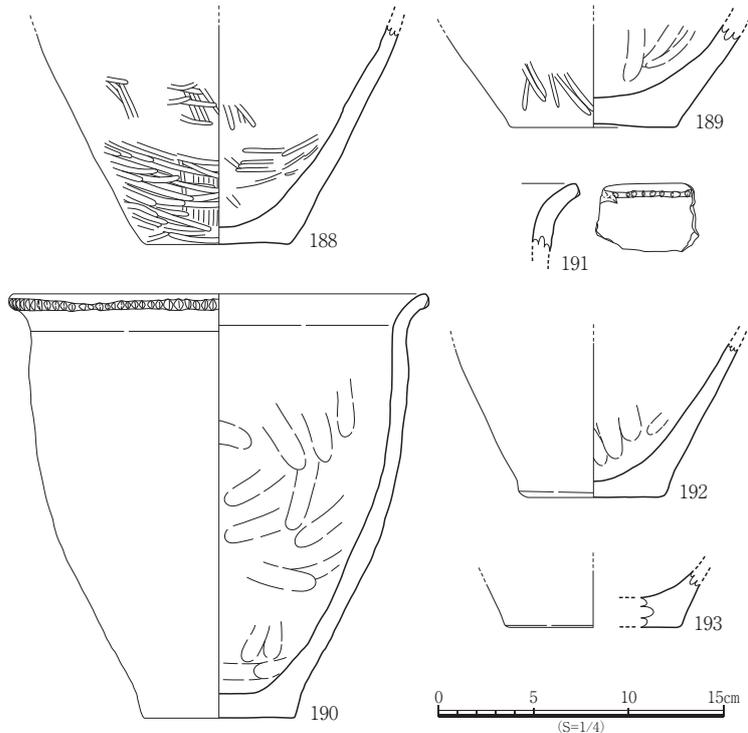


図3-31 SK-1出土遺物実測図1

2. II区 (1) 弥生時代

190～193は甕である。190は全体の形状が復元できるもので、口縁端部には刻み目がみられる。摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にはナデ調整、外面にはヨコナデ調整とナデ調整が認められる。口辺部から胴上半部の外面には煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫を含む。191は口辺部破片で、口縁端部には刻み目がみられる。内外面ともヨコナデを施し、胎土には中粒～極粗粒砂を含む。192は胴部から底部にかけての破片で、摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面に指頭圧痕がみられ、胎土には粗粒砂～小礫を多く含む。193は底部破片で、摩耗のため調整は不明で、胎土には粗粒砂～小礫を多く含む。

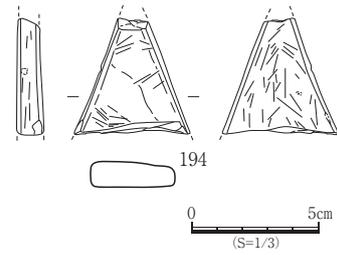


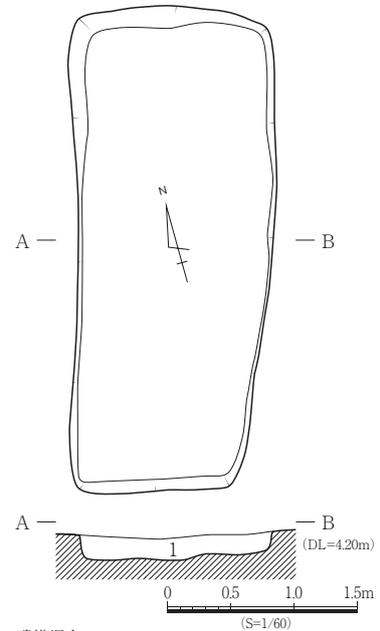
図3-32 SK-1出土遺物実測図2

石製品(図3-32 194)

194は砥石とみられ、両端を欠損する。両面と側面に使用痕が認められ、石材は砂岩である。

SK-2(図3-33)

調査区中央部で検出した長方形を呈する土坑で、長辺3.85m、短辺1.54m、深さ7～20cmを測り、長軸方向はN-16°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は土器を含む黄褐色(10YR5/6)シルトのブロックが少し混じる黒色(10YR1.7/1)シルト質粘土で、出土遺物には弥生土器325点がみられ、弥生土器21点(195～215)が図示できた。



遺構埋土
1. 土器を含む黄褐色(10YR5/6)シルトのブロックが少し混じる黒色(10YR1.7/1)シルト質粘土

図3-33 SK-2

出土遺物

弥生土器(図3-34 195～215)

195～202は壺である。195は口辺部から胴上半部にかけての破片で、口縁端部にヨコナデ、口辺部内面にヘラミガキ、胴部内面にナデを施す。外面にはハケ調整がみられ、頸部外面にはハケのあとのヘラミガキ調整が認められる。胎土には中粒砂～小礫を含む。196は口辺部破片で、口縁端部と内面にヘラミガキ、外面にハケのあとヨコナデとヘラミガキを施し、胎土には中粒～極粗粒砂を含む。197・198は胴部破片である。197は摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にナデ調整が認められ、胎土には中粒～極粗粒砂を含む。198は器面に6条を単位とする複線山形文をヘラ描きで施し、外面にはヘラミガキ調整がみられる。胎土には中粒～極粗粒砂を含む。199～202は胴部から底部にかけての破片である。199は摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にハケ調整がみられ、胎土には中粒～極粗粒砂を含む。200は内面にナデ、外面にハケ調整を施し、胎土には中粒～極粗粒砂を含む。201は摩耗のため調整は不明瞭であるが、胴部下端にハケ調整とヘラミガキ調整が認められる。胎土には粗粒砂～中礫を多く含む。202は内面にヘラミガキ、外面にハケを施し、胎土には中粒～極粗粒砂を含む。

203～215は甕である。203～205は口辺部から胴部にかけての破片で、203・204は口縁端部に刻み目が施される。203は口辺部内外面にヨコナデ、胴部内面にナデ、胴部外面にハケを施し、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。204も口辺部内外面にヨコナデ、胴部内面にナデ、胴部外面にハケを施す。

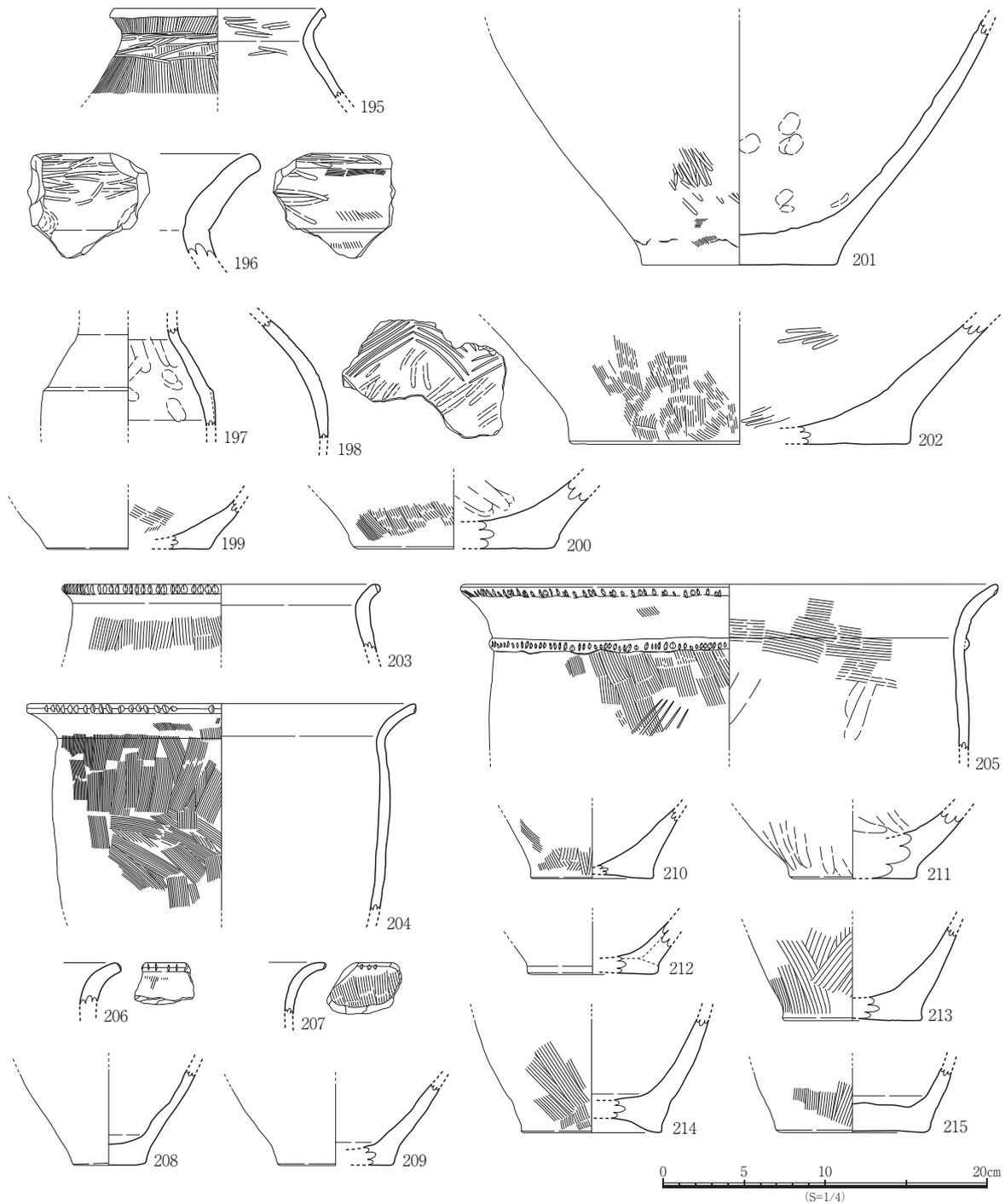


図3-34 SK-2出土遺物実測図

胎土には中粒砂～小礫を含む。205は口縁端部外面に刻み目がみられ、胴部上端に刻目突帯を巡らす。口辺部内外面にハケのあとヨコナデ、胴部内面にハケとナデ、胴部外面にハケを施し、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。206・207は口縁部破片で、口縁端部に刻み目がみられる。206は摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面にハケ調整が認められ、胎土には中粒～極粗粒砂を含む。207も摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面にハケ調整が認められる。また、外面には煤が付着しており、胎土には中粒～極粗粒砂を含む。208～215は胴部から底部にかけての破片である。208は摩耗のため調整

2. II区 (2) 中世

は不明で、胎土には中粒砂～小礫を含む。209も摩耗のため調整は不明で、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。210は摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面にハケ調整が認められ、胎土には中粒～極粗粒砂を含む。211は内外面ともナデを施し、胎土には中粒～極粗粒砂を含む。212は摩耗のため調整は不明で、胎土には中粒砂～小礫を多く含む。213は内面にナデ、外面にハケを施し、胎土には中粒～極粗粒砂を含む。214は底部外面が大きく凹む。摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面にハケ調整がみられ、胎土には中粒砂～小礫を含む。215も摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面にハケ調整がみられ、胎土には中粒砂～小礫を含む。

③ 柱穴

P-1

調査区南部で検出された柱穴である。長径26cm、短径23cmの楕円形で、深さ9cmを測る。埋土は黄褐色と褐色シルトのブロックが多く混じる黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトで、出土遺物には弥生土器3点がみられ、弥生土器1点(216)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-35 216)

216は鉢とみられる底部破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面にタタキ目がみられ、胎土には中粒砂～小礫を含む。

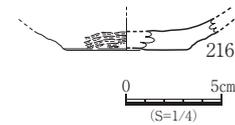


図3-35 P-1出土遺物実測図

(2) 中世

土坑・溝跡・柱穴が検出されているが、掘立柱建物跡などは復元できなかった。

① 土坑

SK-3

調査区北西部で検出した長楕円形を呈する土坑で、長径2.23m、短径1.02m、深さ8～22cmを測り、長軸方向はN-76°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は黄褐色シルトのブロックと中礫が混じる黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトで、出土遺物には弥生土器10点、土師質土器1点がみられ、土師質土器1点(217)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-36 217)

217は杯の口辺部破片である。手づくね成形とみられ、摩耗のため調整は不明である。胎土には中粒砂を含む。

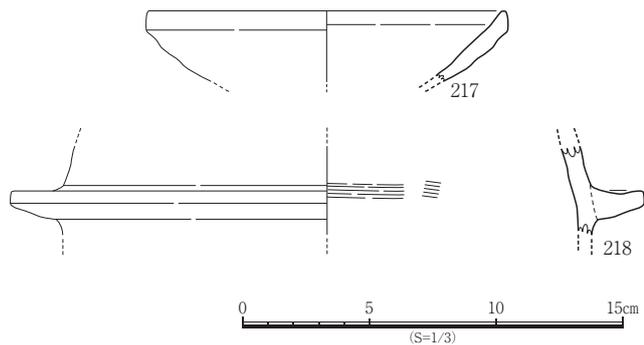


図3-36 SK-3・4出土遺物実測図

SK-4

調査区北西部で検出した円形を呈する土坑で、長径2.43m、短径2.34m、深さ6～20cmを測り、長軸方向はN-74°-Wを示す。

断面は中央部が盛り上がる特異な形状を呈し、埋土は黒褐色(10YR3/2)砂質シルトで、出土遺物には土師質土器1点(218)がみられ、図示できた。

出土遺物

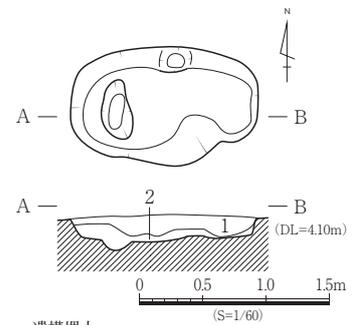
土師質土器(図3-36 218)

218は羽釜で、鏝周辺部のみ残存する。摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にハケ調整が認め

られ、胎土には中粒砂～小礫を含む。

SK-5 (図3-37)

調査区北部で検出した楕円形を呈する土坑で、長径 1.47m、短径 0.95m、深さ 11～37cmを測り、長軸方向はN-73°-Wを示す。断面は中央部が盛り上がる特異な形状を呈し、埋土は1層が褐灰色シルトのブロックが少し混じる黒色(N2/)粘土質シルト、2層が褐灰色シルトのブロックが少し混じる黒色(10YR1.7/1)シルト質粘土で、出土遺物には弥生土器8点、土師質土器5点、瓦質土器1点、石製品1点がみられ、弥生土器1点(219)が図示できた。



遺構埋土
1. 褐灰色シルトのブロックが少し混じる黒色(N2/)粘土質シルト
2. 褐灰色シルトのブロックが少し混じる黒色(10YR1.7/1)シルト質粘土

図3-37 SK-5

出土遺物

弥生土器(図3-38 219)

219は壺とみられる胴部から底部にかけての破片である。胴部の内外面ともナデを施し、胎土には中粒～極粗粒砂を含む。

SK-6

調査区中央部で検出した不整形を呈する土坑で、長辺1.84m、短辺0.62～1.11m、深さ5～19cmを測り、長軸方向はN-84°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、埋土が黄褐色と褐色シルトのブロックと小礫が混じる暗褐色(10YR3/3)粘土質シルトで、出土遺物には弥生土器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-7

調査区北東部で検出した楕円形を呈する土坑で、長径1.03m、短径0.76m、深さ9cmを測り、長軸方向はN-21°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土が黄褐色シルトのブロックが少し混じる黒褐色(7.5YR3/2)シルト質粘土で、出土遺物には弥生土器1点、須恵器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-8

調査区北東部で検出した円形を呈する土坑で、長径1.04m、短径0.91m、深さ2～3cmを測り、長軸方向はN-44°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土が1層が黄褐色シルトのブロックが少し混じる黒褐色(7.5YR2/2)シルト質粘土、2層が黄褐色シルトのブロックが多く混じる黒褐色(7.5YR3/2)シルト質粘土で、出土遺物には弥生土器1点、東播系須恵器1点がみられ、東播系須恵器1点(220)が図示できた。

出土遺物

東播系須恵器(図3-38 220)

220は捏鉢とみられる体部から底部にかけての破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面に回転ナデ調整がみられ、胎土には中粒～粗粒砂を含む。

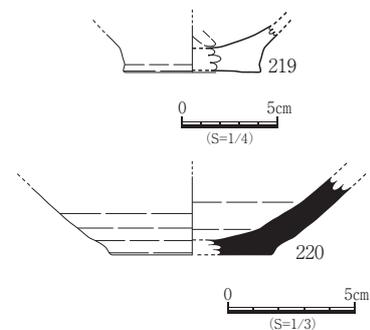


図3-38 SK-5・8出土遺物実測図

SK-9

調査区北東部で検出した不整楕円形を呈する土坑で、長径 1.51m、短径 0.79m、深さ 2～7cmを測り、長軸方向はN-17°-Wを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土が黄褐色シルトの

2. II区 (2) 中世

ブロックが少し混じる暗褐色(10YR3/3)粘土質シルトで、出土遺物には弥生土器2点、石製品1点がみられたが、図示できるものはなかった。

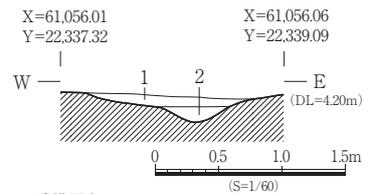
SK-10

調査区南東部で検出した不整形を呈する土坑で、長辺0.84m、短辺0.72m、深さ12~19cmを測り、長軸方向はN-81°-Wを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土は黄褐色シルトのブロックが少し混じる黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトで、出土遺物は皆無であった。

② 溝跡

SD-1 (図3-39)

調査区北側で検出した南北溝跡で、北側は調査区外へ続く。幅0.74~1.65m、深さ2~15cmを測り、基底面は南(4.310m)から北(3.784m)に傾斜し、16.40mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は1層が黄褐色及び褐色シルトのブロックが混じる暗褐色(7.5YR3/3)シルト、2層が黄褐色シルトのブロックが混じる暗褐色(10YR3/3)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器16点、土師器1点、土師質土器32点、瓦質土器6点、備前焼3点がみられ、土師器1点(221)、土師質土器1点(222)が図示できた。



- 遺構埋土
1. 黄褐色及び褐色シルトのブロックが混じる暗褐色(7.5YR3/3)シルト
 2. 黄褐色シルトのブロックが混じる暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト

図3-39 SD-1

出土遺物

土師器(図3-40 221)

221は羽釜で、鏝の周辺部のみ残存する。内面にはヨコナデとハケ、外面にはヨコナデを施す。鏝上面には煤が付着し、胎土には中粒砂~小礫を含む。

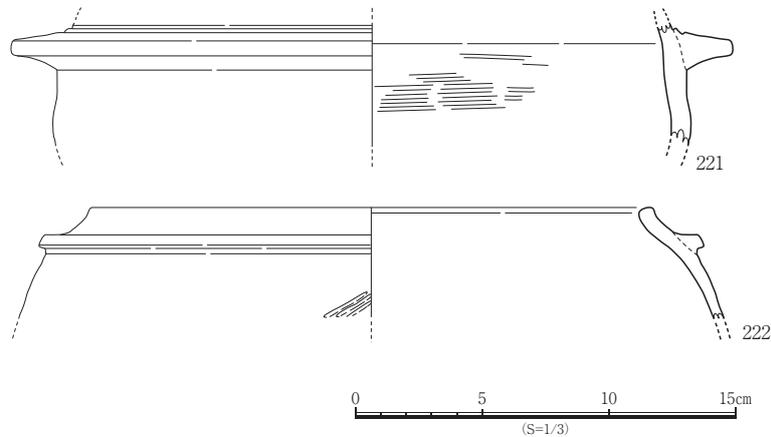


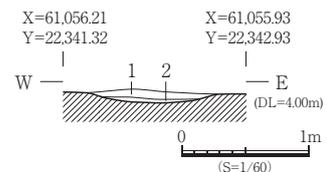
図3-40 SD-1出土遺物実測図

土師質土器(図3-40 222)

222は鍋の口辺部から胴部にかけての破片で、内面から口辺部にかけてナデを施し、胴部外面にはタタキ目がみられ煤が付着している。胎土には中粒~粗粒砂を含む。

SD-2(図3-41)

調査区北側で検出した南北溝跡で、北側は調査区外へ続く。幅0.97~1.38m、深さ7~12cmを測り、基底面は南(3.982m)から北(3.795m)に傾斜し、6.80mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は1層が黄褐色と褐色シルトのブロックが少し混じる暗褐色(10YR3/3)シルト、2層が炭化物を含み黄褐色シルトのブロックが少し混じる黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器2点、瓦質土器5点がみられたが、図示できるものはなかった。



- 遺構埋土
1. 黄褐色と褐色シルトのブロックが少し混じる暗褐色(10YR3/3)シルト
 2. 炭化物を含み黄褐色シルトのブロックが少し混じる黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト

図3-41 SD-2

③ 柱穴

P-2

調査区北西部で検出された柱穴である。長径 47 cm, 短径 32 cm の楕円形で、深さ 38 cm を測る。埋土は黄褐色と褐色シルトのブロックが多く混じる黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトで、出土遺物には弥生土器 11 点, 土師質土器 8 点がみられ, 土師質土器 3 点(223~225)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-42 223~225)

223~225 は杯で、223・224 は全体の形状が復元できたものである。223 はやや歪み、摩耗のため調整は不明瞭であるが、口辺部外面に回転ナデ調整が認められる。底部切り離しは回転糸切りで、胎土は精良である。224 はロクロ水挽成形とみられ、調整は摩耗のため不明瞭であるが、口縁部外面と底部内面に回転ナデ調整が認められる。底部切り離しは回転糸切りで、胎土には中粒砂を含む。225 は口辺部破片で、摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面に回転ナデがみられ、胎土は精良である。

P-3

調査区北西部で検出された柱穴である。長径 26 cm, 短径 23 cm の楕円形で、深さ 18 cm を測る。埋土は黒色(7.5YR2/1)シルト質粘土で、出土遺物には弥生土器 2 点, 土師質土器 2 点, 瓦質土器 5 点がみられ, 土師質土器 2 点(226・227)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-42 226・227)

226・227 は杯とみられるものである。226 は口辺部破片で、内外面とも回転ナデを施し、胎土には中粒~粗粒砂を含む。227 は底部破片で、外面には回転ナデ調整がみられる。底部切り離しは回転糸切りで、胎土には中粒砂を含む。

P-4

調査区西部で検出された柱穴である。長径 39 cm, 短径 35 cm の楕円形で、深さ 28 cm を測る。埋土は黄褐色と褐色シルトのブロックが多く混じる暗褐色(10YR3/3)シルトで、出土遺物には土師質土器 1 点(228)がみられ, 図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-42 228)

228 は杯の底部破片とみられるものである。摩耗のため調整は不明で、胎土には中粒砂を含む。

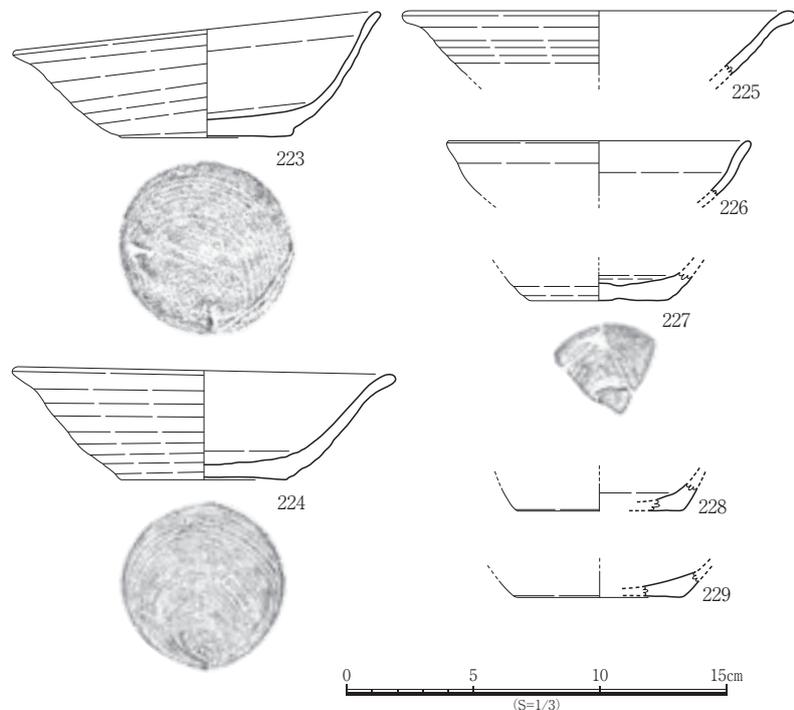


図3-42 P-2~5出土遺物実測図

2. II区 (2) 中世

P-5

調査区西部で検出された柱穴である。長径38cm, 短径27cmの不整楕円形で, 深さ11cmを測る。埋土は黄褐色と褐色シルトのブロックが多く混じる暗褐色(10YR3/3)シルトで, 出土遺物には土師質土器1点(229)がみられ, 図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-42 229)

229は杯の底部破片とみられるものである。摩耗のため調整は不明で, 胎土には中粒砂を含む。

P-6

調査区西部で検出された柱穴である。長径34cm, 短径29cmの楕円形で, 深さ20cmを測る。埋土は黄褐色と褐色シルトのブロックが多く混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで, 出土遺物には土師質土器1点(230)がみられ, 図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-43 230)

230は小皿の底部破片とみられるもので, 摩耗のため調整は不明である。底部切り離しは回転糸切りで, 胎土には中粒～粗粒砂を含む。

P-7

調査区西部で検出された柱穴である。長径29cm, 短径21cmの楕円形で, 深さ8cmを測る。埋土は黒色(7.5YR2/1)シルト質粘土で, 出土遺物には須恵器1点, 土師質土器6点, 瓦器1点がみられ, 瓦器1点(231)が図示できた。

出土遺物

瓦器(図3-43 231)

231は椀である。摩耗のため調整は不明瞭であるが, 口縁部外面にヨコナデ調整, 体部外面に指オサエが認められ, 胎土には中粒～粗粒砂を含む。

P-8

調査区西部で検出された柱穴で, P-9に切られる。長径41cm, 短径38cmの楕円形で, 深さ5cmを測る。埋土は黄褐色と褐色シルトのブロックが多く混じる暗褐色(10YR3/3)シルトで, 出土遺物には弥生土器3点, 土師器6点, 土師質土器11点がみられ, 土師質土器3点(232～234)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-43 232～234)

232・233は杯とみられる底部破片で, 摩耗のため調整は不明である。232は底部切り離しは回転糸切りで, 胎土は精良である。233も底部切り離しは回転糸切りで, 胎土には中粒～粗粒砂を含む。

234は小皿である。摩耗のため調整は不明瞭であるが, 外面に回転ナデ調整がみられる。底部切り離しは回転糸切りで, 胎土は精良である。

P-9

調査区西部で検出された柱穴で, P-8を切る。長径56cm, 短径43cmの楕円形で, 深さ38cmを測る。埋土は黄褐色と褐色シルトのブロックが多く混じる暗褐色(10YR3/3)シルトで, 出土遺物には弥生土器6点, 土師質土器2点がみられ, 土師質土器2点(235・236)が図示できた。

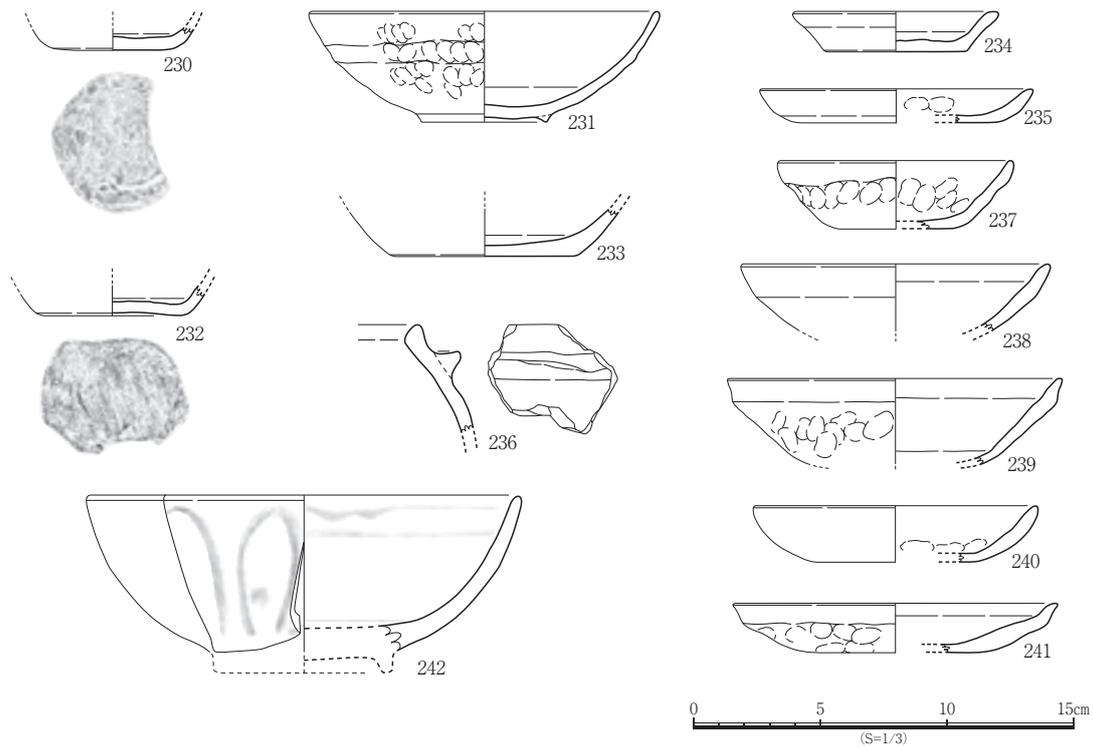


図3-43 P-6~10出土遺物実測図

出土遺物

土師質土器(図3-43 235・236)

235は皿とみられるものである。手づくね成形と考えられ、器面には指頭圧痕が認められる。胎土は精良である。

236は鍋の口辺部破片で、内外面とも回転ナデを施し、胎土には中粒砂~小礫を含む。

P-10

調査区西部で検出された柱穴である。長径37cm、短径33cmの楕円形で、深さ34cmを測る。埋土は黄褐色と褐色シルトのブロックが多く混じる暗褐色(10YR3/3)シルトで、出土遺物には弥生土器1点、土師質土器44点、青磁1点がみられ、土師質土器5点(237~241)、青磁1点(242)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-43 237~241)

237~239は杯である。237は全体の形状が復元できるもので、手づくね成形とみられる。摩耗のため調整は不明瞭であるが、器面には指頭圧痕がみられる。胎土は精良である。238・239は口辺部破片で、手づくね成形とみられる。238は摩耗のため調整は不明で、胎土は精良である。239は口縁部内外面にヨコナデ、体部外面に指オサエを施し、胎土には中粒砂を含む。

240・241は皿とみられる口辺部から底部にかけての破片で、手づくね成形と考えられる。240は口辺部破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが、口辺部内面にヨコナデ調整、底部内面に指頭圧痕がみられ、胎土は精良である。241も摩耗のため調整は不明瞭であるが、口縁部外面にヨコナデ調整、体部から底部にかけての外面には指頭圧痕とナデ調整が認められる。胎土は精良である。

青磁(図3-43 242)

242は碗である。見込みに1条の圈線と体部外面に蓮弁を片彫りし、胎土には黒色を呈する中粒砂

2. II区 (2) 中世

を含む。

P-11

調査区中央部で検出された柱穴である。長径 29 cm, 短径 25 cmの楕円形で、深さ 33 cmを測る。埋土は黄褐色と褐色シルトのブロックが多く混じる黒褐色(7.5YR3/2)シルト質粘土で、出土遺物には弥生土器1点, 土師質土器5点がみられ, 土師質土器1点(243)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-44 243)

243は杯とみられる口辺部破片で、手づくね成形と考えられる。摩耗のため調整は不明瞭であるが、体部外面には指頭圧痕が認められる。胎土は精良である。

P-12

調査区東部で検出された柱穴で、他の柱穴に切られる。径 20 cmの円形で、深さ 5 cmを測る。埋土は黄褐色と褐色シルトのブロックが多く混じる黒褐色(7.5YR3/2)シルト質粘土で、出土遺物には土師質土器4点がみられ, 土師質土器2点(244・245)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-44 244・245)

244・245は小皿である。244は全体の形状が復元できるもので、摩耗のため調整は不明瞭であるが、口縁部内面に回転ナデ調整がみられる。底部切り離しは回転糸切りで、胎土は精良である。245は口縁部破片で、摩耗のため調整は不明で、胎土は精良である。

P-13

調査区東部で検出された柱穴である。長径 37 cm, 短径 28 cmの楕円形で、深さ 32 cmを測る。埋土は黄褐色と褐色シルトのブロックが多く混じる黒褐色(7.5YR3/2)シルト質粘土で、出土遺物には土師質土器1点(246)がみられ, 図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-44 246)

246は小皿で、口縁部内外面に回転ナデを施す。底部切り離しは回転糸切りで、胎土は精良である。

P-14

調査区東部で検出された柱穴である。長径 27 cm, 短径 21 cmの楕円形で、深さ 40 cmを測る。埋土は黄褐色と褐色シルトのブロックが多く混じる暗褐色(10YR3/3)シルトで、出土遺物には土師質土器2点がみられ, そのうち1点(247)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-44 247)

247は杯で、器面には回転ナデを施す。底部切り離しは回転糸切りで、胎土は精良である。

P-15

調査区東部で検出された柱穴である。径 26 cmの円形で、深さ 32 cmを測る。埋土は黄褐色と褐色シルトのブロックが多く混じる黒褐色(7.5YR3/2)シルト質粘土で、出土遺物には土師質土器1点(248)がみられ, 図示できた。

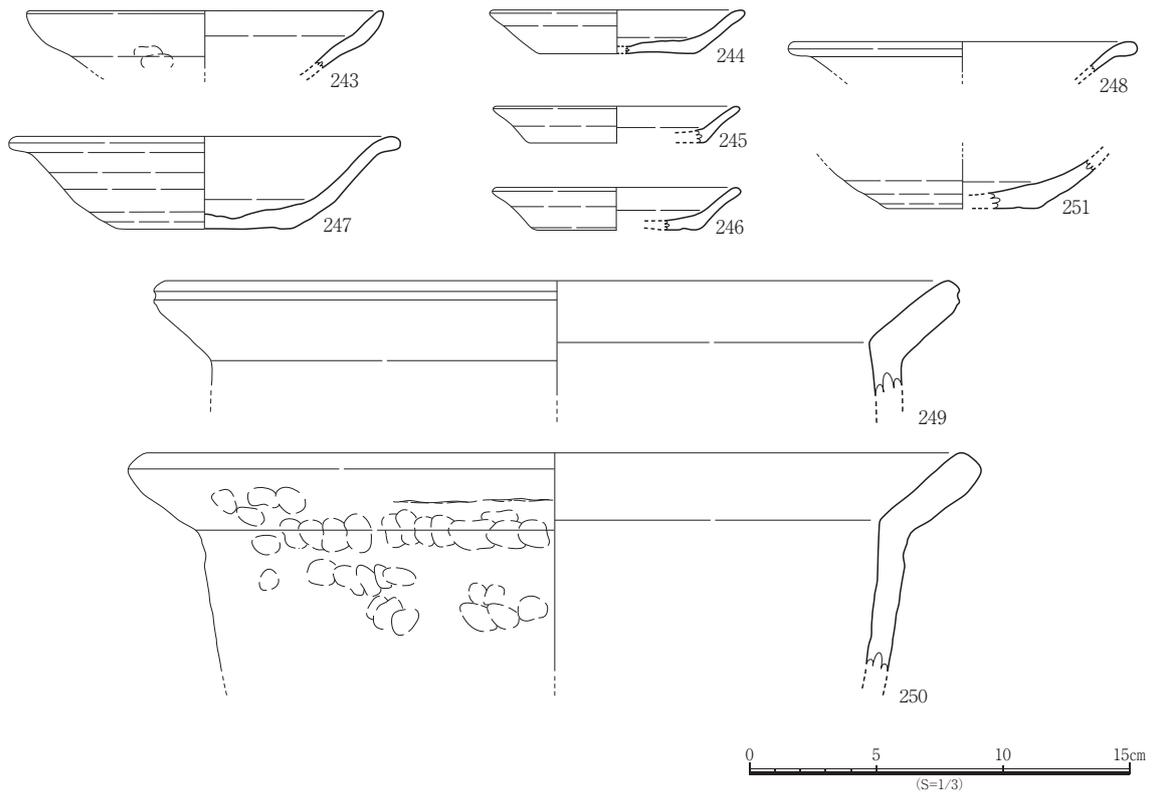


図3-44 P-11~17出土遺物実測図

出土遺物

土師質土器(図3-44 248)

248は杯とみられる口縁部破片である。摩耗のため調整は不明で、胎土は精良である。

P-16

調査区東部で検出された柱穴である。長径23cm、短径19cmの楕円形で、深さ43cmを測る。埋土は橙色と黄褐色シルトのブロックが多く混じる暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトで、出土遺物には土師器1点(249)がみられ、図示できた。

出土遺物

土師器(図3-44 249)

249は甕の口辺部破片である。摩耗のため調整は不明で、胎土には粗粒~極粗粒砂を多く含む。

P-17

調査区東部で検出された柱穴である。長径28cm、短径24cmの楕円形で、深さ41cmを測る。埋土は黄褐色と褐色シルトのブロックが多く混じる暗褐色(10YR3/3)シルトで、出土遺物には土師器1点(250)、土師質土器1点(251)がみられ、図示できた。

出土遺物

土師器(図3-44 250)

250は甕の口辺部から胴部にかけての破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるが、口縁端部にヨコナデ、口辺部から胴部にかけての外面に指オサエを施す。胴部外面には煤が付着し、胎土には中粒~極粗粒砂を多く含む。

3. Ⅲ区 (1) 弥生時代

土師質土器(図3-44 251)

251は杯とみられる底部破片である。摩耗のため調整は不明であるが、底部切り離しは回転糸切りで、胎土は精良である。

(3) 近代

① 塹壕跡

T-1

調査区南東部で検出された塹壕跡である。平面形は刺又状を呈し、南側は調査区外へ続く。南側の通路部分は南から北にむけて緩やかに傾斜し、斜路となっている。太平洋戦争時に掘削されたものとみられるが、用途は不明である。幅6.30m、長さ7.20m、深さ1.76mを測り、床面には98cm間隔で並ぶ坑木が3本検出されている。埋土は1層が黄褐色シルトと暗褐色粘土質シルトのブロックが混じるにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト、2層が、黄褐色シルトと暗褐色粘土質シルトのブロックと中粒砂が混じるにぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト、3層が黄褐色のブロックと小礫が混じる暗褐色(10YR3/3)シルト質粘土、4層が黄褐色の風化礫が混じる褐色(10YR4/4)シルト、5層が黄褐色と褐色シルトのブロックが混じる暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト、6層が黒褐色と黄褐色のブロックが混じる暗褐色(10YR3/4)粘土質シルトで、出土遺物には土師質土器1点、近世陶器1点、近代陶器2点、近代磁器11点、鉄製品2点、ガラス製品1点がみられ、土師質土器1点(252)、近世陶器1点(253)、近代磁器3点(254～256)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-45 252)

252は小皿で、器面には回転ナデを施す。底部切り離しは回転糸切りで、胎土は精良である。

近世陶器(図3-45 253)

253は灯明皿で、一部を欠損する。器面には回転ナデ調整がみられ、底部切り離しは回転糸切りである。底部外面は露胎で、胎土は精良である。

近代磁器(図3-45 254～256)

254は碗で、体部外面には草花文が施される。畳付は露胎で、胎土は精良である。255はインク瓶とみられるもので、ほぼ完存する。体部外面には「P」の染付がみられる。畳付は露胎で、胎土は精良である。256は瓶で、底部外面に「岐251」の陽刻がみられる。畳付には砂が付着し、胎土は精良である。

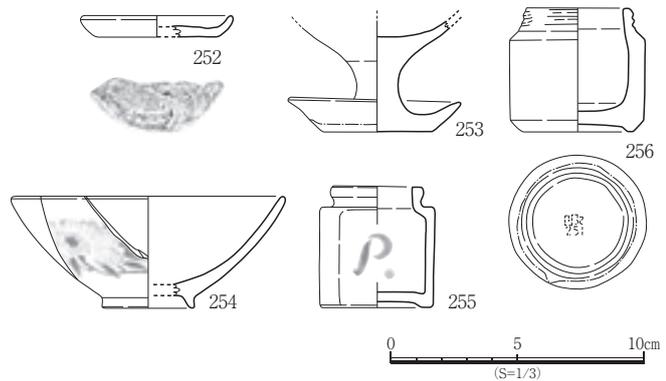


図3-45 T-1出土遺物実測図

3. Ⅲ区

確認された遺構の時期は弥生時代・中世で、竪穴建物跡・土坑・溝跡・柱穴が検出されている。調査区の地勢は南から北に向けて緩やかに傾斜しており、後世の削平を受けていた調査区南部では遺構は検出されなかった。

(1) 弥生時代

竪穴建物跡・土坑などが検出されており、当該期の集落が確認された。

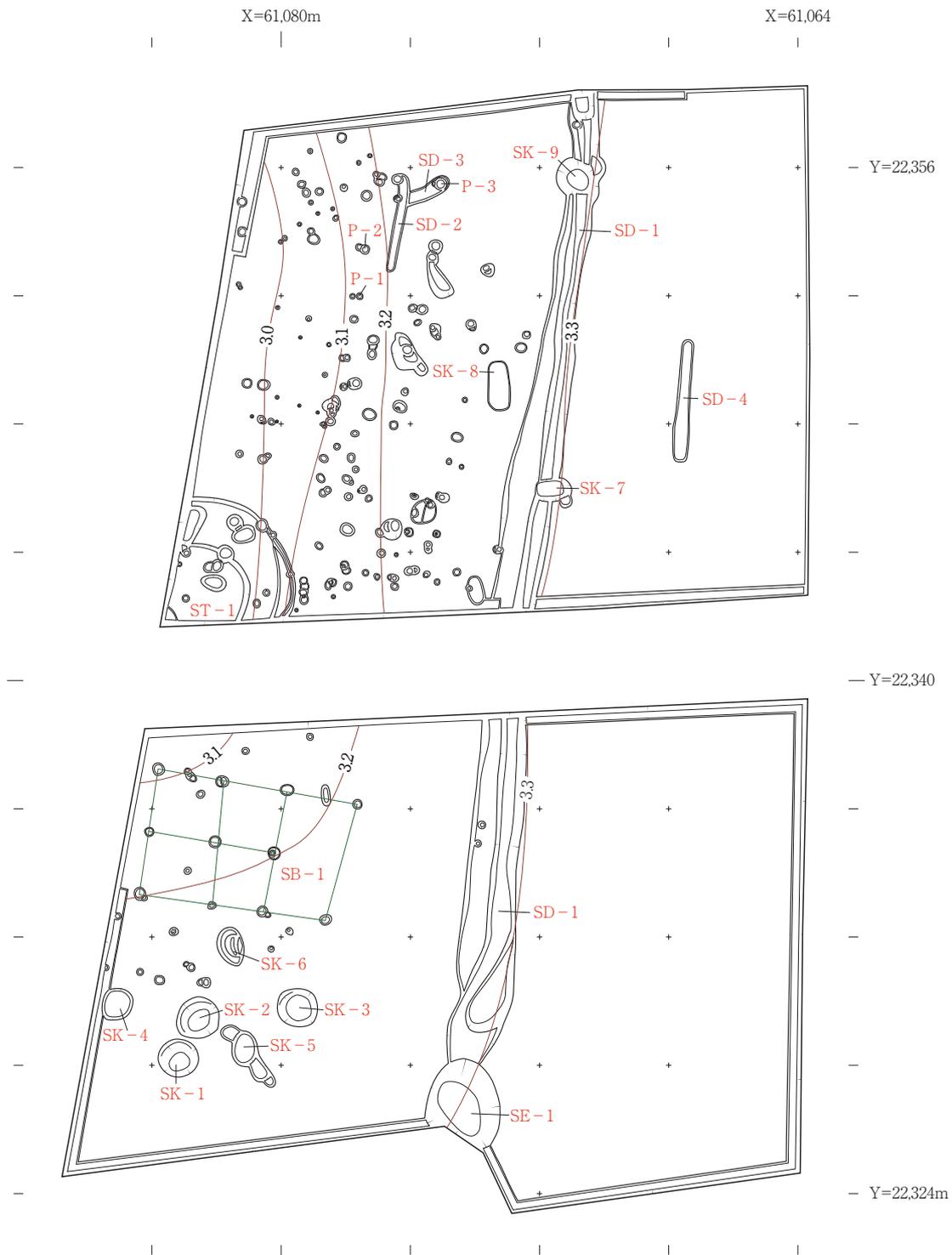


図3-46 Ⅲ区遺構平面図(S=1/200)

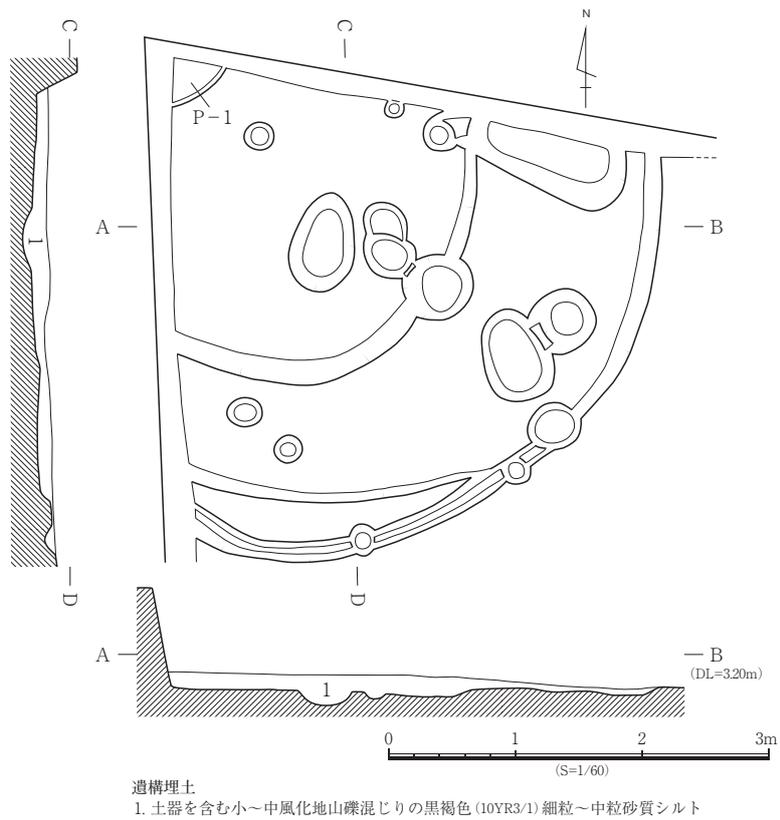
① 竪穴建物跡

ST-1 (図3-47)

調査区北部で検出した円形を呈するとみられる竪穴建物跡で、西側と北側は調査区外へ続き全体の約1/4を確認した。径と主軸方向は不明である。遺存する壁高は5cmで、床面の標高は2.914~3.048mを測る。付属遺構として、中央ピット(P-1)と壁溝、14個の柱穴及びベッド状遺構を確認した。主柱

3. Ⅲ区 (1) 弥生時代

穴は全体の様相が不明であることから、明確に断定できなかった。中央ピット(P-1)は調査区北西隅で確認されており規模・形状は不明で、深さ4cmを測り、弥生土器が13点出土している。壁溝は南側の壁沿いで検出されており、幅13~22cm、深さ4cm、延長3.06mを測る。竪穴建物跡の壁沿いには地山削り出しとみられるベット状遺構が確認されており、比高差は4~5cmであった。埋土は土器を含む小~中風化地山礫混じりの黒褐色(10YR3/1)細粒~中粒砂質シルトで、出土遺物には弥生土器767点がみられ、弥生土器18点(257~274)が図示できた。



遺構埋土
1. 土器を含む小~中風化地山礫混じりの黒褐色(10YR3/1)細粒~中粒砂質シルト

図3-47 ST-1

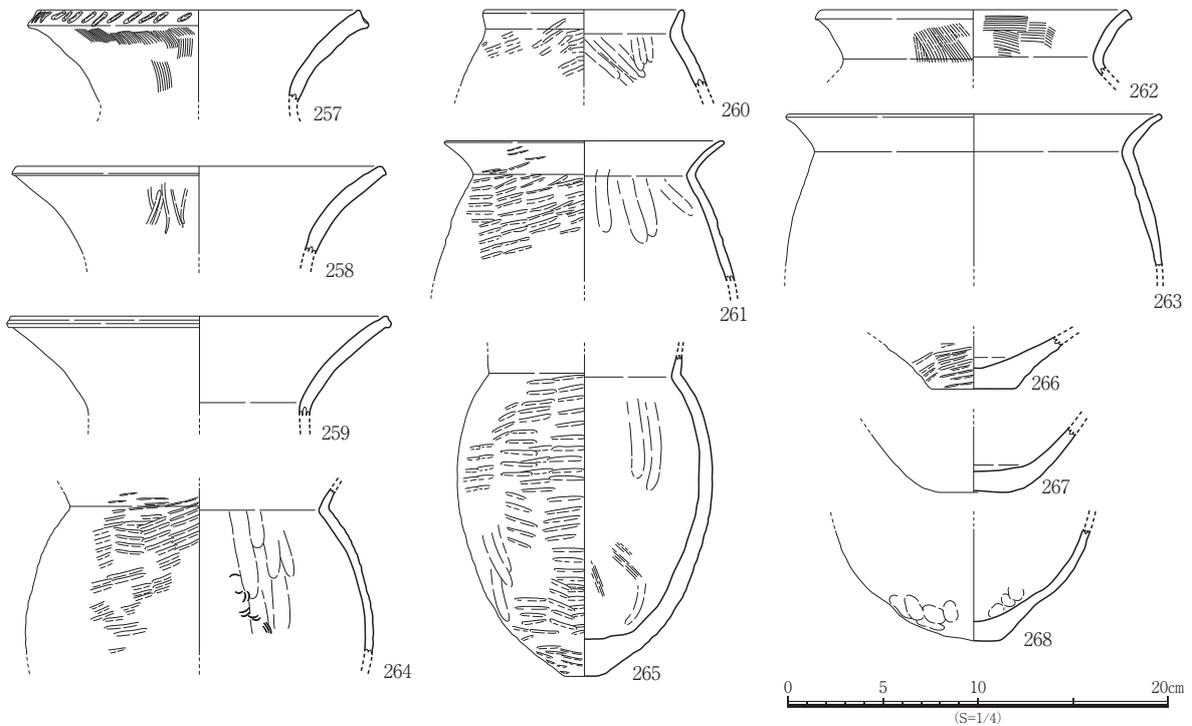


図3-48 ST-1出土遺物実測図1

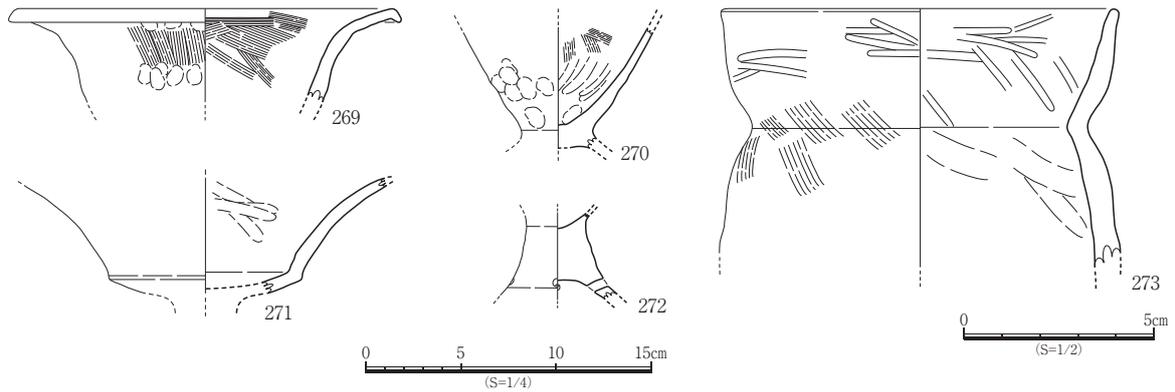


図3-49 ST-1出土遺物実測図2

出土遺物

弥生土器(図3-48~50 257~274)

257~259は壺とみられる口辺部破片である。257は口縁端部に楕円形の刺突文を施す。摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面にはハケ調整がみられ、煤が付着する。胎土には中粒砂~小礫を含む。258は口縁部内外面と内面にヨコナデ、外面にヨコナデのあとヘラミガキを施す。口縁部外面には煤が付着し、胎土には中粒砂~小礫を含む。259は摩耗のため調整は不明瞭であるが、口縁部外面にヨコナデ調整がみられ、胎土には中粒砂~小礫を含む。

260~268は甕で、260~263は口辺部から胴部にかけての破片である。260は口辺部が斜め上方に直線的に立ち上がるもので、摩耗のため調整は不明瞭であるが、胴部内面にナデ調整、外面全体にタタキ目が認められる。胎土には極粗粒砂~小礫を含む。261~263は口辺部が外反して立ち上がるものである。261は胴部内面にナデ、外面全体にタタキを施すが、口縁部内面は摩耗のため調整は不明で、胎土には中粒砂~小礫を含む。262は口縁部内外面にハケ、口縁端部にヨコナデを施し、胎土には中粒砂~小礫を含む。263は摩耗のため調整は不明で、胎土には中粒砂~小礫を多く含む。264は口辺部から胴部にかけての破片で、口縁部を欠損する。摩耗のため調整は不明瞭であるが、胴部内面にナデ調整、外面全体にタタキ目が認められ、胎土には中粒砂~小礫を含む。265は口辺部から底部にかけての破片である。口縁部内外面にヨコナデ、胴上半部内面にナデ、胴下半部内面にハケとナデを施し、外面全体にはタタキ目がみられる。胴中央部から胴下半部にかけてはタタキのあとナデを施し、胎土には中粒砂~小礫を含む。266~268は胴部から底部にかけての破片である。266は摩耗のため調整は不明瞭であるが、胴部外面にはタタキ目がみられ、胎土には中粒砂~小礫を含む。267は摩耗のため調整は不明で、胎土には中粒砂~小礫を多く含む。268は全体的に歪んでおり、摩耗のため調整は不明瞭である。底部内面と胴下半部下端には指頭圧痕がみられ、胎土には中粒砂~小礫を含む。

269・270は鉢と考えられるものである。269は口辺部から体部にかけての破片で、内面にハケ、外面にハケと指オサエを施し、口縁部外面にはヨコナデ調整と指頭圧痕がみられる。胎土には中粒砂~小礫を含む。270は脚付鉢とみられる体部破片で、口縁部と脚部を欠損する。内面にハケとナデ、外面に指オサエを施し、

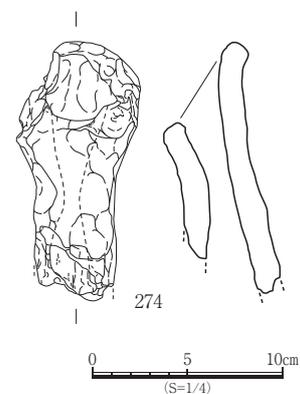


図3-50 ST-1出土遺物実測図3

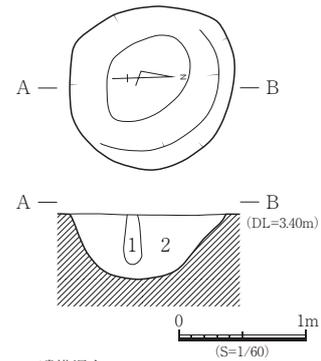
3. Ⅲ区 (1) 弥生時代

胎土には中粒砂～小礫を含む。

271・272は高杯である。271は杯口辺部破片で、口縁端部を欠損する。摩耗のため調整は不明瞭であるが、内面にヨコナデ調整がみられ、胎土には中粒砂～小礫を含む。272は脚柱部破片で、四方に径5mmの円孔を穿つ。摩耗のため調整は不明で、胎土には粗粒砂～小礫を含む。

273はミニチュア土器で、甕を模したものと考えられる。口辺部から胴部にかけての破片で、口辺部内外面にヘラミガキ、胴部内面にナデ、胴部外面にハケのあとナデを施す。胎土には中粒砂～小礫を含む。

274は支脚と考えられるものである。中空で、脚部を欠損する。摩耗のため調整は不明瞭であるが、全体に指頭圧痕がみられ、胎土には中粒砂～小礫を含む。



遺構埋土
1. 小～中礫が多く混じるにぶい黄色 (2.5Y6/3) 中粒砂質シルト (暗渠)
2. 小～中礫混じりの黒色 (10YR2/1) 細粒砂質シルト

図3-51 SK-2

② 土坑

SK-1

調査区北西部で検出した円形を呈する土坑で、長径1.25m、短径1.18m、深さ47～51cmを測り、長軸方向はN-33°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土は1層がにぶい黄色 (2.5Y6/3) 中粒砂質シルトを帯状に含む小礫混じりの褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂質シルト、2層が小～中礫混じりの黒色 (10YR2/1) 細粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SK-2 (図3-51)

調査区北西部で検出した円形を呈する土坑で、長径1.39m、短径1.28m、深さ48～52cmを測り、長軸方向はN-35°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土1層が小～中礫が多く混じるにぶい黄色 (2.5Y6/3) 中粒砂質シルト (暗渠)、2層

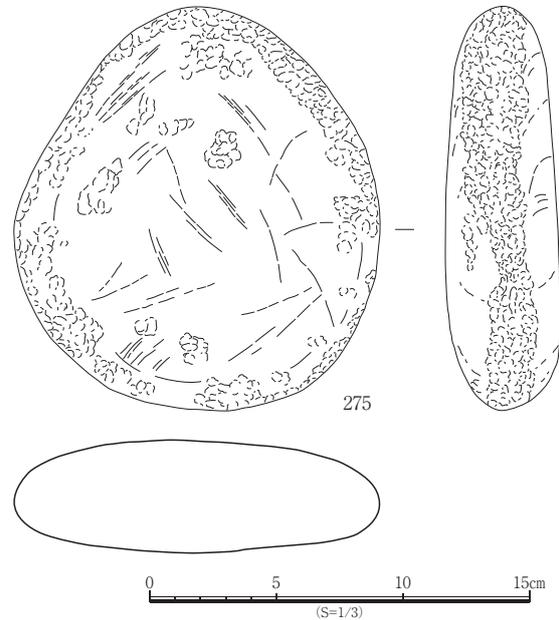


図3-52 SK-2出土遺物実測図

が小～中礫混じりの黒色 (10YR2/1) 細粒砂質シルトで、出土遺物には弥生土器1点、石製品1点がみられ、石製品1点 (275) が図示できた。

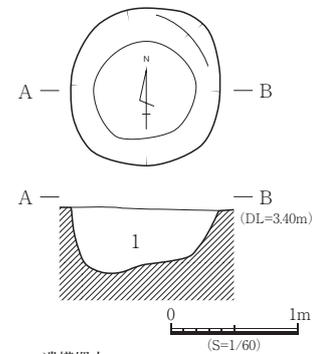
出土遺物

石製品 (図3-52 275)

275は叩石で、側面全体に敲打痕がみられる。石材は砂岩である。

SK-3 (図3-53)

調査区北西部で検出した円形を呈する土坑で、長径1.25m、短径1.18m、深さ41～52cmを測り、長軸方向はN-3°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、埋土が小～中礫混じりの黒色 (10YR2/1) 細粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。



遺構埋土
1. 小～中礫混じりの黒色 (10YR2/1) 細粒砂質シルト

図3-53 SK-3

(2) 中世

掘立柱建物跡・土坑・溝跡・井戸跡などが検出されており、当該期の屋敷が存在していたとみられる。

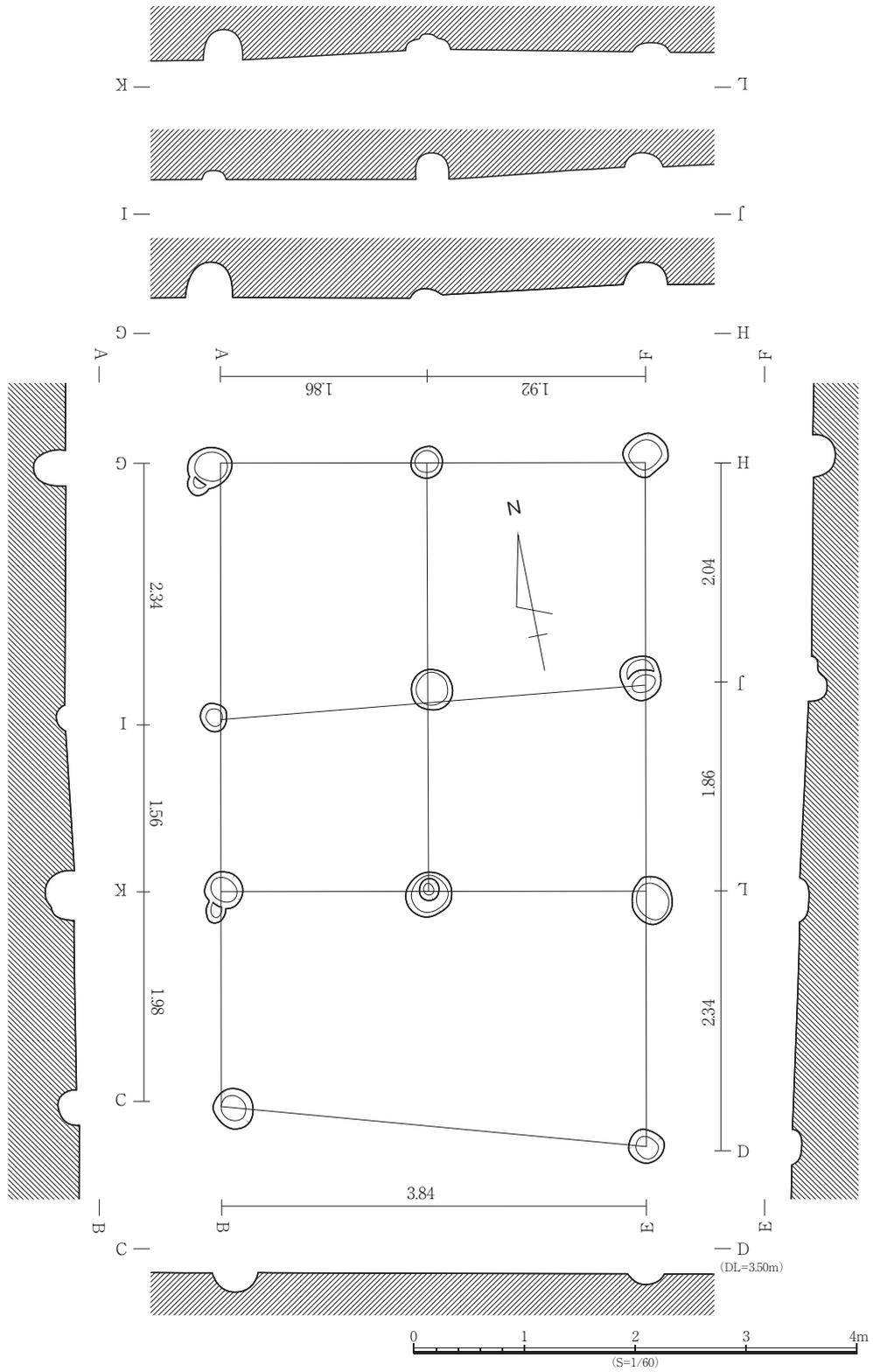


図3-54 SB-1

3. Ⅲ区 (2) 中世

① 掘立柱建物跡

SB-1 (図3-54)

調査区の北部で検出した桁行3間(5.88~6.24m)、梁間2間(3.78~3.84m)のやや歪みのある南北棟建物跡で、北から1間目と2間目の柱通りに間仕切り柱が立つ。棟方向はN-12°-Eを示す。柱間寸法は桁行(南北)が1.56~2.34m、梁行(東西)が1.86~3.84mである。柱穴の平面形は一部不整形を呈するものもみられるが、基本的には円形で、径23~37cmを測り、深さは9~31cmである。柱穴の埋土は小~中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)中粒砂質シルトで、出土遺物には弥生土器42点、土師器4点、緑釉陶器1点、土師質土器12点がみられ、緑釉陶器1点(276)が図示できた。

出土遺物

緑釉陶器(図3-55 276)

276は椀と考えられる体部破片である。内外面に回転ナデ調整がみられ、器面には緑色の釉を施す。胎土には中粒砂を含む。

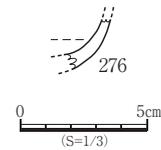
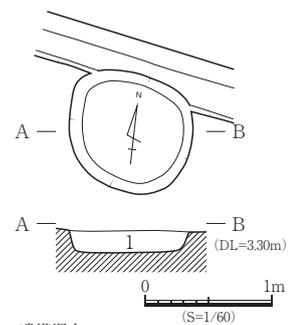


図3-55 SB-1出土遺物実測図

② 土坑

SK-4 (図3-56)

調査区北西部で検出した楕円形を呈する土坑で、長径1.09m、短径0.95m、深さ13~18cmを測り、長軸方向はN-47°-Wを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土が小~大礫(風化地山礫)混じりの灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂質シルトで、出土遺物には弥生土器7点がみられたが、図示できるものはなかった。



遺構埋土
1. 小~大礫(風化地山礫)混じりの灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂質シルト

図3-56 SK-4

SK-5

調査区北西部で検出した楕円形を呈する土坑で、長径1.06m、短径0.81m、深さ12~28cmを測り、長軸方向はN-68°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土が小~大礫(風化地山礫)混じりの灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SK-6

調査区北西部で検出した楕円形を呈する土坑で、長径1.22m、短径0.91m、深さ5~21cmを測り、長軸方向はN-74°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、埋土が小~大礫(風化地山礫)混じりの灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂質シルトで、出土遺物には弥生土器3点、土師器2点、須恵器2点、土師質土器7点、備前焼1点、青磁1点がみられ、土師器1点(277)、備前焼1点(278)、青磁1点(279)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-57 277)

277は羽釜の口辺部破片で、胴部内面にハケを施し、その他の部位にはヨコナデ調整がみられる。胎土には粗粒砂~小礫を含む。

備前焼(図3-57 278)

278は甕の口辺部から胴部にかけての破片で、内外面とも回転ナデを施し、胎土には粗粒砂~小礫を含む。

青磁(図3-57 279)

279は碗の体部から底部にかけての破片で、内面には回転ナデ、外面には回転ヘラケズリを施す。

高台は削り出しと考えられ、胎土は精良である。

SK-7

調査区中央部で検出した楕円形を呈する土坑で、SD-1に切られる。長径1.12m、短径0.72m、深さ48～53cmを測り、長軸方向はN-13°-Wを示す。断面は舟底状を呈し、埋土が小～大礫(風化地山礫)混じりの灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

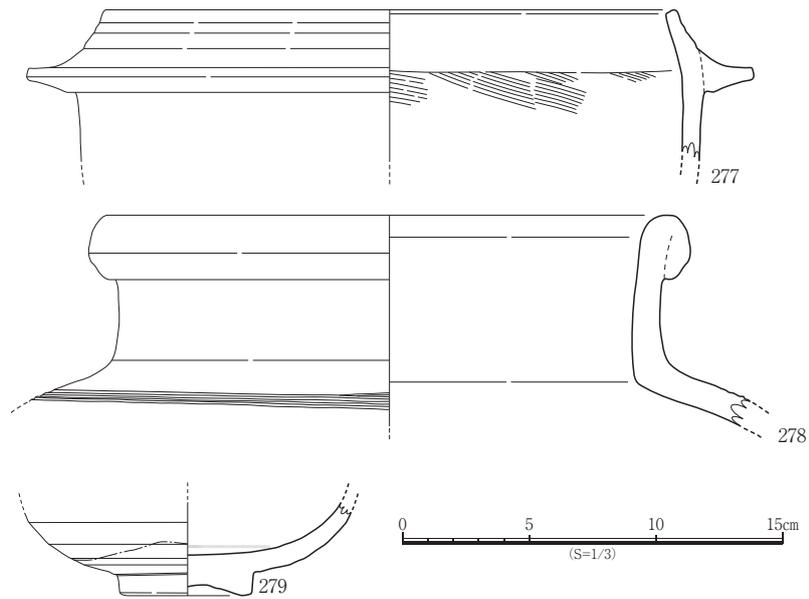


図3-57 SK-6出土遺物実測図

SK-8

調査区中央部で検出した長方形を呈する土坑で、長辺1.55m、短辺0.71m、深さ3～7cmを測り、長軸方向はN-87°-Eを示す。断面は逆台形状を呈し、埋土が小～大礫(風化地山礫)混じりの灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SK-9

調査区東部で検出した楕円形を呈する土坑で、SD-1に切られる。長径1.36m、短径1.15m、深さ26～33cmを測り、長軸方向はN-13°-Eを示す。断面は舟底状を呈し、埋土が小～大礫(風化地山礫)混じりの灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

③ 溝跡

SD-1 (図3-58)

調査区中央部で検出した東西溝跡で、西側はSE-1と繋がり、東側は調査区外へ続く。幅0.82～1.79m、深さ5～21cmを測り、基底面は西(3.225m)から東(3.151m)に傾斜し、36.60mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は小～大礫混じりの暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒～中粒砂質シルトで、出土遺物には弥生土器20点、土師器8点、須恵器4点、土師質土器77点、瓦質土器1点がみられ、土師器1点(280)、土師質土器2点(281・282)が図示できた。

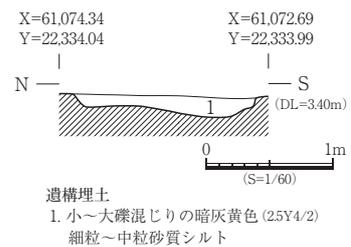


図3-58 SD-1

出土遺物

土師器(図3-59 280)

280は羽釜の口辺部破片で、胴部内面にハケを施し、その他の部位にはヨコナデ調整がみられる。鏝上部には径5mmの円孔を穿ち、鏝下部には煤が付着する。胎土には中粒砂～極粗粒砂を含む。

土師質土器(図3-59 281・282)

281・282は鍋の口辺部から胴部にかけての破片である。281は口縁部内外面に回転ナデ、胴部内面にハケ、胴部外面にタタキを施す。鏝下方には煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫を含む。282は口

3. Ⅲ区 (2) 中世

縁部内外面と胴部内面に回転ナデ、胴部外面にタタキを施す。鏝下方には煤が付着し、胎土には中粒砂～小礫を含む。

SD-2

調査区東部で検出した東西溝跡で、幅0.26～0.37m、深さ4～5cmを測り、基底面は東(3.225m)から西(3.196m)に傾斜し、3.10mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は小～大礫(風化地山礫)混じりの灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-3

調査区東部で検出した南北溝跡で、幅0.41～0.49m、深さ4～5cmを測り、基底面は南(3.292m)から北(3.281m)に傾斜し、1.40mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は小～大礫(風化地山礫)混じりの灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-4

調査区南部で検出した東西溝跡で、幅0.37～0.51m、深さ4～6cmを測り、基底面は東(3.316m)から西(3.309m)に傾斜し、3.80mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は小～大礫混じりの暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒～中粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

④ 井戸跡

SE-1 (図3-60)

調査区西部で検出した楕円形を呈する井戸で、SD-1に繋がり、西側は調査区外へ続く。素掘りの溜井と考えられるもので、調査区の際であったため底まで調査を行えなかった。長径2.62m、短径2.34m、深さ1.25m以上を測り、長軸方向はN-61°-Eを示す。埋土は1層が小～中地山礫が混じる暗褐色(10YR3/3)中粒砂質シルト、2層が小地山礫が混じる褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルト、3層が小地山礫が混じる黄灰色(2.5Y5/1)中粒～粗粒砂質シルト、4層が小～大礫が混じる黒褐色(10YR3/2)粗粒砂質シルト、5層が小地山礫が混じる褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルト、6層が小～大礫が混じる黄灰色(2.5Y4/1)細粒～中粒砂質シルト、7層が小

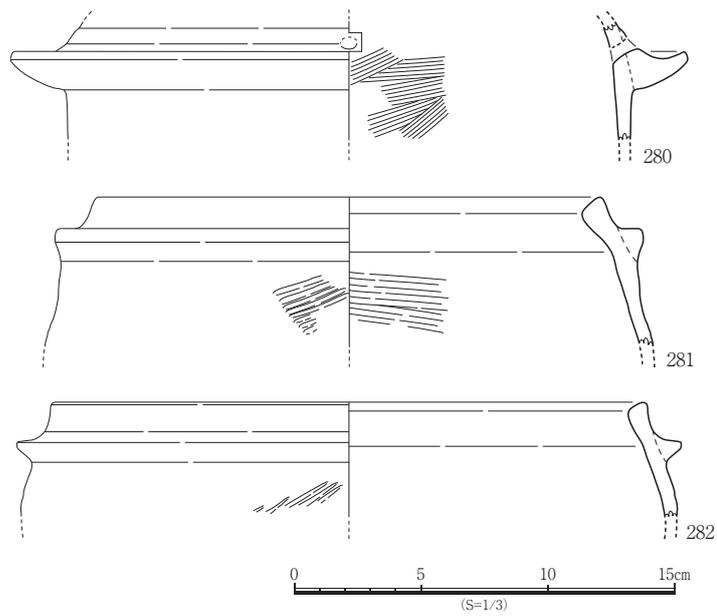
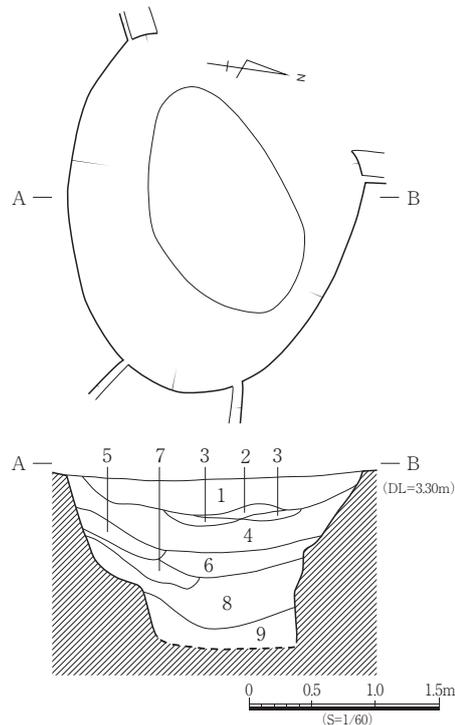


図3-59 SD-1出土遺物実測図



- 遺構埋土
1. 小～中地山礫が混じる暗褐色(10YR3/3)中粒砂質シルト
 2. 小地山礫が混じる褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルト
 3. 小地山礫が混じる黄灰色(2.5Y5/1)中粒～粗粒砂質シルト
 4. 小～大礫が混じる黒褐色(10YR3/2)粗粒砂質シルト
 5. 2と同一
 6. 小～大礫が混じる黄灰色(2.5Y4/1)細粒～中粒砂質シルト
 7. 小～中地山礫と黄褐色(2.5Y5/6)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)極粗粒砂質シルト
 8. 小～大礫が混じる暗褐色(10YR3/3)中粒砂質シルト
 9. 緑灰色(10GY5/1)中粒～粗粒砂質シルト

図3-60 SE-1

～中地山礫と黄褐色(2.5Y5/6)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)極粗粒砂質シルト, 8層が小～大礫が混じる暗褐色(10YR3/3)中粒砂質シルト, 9層が緑灰色(10GY5/1)中粒～粗粒砂質シルトで, 出土遺物は皆無であった。

⑤ 柱穴

P-1

調査区東部で検出された柱穴である。径 22 cm の円形で, 深さ 10 cm を測る。埋土は小～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)中粒砂質シルトで, 出土遺物には土師質土器 1 点(283)がみられ, 図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-61 283)

283は小皿で, 口縁部の一部が欠損する。摩耗のため調整は不明瞭であるが, 口縁部内外面に回転ナデ調整, 底部内面にナデ調整がみられる。底部切り離しは回転ヘラ切りで, 胎土は精良である。

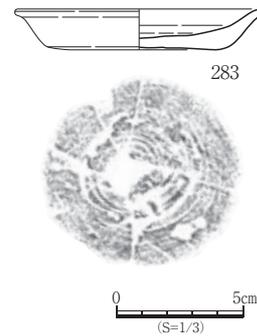


図3-61 P-1出土遺物実測図

P-2

調査区東部で検出された柱穴である。長径 29 cm, 短径 27 cm の楕円形で, 深さ 26 cm を測る。埋土は小～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)中粒砂質シルトで, 出土遺物には土師質土器 3 点, 石製品 1 点がみられ, 石製品 1 点(284)が図示できた。

出土遺物

石製品(図3-62 284)

284は叩石で, 両面と側面に敲打痕が認められる。石材は砂岩である。

P-3

調査区東部で検出された柱穴で, SD-3に切られる。径 38 cm の円形で, 深さ 30 cm を測る。埋土は

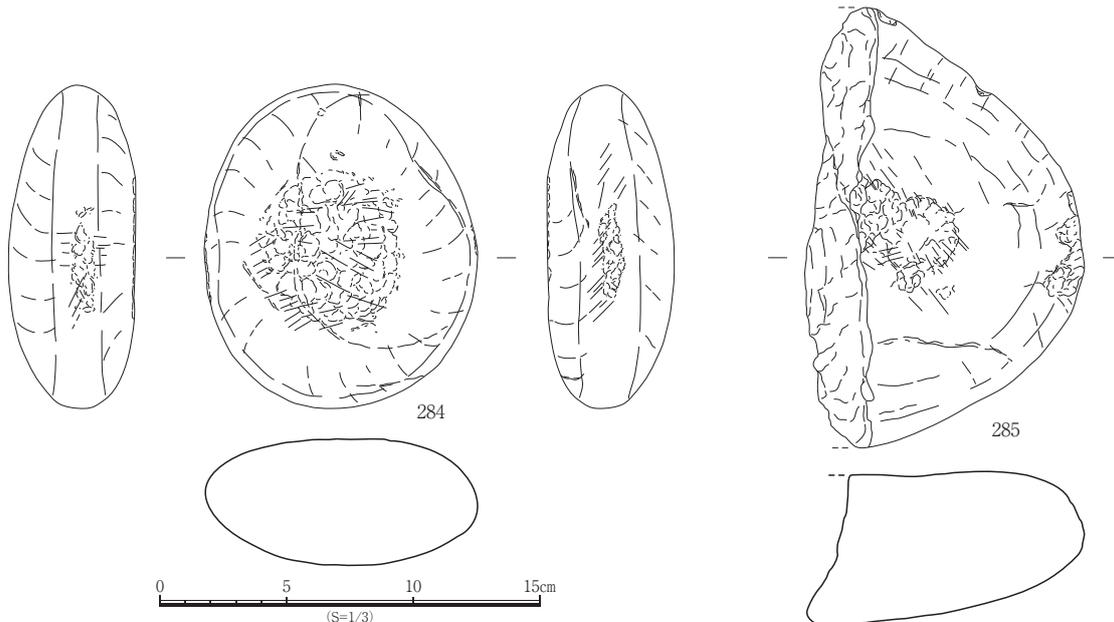


図3-62 P-2・3出土遺物実測図

4. IV区 (1) 近世

小～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)中粒砂質シルトで、出土遺物には石製品1点(285)がみられ、図示できた。

出土遺物

石製品(図3-62 285)

285は叩石で、片側を欠損する。両面と側面に敲打痕が認められ、石材は砂岩である。

4. IV区

確認された遺構の時期は近世とみられ、溝跡が検出されている。調査区の地勢は西から東に向けて緩やかに傾斜しており、比較的標高の高い調査区西部は後世の削平を受けており、調査区東部は低湿地の様相を呈していた。

(1) 近世

溝跡が検出されているが、遺構密度は極端に低い。本調査区は丘陵裾部に位置しており、居住域ではなく生産域であったと考えられる。

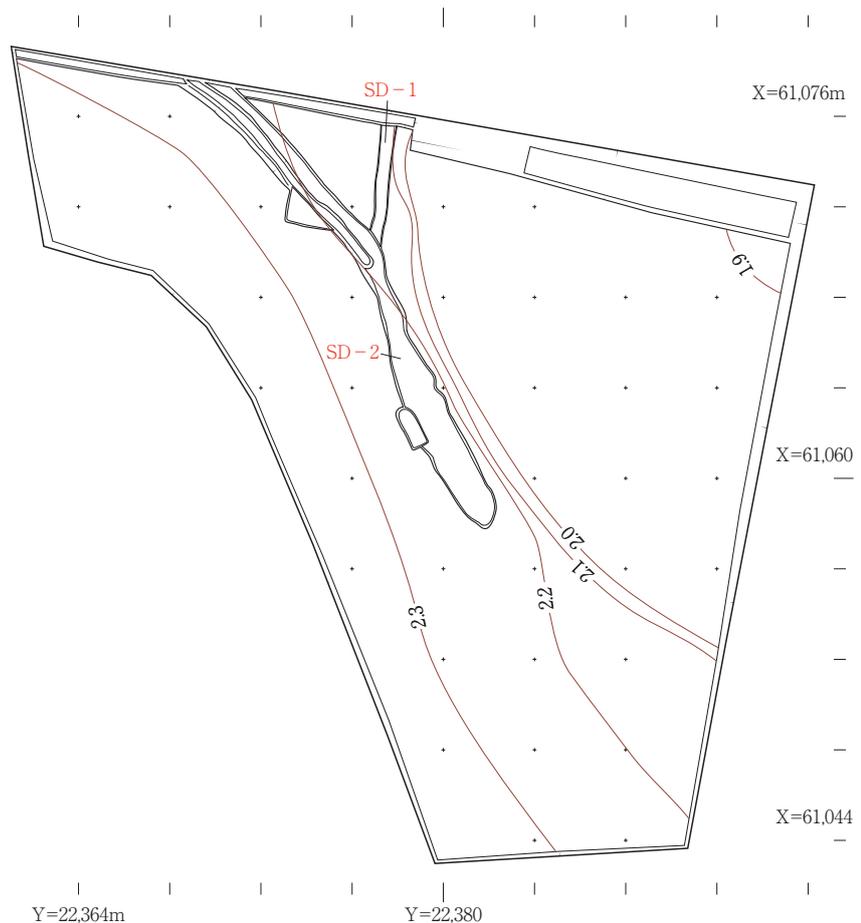


図3-63 IV-W区遺構平面図(S=1/350)

① 溝跡

SD-1

調査区北部で検出した南北溝跡で、北側は調査区外へ続き、南側はSD-2に切られる。幅0.52～0.69m、深さ2～6cmを測り、基底面は北(2.091m)から南(2.088m)に傾斜し、5.00mを検出した。断面は逆台形状を呈し、埋土は小礫混じりの黄灰色(2.5Y5/1)極細粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

SD-2(図3-64)

調査区北部で検出した南北溝跡で、北側は調査区外へ続き、SD-1を切る。幅0.75～1.79m、深さ8～23cmを測り、基底面は南(2.183m)から北(2.069m)に傾斜し、31.20mを検出した。断面は舟底状を呈し、埋土は小～中礫混じりの黄灰色(2.5Y5/1)細粒砂質シルトで、出土遺物は皆無であった。

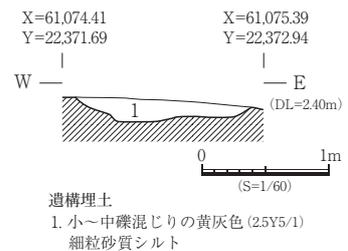


図3-64 SD-2

第Ⅳ章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

辻 康男・田中義文・矢作健二・馬場健司・松元美由紀・伊藤良永

1. はじめに

今回の分析目的は、弥生時代の居住域が分布する台地上のⅢ区に累重する遺構検出面を構成するローム状堆積物の形成年代の検討と、住居の炉跡埋土に含まれる炭化物の同定にもとづく植物利用の推定、その東側の第Ⅳ-E区で検出された開析谷の埋積層による古代～中世の層準の古環境復元である。この目的に対しては、現地野外調査による調査区の堆積層観察・記載と試料採取、テフラ分析(重鉍物+火山ガラス比分析・火山ガラスの屈折率測定)、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、種実遺体分析を適用した。種実遺体分析では、炭化材同定も併せて実施する。

2. 試料

分析試料の採取地点の位置と層序を図4-1に示す。テフラ分析試料は、第Ⅲ区で採取した。試料は試料番号1～5までの5点である。種実遺体分析試料は、台地上の調査区で検出されたST-1の炉跡および埋土である。珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析試料は、第Ⅳ-E区で採取した。試料は、試料番号1, 2, 3, 4と試料番号6の5点である。

3. 分析方法

(1) 重鉍物・火山ガラス比分析及び屈折率測定

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径

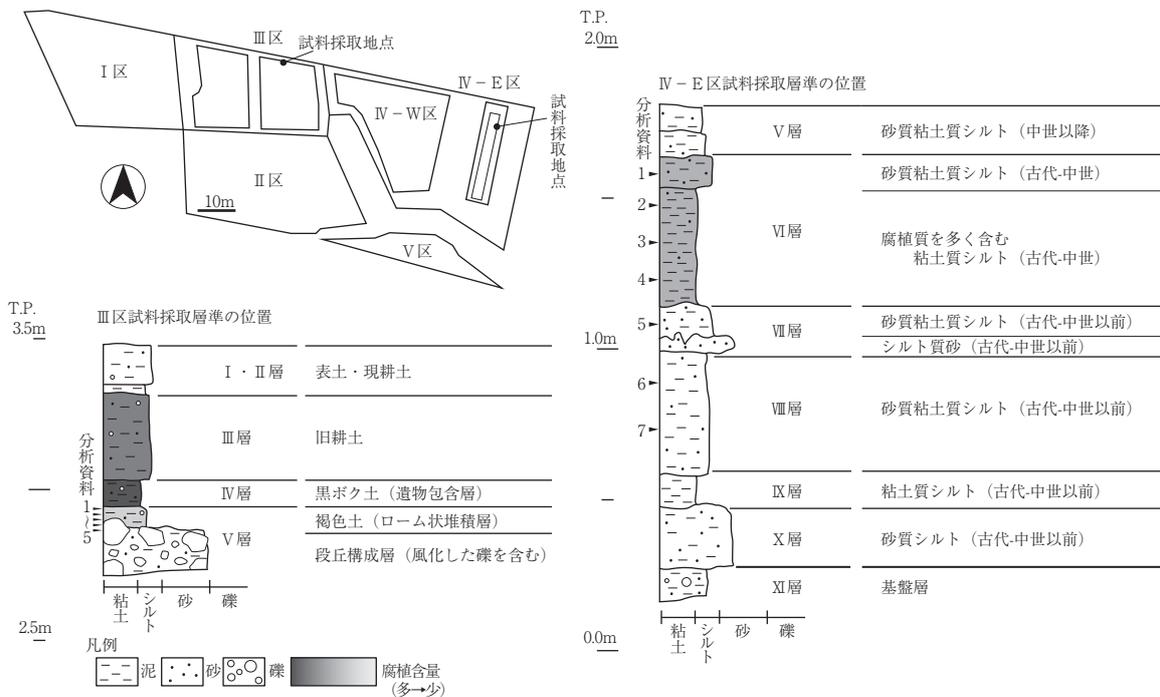


図4-1 分析試料採取地点の位置と層序

3. 分析方法 (3) 花粉分析

1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm - 1/8mmの砂分をポリタングステン酸ナトリウム(比重約2.96に調整)により重液分離、重鉍物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。重鉍物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉍物」とする。「不透明鉍物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。

火山ガラス比は、重液分離した軽鉍物分における砂粒を250粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。また、火山ガラス比における「その他」は、主に石英および長石などの鉍物粒と変質等で同定の不可能な粒子を含む。

屈折率の測定は検出された火山ガラスを対象とし、特に重要と目される産状を示す試料を1点選択する。測定は、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いる。

(2) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法(4時間放置)の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する(化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、原口ほか(1998)、Krammer(1992)、Krammer & Lange - Bertalot(1986,1988,1991a,1991b)、渡辺ほか(2005)、小林ほか(2006)、Witkowski et al.(2000)などを参照し、分類基準は、Round, Crawford & Mann(1990)に従う。なお、壊れた珪藻殻の計数基準は、柳沢(2000)に従う。

同定結果は、中心類(Centric diatoms; 広義のコアミケイソウ綱Coccosinodiscophyceae)と羽状類(Pennate diatoms)に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類(Araphid pennate diatoms; 広義のオビケイソウ綱Fragilariophyceae)と有縦溝羽状珪藻類(Raphid pennate diatoms; 広義のクサリケイソウ綱Bacillariophyceae)に分ける。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分する。

各種類の生態性は、Vos & de Wolf(1993)を参考とするほか、塩分濃度に対する区分はLowe(1974)に従い、真塩性種(海水生種)、中塩性種(汽水生種)、貧塩性種(淡水生種)に類別する。また、貧塩性種はさらに区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。そして、産出個体数100個体以上の試料は、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたり、海水生種(真塩性種)～汽水生種(中塩性種)は小杉(1988)、淡水生種(貧塩性種)は安藤(1990)、陸生珪藻は伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性は渡辺ほか(2005)の環境指標種を参考とする。

(3) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛: 比重2.3)による有機物の分

離, フッ化水素酸による鉍物質の除去, アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い, 物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し, 400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し, 出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表, および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を, 草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として, 百分率で出現率を算出し図示する。

(4) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理, 沈定法, 重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム, 比重2.5)の順に物理・化学処理を行い, 植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後, プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し, その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下, 短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下, 機動細胞珪酸体と呼ぶ)を, 近藤(2004)の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には, 分析試料の乾燥重量, プレパラート作成に用いた分析残渣量, 検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し, 堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は, 植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際, 100個/g以下は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸める(100単位にする)。また, 各分類群の植物珪酸体含量とその層位的变化から稲作の様態や古植生について検討するために, 植物珪酸体含量の層位的变化を図示する。

(5) 種実遺体分析

試料200ccを水に浸し, 粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し, ピンセットを用いて同定が可能な種実や葉などの大型植物遺体を抽出する。

抽出された大型植物遺体を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川(1994), 中山ほか(2000)等の図鑑との対照から, 種類と部位を同定し, 個数を数えて表示する。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は, ハイフォンで結んで表示する。炭化材は, 最大径と70℃48時間乾燥後の重量を表示する。試料中に確認された木材, 木の芽, 植物のトゲ, 蘚苔類, 菌核, 昆虫は, 抽出・プラス表示にとどめる。分析後は, 大型植物遺体等を種類別に容器に入れ, 70%程度のエタノール溶液で液浸し, 保管する。

(6) 炭化材同定

種実遺体同定の結果, 種実がほとんど検出されなかったため, 炉跡, 埋土で検出された炭化材のうち, 状態の良い炭化材を各3点ずつ選び, 合計6点を分析する。

試料を自然乾燥させた後, 木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し, 実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し, その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお, 木材組織の名称や特徴は, 島地・伊東(1982)やWheeler他(1998)を参考にする。また, 日本産木材の組織配列は, 林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

4. 結果 (1) 重鉍物・火山ガラス比分析及び屈折率測定

4. 結果

(1) 重鉍物・火山ガラス比分析及び屈折率測定

テフラ分析試料のうち、試料番号1～3は、風化した基盤岩上に薄く載るローム状堆積物である。試料番号4・5は、ローム状堆積物から風化基盤岩の漸移層である。この層準には、段丘構成層とみられる中礫～大礫が含まれる。

重鉍物・火山ガラス比分析の結果を表4-1、図4-2に示す。重鉍物組成は、全層位ともに斜方輝石、角閃石、不透明鉍物の3者を主体とするが、その量比は層位によって異なる。段丘礫層マトリックス～基盤岩の試料番号5および4では、角閃石が最も多く、次いで斜方輝石が多く、不透明鉍物は少量である。ローム状堆積物～段丘礫層マトリックスの試料番号3およびローム状堆積物の試料番号2では、主体となる3者がほぼ同量程度を占め、最上部のローム状堆積物の試料番号1では角閃石が多く、次いで不透明鉍物が多く、斜方輝石は少量である。

火山ガラス比では、いずれの試料も微量のバブル型火山ガラスを含み、試料番号1～3では微量の軽石型火山ガラスも認められた。火山ガラスが特に濃集する層位は認められない。

屈折率の測定は、試料番号3の火山ガラスを対象とした。測定結果を表4-2、図4-3に示す。火山ガラスの含有量が極めて微量なため、レンジを特定するだけの測定粒数は得られなかったが、概ねn1.507～1.510付近の値を示す傾向が看取される。

試料番号	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	ザクロ石	緑レン石	ジルコン	モナザイト	不透明鉍物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
1	24	1	136	0	0	3	1	69	16	250	1	0	1	248	250
2	65	4	86	0	1	4	0	65	25	250	3	0	2	245	250
3	56	7	89	0	1	5	0	84	8	250	5	0	1	244	250
4	68	13	114	0	0	2	0	46	7	250	5	0	0	245	250
5	81	8	109	1	0	1	0	47	3	250	2	0	0	248	250

表4-1 重鉍物・火山ガラス比分析結果

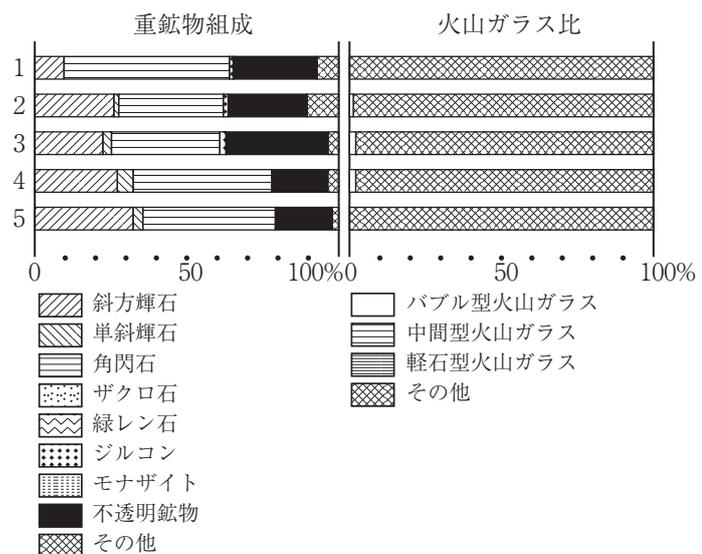


図4-2 重鉍物組成及び火山ガラス比

試料番号	形態	屈折率				合計	対比されるテフラ
		平均値	最小値	最大値			
3	bw・cl>bw・br	1.508	1.507	1.51	5	K-Ah	

略号説明： bw= バブルウォール型 cl= 透明 br= 褐色

表4-2 火山ガラスの屈折率

(2) 珪藻分析

結果を表4-3, 図4-4に示す。珪藻化石の産出頻度は全般的に少なく, 堆積環境を検討する上で有意な量の珪藻化石が産出したのは試料番号6のみで, それ以外は少ない。化石が多く産出した試料の完形殻の出現率は, 約40%である。産出分類群数は, 合計で24属22分類群である。以下に珪藻化石群集の特徴を述べる。

試料番号6は, 淡水域に生育する淡水生種が全体の約75%を占め, 残りのほとんどが汽水生種である。主要種は, 淡水生種では流水不定性で付着性の *Aulacoseira* cf. *canadensis* が約40%と検出され, 植物に付着して生育する *Aulacoseira* *crassipunctata*, 流水不定性で付着性の *Amphora* *copulata*などを伴う。汽水生種では, 付着性の *Navicula* *elegantoides*, 底生種の *Campylodiscus* *echeneis*, 汽水浮遊性の *Thalassiosira* *lacustris*などが産出する。化石の少なかった試料番号4は, 試料番号6に群集が近似する。また, 試料番号1~3は, 淡水生種の破片が少量検出した程度である。

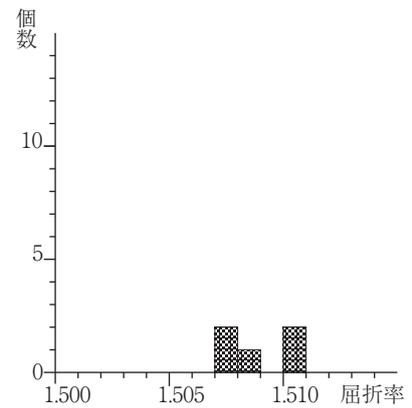


図4-3 屈折率測定結果

(3) 花粉分析

結果を表4-4, 図4-5に示す。全ての試料で花粉化石が検出される。保存状態はこの時期のものとしては比較的良く, 上位ほど花粉化石の保存が良くなる傾向にある。

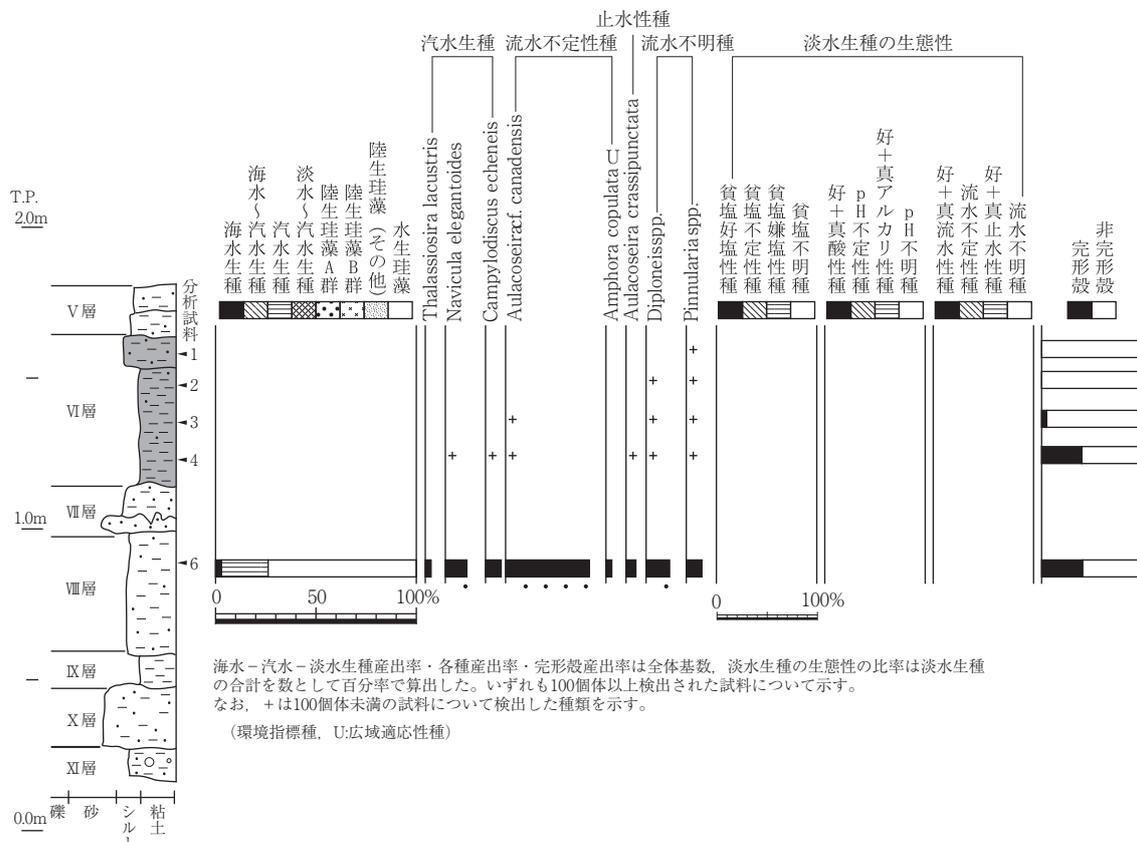


図4-4 主要珪藻化石群集

4. 結果 (3) 花粉分析

種類	生態性			環境 指標種	試料番号				
	塩分	pH	流水		1	2	3	4	6
Bacillariophyta (珪藻植物門)									
Centric Diatoms (中心型珪藻類)									
<i>Aulacoseira cf. canadensis</i> (Hust.) Simonsen	Ogh-ind	ac-il	ind		-	-	1	12	43
<i>Aulacoseira crassipunctata</i> Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	-	-	6	5
<i>Aulacoseira</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1	-	-
<i>Pseudopodosira kosugii</i> Tanimura et Sato	Meh			E2	-	-	-	1	2
<i>Thalassiosira lacustris</i> (Grun.) Hasle	Meh				-	-	-	-	3
Araphid Pennate Diatoms (無縦溝羽状珪藻類)									
<i>Fragilaria capucina</i> var. <i>gracilis</i> (Oestr.) Hustedt	Ogh-ind	ind	l-ph	T	-	-	-	1	-
<i>Fragilariforma exigua</i> (Grun.) D.M.Williams & Round	Ogh-hob	ac-il	l-ph	P	-	-	-	1	-
<i>Pseudostaurosira brevistriata</i> (Grun.) Williams & Round	Ogh-hil	al-il	l-ph	U	-	-	-	-	1
<i>Staurosira construens</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	-	1	-	-
Raphid Pennate Diatoms (有縦溝羽状珪藻類)									
Biraphid Pennate Diatoms (双縦溝羽状珪藻類)									
<i>Amphora copulata</i> (Kuetz.) Schoeman et R.E.M.Archibald	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	3
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	2	2	-
<i>Cymbopleura naviculiformis</i> (Auerswald) Krammer	Ogh-ind	ind	ind	O,U	-	-	-	1	-
<i>Encyonema silesiacum</i> (Bleisch) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	1
<i>Encyonema</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	1	1
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	-	-	-	1	-
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1	-	-
<i>Petronis granulata</i> (Bailey) D.G.Mann in Round et al.	Euh				-	-	-	-	2
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	1	2
<i>Diploneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	2	1	12
<i>Navicula elegantoides</i> Hustedt	Meh				-	-	-	2	11
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-	-	-
<i>Gyrosigma</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	2	3	-
<i>Craticula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	2	-	-	-
<i>Stauroneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	2	-	-	-
<i>Luticola mutica</i> (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	R,A,S	-	-	-	2	-
<i>Neidium dubium</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	1	-
<i>Caloneis</i> spp.	Euh				-	-	-	-	1
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	6	9	7	8
翼管縦溝類									
<i>Campylodiscus echeneis</i> Ehrenberg	Meh				-	-	-	1	8
短縦溝類									
<i>Eunotia minor</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-hob	ind	ind	O,T	-	-	-	1	-
<i>Eunotia pectinalis</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O,T	-	1	-	-	-
<i>Eunotia praerupta</i> var. <i>bidens</i> (Ehren.) Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	R,B,O,T	-	1	-	-	-
<i>Eunotia pseudoserrata</i> H.Kobayashi,K.Ando & T.Nagumo	Ogh-hob	ac-il	ind	RI	-	-	-	1	-
<i>Eunotia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	1	1	-
海水生種					0	0	0	0	3
海水～汽水生種					0	0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	4	24
淡水～汽水生種					0	0	0	0	0
淡水生種					4	14	20	43	76
珪藻化石総数					4	14	20	47	103

珪藻の適応性

H.R.: 塩分濃度, pH: 水素イオン濃度, C.R.: 流水

Meh: 汽水生種, al-bi: 真アルカリ性種, l-bi: 真止水性種

Ogh-Meh: 淡水～汽水生種, al-il: 好アルカリ性種, l-ph: 好止水性種

Ogh-hil: 貧塩好塩性種, ind: pH不定性種, ind: 流水不定性種

Ogh-ind: 貧塩不定性種, ac-il: 好酸性種, r-ph: 好流水性種

Ogh-hob: 貧塩嫌塩性種, ac-bi: 真酸性種, r-bi: 真流水性種

Ogh-unk: 貧塩不明種, unk: pH不明種, unk: 流水不明種

環境指標種群

Cl: 海水藻場指標種, D1: 海水砂質干潟指標種(小杉, 1988)

J: 上流性河川指標種, K: 中～下流性河川指標種, N: 湖沼沼沢湿地指標種, O: 沼沢湿地付着生種(安藤, 1990)

S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種(以上は Asai and Watanabe, 1995)

R: 陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内, 1991)

表4-3 主要珪藻分析結果

種類	試料番号				
	1	2	3	4	6
木本花粉					
マキ属	1	-	2	5	4
モミ属	6	12	18	21	18
ツガ属	43	32	46	43	44
トウヒ属	2	1	1	-	1
マツ属単維管束亜属	-	1	-	1	1
マツ属複維管束亜属	24	12	21	6	4
マツ属(不明)	43	39	52	15	16
コウヤマキ属	10	2	2	10	6
スギ属	25	36	21	19	10
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	11	18	8	30	37
ヤマモモ属	5	2	3	-	2
サワグルミ属-クルミ属	1	1	-	-	-
クマシデ属-アサダ属	3	3	1	1	2
カバノキ属	2	2	1	1	-
ハンノキ属	2	4	2	3	4
ブナ属	5	2	3	4	5
コナラ属コナラ亜属	4	10	12	55	92
コナラ属アカガシ亜属	21	26	44	53	29
シイ属	5	7	1	6	2
ニレ属-ケヤキ属	3	1	1	2	4
エノキ属-ムクノキ属	-	-	1	-	1
カツラ属	-	1	-	-	-
シキミ属	1	-	-	-	-
アカメガシワ属	-	1	-	-	1
ブドウ属	-	1	-	-	-
イボタノキ属	-	-	1	-	-
トネリコ属	-	1	-	-	-
草本花粉					
ガマ属	-	1	3	2	1
ミクリ属	2	2	5	1	-
オモダカ属	3	4	6	-	-
イネ属	80	44	49	4	1
イネ科	362	304	259	78	30
カヤツリグサ科	32	40	44	136	60
ミズアオイ属	4	3	2	-	-
ユリ科	-	-	1	-	-
ギシギシ属	-	-	-	-	1
サナエタデ節-ウナギツカミ節	-	-	1	4	3
ソバ属	2	1	-	-	-
アブラナ科	1	-	-	-	-
フサモ属	-	-	-	2	3
ガガブタ	-	-	-	-	1
セリ科	-	1	-	1	-
オミナエシ属	-	-	1	1	-
ヨモギ属	2	6	6	1	-
キク亜科	2	-	-	-	-
タンポポ亜科	3	3	-	1	-
不明花粉	8	3	1	-	1
シダ類孢子					
ミズワラビ属	1	1	-	-	-
他のシダ類孢子	29	47	51	55	18
合計					
木本花粉	217	215	241	275	283
草本花粉	493	409	377	231	100
不明花粉	8	3	1	0	1
シダ類孢子	30	48	51	55	18
総計(不明を除く)	740	672	669	561	401

表4-4 花粉分析結果

試料番号6は、草本花粉に比べて木本花粉の割合が高い。木本花粉ではコナラ亜属の割合が高く、モミ属、ツガ属、マツ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、アカガシ亜属等がコナラ亜属に次いで多い。草本花粉はカヤツリグサ科が多く、次いでイネ科が多く検出される。

4. 結果 (4) 植物珪酸体分析

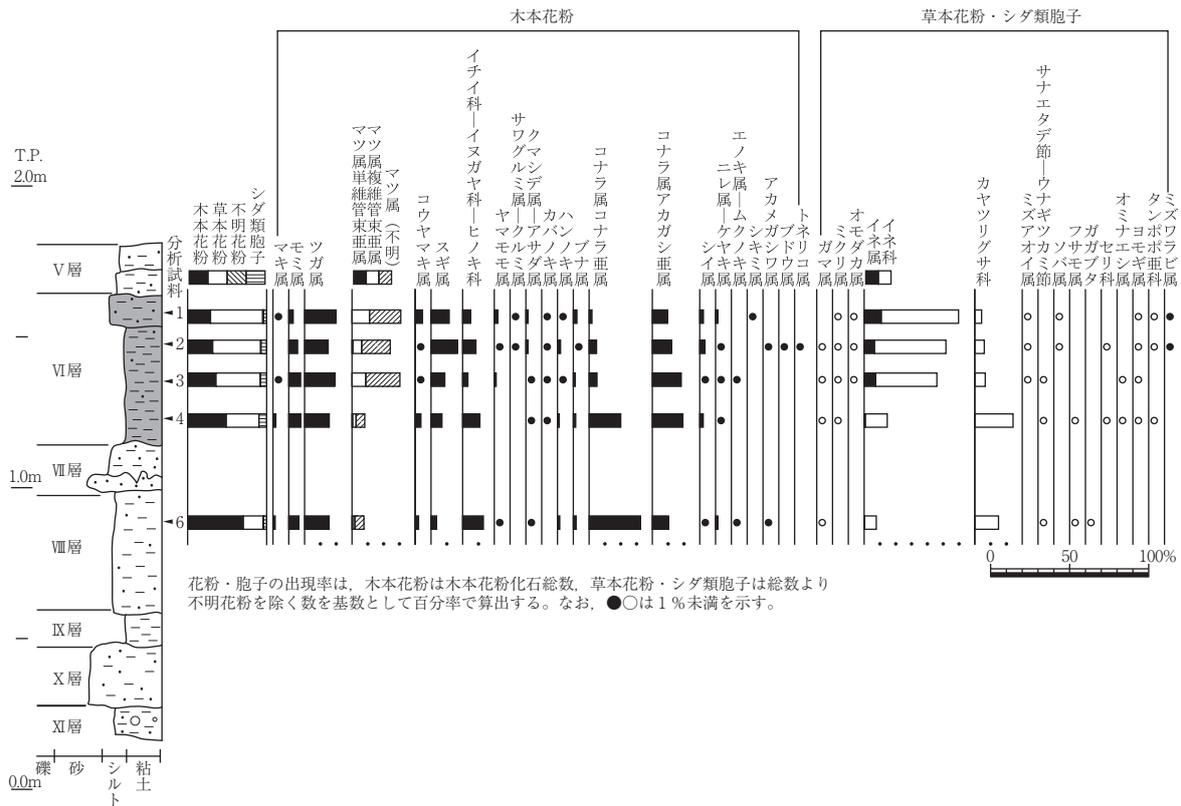


図4-5 花粉化石群集

試料番号5は、草本花粉と木本花粉はほぼ同率である。木本花粉は試料番号6に比べてコナラ亜属の割合が減少し、アカガシ亜属の割合がやや増加するものの、全体的な傾向は変わらない。草本花粉は、カヤツリグサ科の割合が高く、次いでイネ科の割合が高い。

試料番号1～3は、組成がほぼ類似する。いずれも木本花粉に比べ草本花粉の割合が高い。木本花粉では、マツ属の割合がやや高く、ツガ属、スギ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、アカガシ亜属がマツ属に次いで多い。草本類ではイネ科が多い。イネ科の中にはイネ属を含むが、その割合は、イネ科全体に対して15%前後である。その他、カヤツリグサ科やヨモギ属を含む。ミクリ属、オモダカ属、ミズワラビ属などの水生植物もみられる。イネ属以外の栽培種としてソバ属を含む。

(4) 植物珪酸体分析

結果を表4-5、図4-6に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。

試料番号6から試料番号1にかけては、植物珪酸体含量に層位的な変化が見られる。なお、各試料ではタケ亜科の産出が目立ち、植物珪酸体含量の層位的な変化もタケ亜科の産出を反映している。タケ亜科の含量は試料番号6～2にかけて増加するが、試料番号1では減少する。タケ亜科には、試料番号6でメダケ属(ネザサ節)、試料番号4～1でネザサ節に加えてメダケ属のメダケ節やクマザサ属(ササ属)が見られる。この他に、試料番号6～2ではヨシ属が見られ、試料番号3で産出のピークが見られる。また試料番号1でススキ属を含むウシクサ族が認められる。

栽培植物のイネ属が試料番号4で出現し、試料番号1まで連続的に検出され、葉部に形成される短細胞珪酸体あるいは機動細胞珪酸体が認められる。試料番号1では、穎(稗)に形成される穎珪酸体も

(個/g)

種類	試料番号				
	1	2	3	4	6
イネ科葉部短細胞珪酸体					
イネ族イネ属	300	<100	<100	<100	-
クマザサ属	500	500	400	100	-
メダケ属メダケ節	600	500	400	100	-
メダケ属ネザサ節	600	1,100	900	500	100
タケ亜科	3,100	6,800	5,900	2,700	500
ヨシ属	-	300	1,200	400	-
ウシクサ族ススキ属	100	100	-	-	-
不明	2,600	3,600	3,800	1,900	600
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
イネ族イネ属	500	200	100	200	-
クマザサ属	100	400	<100	100	-
メダケ属メダケ節	300	500	300	-	-
メダケ属ネザサ節	400	700	800	400	<100
タケ亜科	1,400	2,100	1,900	800	100
ヨシ属	-	500	1,200	400	100
ウシクサ族	<100	100	-	-	-
不明	1,000	2,200	3,400	1,100	300
合計					
イネ科葉部短細胞珪酸体	7,800	13,100	12,600	5,800	1,300
イネ科葉身機動細胞珪酸体	3,900	6,700	7,800	3,100	700
総計	11,700	19,800	20,400	8,900	1,900
珪化組織片					
イネ属穎珪酸体	*	-	-	-	-

含量は、10の位で丸めている(100単位にする)

<100: 100個/g未満

-: 未検出, *: 検出

表4-5 植物珪酸体含量

わずかに検出される。その含量は、多くても試料番号1の機動細胞珪酸体が約500個/gであり、他は100個/g未満～300個/g程度である。

(5) 種実遺体分析

結果を表4-6に示す。被子植物3分類群(栽培種のイネ、ヒエ近似種?, 草本のカヤツリグサ属)45個の種実が検出された他に、炭化材などが確認された。

ST-1の炉跡からは、炭化した栽培種のイネの穎の破片が7個、胚乳の破片が2個と、炭化していない草本のカヤツリグサ属の果実が1個、炭化材が0.12g(最大6.4mm)確認された。カヤツリグサ科は、調査地周辺の草地環境に由来すると考えられるが、保存状態から後代の混入の可能性が高く、炭化種実と由来が異なると想定されるため、本報告では検出状況の表示に留め、解析からは除外している。

ST-1の埋土からは、炭化した栽培種のイネの穎の破片が33個、胚乳の破片が1個、ヒエ近似種?の胚乳が1個、炭化材が0.20g(最大8.5mm)が確認された。

以下に、炭化種実の形態的特徴を記す。

・イネ(*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳、穎は炭化しており黒色、やや偏平な長楕円体。胚乳は、完形ならば長さ4-5mm、幅2.5-3.5mm、厚さ1-1.5mm程度で、基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、

4. 結果 (5) 種実遺体分析

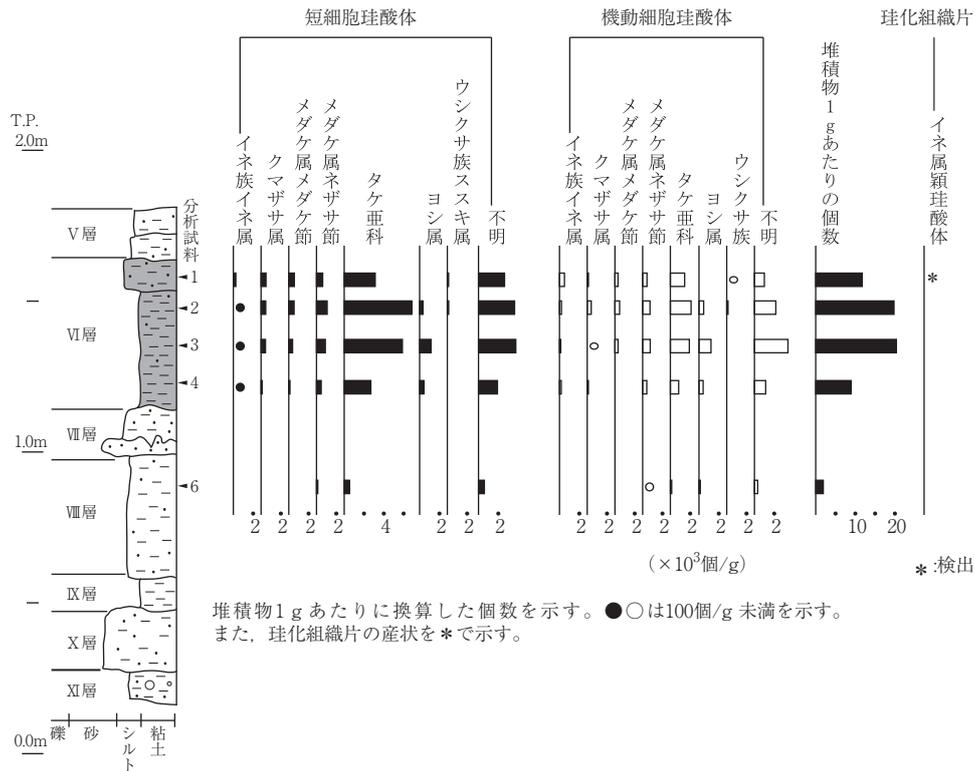


図4-6 植物珪酸体含量

分類群	部位	状態		ST-1		備考
				炉跡	埋土	
種実						
イネ	穎	破片(基部)	炭化	7	32	
		破片	炭化		1	
ヒエ近似種?	胚乳	破片	炭化	2	1	胚部分に泥付着 後代の可能性
カヤツリグサ属	胚乳	完形	炭化			
	果実	完形		1		
炭化材				0.12g	0.20g	乾燥重量
コナラ亜属クヌギ節				6.4mm	8.5mm	最大径
ブナ科				2	2	
モチノキ属				1		
カキノキ属					1	
		分析量		200cc	200cc	
				225.13g	244.59g	
		残渣		47.68g	22.35g	

表4-6 種実遺体分析結果

2-3本の隆条が縦列する。破片の大きさは、最大3.7mm。胚乳を包む穎(果)は、完形ならば長さ6-7.5mm、幅3-4mm、厚さ2mm程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲粒を構成する。果皮は薄く脆く、表面には顆粒状突起が縦列する。穎の破片は、主に果実序柄が確認され、大きさは最大1.2mm。

・ヒエ近似種(*Echinochloa cf. utilis* Ohwi et Yabuno)? イネ科ヒエ属

胚乳は炭化しており黒色。長さ1.3mm、幅0.9mm、厚さ0.8mm程度の狭卵-半偏球体で、背面は丸

みがあり腹面はやや平ら。基部正中線上の長さ0.9mm, 最大幅0.5mm程度の馬蹄形の胚の凹みに泥が付着している。胚乳表面は粗面。

(6) 炭化材同定

樹種同定結果は, 種実分析結果と合わせて表4-6に示す。炭化材は, 広葉樹4分類群(コナラ属コナラ亜属クヌギ節・ブナ科・モチノキ属・カキノキ属)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属コナラ亜属

放射組織の特徴から, ブナ科のコナラ属(コナラ亜属・アカガシ亜属), ブナ属, マテバシイ属等の複合放射組織と考えられる。道管配列が観察できないため, ブナ科とした。

・モチノキ属(Ilex) モチノキ科

散孔材で, 管壁は薄く, 横断面では多角形, 単独または2-6個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し, 内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性, 1-5細胞幅, 1-40細胞高。

・カキノキ属(Diospyros) カキノキ科

散孔材で, 管壁は厚く, 横断面では楕円形, 単独または2-4個が時に年輪界をはさんで複合する。道管は単穿孔を有し, 壁孔は対列状に配列する。放射組織は異性, 1-3細胞幅, 10-20細胞高で階層状に配列する。

・クヌギ節(Quercus subgen. Quercus sect. Cerris) ブナ科

試料はいずれも微細片で電子顕微鏡観察ができず, 実体顕微鏡による観察のみ実施した。環孔材で, 孔圏部は1-2列, 孔圏外で急激に管径を減じたのち, 単独で放射方向に配列し, 年輪界に向かって径を漸減させる。放射組織は同性, 単列の組織と複合放射組織とがある。

・ブナ科(Fagaceae)

試料は微細片で実体顕微鏡による観察のみ実施した。大型の複合放射組織のみ観察でき, 道管配列などは不明である。

5. 考察

(1) 遺跡の立地環境

徳王子大崎遺跡は, 高知平野東端部に存在する徳王子・香我美丘陵の南端部に形成された小規模な段丘面と, その東側に南北へ伸びる, 丘陵を侵食して形成された岸本川の谷底低地末端部に立地する(図4-7~10)。遺跡の南側約1.4kmには, 現海岸線が存在する。海岸線には, 浜堤が並行して伸び, その後背に岸本低地と呼ばれる潟湖性の海岸低地が広がる。

徳王子大崎遺跡の周辺には, 考古遺跡が隣接して存在する。これらの遺跡は, 本地域のモザイク状の地形を反映し, 多様な立地傾向を示す。本遺跡の西側の花宴遺跡から, その東側に続く徳王子前島遺跡における一連の調査地点については, 丘陵地の谷底低地末端部(徳王子前島遺跡西半部・徳王子広本遺跡西半部), 台地(徳王子大崎遺跡・徳王子広本遺跡東半部), 丘陵斜面の開析谷前面の小規模な扇状地(徳王子前島遺跡東半部), 香宗川氾濫原下半部(花宴遺跡: 地形分類図の海岸平野・三角州平野に相当)にまとめられる。

(2) 台地構成層について

Ⅲ区で検出された弥生時代前期の居住域が立地する台地は, 岸本川谷底低地の右岸に位置する, 残丘状の丘陵周縁に形成された非常に小規模な段丘面である。この段丘面では, 段丘礫層がほとんど

5. 考察 (2) 台地構成層について

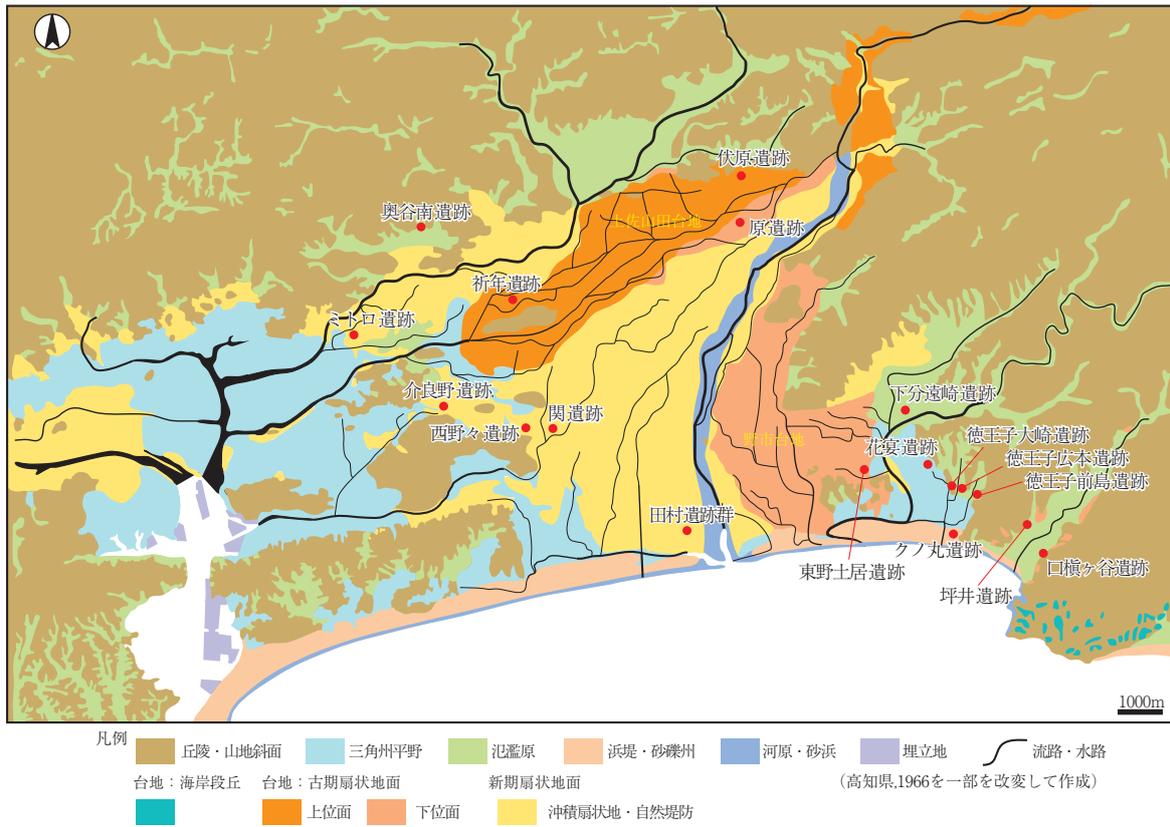


図4-7 遺跡の位置図

ど存在せず、極浅い深度で風化した基盤岩が露出する。段丘礫層に相当する層準は層厚が極めて薄く、風化した基盤岩に散在する礫として存在するのみの領域がほとんどある。段丘面上では、基盤岩と段丘礫層相当層準を被覆するローム状堆積物と黒ボク土の層厚も薄い。

ローム状堆積物については、重鉍物分析において角閃石はどの層位でも最も多くを占めており、層位的な組成の変化に乏しいが、斜方輝石は上部の試料番号1で減少する傾向が認められる。遺跡周辺の地質学的背景を考慮すれば、物部川流域に分布する物部川層群や秩父帯および四万十帯などは、ほとんど堆積岩類からなる地質である(日本の地質「四国地方」編集委員会 1991 など)から、検出された斜方輝石と角閃石は、台地の基盤や周辺の河川砂に由来するものではない。従ってその由来としては、遠隔地から飛来して段丘上に降下堆積したテフラを考えることができる。その場合、層位的な重鉍物組成の変化は、土壌中におけるテフラの産状を反映している可能性がある。火山ガラス比分析では、微量の火山ガラスが検出されたものの、テフラの降灰層準を示すような濃集層準は見出せなかった。しかし、試料番号2~4に比べて試料番号1の火山ガラス比は有意に少ないとみることができ、斜方輝石の層位的な産状と連動している可能性がある。すなわち、火山ガラスの由来となるテフラは、斜方輝石を主な斑晶鉍物とするテフラである可能性がある。検出された火山ガラスは、バブル型を呈することと褐色を帯びたものも認められることおよび比較的高い屈折率を呈することが特徴であったが、この火山ガラスからなるテフラが斜方輝石を主な斑晶鉍物とするとすれば、その由来するテフラは、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah:町田・新井,1978)であると考えられる。

今回の分析結果からは、重鉍物組成においても火山ガラス比においてもK-Ahの降灰層準を推定することはできない。

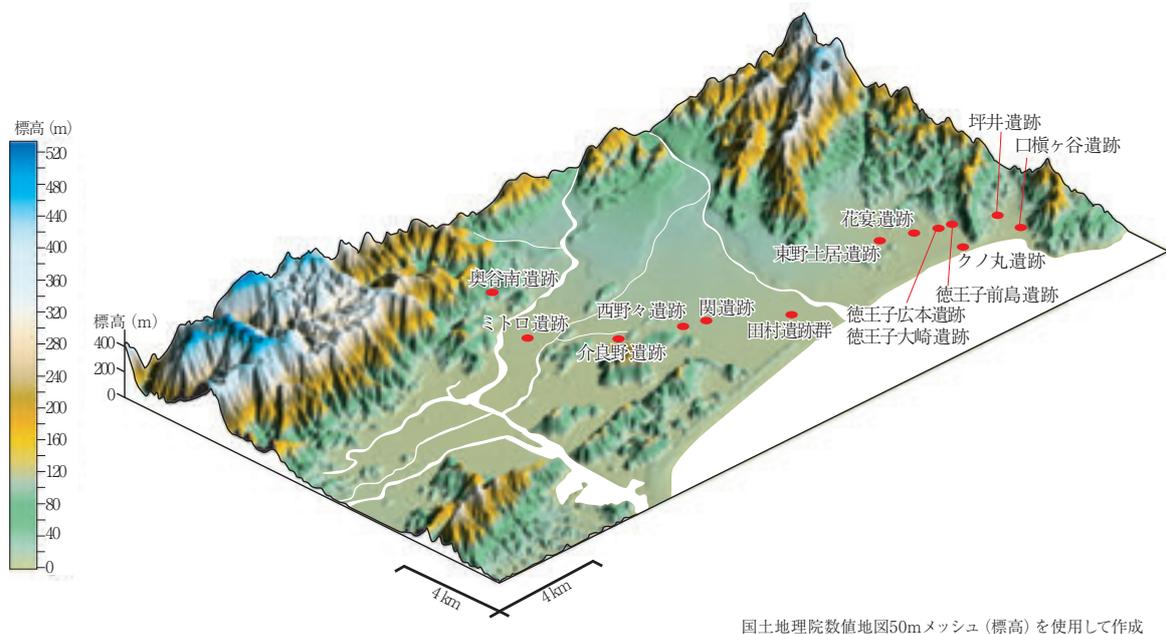


図4-8 遺跡周辺の地形

以上のテフラ分析結果と現地での層序観察から、本遺跡が載る台地では、削剥が著しく段丘礫層およびそれを覆うローム状堆積物がほとんど存在しないことが明らかとなった。このような堆積状況は、物部川の古期扇状地面である土佐山田台地や野市台地と大きく異なる。しかし、現段階においてその地質学的要因は不明であり、今後の検討課題である。

(3) 谷部の堆積環境

IV-E区で検出された開析谷では、碎屑物主体の砂質シルト、粘土質シルト、砂質粘土質シルトが累重する。これらの堆積層では遺物が出土しておらず、堆積年代が不明である。層相から、下半部は自然堤防などの流路河岸やその近傍に累重した洪水堆積物であることが推定される。

上半部では、腐植を多く含む粘土質シルトが累重する。この層準の最上部には、下位に比べ淘汰が著しく不良で塊状をなす砂質粘土質シルトの堆積がみられる。上半部に相当する堆積層は、出土遺物から古代～中世に形成されたことが推定されている。層相から、上半部は後背湿地の堆積環境が推定される。なお、上半部と下半部の境界には、洪水堆積物が挟在する。この洪水堆積物は、レンズ状の堆積を示し、泥～砂礫層で構成され、側方への細粒化が顕著である。

本調査区は、岸本川が形成した開析谷の西縁部に位置する。この開析谷では、東縁部で徳王子広本遺跡において発掘調査が実施されている。この徳王子広本遺跡の調査区と徳王子大崎遺跡の調査区の間には、試掘調査のみが行われた区間が存在する。徳王子広本遺跡では、西半部の調査区において厚い泥炭で埋積された開析谷が検出されている。

この開析谷内では、上記した東縁部の徳王子大崎遺跡の第IV-E区で検出された開析谷内の埋積層の層相から、古代～中世以前に流路からの洪水の影響を強く受けていたと考えられる。これに対し、西縁部の徳王子広本遺跡の開析谷内では、流路からの砂質堆積物の流入の影響を直接受けることのない、泥炭ないし泥炭質な堆積層が積層する安定した地下水位の高い湿地が、古代～中世以前に継続的に形成されていた。このような谷内の空間的な層相の差違にもとづくと、粗粒堆積物が累

5. 考察 (4) 谷部の水文環境

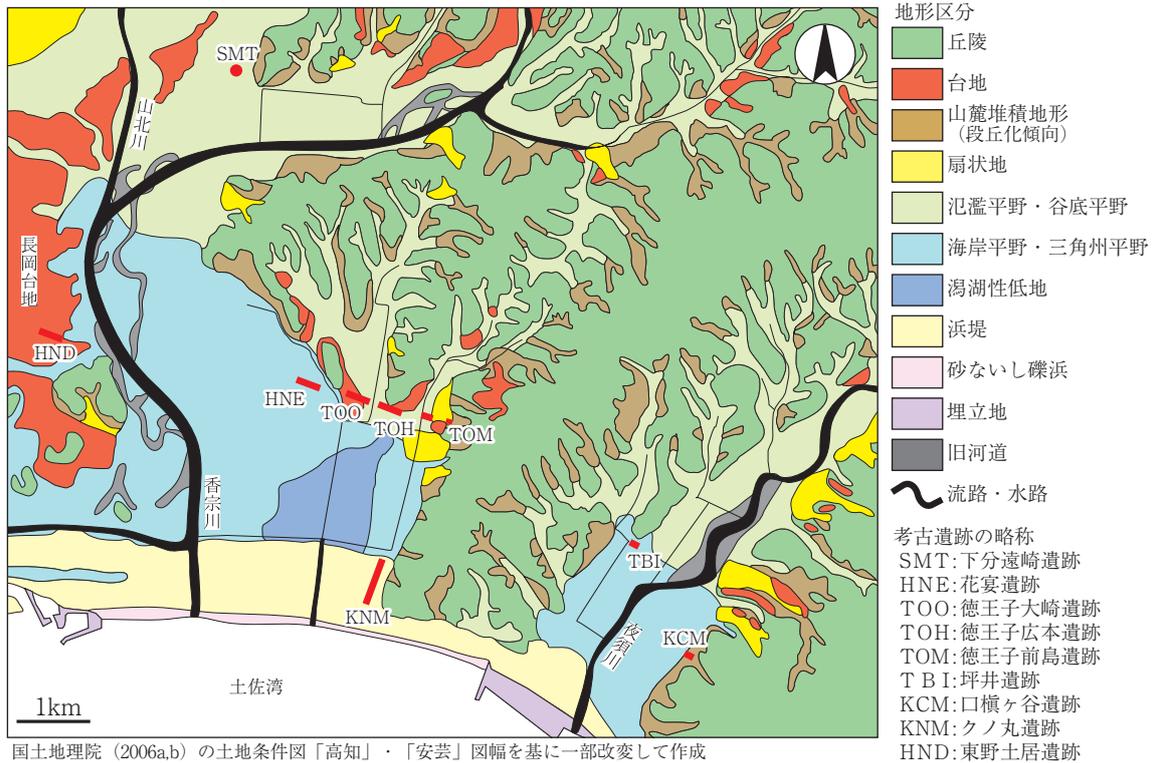


図4-9 遺跡周辺の地形分類図

重なる岸本川の流路帯は、徳王子大崎遺跡と徳王子広本遺跡の間の試掘領域に存在していたと考えられる。

徳王子広本遺跡で確認された谷内の堆積環境は、南へ突出する徳王子・香我美丘陵の先端部とそれを取りまく低位段丘面を介して、岸本川と並行して流れる大留川の開析谷内に位置する徳王子前島遺跡でも確認される。徳王子前島遺跡では、7300年前の鬼界アカホヤ火山灰から縄文時代晩期頃まで、数枚の砂礫層を挟在して、泥炭ないし泥炭質な堆積層が連続的に累重する(パリーノ・サーヴェイ(株),2011)。なお、鬼界アカホヤ火山灰降灰層準よりも下位の堆積層については、重機による掘削で確認することができず堆積状況が不明である。

古代～中世には、流路からの粗粒堆積物の供給が弱まり、後背湿地へと堆積環境が変化する。本時期の後背湿地は、後述する珪藻化石群集から、洪水による冠水などによって水没と干出を繰り返す、泥質氾濫堆積物も多く供給されるような不安定な地表環境下にあったと考えられる。古代～中世に上述した近隣の徳王子前島遺跡では、多くの遺物が検出される(島内編,2011)。また、自然科学分析からは、中世に谷内で水田が形成された可能性が高いことが示唆される。このような徳王子大崎遺跡と徳王子前島遺跡で認められる古代～中世の開析谷内での考古学的様相の差違については、社会・自然複合的な視点において今後さらに検討を行っていくことが課題である。

(4) 谷部の水文環境

ここでは、珪藻化石分析結果にもとづき、第Ⅳ-E区の谷部の古水文環境変遷を述べる。珪藻化石では、下半部の試料番号6のみで統計的に扱える量の化石が産出する。本試料では、淡水生種の他に汽水性種をとともう。汽水性種は、古代～中世の層準最下部の試料番号4でも産出する。産出した汽水性種のうち、*Thalassiosira lacustris*は、浮遊性の種で淡水域から汽水域まで広く分布し、汽水湖

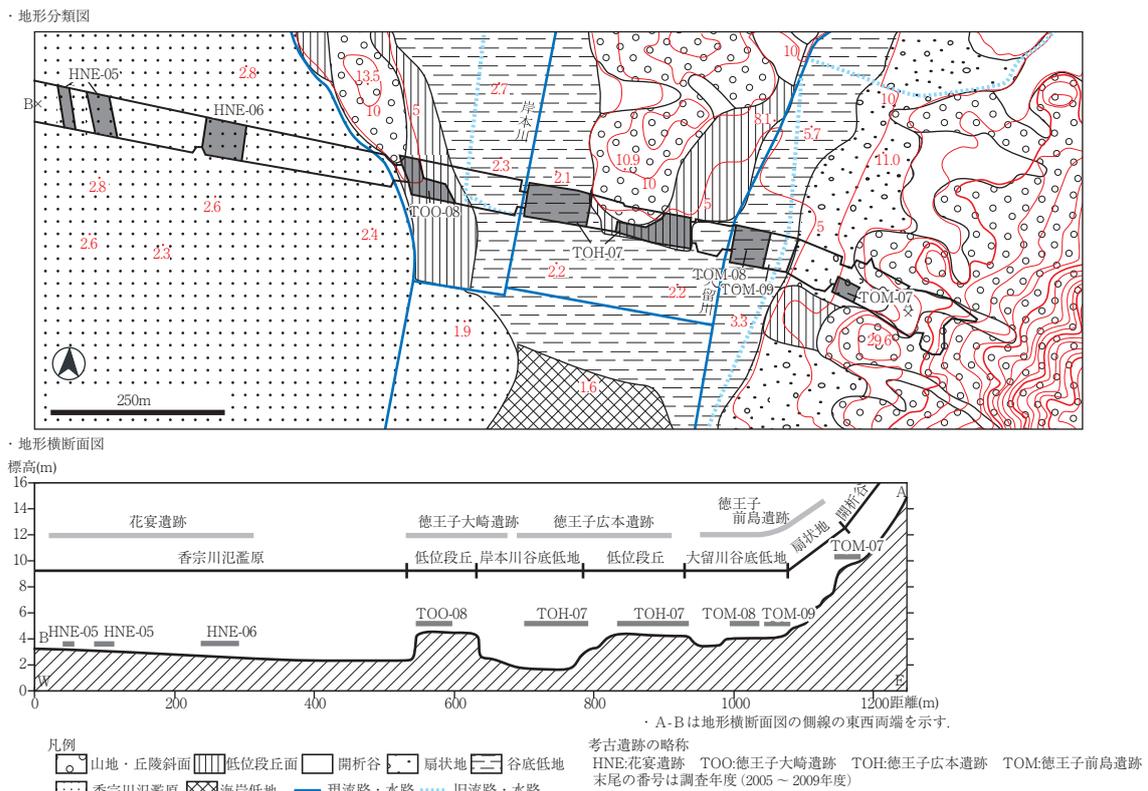


図4-10 遺跡周辺の地形分類図・地形横断面図

からでも一般的な産出を示す(田中,2002)。

周辺の分析事例では、花宴遺跡や同じ開析谷内に位置する徳王子広本遺跡で、弥生時代前期頃まで汽水生種の随伴が確認される。今回の分析により、徳王子大崎および徳王子広本遺跡内の岸本川の谷底低地では、古代～中世のある段階まで、海水の影響を受けていた可能性が示唆される。ここでは、前面に潟湖性の海岸低地の広がることから、この時期に本遺跡周辺の岸本川では、海水塩分の影響を受ける感潮河川域であったと推測される。このような水文環境がいつ頃まで継続したかについては、保存状態が不良であったため、今回の分析結果から確認されず、今後の課題を残すこととなった。

谷部上半部の腐植質粘土質シルトでは、珪藻化石の保存状態が著しく不良であった。層相からは、本層が湿地の環境下にあったと考えられる。植物珪酸体分析では、湿潤地を好むヨシ属が少なく、洪水層で多産傾向のあるタケ亜科が優占する。この腐植質粘土質シルトでは、未分解の植物遺体が挟在せず、有機物の分解が進行する状況であったことが捉えられる。

なお、粒径を同じくする花粉化石は比較的保存が良く検出されることや、堆積物の層相から考えて、シルト径の粒子が、堆積物に少ないとは考えられないので、谷部上半部に含まれる珪藻化石は、堆積後に消失したとみなされる。詳細な理由は不明だが、珪藻化石を構成する非晶質であるガラスは風化に弱く、アルカリ性の水域や、乾湿を繰り返す環境で消失しやすいといわれている(江口,1994,1996)。

以上のことから、古代～中世に谷部では、水位変動が大きく水没と干出を繰り返し、地表が乾燥する時期も挟在するような不安定な湿地の水文環境であったと推定される。

(5) 谷部の古植生

花粉分析結果では、古代～中世の試料番号4と3を境にして、花粉化石群集が変化する。この変化のうち、木本花粉の変化としては、試料番号3より上位でマツ属が増加することがあげられる。そしてコナラ亜属は、このマツ属の増加にともない減少する。コナラ亜属は、その生態性から開析谷の氾濫原上で生育していた河畔林の構成要素の一つとみなされ、調査区周辺での生育がうかがわれる。このことから、今回確認されたマツ属の増加は、古代～中世のある段階に開析谷周辺での森林破壊が顕著化し、痩せ地でも生育が早いマツが林を構成するようになったと考えられる。

草本花粉の変化としては、イネ科を中心とする草本類の増加が認められる。このなかでは、特に栽培種のイネ属を含むイネ科が多産し、さらにカヤツリグサ科、ヨモギ属等の開けた明るい場所を好む「人里植物」を多く含む分類群をとまなう。この他、草本花粉では、ガマ属、ミクリ属、オモダカ属、ミズアオイ属、ミズワラビ属の水湿地生植物が確認される。これらは、谷内の湿潤地に生育していた他、水田雑草として普通にみられる種類でもあることから、流域近傍の水田に由来している可能性がある。植物珪酸体分析では、イネ科花粉の消長と相関するように、試料番号3より上位でイネ科の植物珪酸体含量が増加する。大部分はタケ亜科であるが、ヨシ属やウシクサ属をとまなない、少量ではあるがイネ属の植物珪酸体も産出する。

以上のような植物化石の産状から、岸本川の開析谷底やその周辺では、試料番号3の時期に耕作地の開発が顕著化したことが推定される。この時期については、発掘調査においてほとんど遺物が検出されておらず、現段階において古代～中世の範疇でしか捉えられない。この点については、年代測定や今後の発掘結果などをふまえ、さらに詳細な時期決定を行っていくことが必要である。なお、分析地点については、堆積物中に含まれるイネ属珪酸体の含量が少ないことから、水田として活発に利用されなかったことが想定される。

イネ属珪酸体以外の栽培種では、ソバ属花粉が試料番号2・1で産出する。ソバ属花粉については、過去9年間毎年裏作でソバを栽培している水田と、その隣でまったくソバを栽培していない水田の表層土での散布と堆積に関する研究が行われている(中村,1984)。これによると、ソバ属花粉は堆積物中での偏在性が極めて高く、1%以上検出された場合に、その地点あるいはあまり離れていない地点で大規模なソバ栽培があったとみなしても良いとされる。このことから、調査区やその周辺では、ソバが栽培されていたことが確認される。

いっぽう、地域的な古植生変遷を示唆する可能性が高い木本花粉群集に着目してみると、古代～中世の試料番号4と古代～中世以前の試料番号7では、種類構成に大きな変化が認められない。今回確認された木本花粉では、コナラ亜属をはじめとする落葉広葉樹に加え、モミ属、ツガ属などの針葉樹、ヤマモモ属、アカガシ亜属、シイノキ属などの常緑広葉樹等が普通に産出する。なお、試料番号6と4では、草本花粉の割合が異なるが、これは試料の層相の差異によって生じたものと考えられる。すなわち、粗粒な洪水堆積物を多く含む試料番号6は、湿地泥層の試料番号4に比べ、より広域の花化石群集を反映した結果、木本化石の割合が高くなったと推定される。

上記の花化石群集にもとづくと、本遺跡周辺では、古代～中世の試料番号4段階とそれ以前に、アカガシ亜属、シイ属、ヤマモモ属などの常緑広葉樹が、丘陵や山地に安定した森林を形成しており、それよりも土地条件の悪い谷斜面などでモミ属、ツガ属、ヒノキ科等の針葉樹が生育していたと考えられる。また、開析谷を中心とする本遺跡周辺の氾濫原上では、サワグルミ属-クルミ属、コナ

ラ亜属, ニレ属 - ケヤキ属といった落葉広葉樹が河畔林や溪谷林として生育していたと推察される。そして, 古代~中世のある段階に, 耕作地の開発により氾濫原上の林分を中心に, 人間により植生破壊により, 上記の林分は後退傾向へ転じたと判断される。

(6) ST-1の植物利用

第Ⅲ区で検出された弥生時代後期後半のST-1の炉跡および埋土の種実遺体分析の結果, 炭化した栽培種のイネの穎, 胚乳, ヒエ近似種?の胚乳が確認された。栽培種では, イネが多産する。このことから, 弥生時代後期後半に本遺跡では, イネを中心とする植物質食糧の利用が推定される。

また, 種実の洗い出しにより随伴した炭化材片では, コナラ亜属クヌギ節, ブナ科(属種不明), モチノキ属, カキノキ属が確認された。炉跡などから検出されたことから, これらの炭化材は, 燃料材として使用されたと思われる。このうちクヌギ節は, クヌギやアベマキを含む, これらは人里近くの森林(里山林)や低地によくみられる。ブナ科は, 常緑樹, 落葉樹とも日本を代表とする樹木で日本各地のいたるところでみられる。モチノキ属は林縁部など明るい場所を好む陽樹が多く含まれる。カキノキ属は, 西日本を中心に生育する種類である。このような生態性と燃料材であることをふまえると, 同定された炭化材片は, 調査区周辺に生育していた木材と考えられ, 弥生時代後期後半の居住域をとりまく林分の種類構成の一端を示すものと捉えられる。

引用文献

- 安藤一男,1990,淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理,42,73-88.
- Asai, K. & Watanabe, T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom,10, 35-47.
- 江口誠一,1994,沿岸域における植物珪酸体の分布 千葉県小櫃川河口域を例にして.植生誌研究,2,19-27.
- 江口誠一,1996,沿岸域における植物珪酸体の風化と堆積物のpH値.ペトロジスト,40,81-84.
- 原口和夫・三友清史・小林 弘,1998,埼玉の藻類 珪藻類.埼玉県植物誌,埼玉県教育委員会,527-600.
- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- Faegri K.& Iversen Johs.,1989,Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press,328p.
- 古澤 明,1995,火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別.地質学雑誌,101,123-133.
- Hustedt, F.,1937-1939,Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen - Flora von Java, Bali und Sumatra . Archiv für Hydrobiologie, Supplement,15:131-177,15:187-295,15:393-506,15:638-790,16:1-155,16:274-394.
- 石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 伊藤良永・堀内誠示,1991,陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.珪藻学会誌,6,23-45.
- 小林 弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲 保・長田啓五,2006,小林弘珪藻図鑑.第1巻,(株)内田老鶴圃,531p.
- 国土地理院,2006a,1:25000 土地条件図 高知.国土地理院地理調査部防災地理課.

引用文献

- 近藤鍊三,2004,植物ケイ酸体研究.ペドロジスト,48,46 - 64.
- 小杉正人,1988,珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用.第四紀研究,27,1 - 20.
- 高知県,1966,土地分類基本調査 高知 5万分の1 国土調査,経済企画庁.
- Krammer, K.,1992,PINNULARIA.eine Monographie der europäischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J.CRAMER,353p.
- Krammer, K. & Lange - Bertalot, H.,1986,Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/1. Gustav Fischer Verlag,876p.
- Krammer, K. & Lange - Bertalot, H.,1988,Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae,Bacillariaceae, Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2. Gustav Fischer Verlag,536p.
- Krammer, K. & Lange - Bertalot, H.,1991a,Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3. Gustav Fischer Verlag,230p.
- Krammer, K. & Lange - Bertalot, H.,1991b,Bacillariophyceae.4.Teil: Achnanthaceae,Kritische Ergaenzungen zu Navicula(Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4. Gustav Fischer Verlag,248p.
- Lowe, R.L.,1974,Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh - water Diatoms.334p. In Environmental Monitoring Ser.EPA Report 670/4 - 74 - 005 . Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati .
- 町田 洋・新井房夫,1978,南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ - アカホヤ火山灰.第四紀研究,17,143 - 163.
- 中村 純,1984,古代農耕とくに稲作の花粉分析学的研究.古文化財の自然科学的研究,同明舎出版,581 - 602.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.
- 日本の地質「四国地方」編集委員会,1991,日本の地質8 四国地方.共立出版,266p.
- パリノ・サーヴェイ(株),2011,自然科学分析.徳王子前島遺跡.高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター,83 - 130.
- Round, F. E.,Crawford, R. M. & Mann, D. G.1990,The diatoms. Biology & morphology of the genera. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.
- 島地 謙・伊東隆夫編,1988,日本の遺跡出土木製品総覧.雄山閣,296p.
- 島内洋二編,2011,徳王子前島遺跡.高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター,164p.
- 田中正昭,2002,日本淡水産動・植物プランクトン図鑑.584p.
- Vos, P.C. & H. de Wolf,1993,Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands; methodological aspects.Hydrobiologica,269/270,285 - 296.
- 渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻 彰洋・伯耆 子,2005,淡水珪藻生態図鑑.内田老鶴圃,666p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
- Witkowski, A., & Lange - Bertalot, H. & Metzeltin, D.,2000, Iconographia Diatomologica 7. Diatom flora of Marine coast I. A.R.G.Gantner Verlag K.G., 881p.
- 柳沢幸夫,2000,II - 1 - 3 - 2 - (5)計数・同定.化石の研究法 - 採集から最新の解析法まで -,化石研究会,共立出版株式会社,49 - 50.

第V章 考察

1. 弥生時代

徳王子大崎遺跡では弥生時代前期の土坑2基がⅡ区で確認されている。竪穴建物跡などその他の遺構は確認されなかったが、遺跡の立地する丘陵には当該期の集落が存在していた可能性が考えられる。香宗川流域では本遺跡の北東方向約1.5km、香宗川の支流である山南川の左岸に所在する十万遺跡で縄文時代晩期終末の土坑が検出されており、当該期の粗製深鉢と黒色研磨の鉢が出土している。また、本遺跡の北方約1.6km、香宗川右岸に所在する下分遠崎遺跡では弥生時代前期末から中期前半にかけての掘立柱建物跡4棟や多くの土坑、溝跡が確認されている。この遺跡からは当該期の遺物が大量に出土しており、集落が存在していたと考えられている。これまで本地域において十万遺跡と下分遠崎遺跡を繋ぐ遺跡は確認されていなかったが、今回確認された弥生時代前期の土坑はこれら十万遺跡と下分遠崎遺跡の間に存在していた空白時期を埋める資料となり、本地域の歴史を考えるうえで貴重な発見となった。

また、弥生時代後期後半～終末にかけての竪穴建物跡がⅡ区で5軒、Ⅲ区で1軒の計6軒検出されており、当該期の集落が存在していたことが明らかとなった。高知平野においては弥生時代後期中葉での田村遺跡群の終焉とともに、弥生時代後期後半から終末にかけて、周辺地域に中小規模の集落が数多く散在して成立した時期であり、本遺跡で確認された当該期の集落もその一つと考えられる。なお、西方約1.6kmには当該期の大規模な集落である東野土居遺跡が存在しており、本遺跡は東野土居遺跡を中心とする衛星的な集落であった可能性も考えられる。確認された竪穴建物跡の平面形は円形が1軒(Ⅲ区_ST-1)、多角形(Ⅱ区_ST-2)が1軒、方形(Ⅱ区_ST-1・3~5)が4軒であり、このうち平面形が多角形の1軒は八角形を呈するとみられる。このような平面形の竪穴建物跡は円形から方形へと変化する過程と考えられており、本遺跡の竪穴建物跡は様々な平面形が混在する弥生時代後期後半～終末にかけての様相を現しているとみられる。

なお、本遺跡の立地する丘陵の西側に所在する花宴遺跡では当該期の自然流路が検出されており、農業用の灌漑施設であった可能性が指摘されている堰が確認されている。花宴遺跡で確認された当該期の自然流路と本遺跡の集落はほぼ同時期に存在していたとみられ、花宴遺跡で確認された堰の構成部材に多く使用されている廃材は本遺跡から持ち出された可能性が考えられる。弥生時代後期後半においては本遺跡が居住域、花宴遺跡が生産域であったと考えられ、丘陵上に存在する集落の周辺に生産域が広がる当時の風景が想像される。

2. 中世

中世では当該期の掘立柱建物跡や屋敷を区画していたと考えられる溝跡が検出されている。本遺跡は近世以降耕作地として利用されており、本遺跡の立地する丘陵上に存在していた当該期の遺構は近世以降に大部分が削平されたとみられる。掘立柱建物跡はⅢ区でSB-1が検出されているのみであり、具体的な様相は判然としない。また、Ⅰ区で確認された平面形がコの字状を呈するSD-2とSD-2の南側に存在するSD-1が屋敷を区画する溝跡と考えられる。SD-1には溝跡の幅が急に減じ土橋状を呈する箇所が存在する。これは屋敷への入口であった可能性も考えられるが、柵列等は復元できず推測の域を出ない。

3. まとめ

出土遺物には土師質土器, 瓦器, 瓦質土器, 青磁などがみられ, 本遺跡において居住域として利用された時期は概ね13～15世紀代と考えられる。

3. まとめ

本遺跡の発掘調査では弥生時代・中世・近世・近代の遺構・遺物が確認されており, 時代ごとに本遺跡の変遷をまとめてみたい。

本遺跡における初現は弥生時代前期である。土坑2基が検出されており, 当該期の集落が存在していた可能性が考えられる。その後, 弥生時代後期後半から終末にかけて集落が形成されており, 計6軒の竪穴建物跡が確認されている。この集落が廃絶したあと古墳時代, 古代と一千年以上の空白期間をへて, 中世には屋敷地として利用されたと考えられる。その後, 近世以降には地形改変が行われ, 耕作地として利用されていたとみられる。

参考文献

香我美町教育委員会 1988『十万遺跡発掘調査報告書』

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1994『下分遠崎遺跡』

徳平涼子 2010「考察」『伏原遺跡 I』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

廣田佳久 2010「総括」『花宴遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

遺物觀察表

凡例

法量は土器を基準にcmで示しているが、土製品・石製品の場合は口径が全長(cm)、器高が全幅(cm)、胴径が全厚(cm)、底径が重量(g)と読み替えている。それ以外の値については、特徴または本文中に記している。かっこ付きの数値は残存値を示している。

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
1	I区 第I層	土師質土器 小皿	-	(1.4)	-	5.8	浅黄色 にぶい黄橙色	やや不良	摩耗のため調整は不明
2	〃 〃	近世磁器 皿	12.9	(2.2)	-	-	灰白色 〃	良好	器面には灰白色の釉を施す。
3	〃 第IX層	瓦質土器 鍋	-	(5.9)	-	-	〃 〃	やや不良	独立した鑊を有し、上部に穿孔
4	〃 〃	〃 播鉢	31.4	(4.5)	-	-	灰黄色 〃	不良	5・6条を単位とする条線を施す。
5	〃 〃	備前焼 播鉢	29.0	(6.0)	-	-	灰色 〃	良好	内外面とも回転ナデを施す。
6	〃 〃	石製品 叩石	6.9	9.0	2.1	176.8	-	-	石材は砂岩で、側面部と両端部に敲打痕
7	〃 〃	〃 石鏃	1.6	1.4	0.3	0.4	-	-	完存し、石材はサヌカイト
8	〃 第X層	土製品 土錘	4.4	1.9	1.8	(11.8)	橙色	不良	片側を欠損し、調整は不明
9	II区 第I層	弥生土器 鉢	15.1	5.3	-	4.6	にぶい黄色 にぶい黄橙色	良好	調整は不明瞭だが、外面にタタキ目が残る。
10	〃 〃	土師質土器 杯	-	(2.3)	-	4.2	淡黄色 橙色	やや不良	調整は不明で、底部切り離しは回転糸切り
11	〃 〃	〃 〃	-	(2.0)	-	6.6	浅黄色 浅黄橙色	良好	外面に回転ナデ調整が認められ、底部切り離しは回転糸切り
12	〃 〃	ガラス製品 目薬瓶	0.7	4.9	2.5	2.3	透明	-	完存する。
13	〃 第V層	弥生土器 壺	-	(4.3)	-	9.6	にぶい黄橙色 〃	良好	外面にヘラミガキの痕跡が残る。
14	〃 〃	〃 甕	-	(3.9)	-	4.3	暗灰黄色 〃	〃	内面にナデ、外面にハケを施し、外面の一部に煤が付着する。
15	〃 〃	土師質土器 杯	-	(1.5)	-	4.4	橙色 〃	〃	内面に回転ナデ調整の痕跡が残る。
16	〃 〃	〃 〃	-	(1.7)	-	6.8	〃 〃	やや不良	調整不明
17	〃 第VI層	弥生土器 壺	-	(3.8)	-	4.9	褐色 橙色	良好	内面にハケのちナデ、外面にタタキを施す。
18	〃 〃	〃 〃	-	(4.1)	-	10.9	にぶい黄橙色 〃	やや不良	調整は不明瞭であるが、外面にハケ調整が残る。
19	〃 〃	〃 甕	22.0	(4.7)	-	-	橙色 〃	良好	内面にハケ調整、外面にタタキのちナデ調整がみられる。
20	〃 〃	〃 〃	-	(9.3)	-	5.6	灰褐色 橙色	〃	内面にはハケ及びナデ、外面にはタタキのちハケを施す。
21	〃 〃	土師質土器 鍋	23.3	(3.8)	-	-	橙色 にぶい橙色	〃	内面にはヨコナデ、外面にはタタキを施し、鑊の下部には煤が付着
22	III区 第I層	弥生土器 壺	-	(3.2)	-	4.7	褐灰色 灰褐色	〃	内面には指オサエとナデ、外面にはタタキのちハケを施す。
23	〃 〃	〃 支脚	(4.3)	-	-	-	にぶい橙色	〃	全体的に摩耗と剥離が著しい。
24	〃 〃	土師器 羽釜	19.6	(3.7)	-	-	にぶい橙色 灰褐色	〃	器面には内外面ともヨコナデを施し、鑊下部には煤が付着
25	〃 〃	備前焼 播鉢	34.0	(6.9)	-	-	灰褐色 にぶい赤褐色	〃	器面には回転ナデ調整が認められ、内面には9～11条を単位とした条線を施す。

遺物観察表2

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径	内面 / 外面		
26	Ⅲ区 第Ⅲ層	土師器 甕	-	(6.6)	-	-	にぶい褐色 〃	良好	口縁部内外面と胴部内面にヨコナデ、胴部外面にハケを施す。
27	〃 〃	須恵器 壺	7.4	(3.5)	-	-	灰オリーブ色 灰色	〃	器面には回転ナデを施す。
28	〃 〃	土師質土器 椀	-	(1.9)	-	7.0	淡黄色 〃	〃	器面は摩耗が著しく調整は不明
29	〃 〃	〃 羽釜	25.4	(2.9)	-	-	橙色 〃	〃	器面には回転ナデを施す。
30	〃 〃	土製品 土錘	4.4	1.7	1.6	10.0	にぶい橙色	〃	表面には指頭圧痕が残り、孔径0.5 cm
31	〃 〃	石製品 台石	(11.8)	(10.5)	5.2	(10167)	-	-	石材は砂岩で、片側に使用痕が認められる。
32	〃 第Ⅳ層	弥生土器 壺	-	(3.5)	-	5.8	浅黄橙色 橙色	やや不良	内面には指ナデとヘラナデ、外面にはタタキのちナデを施す。
33	〃 〃	〃 甕	13.2	(6.0)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい褐色	良好	口辺部内面にハケ、胴部内面にナデを施し、外面にはタタキ目が認められる。
34	〃 〃	〃 〃	16.6	(4.3)	-	-	にぶい橙色 橙色	〃	口辺部内面にヨコナデ、胴部内面にナデ、外面にタタキ、ヨコナデを施す。
35	〃 〃	〃 〃	17.8	(6.8)	-	-	橙色 〃	〃	外面にタタキを施し、口辺部外面にはタタキのあとヨコナデ調整が認められる。
36	〃 〃	〃 〃	15.9	(8.6)	15.9	-	灰白色 浅黄橙色	やや不良	口辺部外面にヨコナデ、胴部外面にハケのちナデを施し、胴部内面にナデ調整の痕跡が残る。
37	〃 〃	〃 〃	15.6	(6.4)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良好	口辺部内面にハケ、胴部内面にナデを施し、外面にはタタキ目がみられ、口縁端部は断面方形を呈する。
38	〃 〃	〃 〃	-	(2.0)	-	5.1	にぶい橙色 〃	〃	内面にハケ、外面にタタキを施す。
39	〃 〃	〃 〃	-	(2.9)	-	5.6	にぶい橙色 にぶい黄橙色	〃	内面にナデ、外面にタタキを施す。
40	〃 〃	〃 〃	-	(2.6)	-	2.6	灰黄色 にぶい黄橙色	〃	内面にナデを施す。
41	〃 〃	〃 〃	-	(10.8)	-	-	にぶい黄橙色 浅黄橙色	〃	内面にハケ、胴部中央部外面にタタキのち指ナデ、胴下半部から底部外面にかけてヘラナデと指ナデを施す。
42	〃 〃	〃 鉢	14.8	(5.0)	-	-	灰褐色 にぶい赤褐色	〃	内面にナデ、外面にタタキを施し、口縁端部には強いヨコナデがみられる。
43	〃 〃	〃 器台	-	(4.0)	-	-	灰黄褐色 〃	〃	摩耗のため調整は不明瞭であるが、一部にナデ調整の痕跡が残る。
44	Ⅰ区 SD - 1	土師質土器 鍋	18.6	(5.3)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	内面と口辺部外面には回転ナデを施し、胴部外面にはタタキ目が認められ、外面に煤が付着
45	〃 〃	〃 〃	19.9	(4.6)	-	-	橙色 〃	不良	胴部外面にはタタキ目が残り、鏝下部から胴部外面にかけて煤が付着
46	〃 〃	〃 〃	20.2	(4.4)	-	-	にぶい褐色 〃	良好	内面と口辺部外面には回転ナデを施し、胴部外面にはタタキ目が認められる。外面には煤が付着
47	〃 〃	〃 〃	20.2	(5.0)	-	-	橙色 〃	〃	鏝下部にヨコナデ、胴部外面にタタキ目が認められ、煤が付着
48	〃 〃	〃 〃	-	(4.3)	-	-	浅黄橙色 〃	やや不良	胴部外面にタタキ目が認められる。
49	〃 〃	〃 〃	-	(5.0)	-	-	橙色 〃	〃	胴部外面にはタタキ目が残り、鏝下部から胴部外面にかけて煤が付着
50	〃 〃	〃 〃	20.1	(5.0)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良好	口縁部外面にヨコナデ、口辺部から胴部の外面にはナデを施し、煤が付着

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
51	I区 SD-1	瓦質土器 鍋	22.3	(5.6)	23.1	-	にぶい橙色 灰黄褐色	不良	口縁部外面にはヨコナデ、胴部には指オサエのちナデを施し、外面には煤が付着
52	〃 〃	〃 〃	24.4	9.6	25.6	-	黄灰色 〃	やや不良	胴部から底部内面にヨコナデとナデ、底部外面には指オサエのあとナデを施し、煤が付着
53	〃 〃	〃 〃	25.9	9.2	27.8	15.5	黄灰色 灰色	良好	口縁部内外面にヨコナデ、胴部内外面に指オサエのちナデ、底部内外面にナデを施す。
54	〃 〃	〃 〃	12.4	(5.2)	-	-	灰色 オリーブ黒色	〃	独立した鐳が2つ付くと考えられるものである。
55	〃 〃	備前焼 甕	-	(5.9)	-	-	暗灰黄色 〃	〃	内外面とも回転ナデを施す。
56	〃 〃	石製品 石鍋	20.6	6.9	-	14.1	-	-	器面には加工痕が認められ、石材は滑石と考えられる。
57	〃 〃	〃 叩石	9.0	5.4	2.4	169.4	-	-	両端と片側側面に敲打痕が残る。
58	〃 〃	〃 〃	9.5	7.5	2.8	289.8	-	-	側面全体に敲打痕が残る。
59	〃 〃	〃 〃	12.3	9.1	4.7	739.8	-	-	側面全体と両面に敲打痕が残る。
60	〃 〃	〃 砥石	10.0	9.7	2.9	392.2	-	-	石材は砂岩で、片側の平坦面と側面に使用痕が残る。
61	〃 〃	〃 石鏝	1.8	1.4	0.3	0.6	-	-	完存し、石材はサヌカイトとみられる。
62	〃 SD-2	土師質土器 鍋	22.6	(4.0)	-	-	橙色 〃	やや不良	鐳下部から胴部外面にかけて煤が付着する。
63	〃 〃	備前焼 播鉢	26.2	(7.2)	-	-	灰色 〃	良好	器面には回転ナデを施し、内面には9条の条痕が認められる。
64	〃 〃	石製品 叩石	12.4	7.4	2.3	354.6	-	-	側面全体に敲打痕が残る。
65	〃 〃	〃 〃	17.7	13.2	4.0	(10845)	-	-	片側の側面に敲打痕が認められる。
66	〃 P-1	土師質土器 鍋	22.1	(5.3)	-	-	橙色 にぶい黄橙色	やや不良	胴部外面にタタキ目が残る、鐳下部から胴部外面にかけて煤が付着
67	〃 P-2	近世磁器 皿	9.6	2.3	-	4.6	灰白色 〃	良好	器面には灰白色の釉を施し、見込みにはハマの痕跡が残る、高台皿付は4箇所波状に削る。
68	〃 P-3	土師質土器 皿	13.8	(2.0)	-	-	橙色 にぶい橙色	やや不良	手づくね成形とみられ、器面には指頭圧痕が残る。
69	II区 ST-1	弥生土器 甕	16.8	22.2	18.9	3.3	橙色 浅黄橙色	良好	内面にハケとナデを施し、外面にはタタキ目とハケが認められ、胴下半部には破裂痕
70	〃 〃	〃 〃	14.3	22.3	17.5	2.3	にぶい黄橙色 橙色	〃	内面にハケ調整とナデ調整、外面にタタキがみられ、胴中央部から底部の外面にはタタキのあとハケを施す。
71	〃 〃	〃 〃	14.8	(10.5)	22.5	-	にぶい黄橙色 〃	やや不良	外面にはタタキ目と指頭圧痕が認められる。
72	〃 〃	〃 〃	15.2	(5.5)	-	-	〃 〃	良好	口縁部内外面にヨコナデ、胴上半部内面にハケ、胴上半部外面にタタキを施す。
73	〃 〃	〃 〃	15.6	(6.0)	-	-	にぶい黄橙色 橙色	〃	口縁端部にヨコナデ調整、口辺部外面にハケ調整、胴上半部にタタキ目が認められる。
74	〃 〃	〃 〃	16.6	(9.7)	21.5	-	にぶい黄橙色 橙色	やや不良	外面にはタタキ目が認められる。
75	〃 〃	〃 〃	-	(18.8)	24.0	4.8	浅黄色 橙色	良好	内面にナデ、外面にタタキを施し、胴下半部外面にはタタキのあとヘラナデ調整がみられる。

遺物観察表4

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面 / 外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
76	Ⅱ区 ST - 1	弥生土器 甕	-	(19.0)	23.5	5.5	灰黄色 浅黄橙色	良好	内面にハケ、外面にはタタキ、ハケ、ヘラナデを施し、 胴中央部には煤が付着
77	〃 〃	〃 鉢	15.5	(3.4)	-	-	にぶい黄橙色 橙色	〃	外面にはナデの痕跡が認められる。
78	〃 〃	〃 器台	-	(5.8)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	摩耗のため調整は不明
79	〃 〃	〃 ミニチュア	-	(5.8)	-	4.7	灰黄褐色 にぶい黄橙色	〃	内面にはナデ、外面にはタタキのあと丁寧なナデを施す。
80	〃 〃	石製品 砥石	10.8	10.4	2.0	335.6	-	-	石材は砂岩で、両面と側面に使用痕が認められる。
81	〃 ST - 2	弥生土器 壺	9.4	22.8	17.1	-	橙色 〃	良好	内面にはナデ、ヨコナデを施し、外面にはハケ調整、 タタキ目が認められ、胴部には煤が部分的に付着
82	〃 〃	〃 〃	13.6	(7.7)	-	-	橙色 にぶい橙色	〃	胴上半部内外面にヘラミガキ調整、口辺部外面にヨコ ナデ調整がみられる。
83	〃 〃	〃 〃	17.6	(6.8)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	内面にハケ、口縁部内外面にヨコナデ、口辺部外面に ハケを施す。
84	〃 〃	〃 〃	13.0	(3.0)	-	-	橙色 にぶい褐色	やや不良	外面にハケのあとヨコナデを施す。
85	〃 〃	〃 〃	16.8	(9.9)	-	-	浅黄橙色 にぶい黄橙色	良好	内面にハケ、ナデを施し、外面にヨコナデ調整、ハケ 調整、タタキ目が認められる。
86	〃 〃	〃 〃	14.0	(5.7)	-	-	浅黄橙色 〃	やや不良	口辺部内面にハケ調整、口縁部内外面にヨコナデ調整 が認められる。
87	〃 〃	〃 〃	14.4	(4.8)	-	-	灰白色 褐灰色	良好	内外面ともハケを施し、口縁部内外面にはヨコナデ調 整がみられる。
88	〃 〃	〃 〃	18.2	(8.6)	-	-	にぶい黄橙色 橙色	〃	二重口縁を呈し、内面と口辺部外面にはハケ調整、胴 上半部にはタタキ目がみられる。
89	〃 〃	〃 〃	-	(26.0)	21.8	4.0	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	内面にはナデ調整、外面にはタタキ目とハケ調整が認 められる。
90	〃 〃	〃 〃	-	(4.3)	-	4.7	黄灰色 にぶい橙色	〃	内面にハケ、外面にタタキとハケを施す。
91	〃 〃	〃 〃	-	(3.7)	-	7.6	灰黄褐色 〃	〃	摩耗のため調整は不明
92	〃 〃	〃 〃	-	(8.9)	-	7.2	灰黄色 浅黄橙色	〃	外面にはタタキ目とハケ調整が認められる。
93	〃 〃	〃 〃	11.2	7.7	-	-	黄橙色 〃	やや不良	外面にはタタキ目が認められる。
94	〃 〃	〃 〃	9.6	(13.5)	13.0	-	橙色 〃	良好	胴部内面にはナデ調整、胴部外面にはヘラミガキ調整 が認められる。
95	〃 〃	〃 甕	12.1	12.6	12.1	1.8	にぶい橙色 にぶい黄橙色	〃	内面にはハケとナデ、外面にはタタキを施す。
96	〃 〃	〃 〃	14.3	(16.0)	16.7	-	浅黄橙色 明赤褐色	〃	内面にナデと指オサエ、外面にタタキ、指オサエが認め られる。胴下半部には炭化物、外面全体には煤が付着
97	〃 〃	〃 〃	16.8	(20.9)	19.2	-	にぶい黄橙色 〃	〃	内面にナデとヨコナデ、外面にハケ、タタキを施す。
98	〃 〃	〃 〃	14.5	(20.0)	17.4	-	にぶい黄橙色 橙色	〃	内面にはハケ、ナデを施し、外面にはタタキ目がみら れる。口辺部から胴上半部の外面には煤が付着
99	〃 〃	〃 〃	11.5	(9.3)	16.4	-	にぶい黄橙色 灰黄褐色	〃	内面にハケ、ナデを施し、外面にはヨコナデ調整、タ タキ目がみられ、胴部外面には煤が付着
100	〃 〃	〃 〃	12.6	(13.7)	15.6	-	にぶい赤褐色 〃	やや不良	外面にはタタキ目が残り、外面全体に煤が付着

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面 / 外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
101	Ⅱ区 ST - 2	弥生土器 甕	15.2	(8.5)	-	-	橙色 〃	良好	口辺部内外面にヨコナデ, 胴部内面にナデを施し, 胴部外面にはタタキ目, 外面には部分的に煤が付着
102	〃 〃	〃 〃	16.4	(10.0)	18.0	-	にぶい黄橙色 〃	〃	内面にナデを施し, 外面にはタタキとハケ調整がみられ, 口辺部外面には煤が付着
103	〃 〃	〃 〃	16.6	(6.7)	-	-	〃 〃	〃	口辺部内外面にハケ調整, 胴部内面にナデ調整, 胴部外面にはタタキ目が認められる。
104	〃 〃	〃 〃	17.0	(6.9)	-	-	橙色 にぶい黄橙色	〃	口辺部内外面にヨコナデ調整, 胴部内面にナデ調整, 胴部外面にタタキのあとのナデ調整が認められる。
105	〃 〃	〃 〃	13.6	(10.2)	13.6	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	胴部内面にナデ調整, 口辺部外面にハケ調整, 胴部外面にタタキとハケ調整が残る。
106	〃 〃	〃 〃	13.0	(8.9)	15.7	-	にぶい黄橙色 〃	〃	内面にヨコナデ, ハケ, ナデを施し, 外面にはタタキ目, ハケ調整が認められ, 口辺部外面には煤が付着
107	〃 〃	〃 〃	14.0	(16.3)	27.2	-	灰色 橙色	〃	外面にはタタキ目が認められる。
108	〃 〃	〃 〃	14.2	(4.7)	-	-	にぶい黄橙色 橙色	〃	口辺部内面にハケ, 口辺部外面にタタキを施し, 口縁端部内外面にはヨコナデ調整が認められる。
109	〃 〃	〃 〃	14.4	(7.2)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄褐色	〃	口辺部内面にハケ, 胴部内面にナデを施し, 外面にはタタキ目がみられる。
110	〃 〃	〃 〃	14.4	(4.1)	-	-	浅黄橙色 橙色	〃	胴部外面にはタタキ目が残る。
111	〃 〃	〃 〃	14.9	(7.1)	-	-	にぶい黄橙色 灰黄褐色	やや不良	口辺部内外面にハケ調整, 胴部内面にナデ調整, 外面にタタキ目が認められる。口辺部外面には煤が付着
112	〃 〃	〃 〃	15.1	(5.4)	-	-	にぶい橙色 〃	良好	口辺部内面にハケ, 胴部内面にナデ, 外面にタタキを施す。
113	〃 〃	〃 〃	16.2	(7.1)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口辺部内外面にハケ, 胴部内面にナデ, 外面にタタキを施す。
114	〃 〃	〃 〃	16.7	(5.0)	-	-	にぶい黄橙色 浅黄色	〃	口辺部内外面にハケ調整, 外面にタタキ目が認められ, 口辺部外面には煤が付着
115	〃 〃	〃 〃	17.0	(7.5)	-	-	橙色 にぶい黄橙色	〃	口辺部外面にハケ, 胴部外面にタタキを施す。
116	〃 〃	〃 〃	17.2	(7.3)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	口辺部内面にハケ, 胴部内面にハケとナデを施し, 外面にはタタキ目がみられる。
117	〃 〃	〃 〃	17.5	(16.7)	24.8	-	にぶい黄橙色 〃	やや不良	胴部内面にはナデ調整, 外面にはタタキ目が認められる。
118	〃 〃	〃 〃	-	(19.0)	25.6	-	〃 〃	良好	内面にハケを施し, 下半部にはハケのあとのナデ調整が認められ, 外面にはタタキのあとハケを施す。
119	〃 〃	〃 〃	-	(28.5)	23.8	-	にぶい橙色 〃	〃	内面にナデ, 外面にタタキを施し, 外面下半部にはヘラ描き沈線がみられる。
120	〃 〃	〃 〃	-	(27.6)	24.8	-	にぶい黄色 にぶい黄橙色	〃	内面にナデ, 外面にタタキ, ハケ, ナデを施す。
121	〃 〃	〃 〃	-	(15.2)	11.1	2.0	灰黄色 〃	〃	内外面とも粗いナデを施し, 胴中央部に破裂痕
122	〃 〃	〃 〃	-	(13.2)	14.9	2.3	橙色 にぶい橙色	やや不良	内面にナデ, 外面にタタキを施し, 胴中央部には煤が付着
123	〃 〃	〃 〃	-	(16.4)	21.1	4.7	にぶい褐色 橙色	〃	外面にはタタキのあとハケを施す。
124	〃 〃	〃 〃	-	(18.6)	22.5	3.6	にぶい橙色 〃	良好	内面にナデ, 外面にタタキを施し, 外面にはタタキのあとハケ調整とナデ調整がみられる。
125	〃 〃	〃 〃	-	(10.5)	-	3.3	〃 〃	〃	内面に強いナデ, 外面にタタキのあと粗いナデを施す。

遺物観察表6

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径	内面 / 外面		
126	Ⅱ区 ST - 2	弥生土器 甕	-	(10.1)	-	3.6	にぶい黄橙色 にぶい褐色	良好	内面にナデ調整、外面にタタキ目とハケ調整が認められる。
127	〃 〃	〃 〃	-	(7.4)	-	6.4	にぶい橙色 〃	〃	胴部内面にハケのあとナデ、底部内面にナデを施し、外面にはタタキのあとナデ調整がみられる。
128	〃 〃	〃 〃	-	(15.3)	25.7	4.9	にぶい黄色 にぶい橙色	〃	内面にナデ、外面にタタキを施す。
129	〃 〃	〃 〃	-	(3.6)	-	2.5	褐灰色 にぶい褐色	〃	内面にナデ、外面にタタキのあとナデを施す。
130	〃 〃	〃 〃	-	(3.3)	-	3.0	にぶい橙色 灰黄褐色	やや不良	外面にはタタキ目が認められる。
131	〃 〃	〃 〃	-	(4.4)	-	5.4	にぶい黄橙色 橙色	良好	内面にハケ、外面にタタキのあとハケを施し、底部外面には斜行するヘラ描き沈線が認められる。
132	〃 〃	〃 〃	-	(18.0)	16.1	4.0	にぶい橙色 灰黄褐色	〃	内面全体にナデ、外面にハケ、タタキ、ナデを施す。口辺部から胴上半部外面には煤が付着
133	〃 〃	〃 〃	-	(11.2)	-	5.2	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	内面にはナデ調整が認められ、外面にはタタキのあとハケを施す。
134	〃 〃	〃 〃	-	(12.5)	-	-	オリーブ黒色 にぶい橙色	〃	内面にはナデ、外面にはタタキを施す。胴下半部にはタタキのあとのハケ調整がみられる。
135	〃 〃	〃 〃	-	(7.9)	-	3.1	橙色 にぶい橙色	〃	内面に強いナデ、外面にタタキを施す。
136	〃 〃	〃 〃	-	(5.0)	-	3.1	にぶい橙色 橙色	〃	内面にナデ、外面にハケ、底部外面にタタキを施し、内面の一部に炭化物が付着
137	〃 〃	〃 〃	-	(2.9)	-	4.2	にぶい橙色 橙色	〃	内面にナデ、外面にタタキのあとナデを施し、内面には炭化物が付着
138	〃 〃	〃 〃	-	(13.5)	-	3.6	橙色 〃	〃	内面にハケと強いナデ、外面にタタキとヘラナデを施す。
139	〃 〃	〃 〃	-	(6.2)	-	-	にぶい黄橙色 橙色	〃	内面にハケ調整、外面にハケ調整とナデ調整が認められる。
140	〃 〃	〃 〃	-	(4.3)	-	1.4	にぶい黄褐色 橙色	やや不良	内面にナデ、外面にタタキを施す。
141	〃 〃	鉢	-	6.0	-	3.4	橙色 〃	良好	底部内面にはナデ調整が認められる。
142	〃 〃	〃 〃	12.2	5.4	-	3.8	にぶい褐色 にぶい橙色	〃	手づくね成形とみられ、体部内外面にナデを施す。
143	〃 〃	〃 〃	12.1	5.9	-	4.0	橙色 浅黄橙色	やや不良	器面にはタタキ目と指頭圧痕がみられる。
144	〃 〃	〃 〃	16.3	6.8	-	2.4	にぶい黄橙色 にぶい橙色	良好	体部外面下端にタタキ目がみられる。
145	〃 〃	〃 〃	16.8	8.3	-	4.4	橙色 にぶい黄橙色	〃	体部外面にタタキ目が認められ、口縁部は指オサエのため波状を呈する。
146	〃 〃	〃 〃	18.4	10.8	-	6.2	明黄褐色 にぶい黄橙色	〃	体部内面にハケ、体部外面にタタキを施す。
147	〃 〃	〃 〃	13.2	6.8	-	-	にぶい橙色 浅黄橙色	〃	外面にはタタキを施す。
148	〃 〃	〃 〃	16.8	8.5	-	-	橙色 にぶい黄橙色	やや不良	内外面ともハケを施し、外面には破裂痕
149	〃 〃	〃 〃	18.2	8.5	-	7.2	黄灰色 灰黄褐色	良好	内面にナデ、外面にタタキを施し、口縁部内外面には指頭圧痕
150	〃 〃	〃 〃	-	(10.1)	13.0	5.4	にぶい黄橙色 〃	〃	内面にハケ、外面にタタキを施す。

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面 / 外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
151	Ⅱ区 ST - 2	弥生土器 鉢	-	(7.1)	-	-	橙色 〃	良好	脚付鉢で、脚柱部外面にヨコナデ調整が認められる。
152	〃 〃	〃 〃	-	(5.5)	-	10.8	にぶい褐色 にぶい橙色	〃	脚付鉢で、脚柱部外面にナデ、脚裾部内外面にハケのあと指オサエを施す。
153	〃 〃	〃 高杯	22.9	(16.8)	-	-	橙色 〃	〃	脚裾部には円孔を穿ち、内面にナデ調整、ヨコナデ調整が認められ、外面全体には丁寧なヘラミガキを施す。
154	〃 〃	〃 〃	20.2	(10.8)	-	-	にぶい黄橙色 浅黄橙色	やや不良	内面にハケ調整とナデ調整、外面にハケ調整が認められ、口縁端部外面にはヨコナデを施す。
155	〃 〃	〃 〃	19.3	(6.8)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良好	口縁端部内外面にヨコナデ、外面にハケを施す。
156	〃 〃	〃 〃	-	(8.0)	-	-	〃 〃	〃	内外面とも丁寧なヘラミガキを施す。
157	〃 〃	〃 〃	-	(5.0)	-	-	にぶい黄褐色 〃	〃	脚柱部外面にナデ、脚裾部外面にハケを施す。
158	〃 〃	〃 〃	-	(4.7)	-	-	橙色 浅黄橙色	やや不良	摩耗のため調整は不明
159	〃 〃	〃 〃	-	(5.5)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良好	脚柱部内外面にナデ、脚裾部外面にハケを施す。
160	〃 〃	〃 〃	-	(5.7)	-	-	橙色 〃	やや不良	脚柱部内面にしぼり目がみられる。
161	〃 〃	〃 蓋	-	(3.4)	-	-	橙色 にぶい褐色	良好	内外面ともナデとヘラミガキを施し、つまみには成型時の指頭圧痕がみられ、つまみ径 5.5 cm
162	〃 〃	〃 〃	-	(5.0)	-	-	橙色 にぶい橙色	〃	外面にはハケ調整が認められ、つまみには成型時の指頭圧痕がみられ、つまみ径 4.4 cm
163	〃 〃	〃 甌	-	(8.7)	-	-	橙色 〃	不良	内面にナデ調整、外面にタタキ目が認められ、孔径 0.8 cm
164	〃 〃	〃 ミニチュア	8.9	13.0	9.6	-	灰白色 にぶい黄橙色	良好	内面に指オサエ、ハケ調整、ナデ調整がみられ、外面にはタタキ、ハケ、ヘラナデ、指オサエを施す。
165	〃 〃	〃 〃	-	(4.1)	-	2.0	にぶい黄橙色 〃	〃	内面にナデ調整、外面にタタキのあとのナデ調整が認められる。
166	〃 〃	〃 〃	8.6	(6.0)	-	-	〃 〃	〃	内面にハケ、口縁端部にヨコナデ、外面にナデと指オサエを施す。
167	〃 〃	〃 〃	-	(3.4)	-	4.7	浅黄橙色 にぶい橙色	〃	内外面にヘラケズリを施す。
168	〃 〃	〃 支脚	(11.8)	(7.5)	(2.5)	-	橙色	やや不良	中空で外面には指オサエとナデを施す。
169	〃 〃	石製品 台石	41.2	32.6	13.1	26.0 kg	-	-	片面のみ使用痕が認められる。
170	〃 〃	〃 〃	43.9	28.2	13.8	22.8 kg	-	-	片面のみ使用痕が認められる。
171	〃 ST - 3	弥生土器 甕	13.3	(11.6)	16.5	-	にぶい黄橙色 〃	やや不良	外面にタタキ目が認められ、胴上半部の一部に煤が付着
172	〃 〃	〃 〃	15.0	(14.9)	19.8	-	にぶい橙色 〃	良好	内面にハケ、強いナデを施し、外面にはタタキ目がみられ、口縁端部にはヨコナデ調整が認められる。
173	〃 〃	〃 〃	-	(14.1)	28.2	-	橙色 〃	〃	外面にはハケ調整が認められ、胴中央部には煤が付着
174	〃 〃	〃 鉢	19.4	7.0	-	8.8	にぶい橙色 〃	〃	内外面ともナデを施す。
175	〃 ST - 4	〃 壺	-	(9.3)	-	6.9	オリーブ黒色 にぶい黄褐色	〃	内面にハケのあとナデ、外面にハケを施す。

遺物観察表8

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面 / 外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
176	Ⅱ区 ST - 4	弥生土器 壺	-	(19.4)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色	良好	内面にハケ、外面にハケのあとヘラミガキを施す。
177	〃 〃	〃 甕	-	(11.5)	12.6	1.1	黒色 にぶい橙色	〃	内面にハケ、胴中央部にタタキのあとハケ、胴下半部にハケを施す。
178	〃 〃	〃 鉢	19.6	(4.6)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	内面にナデ、外面にハケを施し、口縁部内外面にヨコナデ調整がみられる。
179	〃 〃	〃 ミニチュア	8.7	4.9	-	1.9	〃 〃	〃	内面にはハケ調整、外面にはタタキ目が認められる。
180	〃 ST - 5	〃 壺	12.6	(3.7)	-	-	橙色 〃	やや不良	摩耗のため調整は不明
181	〃 〃	〃 〃	-	(4.5)	-	7.6	にぶい橙色 〃	良好	胴下半部外面の下端にヘラミガキ調整が認められる。
182	〃 〃	〃 〃	-	(6.8)	-	9.4	橙色 灰黄褐色	〃	外面にはハケを施す。
183	〃 〃	〃 〃	-	(3.7)	-	13.9	にぶい黄褐色 にぶい黄橙色	〃	外面にはハケ調整がみられる。
184	〃 〃	〃 甕	-	(3.4)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	口縁端部には刻み目がみられ、摩耗のため調整は不明
185	〃 〃	〃 〃	-	(4.5)	-	-	黄灰色 にぶい黄橙色	やや不良	2条のヘラ描き沈線を施し、沈線間には刺突文がみられ、外面にはハケ調整が認められる。
186	〃 〃	〃 〃	-	(11.9)	-	7.5	浅黄橙色 にぶい黄橙色	良好	外面にはハケ調整がみられる。
187	〃 〃	石製品 叩石	8.3	7.6	2.7	243.3	-	-	両面と側面の一部に敲打痕が認められる。
188	〃 SK - 1	弥生土器 壺	-	(11.7)	-	7.6	灰黄褐色 にぶい橙色	良好	内外面ともハケのあとヘラミガキを施す。
189	〃 〃	〃 〃	-	(5.5)	-	8.9	灰黄褐色 にぶい黄橙色	〃	内面にナデ、外面にヘラミガキを施す。
190	〃 〃	〃 甕	21.7	22.6	-	8.1	黄灰色 橙色	〃	口縁端部には刻みがみられ、内面にはナデ調整、外面にはヨコナデ調整とナデ調整が認められる。
191	〃 〃	〃 〃	-	(3.6)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	口縁端部には刻み目がみられ、内外面ともヨコナデを施す。
192	〃 〃	〃 〃	-	(8.2)	-	7.3	にぶい黄褐色 灰黄褐色	〃	内面に指頭圧痕がみられる。
193	〃 〃	〃 〃	-	(3.0)	-	9.0	浅黄橙色 橙色	やや不良	摩耗のため調整は不明
194	〃 〃	石製品 砥石	(4.6)	(4.6)	(1.0)	(22.1)	-	-	両面と側面に使用痕が認められる。
195	〃 SK - 2	弥生土器 壺	12.8	5.6	-	-	橙色 〃	良好	口縁端部にヨコナデ、内面にヘラミガキ、ナデを施し、外面にはハケ調整、ヘラミガキ調整が認められる。
196	〃 〃	〃 〃	-	(6.5)	-	-	灰黄褐色 褐灰色	〃	口縁端部と内面にヘラミガキ、外面にハケのあとヨコナデとヘラミガキを施す。
197	〃 〃	〃 〃	-	(6.2)	10.7	-	にぶい黄褐色 〃	やや不良	内面にナデ調整が認められる。
198	〃 〃	〃 〃	-	(7.4)	-	-	橙色 にぶい橙色	良好	器面に6条を単位とする複線山形文をヘラ描きで施し、外面にはヘラミガキ調整がみられる。
199	〃 〃	〃 〃	-	(3.1)	-	10.0	橙色 〃	〃	内面にハケ調整がみられる。
200	〃 〃	〃 〃	-	(4.3)	-	12.0	にぶい橙色 〃	〃	内面にナデ、外面にハケ調整を施す。

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
201	Ⅱ区 SK - 2	弥生土器 壺	-	15.3	-	11.8	浅黄橙色 〃	良好	胴部下端にハケ調整とヘラミガキ調整が認められる。
202	〃 〃	〃 〃	-	(7.5)	-	20.8	にぶい褐色 にぶい黄褐色	〃	内面にヘラミガキ, 外面にハケを施す。
203	〃 〃	〃 甕	19.2	(4.3)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄橙色	〃	口辺部内外面にヨコナデ, 胴部内面にナデ, 胴部外面にハケを施す。
204	〃 〃	〃 〃	24.0	(12.9)	20.9	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口辺部内外面にヨコナデ, 胴部内面にナデ, 胴部外面にハケを施す。
205	〃 〃	〃 〃	32.9	(10.4)	29.5	-	にぶい橙色 〃	やや不良	口辺部内外面にハケのあとヨコナデ, 胴部内面にハケとナデ, 胴部外面にハケを施す。
206	〃 〃	〃 〃	-	(2.6)	-	-	橙色 〃	良好	外面にハケ調整が認められる。
207	〃 〃	〃 〃	-	(3.2)	-	-	橙色 にぶい黄橙色	〃	外面にハケ調整が認められ, 外面に煤が付着
208	〃 〃	〃 〃	-	(6.0)	-	4.5	にぶい黄褐色 〃	〃	摩耗のため調整は不明
209	〃 〃	〃 〃	-	(5.1)	-	7.0	浅黄色 にぶい黄褐色	〃	摩耗のため調整は不明
210	〃 〃	〃 〃	-	(4.4)	-	7.3	にぶい黄褐色 〃	〃	外面にハケ調整が認められる。
211	〃 〃	〃 〃	-	(4.2)	-	7.3	にぶい橙色 橙色	〃	内外面ともナデを施す。
212	〃 〃	〃 〃	-	(3.3)	-	7.8	浅黄褐色 にぶい黄褐色	〃	摩耗のため調整は不明
213	〃 〃	〃 〃	-	(5.9)	-	8.4	にぶい黄褐色 〃	〃	内面にナデ, 外面にハケを施す。
214	〃 〃	〃 〃	-	(7.1)	-	8.6	浅黄色 〃	〃	外面にハケ調整がみられる。
215	〃 〃	〃 〃	-	(4.0)	-	8.9	浅黄褐色 〃	〃	外面にハケ調整がみられる。
216	〃 P - 1	〃 鉢	-	(1.7)	-	6.5	橙色 〃	〃	外面にタタキ目がみられる。
217	〃 SK - 3	土師質土器 杯	-	14.2	(2.8)	-	にぶい橙色 〃	やや不良	手づくね成形とみられ, 摩耗のため調整は不明
218	〃 SK - 4	〃 羽釜	-	(3.4)	-	-	黄灰色 黒褐色	〃	内面にハケ調整が認められる。
219	〃 SK - 5	弥生土器 壺	-	(2.5)	-	7.0	灰黄褐色 褐灰色	良好	胴部の内外面ともナデを施す。
220	〃 SK - 8	東播系須恵器 捏鉢	-	(3.1)	-	6.4	灰白色 〃	〃	外面に回転ナデ調整がみられる。
221	〃 SD - 1	土師器 羽釜	-	(4.9)	-	-	にぶい黄褐色 灰色	〃	内面にはヨコナデとハケ, 外面にはヨコナデを施し, 鏝上面には煤が付着
222	〃 〃	土師質土器 鍋	22.2	(4.4)	-	-	橙色 にぶい橙色	〃	内面から口辺部にかけてナデを施し, 胴部外面にはタタキ目がみられ, 煤が付着
223	〃 P - 2	〃 杯	14.5	5.0	-	6.7	にぶい橙色 〃	〃	口辺部外面に回転ナデ調整が認められ, 底部切り離しは回転糸切り
224	〃 〃	〃 〃	14.7	4.4	-	6.5	浅黄褐色 〃	〃	口縁部外面と底部内面に回転ナデ調整が認められ, 底部切り離しは回転糸切り
225	〃 〃	〃 〃	15.1	(2.6)	-	-	にぶい黄褐色 〃	〃	外面に回転ナデがみられる。

遺物観察表10

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径	内面 / 外面		
226	Ⅱ区 P-3	土師質土器 杯	11.9	(2.2)	-	-	黒色 にぶい黄橙色	良好	内外面とも回転ナデを施す。
227	〃 〃	〃 〃	-	(1.1)	-	5.6	橙色 〃	やや不良	外面には回転ナデ調整がみられ、底部切り離しは回転糸切り
228	〃 P-4	〃 〃	-	(1.1)	-	6.6	灰白色 橙色	不良	摩耗のため調整は不明
229	〃 P-5	〃 〃	-	(1.0)	-	6.6	明黄褐色 〃	やや不良	摩耗のため調整は不明
230	〃 P-6	〃 小皿	-	(0.9)	-	4.8	灰黄色 浅黄色	良好	底部切り離しは回転糸切り
231	〃 P-7	瓦器 椀	13.6	4.4	-	4.9	にぶい黄橙色 褐灰色	〃	口縁部外面にヨコナデ調整、体部外面に指オサエが認められる。
232	〃 P-8	土師質土器 杯	-	(1.2)	-	5.5	浅黄橙色 〃	やや不良	底部切り離しは回転糸切り
233	〃 〃	〃 〃	-	(1.9)	-	7.3	浅黄色 〃	〃	底部切り離しは回転糸切り
234	〃 〃	〃 小皿	7.9	1.7	-	5.7	にぶい黄橙色 〃	〃	外面に回転ナデ調整がみられ、底部切り離しは回転糸切り
235	〃 P-9	〃 皿	10.7	1.4	-	8.0	〃 〃	〃	手づくね成形と考えられ、器面には指頭圧痕が認められる。
236	〃 〃	〃 鍋	-	(4.3)	-	-	橙色 〃	良好	内外面とも回転ナデを施す。
237	〃 P-10	〃 杯	9.2	2.7	-	4.5	〃 〃	やや不良	手づくね成形と考えられ、器面には指頭圧痕がみられる。
238	〃 〃	〃 〃	12.1	(2.6)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良好	手づくね成形と考えられ、摩耗のため調整は不明
239	〃 〃	〃 〃	13.2	(3.4)	-	-	にぶい黄橙色 褐灰色	〃	手づくね成形と考えられ、指オサエを施す。
240	〃 〃	〃 皿	11.1	2.3	-	6.5	灰色 にぶい黄橙色	〃	手づくね成形と考えられ、口辺部内面にヨコナデ調整、底部内面に指頭圧痕がみられる。
241	〃 〃	〃 〃	12.6	2.0	-	6.8	にぶい黄橙色 にぶい黄褐色	やや不良	手づくね成形と考えられ、外面にはヨコナデ調整、指頭圧痕、ナデ調整が認められる。
242	〃 〃	青磁 碗	16.8	(6.2)	-	-	オリーブ灰色 〃	良好	見込みに1条の圏線と体部外面に蓮弁を片彫り
243	〃 P-11	土師質土器 杯	14.0	(2.3)	-	-	橙色 〃	〃	手づくね成形と考えられ、体部外面には指頭圧痕が認められる。
244	〃 P-12	〃 小皿	9.8	1.8	-	6.1	にぶい黄橙色 浅黄色	やや不良	口縁部内面に回転ナデ調整がみられ、底部切り離しは回転糸切り
245	〃 〃	〃 〃	9.5	1.5	-	7.0	にぶい黄橙色 〃	〃	摩耗のため調整は不明
246	〃 P-13	〃 〃	9.4	1.7	-	6.3	浅黄橙色 〃	良好	口縁部内外面に回転ナデを施し、底部切り離しは回転糸切り
247	〃 P-14	〃 杯	14.8	3.7	-	7.0	〃 〃	〃	器面には回転ナデを施し、底部切り離しは回転糸切り
248	〃 P-15	〃 〃	13.4	(1.3)	-	-	にぶい黄橙色 〃	やや不良	摩耗のため調整は不明
249	〃 P-16	土師器 甕	30.8	(4.7)	-	-	にぶい黄褐色 にぶい褐色	〃	摩耗のため調整は不明
250	〃 P-17	〃 〃	32.1	(8.7)	-	-	明赤褐色 にぶい赤褐色	〃	口縁端部にヨコナデ、口辺部から胴部にかけての外面に指オサエを施し、胴部外面には煤が付着

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
251	Ⅱ区 P-17	土師質土器 杯	-	(1.9)	-	5.8	にぶい黄色 浅黄色	やや不良	底部切り離しは回転糸切り
252	〃 T-1	〃 小皿	5.9	0.9	-	4.6	にぶい橙色 〃	良好	器面には回転ナデを施し、底部切り離しは回転糸切り
253	〃 〃	近世陶器 灯明皿	-	(4.4)	-	4.4	にぶい黄褐色 〃	〃	器面には回転ナデ調整がみられ、底部切り離しは回転糸切りであり、底部外面は露胎
254	〃 〃	近代磁器 碗	10.7	4.5	-	3.5	灰白色 〃	〃	体部外面には草花文が施され、畳付は露胎
255	〃 〃	〃 インク瓶	3.5	4.8	4.6	4.3	〃 〃	〃	体部外面には「P」の染付がみられ、畳付は露胎
256	〃 〃	〃 瓶	4.1	4.9	5.3	4.4	〃 〃	〃	底部外面に「岐 251」の陽刻がみられ、畳付には砂が付着
257	Ⅲ区 ST-1	弥生土器 壺	16.8	(4.9)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	外面にはハケ調整がみられ、煤が付着
258	〃 〃	〃 〃	19.0	(4.7)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄褐色	〃	口縁部内外面と内面にヨコナデ、外面にヨコナデのあとヘラミガキを施し、口縁部外面には煤が付着
259	〃 〃	〃 〃	19.6	(5.3)	-	-	にぶい黄褐色 〃	やや不良	口縁部外面にヨコナデ調整がみられる。
260	〃 〃	〃 甕	10.4	(4.1)	-	-	〃 〃	良好	胴部内面にナデ調整、外面全体にタタキ目が認められる。
261	〃 〃	〃 〃	14.5	(7.5)	-	-	橙色 〃	やや不良	胴部内面にナデ、外面全体にタタキを施す。
262	〃 〃	〃 〃	16.2	(3.5)	-	-	〃 〃	良好	口辺部内外面にハケ、口縁部にヨコナデを施す。
263	〃 〃	〃 〃	19.6	(8.1)	-	-	〃 〃	不良	摩耗のため調整は不明
264	〃 〃	〃 〃	-	(8.9)	18.3	-	浅黄褐色 にぶい橙色	良好	胴部内面にナデ調整、外面全体にタタキ目が認められる。
265	〃 〃	〃 〃	-	(17.1)	13.5	1.9	浅黄色 にぶい橙色	〃	口辺部内外面にヨコナデ、胴部内面にナデとハケを施し、外面全体にはタタキ目がみられる。
266	〃 〃	〃 〃	-	(2.8)	-	4.5	褐灰色 にぶい黄褐色	やや不良	胴部外面にはタタキ目がみられる。
267	〃 〃	〃 〃	-	(3.5)	-	3.5	橙色 にぶい橙色	良好	摩耗のため調整は不明
268	〃 〃	〃 〃	-	(5.9)	-	3.0	にぶい橙色 にぶい黄褐色	〃	底部内面と胴下半部下端には指頭圧痕がみられる。
269	〃 〃	〃 鉢	19.6	(5.0)	-	-	橙色 にぶい橙色	〃	内面にハケ、外面にハケと指オサエを施し、口縁部外面にはヨコナデ調整と指頭圧痕がみられる。
270	〃 〃	〃 〃	-	(6.4)	-	-	橙色 〃	〃	内面にハケとナデ、外面に指オサエを施す。
271	〃 〃	〃 高杯	-	(6.1)	-	-	にぶい黄褐色 〃	やや不良	内面にヨコナデ調整がみられる。
272	〃 〃	〃 〃	-	(4.6)	-	-	橙色 〃	良好	四方に径5mmの円孔を穿ち、摩耗のため調整は不明
273	〃 〃	〃 ミニチュア	10.3	(6.9)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄褐色	〃	口辺部内外面にヘラミガキ、胴部内面にナデ、胴部外面にはハケのあとナデを施す。
274	〃 〃	〃 支脚	(13.7)	(6.4)	(4.4)	-	灰褐色 灰黄褐色	〃	中空で、脚部を欠損し、摩耗のため調整は不明瞭であるが、全体に指頭圧痕がみられる。
275	〃 SK-2	石製品 叩石	16.1	14.4	4.5	1478.0	-	-	側面全体に敲打痕がみられる。

遺物観察表12

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調		焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径	内面 / 外面			
276	Ⅲ区 SB - 1	緑釉陶器 碗	-	(2.0)	-	-	緑色 〃		良好	内外面に回転ナデ調整がみられる。
277	〃 SK - 6	土師器 羽釜	22.8	(6.1)	-	-	灰オリーブ色 灰黄色		〃	胴部内面にハケを施し、その他の部位にはヨコナデ調整がみられる。
278	〃 〃	備前焼 甕	22.6	(8.5)	-	-	灰色 褐灰色		〃	内外面とも回転ナデを施す。
279	〃 〃	青磁 碗	-	(3.7)	-	5.2	オリーブ灰色 〃		〃	内面には回転ナデ、外面には回転ヘラケズリを施す。
280	〃 SD - 1	土師器 羽釜	-	(4.7)	-	-	にぶい黄橙色 灰黄色		〃	器面にはハケ調整、ヨコナデ調整がみられ、鈔上部には径5mmの円孔を穿ち、鈔下部には煤が付着
281	〃 〃	土師質土器 鍋	19.8	(6.0)	-	-	浅黄色 〃		〃	口縁部内外面に回転ナデ、胴部内面にハケ、胴部外面にタタキを施し、鈔下方には煤が付着
282	〃 〃	〃 〃	23.3	(4.6)	-	-	橙色 〃		〃	口縁部内外面と胴部内面に回転ナデ、胴部外面にタタキを施し、鈔下方には煤が付着
283	〃 P - 1	〃 小皿	9.8	1.7	-	6.6	にぶい黄橙色 浅黄橙色		〃	口縁部内外面に回転ナデ調整、底部内面にナデ調整がみられ、底部切り離しは回転ヘラ切り
284	〃 P - 2	石製品 叩石	12.9	10.8	5.0	992.8	-		-	両面と側面に敲打痕が認められる。
285	〃 P - 3	〃 〃	17.7	(11.1)	6.2	(14162)	-		-	両面と側面に敲打痕が認められる。

遺構計測表

遺構計測表1 竪穴建物跡・竪穴状遺構(ST)

遺構番号	平面形態	規模				長軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	床面標高(m)	面積(m ²)		
ST-1	方形	3.18～3.29		3.692～3.787	-	-	Ⅱ区
ST-2	多角形	4.32～4.76		3.639～3.809	-	-	〃
ST-3	方形	2.87～3.24		3.712～3.961	9.30	N-59°-E	〃
ST-4	〃	3.83～5.25		4.164～4.262	20.11	N-62°-W	〃
ST-5	〃	-		3.866～3.967	-	-	〃
ST-1	円形	-		2.914～3.048	-	-	Ⅲ区

遺構計測表2 掘立柱建物跡(SB)

遺構番号	桁行×梁行 (間)	規模		柱間寸法		深さ (cm)	面積 (m ²)	棟方向 (NはGN)	備考
		桁行(m)×梁行(m)	桁(m)	梁(m)					
SB-1	3×2	5.88～6.24×3.78～3.84		1.56～2.34	1.86～3.84	9～31	23.27	N-12°-E	Ⅲ区

遺構計測表3 土坑(SK)

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向(NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SK-1	隅丸方形	2.18	1.72	48～78	N-67°-E	Ⅰ区
SK-2	楕円形	(1.32)	(0.90)	17～27	N-21°-E	〃
SK-1	長方形	2.72	1.66	5～15	N-15°-E	Ⅱ区
SK-2	〃	3.85	1.54	7～20	N-16°-E	〃
SK-3	長楕円形	2.23	1.02	8～22	N-76°-W	〃
SK-4	円形	2.43	2.34	6～20	N-74°-W	〃
SK-5	楕円形	1.47	0.95	11～37	N-73°-W	〃
SK-6	不整形	1.84	0.62～1.11	5～19	N-84°-E	〃
SK-7	楕円形	1.03	0.76	9	N-21°-W	〃
SK-8	円形	1.04	0.91	2～3	N-44°-W	〃
SK-9	不整楕円形	1.51	0.79	2～7	N-17°-W	〃
SK-10	不整形	0.84	0.72	12～19	N-81°-W	〃
SK-1	円形	1.25	1.18	47～51	N-33°-W	Ⅲ区
SK-2	〃	1.39	1.28	48～52	N-35°-W	〃
SK-3	〃	1.25	1.18	41～52	N-3°-E	〃
SK-4	楕円形	1.09	0.95	13～18	N-47°-W	〃
SK-5	〃	1.06	0.81	12～28	N-68°-W	〃
SK-6	〃	1.22	0.91	5～21	N-74°-E	〃
SK-7	〃	1.12	0.72	48～53	N-13°-W	〃
SK-8	長方形	1.55	0.71	3～7	N-87°-E	〃
SK-9	楕円形	1.36	1.15	26～33	N-13°-E	〃

遺構計測表4・5

遺構計測表4 溝跡(SD)

遺構番号	形状	規模			備考
		検出長(m)	幅(m)	深さ(cm)	
SD-1	東西溝	26.80	0.32~1.81	16~42	I区
SD-2	コの字状	43.50	0.46~1.92	9~19	〃
SD-3	東西溝	11.80	0.65~1.31	7~18	〃
SD-4	南北溝	3.20	0.68~0.94	4~9	〃
SD-1	〃	16.40	0.74~1.65	2~15	II区
SD-2	〃	6.80	0.97~1.38	7~12	〃
SD-1	東西溝	36.60	0.82~1.79	5~21	III区
SD-2	〃	3.10	0.26~0.37	4~5	〃
SD-3	南北溝	1.40	0.41~0.49	4~5	〃
SD-4	東西溝	3.80	0.37~0.51	4~6	〃
SD-1	南北溝	5.00	0.52~0.69	2~6	IV区
SD-2	〃	31.20	0.75~1.79	8~23	〃

遺構計測表5 井戸跡(SE)

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向(NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SE-1	楕円形	2.62	2.34	(1.25)	N-61°-E	III区

圖 版

I ☒



遺跡遠景(南より)



調査前全景(南より)

図版2



東壁セクション(西より)



遺構検出状態(南より)



遺構完掘状態(真上上空より)



遺構完掘状態(南より)

図版4



SK-1 セクション (南より)



SD-1 バンクセクション (南西より)



SD-1 瓦質土器 (53) 出土状態



SD-1 備前焼 (55) 出土状態



SD-1 石製品 (56) 出土状態



SD-2 バンクセクション (東より)



SD-3 バンクセクション (南西より)



SD-4 バンクセクション (南より)

II 区



調査前全景(西より)



東壁セクション(北西より)

図版6



遺構検出状態(西より)



ST-2・3検出状態(西より)



遺構完掘状態(真上上空より)



遺構完掘状態(西より)

図版8



ST-1完掘状態(西より)



ST-1弥生土器出土状態



ST-2完掘状態(南より)



ST-2バンクセクション(西より)



ST-2弥生土器出土状態



ST-3完掘状態(西より)



ST-4完掘状態(西より)



ST-5完掘状態(西より)



SK - 1完掘状態(西より)



SK - 1バンクセクション(西より)



SK - 1弥生土器(190)出土状態



SK - 2完掘状態(西より)



SK - 2弥生土器出土状態



SK - 2弥生土器(205)出土状態



SK - 4バンクセクション(西より)



SK - 5完掘状態(南より)

図版10



SK-8セクション(南より)



SK-9セクション(南より)



SD-1バンクセクション(南より)



SD-2バンクセクション(南より)



P-2土師質土器(223)出土状態



P-2土師質土器(224)出土状態



P-9土師質土器(235)出土状態



P-10青磁(242)出土状態

III 区



調査前全景(西より)



遺構完掘状態(真上上空より)

図版12



遺構検出状態(西より)



遺構完掘状態(西より)



SB-1完掘状態(南東より)



SK-1セクション(南より)



SK-2セクション(東より)



SK-4セクション(南より)



SD-1バンクセクション(東より)



SE-1セクション(東より)

IV ☒



調査前全景(南東より)



IV-W区 北壁セクション(南より)

図版14



IV-W区 遺構検出状態(南より)



IV-W区 遺構完掘状態(南より)



IV-W区 SD-2完掘状態(北より)



IV-W区 SD-2バンクセクション(南より)

図版16



IV-E区 北壁セクション(南より)



IV-E区 完掘状態(南より)

V ☒



調査前全景(北西より)



南壁セクション(北西より)

図版18



南壁セクション(北より)

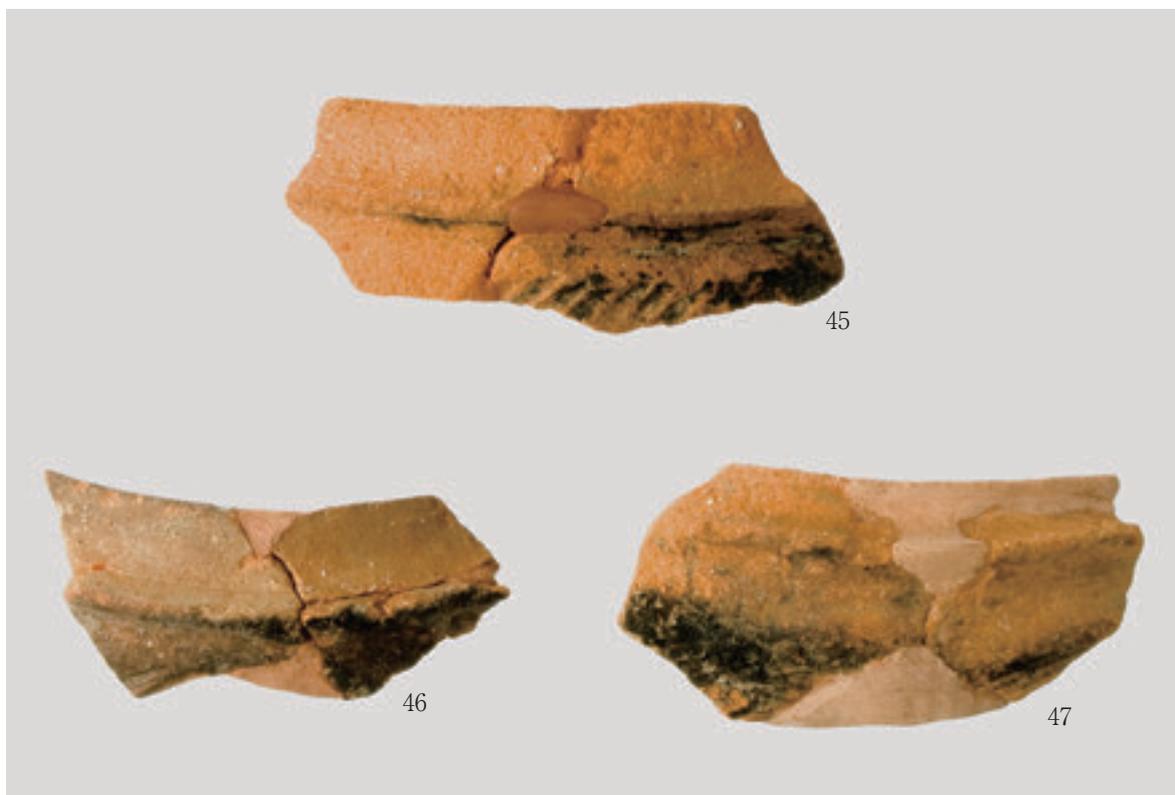


完掘状態(西より)

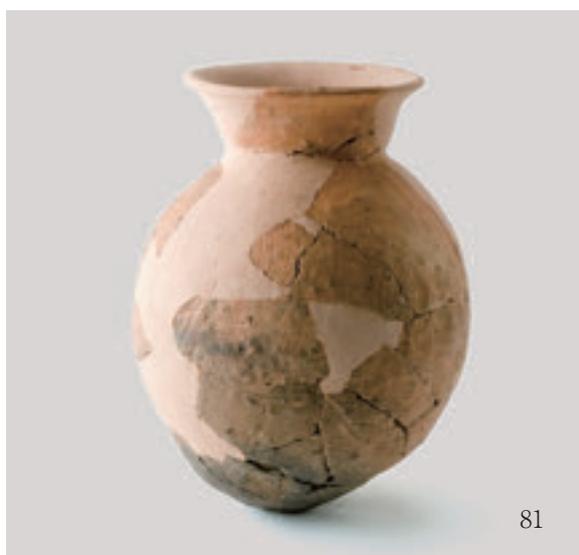
出土遺物



瓦質土器(鍋・播鉢)



土師質土器(鍋)



弥生土器(壺・甕)



弥生土器(壺・甕)

图版22



弥生土器(甕)



弥生土器(甕・鉢)



弥生土器(高杯・甌・ミニチュア)



弥生土器(甕・ミニチュア・支脚)



弥生土器(壺·甕·鉢·支脚), 青磁(碗)



弥生土器(壺・甕・ミニチュア), 土師質土器(鍋), 備前焼(播鉢)



弥生土器(甕)



弥生土器(鉢)

图版30



弥生土器(壺・甕・鉢・高杯・蓋)



弥生土器(甕・高杯), 土師器(甕・羽釜), 緑釉陶器(椀), 土師質土器(鍋), 備前焼(甕)

図版32



弥生土器(鉢), 土師器(羽釜), 土師質土器(鍋・羽釜), 瓦質土器(鍋), 備前焼(甕), 石製品(石鏃)



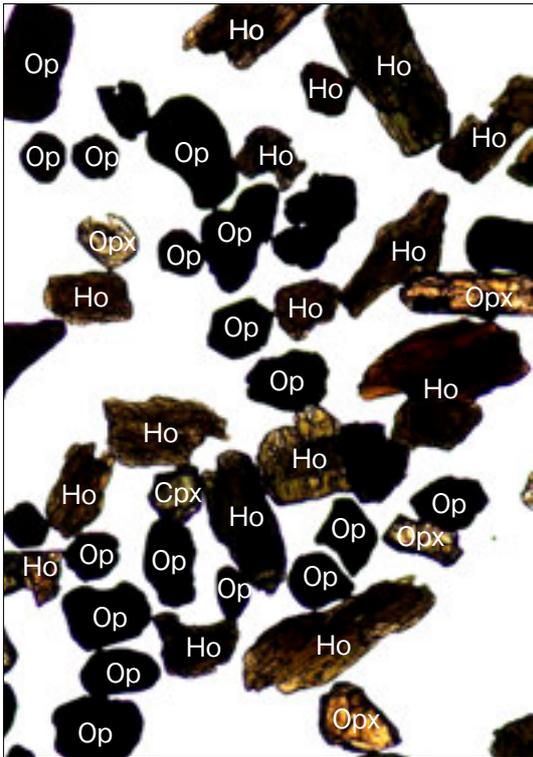
弥生土器(壺・甕・鉢), 土師質土器(鍋・羽釜), 石製品(石鍋)

图版34

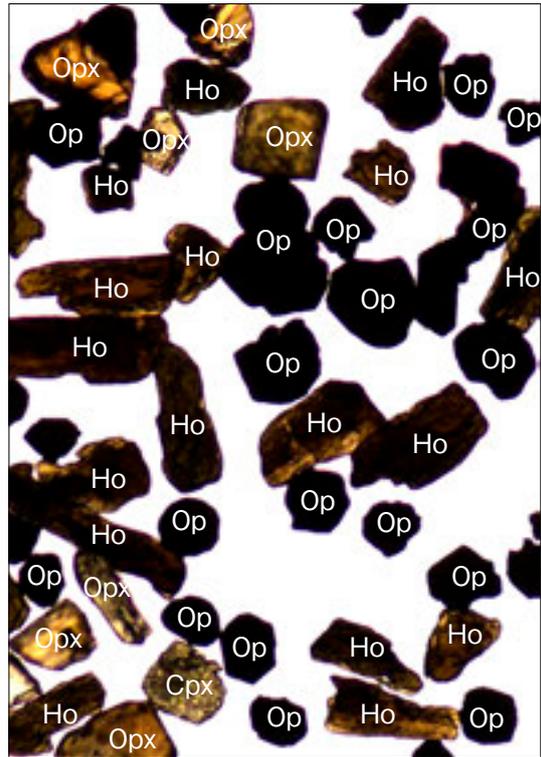


土師器(甕·羽釜), 瓦器(椀), 土師質土器(杯·皿·小皿), 青磁(碗)

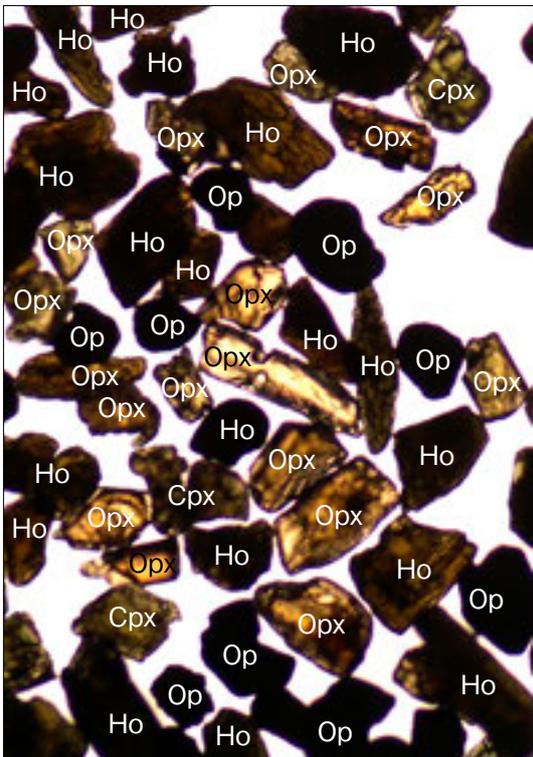
自然科学分析



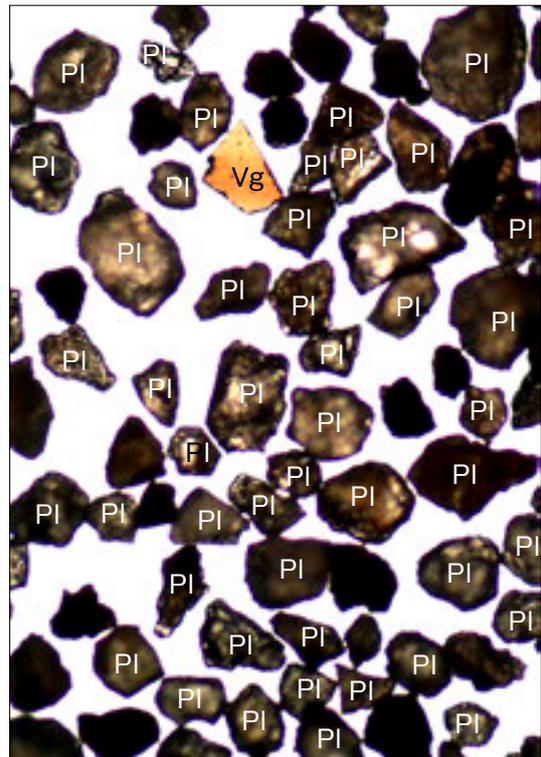
1. 重鉱物 (1地点:1)



2. 重鉱物 (1地点:3)



3. 重鉱物 (1地点:4)

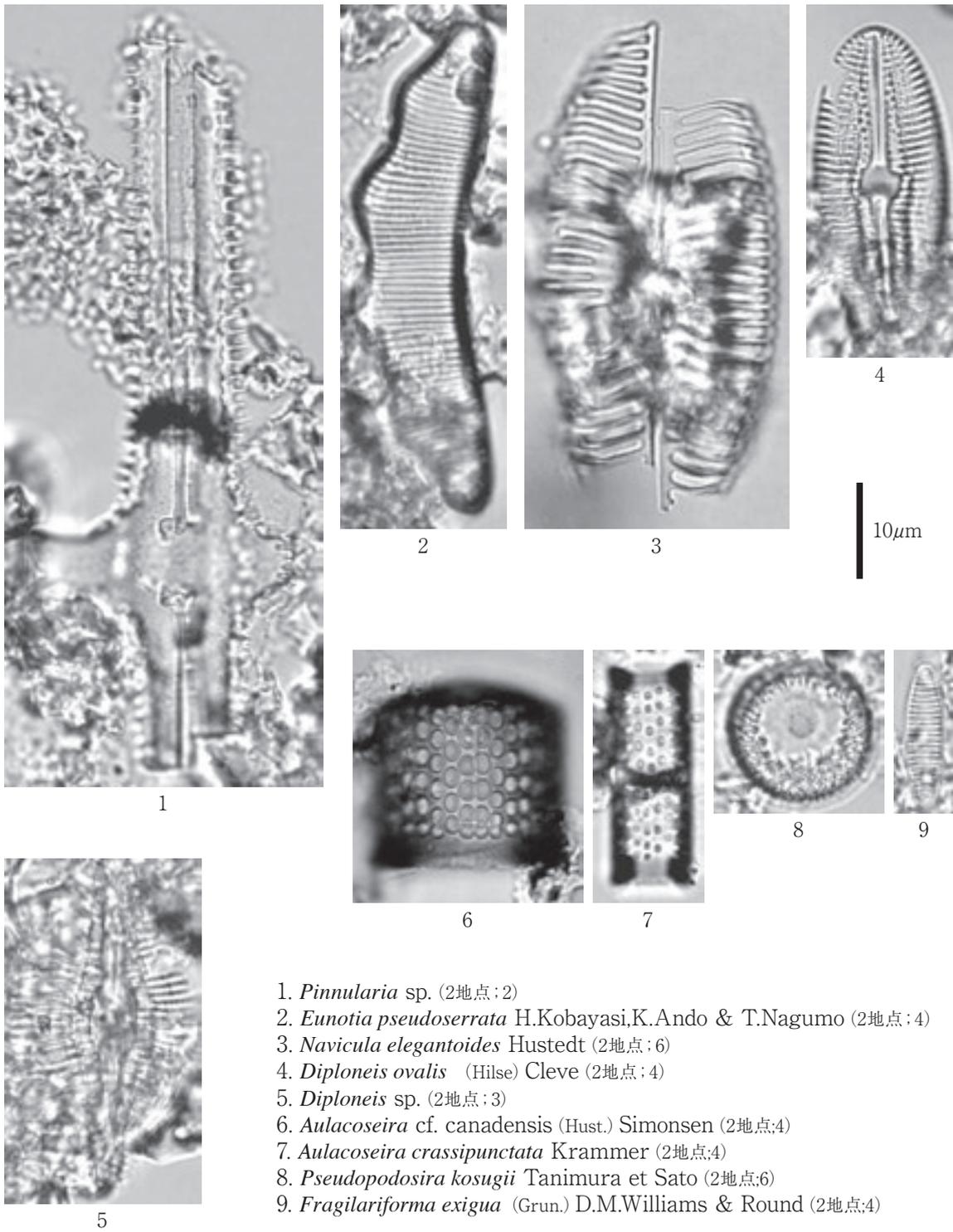


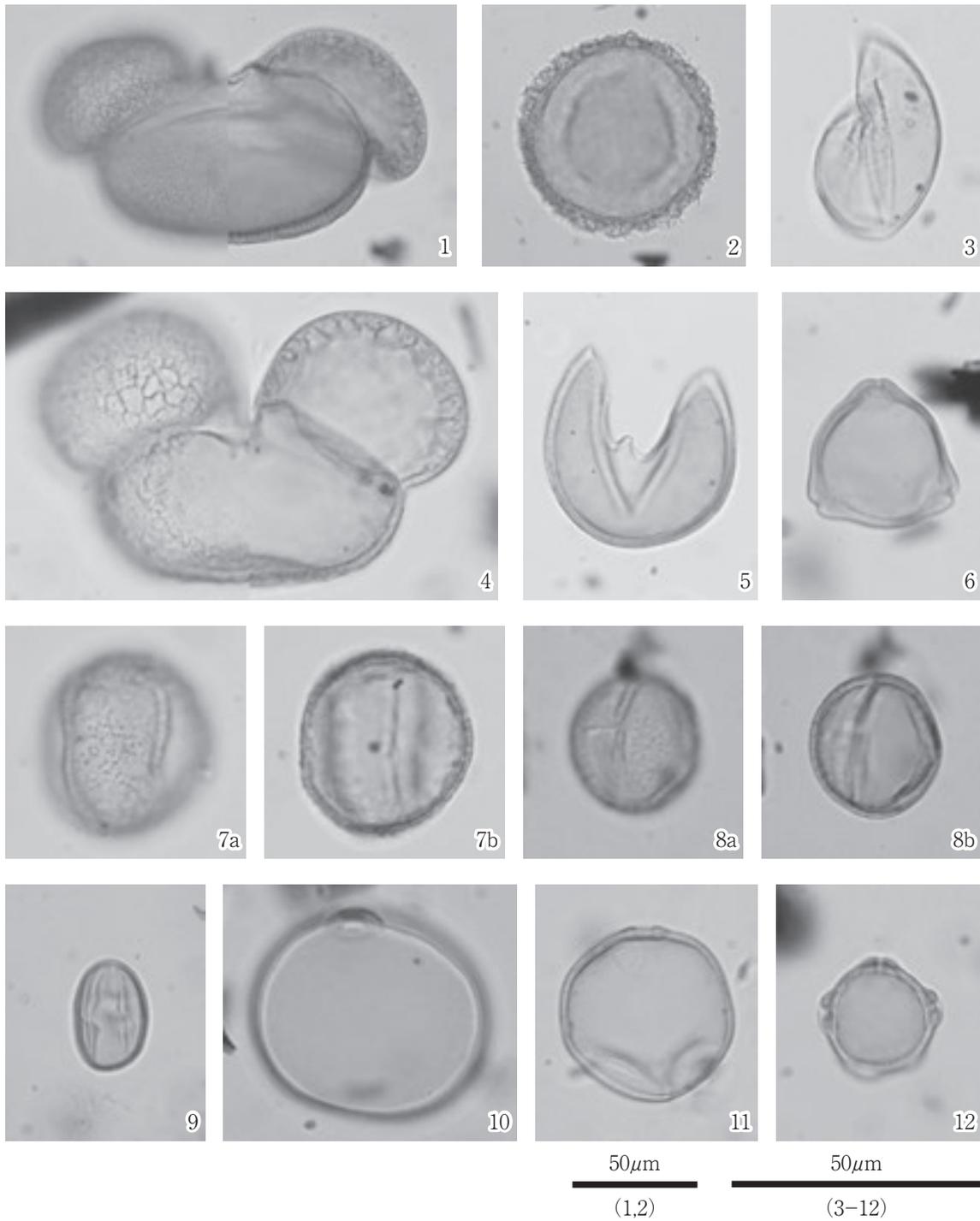
4. 軽鉱物 (1地点:4)

Opx:斜方輝石.Cpx:単斜輝石.Ho:角閃石.Op:不透明鉱物.Vg:火山ガラス.
Pl:斜長石.

0.5mm

重鉱物・軽鉱物

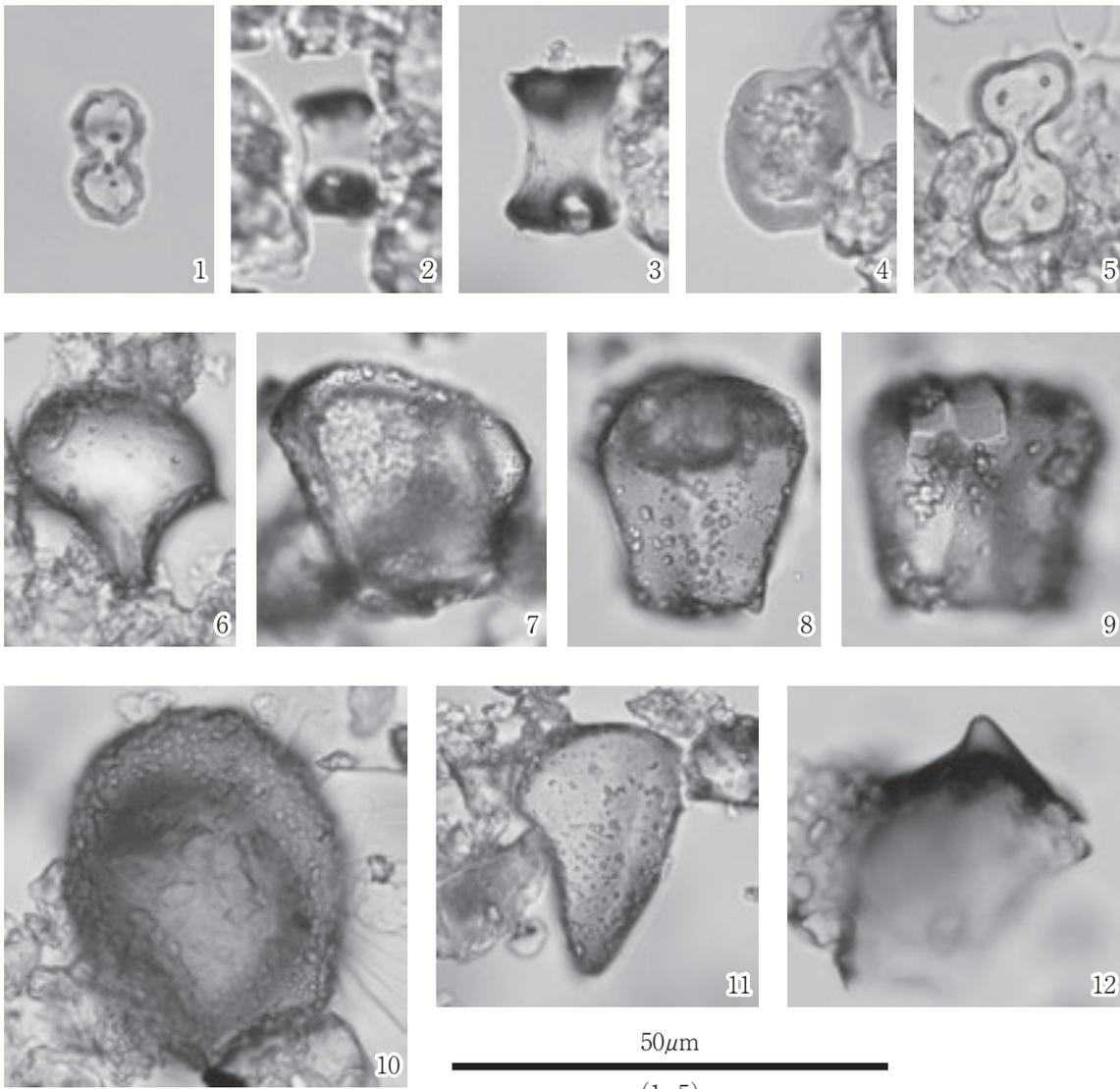




- 1. モミ属 (2地点;1)
- 3. イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科 (2地点;6)
- 5. スギ属 (2地点;1)
- 7. コナラ亜属 (2地点;6)
- 9. シイ属 (2地点;1)
- 11. イネ科 (2地点;1)

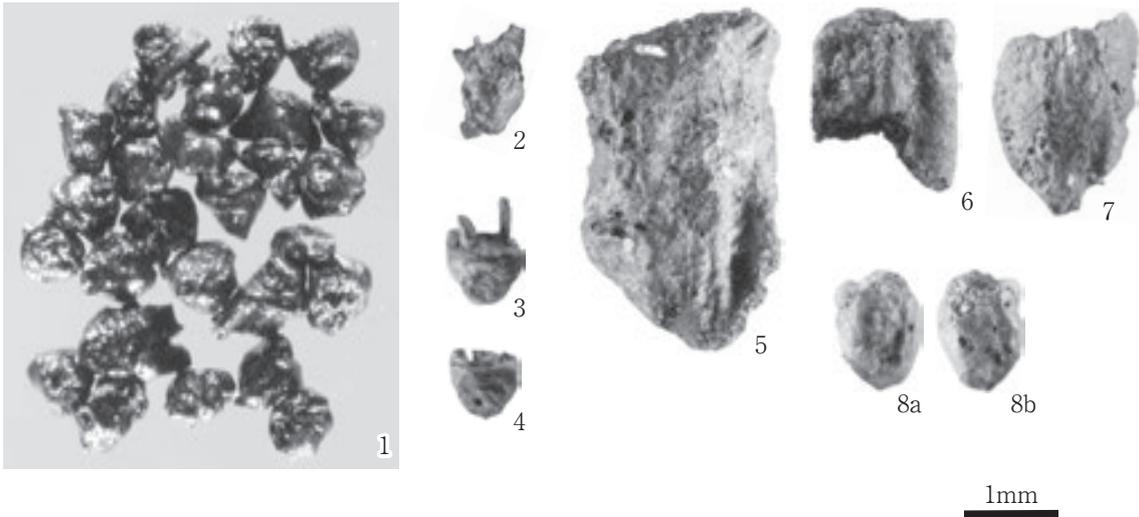
- 2. ツガ属 (2地点;6)
- 4. マツ属 (2地点;1)
- 6. ヤマモモ属 (2地点;1)
- 8. アカガシ亜属 (2地点;6)
- 10. イネ属 (2地点;1)
- 12. フサモ属 (2地点;6)

花粉化石



1. イネ属短細胞珪酸体 (2地点:1)
3. ネザサ節短細胞珪酸体 (2地点:1)
5. ススキ属短細胞珪酸体 (2地点:1)
7. クマザサ属機動細胞珪酸体 (2地点:2)
9. ネザサ節機動細胞珪酸体 (2地点:2)
11. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (2地点:2)

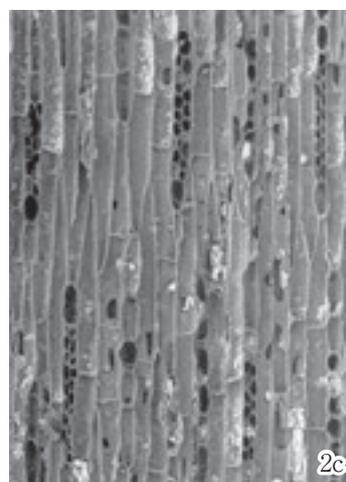
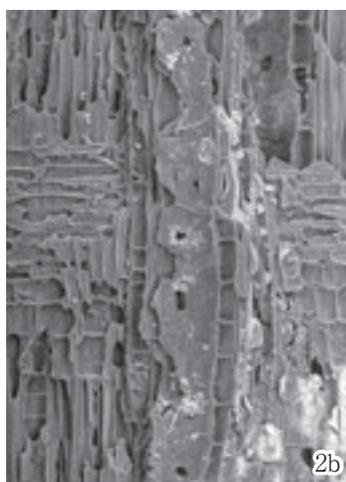
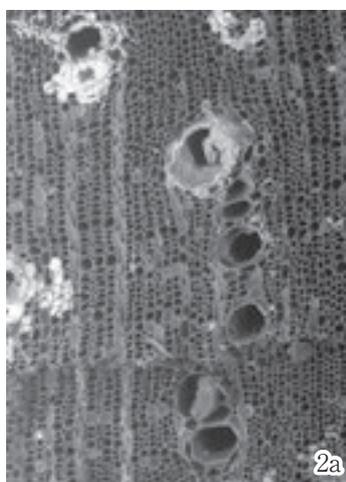
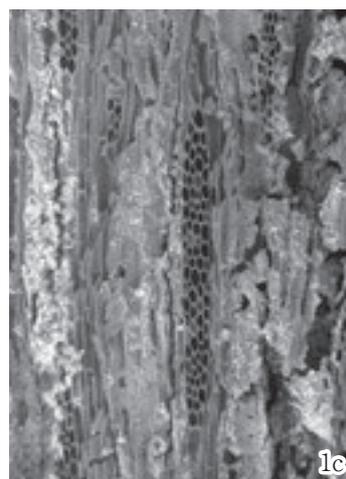
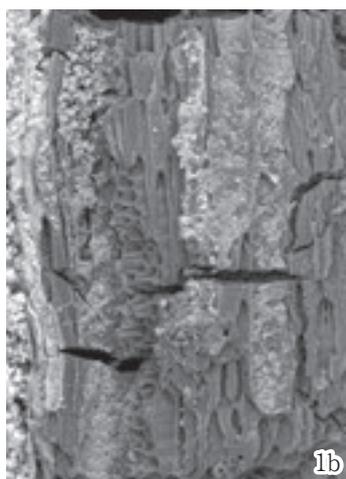
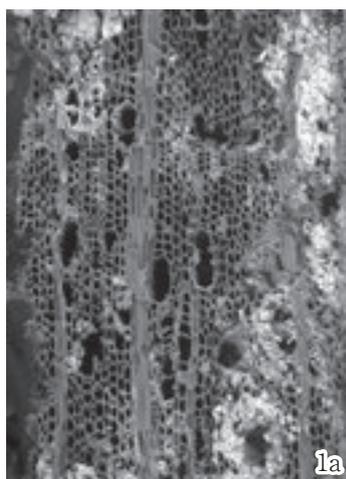
2. メダケ節短細胞珪酸体 (2地点:2)
4. ヨシ属短細胞珪酸体 (2地点:3)
6. イネ属機動細胞珪酸体 (2地点:4)
8. メダケ節機動細胞珪酸体 (2地点:2)
10. ヨシ属機動細胞珪酸体 (2地点:3)
12. イネ属穎珪酸体 (2地点:1)



- 1. イネ 穎 (Ⅲ区 ST-1;2)
- 3. イネ 穎 (Ⅲ区 ST-1;炉跡)
- 5. イネ 胚乳 (Ⅲ区 ST-1;炉跡)
- 7. イネ 胚乳 (Ⅲ区 ST-1;2)

- 2. イネ 穎 (Ⅲ区 ST-1;炉跡)
- 4. イネ 穎 (Ⅲ区 ST-1;炉跡)
- 6. イネ 胚乳 (Ⅲ区 ST-1;炉跡)
- 8. ヒエ近似種? 胚乳 (Ⅲ区 ST-1;2)

図版 40



- 1. モチノキ属 (Ⅲ区 ST-1; 炉跡)
- 2. カキノキ属 (Ⅲ区 ST-1; 炉跡)
- a: 木口, b: 柁目, c: 板目

— 200 μ m:a
— 200 μ m:b,c

炭化材

報告書抄録

ふりがな		とくおうじおおさきいせき						
書名		徳王子大崎遺跡						
副書名		南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書V						
シリーズ名		高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号		第133集						
編著者名		下村裕, 島内洋二, バリノ・サーヴェイ株式会社						
編集機関		公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター						
所在地		高知県南国市篠原1437-1						
発行年月日		2013年3月15日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
とくおうじおおさきいせき 徳王子大崎遺跡	〒781-5332 こうちけんこうなんし 高知県香南市 かがみちょうとくおうじ 香我美町徳王子	39211	180054	33° 32' 37"	133° 44' 46"	2008.7.16 ～ 2008.11.5 2010.10.28 ～ 2011.1.7	3,008 m ²	記録保存 調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
徳王子大崎遺跡	集落跡	弥生時代 中世 近世 近代	竪穴建物跡 6軒 掘立柱建物跡 1棟 土坑 21基 溝跡 12条 井戸跡 1基 塹壕跡 1基	弥生土器 土師器 土師質土器 瓦質土器 備前焼 土製品 石製品	弥生時代前期 の土坑や弥生時 代後期後半から 終末にかけての 竪穴建物跡が検 出されており、 本地域における 当該期の様相を 示す貴重な資料 を得ることがで きた。			
要約	<p>徳王子大崎遺跡は香宗川左岸に広がる低湿地に向けて北側から派生した丘陵上に立地している。本遺跡では弥生時代後期後半から終末にかけての竪穴建物跡が計6軒検出されており、当該期の集落が存在していたことが明らかとなった。また、弥生時代前期の土坑が2基確認されており、当地域の空白期間を埋める資料として、重要な資料になると考えられる。</p> <p>中世においては掘立柱建物跡1棟と屋敷を区画していたとみられるコの字状を呈する溝跡が検出されており、当該期の集落が丘陵上に展開していたことが確認された。</p>							

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第133集

徳王子大崎遺跡

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅴ

(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ)

2013年3月15日

発行 (公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 共和印刷株式会社

